
ある晴れた日に

paiちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある晴れた日に

【Nコード】

N8986V

【作者名】

paiちゃん

【あらすじ】

少年がある日目覚めると、ベッドの上だった。性別までも変える改造手術を施され何時の間にか異世界に。なにやら理由があるみたいですが、冒険をするなかで少しずつ明らかになるはずです。

初めての作品なのでミス等ありましたら大目に見てくださいね。

「うんやう？」

・・・知らない天井だ！

気がついて目を開ければ一面の白い空間。なんか、やわらかいベッドに寝ているみたいだし。ひよっとして、もしかしたら俺って死んじゃったのかも・・・。イヤイヤちょっと待て、こういう時はまず落ち着いてなぜこうなったのかを思い出すがセオリーって誰かが言ってたような気がする。

たしか、何時も通りに、山に芝刈りに行ったはず。毎年冬には木小屋いっぱい柴を集めて1年間の五右衛門風呂の炊き付けにするのが叔父の家に世話になってる俺の仕事だ。両親が早く他界した俺を引き取った叔父との暮らしは、まあ良く言えばエコロジー、早く言えば山村の田舎暮らし、高校生になっても部活動なんてのは縁が無く、田んぼと畑の世話に明け暮れている。おかげで格闘技でもやってるのって感じの体形が維持できている。

柴を刈って梯子に3段重ねて・・・山を降りたはずだが・・・あれ！家まで辿り着いてないぞ！

とりえず、起きてみようとしたが体が動かん。上を向いたままの状態でかろうじて目が動くだけだ。いや、耳も聞こえるか。さっきから何やらガシャガシャとなにかを運ぶ音が近づいてくるのがわかる。

ボタン！という音がするとガチャンとワゴンがベッドの脇に止まったみたいだ。

「気がついたのね。待って、今改造したげるから。」

女の子の声がした。イヤ、ちょっと待て！そんなことより改造だ
と！

人権無視！人でなし！って感じの目線を送るが、まったく無視！
されている。

ウィ・・・ンってドリル？の音が聞ける。もう、ダメかも？

フーッ！つと女の子が手のひらで額の汗を拭く。

隣で成り行きを見ていた甲冑姿の男が器用にヘルメットの後ろに大きな汗をかく。

「良いんですか？体の改造はともかくDNAまでいじっては後々問題になるような気がしますか？」

「良いの、良いの。DNAって言ってもこの体は窒素生命体じゃないから関係ないし。」

男のフェイスマスクがガタンと落ちる。

「一体、どんな改造をしたのですか？」

「私たちと同じ、意識領域を核にした金属生命体！」

そう言うつと、少女はテキパキと大工道具を片付け始めた。

それでは、このスプラッタ状態での改造手術は何だったんだろうと首を傾げる。

「Uーーン！」

良く寝たつて感じた。変な夢をみてたみたいだが、とりあえず起きて・・・なんだコリヤ！！

無いところが・・・有る！。有るところが・・・無い！ついでに意識も無いいいいいー！。

「こやつ気絶しましたよ。」

次元の狭間に捕らえられていた少年を見つけたのは姫であった。

姫は異世界の戦士だとはいやいであったが、持ち物は棒の先で直角に曲がった刃物と腰につけた頑丈そうな短刀？であった。戦士としてはそこそこの筋肉であったが、あのような武器でどのように戦うかは姫の緊急手術のあとじっくりと話しを聞くつもりであったが、いささか精神修行がなっておらなかったように思う。

「ちよつといじりすぎたかも？でも、目的遂行に何の問題も無いわ。私の核を・・・切片だけど、これに入れといたから。」

グタつとした少年？の体にいそいそと着替えを施し、最初に持っていた武器改造版を持たせると、小さなバツクを腰のベルトに取り付けました。

「待つてください。」

あわてて男が小さな懐中電灯みたいなものをバツクに入れます。

「あの武器では・・・せめてこれぐらいは、持たせます。」

少女が頷きます。

「まだ、気絶してるみたいだけど・・・こんなもんでしょ。では、がんばって！」

少年？の寝ているベッドのしたに大きな穴が広がると、ベッドが穴に吸い込まれました。

少女が指を弾くと、壁の一部が透明になります。二人が窓を覗くと、緑の惑星に少年を乗せたベッドが流星のように光ながら吸い込まれていきます。

「災厄に対する、今までの間接対応策ではなく、直接的なアプローチ！・・・はたして・・・」

「たまには違った方法だね。それに切片持たせたからいろいろと助言できるし、なにやってるか良くわかるし・・・」

いつまでも、いつまでも二人は流星の後を見つめていた。

異世界

うう〜ん・・・ここは！

見上げれば底抜けに青い空。なんか長い夢を見ていたような気がするけど・・・。草むらに寝込むようではまだまだ修行が足りないのかな？って独り言を言いながら立ち上がりました。

え？？って感じですよ。左手に小さな森。正面と右側は草原がどこまでも広がっており。後ろには大きな岩山がそびえたっています。

「ここは、どこだ？」

「やっとな気がついた！」

女の子の声です。キョロキョロ見渡しますがそれらしい姿はありません。

「どこを見てるの？ここよ、ここ。」

声と同時に左の薬指に鈍い痛みが走りました。何時の間にか指に銀色の指輪があります。気のせいかな淡く光っているみたいです。

「そう！それが私。正確には私の核を切片とした量子電腦を装飾品にしたものよ。」

先ほどの夢がよみがえります・・・たしか、改造とか？

「そして、あなたは私の作品！改造人間なのだ！！」

思わず両手で体をペタペタさわりながら確かめます・・・おんなだ！！がくつと膝を着きました。

「なにをがっかりしてるの？あなたの理想の体にしたんでしょ？」

理想？？俺って・・・俺って・・・自己嫌悪です。お父さん、お母さん先立つ不幸をお許し・・・ってとづくに両親死んでんじゃん。

「今度はパニックってるし・・・。あなたの中の理想の子のイメージを形にしたのに。」

ちよつと待て！理想とな？・・・ということは、クラスメートのあの子をモデルにしてると？

「それに、今のあなたには性別は関係ないわ。金属生命体。流体金属が核を基に形状を固定してるから、動力もメビウス型重力場エンジン原子炉3基分の出力で放射能も出ないわ。」

「え！でも、性別は・・・この際置いといて、体は変わりないと思うけど・・・」

「それは、擬態よ。表面形状はあなたの原型を基にモデリングした筋肉組織にあわせて変化するけど、筋肉は無いのよ。体を作ってる液体金属がその場その時に応じて変化するだけよ。」

こまった。こんな体では、どうしようも無いのか。途方にくれていと更なる神託が加わります。

「あなたは、次元の狭間に漂流してたの。次元の狭間自体は、古い銀河大戦の異物ってとこかな。地雷みたいにあっちこっち仕掛けたみたいけど未だ機能してるのが偶にあるのよね。あなたの世界でも神隠しって言葉が多分それだと思うけど。あなたは凍結した状態で見つかったけど、私たちの文明でも死者を蘇らせることは出来ないの。でも、あなたの意識、思念体というべきものは取り出すことが出来たわ。それを予備の核に取り込んで、生きている金属というべき流体金属で体を再生したの。あなたの世界でのサイボーグに近い存在になったと思いなさい。」

どうやら、人助けをされたのかな？とりあえず生きてるし？われ思う。ゆえに我ありって言葉もあるし・・・

「ところで、何でこんなところに？」

「そうそう！目的よね。・・・これは、あなたには関係ないけど・・・私達の昔の罪滅ぼしかな。今までは間接的に世界に干渉してたんだけど、今回はあなたがいるから直接に！ってね。・・・手伝ってくれるかな？」

「いいとも！ってなに言わせるんだよ。しかし、どんな形にせよ助けてくれたみたいだし・・・手伝うよ！」

どうすればいいのかと言う質問に指輪はこの世界で生きていけば、必ず判るといっただけで黙ってしまいました。

生きていけと言われてもどうすれば・・・とりあえず持ち物検査をして見ます。

体：女の子の体です。クラスメートのあの子の容姿ですが、良くわかりません。

服装：Gパン、Gシャツ、薄手のハイネック、足はスニーカーです。下着は恐ろしくて確認できません。

持ち物：腰のベルトに錠がケースに入ってます。後ろのポーチには、小さな水筒、見覚えの無い懐中電灯、タバコにマッチが入ってました。それと、傍らには愛用の鎌？ちよつと肉厚で柄が木製から樹脂性になってます。

これで、どうしろと？思わず考えこんでしまいます。

・
・
・

鳥の鳴く声で我に返りました。何時の間にか座り込んで考えてたみたいです。

とりあえず人里に行こうと思い、それらしきものを探します。

右側方面にはどこまでも続く大平原です。

後ろは山でしたから、なにかあるとすれば森を抜けた先と思い歩き出しました。性別の変化からか重心位置が変わったからなのか最初はちよつとふらつきましたけど、数分もしたら大分なれました。どうやら足が長くなっていたみたいです。ちよつと嬉しくなりました。

だんだんと足取りは軽くなります。森に入ると、木立や木に絡まる蔦が邪魔にはなりますが、何時もやってきたことですから問題はありません。何時しか森の奥深く入っていききました。

さらに歩くと、道らしきものを見つけました。

お約束ですよ

森の中で道を見つけた場合の重要な選択！それは、左に行くべきか、それとも右に進路を取るべきか？

誰でも迷いますね。こういう場合の解決策は一つしかありません。少女は少し考え込むと、持っていた鎌を道の真ん中に立てました。鎌は微妙に揺れると右側に倒れました。

「うん！神様の思し召しだ。右に行こう」歩き始めたその時に！
「きゃー！ー！」

誰かの悲鳴です。思わず聞こえた方向を指先で確認すると走り出します。幸いにも道の左側だったことから木立に邪魔をされません。どんとんと駆けていきます。

「こつちこないでー！！」
涙目に訴える先には、グルル〜と唸りながら少女を取り囲む野犬？の群れがありました。じりじりと少女は後ずさりますが、やがて立ち木に後退を阻まれてしまいました。野犬？達は取り囲んだ輪を少しづつ小さくしていきます。

もはや、これまで。でも1体だけでも倒したら後で何が起こったか村の人が判るはず。と覚悟を決めました。少女は杖を縦に持つと野犬に向かって叫びます。

「火炎弾！も一つ、火炎弾！」
杖の上にはめ込まれた小さな宝石から小さな火の玉が野犬に向かって飛び出します。

ギャン！と火の玉を受けた野犬が叫ぶとその体は炎に包まれました。さらにもう1体同じように炎と化します。

しかし、怯むことなく野犬は少女に近づきます。そして、ついに一匹がガルルと唸りながら少女に飛び掛りました。思わず少女は目を瞑ります。

ドゴ！！「ギャンツ！！」

鈍い音と、野犬の叫びが聞こえました。

恐る恐る少女が目を開けると、見慣れない服装の少女が左手の武器を野犬にバシ！と叩きつけています。手に持つ武器は・・・どこか見覚えがあると思ってみて見ると鎌です。それで、どうやってら野犬を倒せるのかと不思議な面持ちで不思議な少女を見ています。・
・終わったようです。野犬の群れは半数近く倒されたことで、自分たちよりも相手が強いことを知ったように少女達の囲みを解くと森の奥に消えました。

「もう、心配ないよ！」

笑顔で少女に挨拶します。内心では、笑顔が肝心！スマイルスマイルって繰り返してますけど・・・

「ありがとうございます。私は、この先の村に住むサンディと言います。失礼ですが・・・どちらさまでしょうか？」

助けてくれた少女の服装は見たこともありません。良く見ると、少女の容姿も少し違って見えます。黒い瞳は初めて目にするものです。村人でもなく、旅人としても変わっています。

「良く判らないんだ・・・気がついたらここに居たし・・・」

助けたのに何か謝ってるみたいだと思いながら、鎌を調べています。丈夫な鎌です。前より肉厚で、柄は長くなりましたが持ち重りはしません。

「あの・・・お名前は？」

「うん・・・ああそうだね。美浜龍維、名前がリユイね。」

「苗字をお持ちでしたか。貴族の方とは思いませんでした。」

「貴族ではないよ。俺の住んだところは誰でも苗字は持つてるもの。」

「では、遠くからの旅人さんですね。とりあえず、日も暮れますから私の村に来てください。」

うっくん。とは言うものの、どうしたものか？第一、無一文だ！村に行っても泊まれないし食べられない！

迷っているとサンディは、大丈夫ですよ。私んちで歓迎しますか

らと、騒動で投げ出した籠を手につとリューイのをガシ！とつかんで歩き出しました。

しばらく歩いていくと森が途切れれます。ほーっ！とリューイは感嘆します。そこには段々畑が広がっており、ちよっとな前までのリューイの故郷に良く似た風景でしたから。

段々畑を下っていくと村が見えてきました。村は丸太の柵で囲まれており、柵の前には空堀が掘られています。少し回り込むように歩くと門が見えてきました。

「とまれ！」

門番の制止の声です。槍を構えています。

「おじさん！なんでとめるのかな？」

「サンデイはいいが、後ろの見かけんやつは何者だ？」

サンデイは、野犬から助けてくれた旅人だと説明しました。

「・・・それは、済まんかった。森の野犬には近頃みんな迷惑してた。わしからも礼を言う。」

どうぞ通ってくれとのこととで門をくぐり村に入ると、サンデイはくるっと振るかえりリューイに微笑みました。

「ようこそ、ナナイ村へ！」

サンデイとライム

サンデイの声に奥からお帰りなさい！の声がします。誰かいるみたいですね。

低い2段の階段を踏んで中に入ると、10畳ほどのリビング兼食堂があります。右手には台所があるようで、軽快なリズムで何かを刻んでいる音がします。左手には、2つのドアがありますけど、寝室のようですね。小さいながらも住みやすそうです。

ここに座っててね。と言われた席に座ると、椅子の脇に鎌を立て掛けました。刃物をそのままにしておくといけないですから、腰のポーチにあった布？でしっかりと包んでいます。

サンデイが向い側に座ったの期に、質問タイムが始まります。

「・・・いろいろと聞きたいことがあるんだが？」
リユーイが切り出します。

「ここは、どこで、今はいつだ？」

「カルキス王国のミルトン村！。今年は建国115年、黄金の月35日！」

即答です。

「今度はこっちからね。あなたはどこから来てどこへ行くの？」

「・・・両方とも判らない。気が付いたときには、草原で・・・その後、森に入り・・・君を見つけた。」

「ところで、この村の防備は何だ？まるで戦争でもしているように頑丈そうだが。」

「ああ・・・あれね。戦争って訳じゃないけど・・・盗賊や魔物に備えるためよ。盗賊はめったにこないけど、畑の取り入れが終わるころに来ることがあるわ。魔物は、あなたも見たでしょ。あんなのよ。いろんな種類がいるけど、ここには大きな魔物は来ないわ。でも、群れで来れると大変なの。」

「この村に銃はないのか？」

サンディは首を傾げています。？って感じです。

「火薬・・・薬剤を調合して粉末にし、鉄の筒に入れて、その後金属製の小さな玉を入れる。敵に筒先を向けたら火薬に火を付けると、勢い良く玉が飛び出るんだ。結構な殺傷力があるんだけど。」
「聞いたこと無いわね。飛ばすんだつたら魔法で十分でしょ。」
サンディには興味ないみたいです。

「そうだ！魔法だ。ここはみんな魔法が使えるの？」

「出来る人と出来ない人がいるわ。それに、魔法には攻撃型と治療型があるの。両方出来る人は・・・そうね。王国内に10人はいないわ。」

「・・・おれにもできるかな？」

「あなたギルドカード持つてる？」

「いや？・・・何のカード？」

ひよつとして、怪しいカードかも知れませんが。作つたら最後、とことん支払いが続くカードがあることを学校で聞いたことがあります。

「冒険者の資格？って感じかな。身分証明書みたいなものだけど。」

「ないよ。」

ひよつとしてと、腰のポーチを探しましたがカードはありません。そんな会話を続けていると、あれ！やっぱりお客さんだあ。と台所から声が届きました。

小さな金髪の巻き毛の女の子が、上半身だけ壁から出してこちらを覗きこんでいます。

「こらあ！行儀悪いでしょ！ちゃんとご挨拶しなさい！！」

トコトコと女の子がテーブルにやって来ました。

「こんにちは。ライムです。よろしくね、お姉ちゃん！」

え・・・ええー！！突然、サンディが大声を上げて立ち上がりました。ライムとリユーイを交互に見てます。最後に、ライムをジッと見据えました。どうやらライムに説明を求めているようです。

「だって、ほら！」

ライムはリユーイの一点を指差します。その指先は・・・そう！ズバリ胸です。自己主張気味なサンデイと違い、控えめではありませんが、確かに男の子の胸ではありません。

「言葉はヤツクルみたいけど・・・お姉ちゃんより背が高いのに、小さいけど・・・お姉ちゃんだよ！」

ライムの指摘に、冷や汗がタラタラと背中に流れるリユーイでした。

ちよつとまって、確かに性別は聞かなかつたけど・・・背は高いし・・・髪も、肩までしかないし・・・言葉使いはあれだし・・・強いし。

このまま家に泊めて、お料理作ってあげて・・・美味しいよサンデイ！。まあ！嬉しいわ、って出来ないじゃない！！それから・・・そして・・・それをネタに村の教会で、って無理じゃない！！

妹の指摘で簡単に行動計画に狂いが生じたようです。意外といい性格ですね。

「まっしょうがないか。確かにライムの言うとおりみたいね。でも、女の子なら普通こんな姿してるでしょう？」

「確かに、男物の服だけど・・・気が付かなかつたの？」

そうです。普通は気が付くはずですが、白馬の王子様効果で、つきり男の子の息子と思ひ込んでいました。

「あゝあ。てつきり、男の子だと思つてただけだな。」

なかなかあきらめきれないみたいです。黄金月ももうすぐ終わります。次に来るのは灰色の月。雪の降る銀色の月が来る前にしなければならぬ冬支度は、灰色の月にしなければなりません。もうすぐ町から帰る母を含めての女手3人では出来ない仕事もあるわけです。

「これでも、けつこう力はあるから・・・言ってくればできることはさせて貰うよ。」

「それと、仕事を探す間、出来れば泊めてほしい。蓄えが全く無

いんだ。」

残念そうに腕を組んでうつむいているサンディに断ります。

「そこは、心配しないでいいわ。仕事は、明日にでもギルドに行けば何とかなると思うけど・・・」

そんなサンディを心配してか、背中を優しく撫でながら、ライムが、大丈夫？お姉ちゃんをしています。

「ところで、お料理出来たけど・・・運んでいいのかな？」

ライムが作ったみたいです。小さい子なのに関心ですね。

「いいわよ。」

手伝おうかとリユーイも声を掛けましたが、大丈夫よ！と軽く断られました。

運ばれてきた料理は、根菜類タツプリのスープと黒パンでした。いただきます。の挨拶で、美味しいお食事タイムです。

「たまにはお肉が欲しいね。お姉ちゃん。」

村の生活をリユーイに話しながらパンを干切っていたサンディにライムが話しかけました。

「うーん、今年是不漁だつてザットさんいつてたからね・・・でも、獲れたとしても、家の株は少ないからあまり配当はないかね。」

「猟と株って関係するの？それに配当って？」

あゝそうね、わからないかも！とサンディが説明します。

猟は専門の人が行っており、猟に専念するためにその家の家族を養う費用を株の形で皆で負担します。猟の獲物があった場合は、その負担金、株数に応じて獲物から得た肉が分配されます。株は1年間有効で、その応募は灰色の月の中ほどで行われます。

サンディ達のお母さんも、灰色の月初めには出稼ぎから帰ってきます。町で働いたお金の一部を使って株を購入し、不定期ながらも子供たちの料理に使用されることになるわけです。

「俺が猟するのは出来るのか？」

「OKよ。村の連中も猟をしてるもの。でも、専業者じゃないか

ら殆ど獲れないけど・・・」

そんな話をしながらも、食事は進みます。「ご馳走さまの後の片付けはライムがヨイシヨヨイシヨとやりました。

「両親の部屋だけ・・・ここを使つてよ。」

「ああ、すまない。」

サンデイの指示に従い8畳ほどの部屋に入ります。ツインベッドに上着を脱いでもぐり込みました。

ふと、疑問がわきました。もう夜だよなあ。なぜ、食堂もここも明るいんだ！

あたりをキョロキョロ見渡すと、天井付近に石版でしようか白く発光している物体があります。

「お姉ちゃん、寝ちゃった?」

ドアが少し開いてライムが顔を出します。

まだ、寝てないよ!と答えると、トコトコとリユイーのベッドに入ってきて言いました。

「お話聞かせて・・・」

小さな子には逆らえませぬ。いいよと答えてリユイーの昔話が始まります。

「むかし、むかし・・・あるところに、お爺さんとお婆さんが住んでました。・・・」

ギルドに行こう

「・・・そんなでもって、めでたしめでたし・・・」
桃太郎のお話を終えて、ライムの様子を見てみます。寝たようです。

リユイは左手を顔の前に持つてくると、薬指の指輪に小さな声で話かけます。

「おーい！聞こえるか？」

「聞こえるよ！。それに声に出さなくてもOKだよ。私は君の思考を直接読めるし、逆もね。」

（わかった。少し確認したいがいいか？）

（OK！）

（今日、野犬と戦ったが、俺の体どうなってるんだ？反射神経、スピード、力・・・全て前と違うぞ！）

（前にも言ったけど、あなたは通常の生命体ではないの。流体金属が核の意思を読み取って、通常の肉体での動きをシミュレーションした結果に基づき形状を変えているの。要するに、骨も肉も血液も無いのよ。だから、擬態して人間のように振舞えるようにあなたの動力炉の出力の内、実に3割がそのために消費されてるし、核に付随した量子電腦の使用率では4割を超えているわ。）

（・・・要するにスーパースーパーになったと思えばいいのかな。）

（生前の10倍出力で、私がリミッターをかけているわ。最大出力は・・・その時にまた。）

（俺の鎌、どうしたんだ。あれって、武器じゃないぞ！）

（え！あなたは異世界の戦士じゃないの？戦士≡武器≡刃物。合ってると思うけど・・・）

（あれは・・・農具だあ！！そして、俺は・・・農民だあ！！）

（え！・・・え！！・・・違ったの！）

(とりあえず野犬程度なら追い払えるけど、それ以上だと期待して貰っては困る。)

(・・・この世界だと・・・ドラゴンいるよ！)

(近づかないようにする。)

(あとは・・・そうだ！この体で食事取ったけど大丈夫なの？)

(胃袋の代わりにデイラックの海がコンパクトに、その都度作成されるから問題なし！それと、怪我した時に血が出ないと困るから同じように見える液体を有機合成するから少しは食事をしてちょうだい。)

(それと、ここには魔法があるみたいなんだが、俺には使えるのか？)

(無理！でも、似たことはできるからそれで我慢してね。今、データを転送するわ。)

(・・・癒しの光：流体金属応用個人限定版、ボルト：動力炉からの余剰電力放出、メギドの火：宇宙船からのメガ粒子砲攻撃、メテオ・ストライク：小惑星に核パルスエンジンを付けて目標地点に落とす・・・とりあえず、前2つにする。)

(そんな感じで使えるから。それと、将軍が可哀相だ！って言いながら何か送ってきたから転送するわ。)

(なにになに・・・サルでもわかる剣の使い方：これであなたも帝国騎士！！)

(将軍が士官学校で使ってた教科書ね。よく読んでいて。あなたの体はあなたのイメージ通りに動くから。)

いろいろ言いたいことがお互いあるようですけど・・・そんな、こんなで、夜が更けて行きます。

・
・
・

コケー、コケー！！

ニワトリが鳴いてるみたいです。ちょっと声が違いますけど・・・

「ウーン・・・朝か！」

リユーイが起きたようです。でも、寝る必要あるんですかねえ。ベッドの隣を見ると、ライムがいません。とっくに起きてたみたいですよ。

もぞもぞしながら上着を着て、スニーカーを履きます。スニーカーの形に変化はありませんが、材質が違ってるみたいです。生地が緻密になっており、しなやかです。

食堂へ行くと、ボンバーヘアーを揺らしながらお茶を飲んでいるサンデイがいました。相当寝相が悪いみたいです。

あつげにとられてサンデイの姿を見てみると、顔を洗って！と台所をサンデイが指差します。台所では、ライムがクレープを焼いていました。

リユーイが来たことに気が付いたライムは、ヨイシヨ！と踏み台を降りると台所の隅にある水瓶から小さな木のオケに水を入れてリユーイに渡します。水道が無いみたいです。

外で顔を洗い食堂に戻ると、すっかり朝食の準備が出来ていました。ライムは良い嫁さんになるなあ・・・って、リユーイは感動します。何時の間にか、サンデイのボンバーヘアーがストレートに変わってます。??疑問はありますが、ちょっと聞いてはいけないと思ったりしてます。

リユーイは、質素な朝食を取りながら、この世界の文明を自分の世界と比較してみました。

水道が無い、家の造りはログハウス風、暖房は暖炉、朝食の食器は素焼きのコップと皿です。西洋世界の中世って感じですかね。王様も居るようだし、サンデイは貴族と最初言ってたし・・・

「さあ、行くわよ！」

食事が終わると、昨日の籠を持ったサンデイがリユーイに告げます。

昨日と同じようにサンデイの後からついていきます。

昨日曲がった十字路を曲がらずに歩くと、周りの建物が、少し立

派になります。木造2階建てに、間口もサンディの家の倍以上あるでしょう。

「ここよ!」

その声に、サンディの指差す建物は、周りの建物と違って石造りでした。

中に入ります。ドアの先にカウンターがあり、何人かの女性が立っています。

その中の1人にサンディは声をかけました。

「あのう・・・一人登録したいんですが・・・」

「新人登録ですね。出来ますよ。あなたででしょうか?」

「いえ、この人なんですけど・・・」

後ろで、見ていたリユーイを前に出します。

「では、この書類に必要な事項を記入してください。」

お姉さんが、書類を出します。

リユーイは受け取った書類を、読もうとして気が付きました。

(これは!・・・ギリシア文字?・・・いや、ヒッタイトに近いかも・・・とにかく読めん!!)

書類を斜めにしたり、逆さにしたりして考え込んでいるリユーイをギルドのお姉さんとサンディが不思議そうに見ています。

「・・・あの・・・ひよつとして、文字が読めないとか?」

リユーイがコクンとうなずきます。

「大丈夫!私が代筆したげるから!」

サンディはリユーイから書類を取り上げると、カウンター備え付けのペンで書類の記載事項を埋めていきます。

なまえは・・・リユーイ・ミハマ、性別は・・・出身地は・・・
ここでいいか、特技・・・無し、・・・

何か適当なところもありますが、書類を書き終わるとギルドのお姉さんに渡します。

「はい、OKです!」

「ではこれに手を入れて下さい。」

カウンターの下から大きな箱を取り出します。脇に手が入る穴が開いています。

リユイーは、恐る恐る箱の中に左手を差し込みます。

「この者の、真実を示せ！」

ギルドのお姉さんが呪文を唱えると、左手が何かに包まれ・・・強く締め付けられます。

そして、突然に左手が開放されます。

「ハイ、終わりました。ちょっと待っててくださいね。」

箱から小さなカードが出てきました。名刺より小さいです。

「どれどれ？」

カードをお姉さんとサンデイが覗き込みます。

- ・生命力：計測不可・・・
 - ・体力：計測不可・・・
 - ・俊敏性：計測不可・・・
 - ・魔法力：ゼロ
 - ・魔法対性：それなりに・・・
- カードをひっくり返します。

・氏名：リユイー・ミハマ

・出身地：ミルトン・カルキス

・性別：女

・職業：仕官候補生見習い

「エエー！ー！こんなんでこんな職業が付くの？？だいたい、計測不可って何なのよ！これ壊れてるんじゃない！！」

「あなた・・・女の子なのね？」

反応はちよつと違うみたいですが、リユイーはとりあえず無視しています。

「壊れてはいないわよ。計測不可というのは、計れないってことで計測限界を超えた能力ではないわ。保留ってことね。」

おねえさんが女の子なんだ！って確認するようにリユイーを見ながらサンデイに答えています。

銀色の鎖にカードを取り付けてリユーイに渡します。

「カードはランクに応じて3種類あるわ。下から順に鉄、銀、金に変わるの。それと、カードの頭、鎖を取り付けるヘッドがある方ね、ここに星があるでしょ。あなたは最初だから・・・変ね？星1つのはずだけど・・・3つあるのね。それだけ実力はあるってことか。」

「はい、これで全部終了！私たちギルドはあなたを歓迎するわ。」
はぐって感じて聞いていたリユーイの腕をサンデイが引っ張りま
す。

「次に行くわよ！」

左手のカウンターに行くとサンデイは籠を渡します。

「これ、お願いします。」

「どれどれ・・・ジギタの根が5本、ケアの株が8本・・・それと野犬の牙が6本！・・・無茶はするなよ、まだ黒の2なんだから・・・」

お爺さんはそう言うのと籠の中身を引き取り、硬貨を籠に入れます。

「ジギタが2エント、ケアは1エント、野犬は5エントだから・・・48エントじゃな。」

ニコニコしながら籠を受け取ると、その中から20エントをリユーイに差し出します。

「あなたが倒した分よ。」

え！って感じでリユーイは戸惑いましたが、それはいいと受け取りません。それはそれ、これはこれ、ってサンデイは説明します。

だったら・・・と交換条件をリユーイが提案します。だって、ギルドの職員が全員注目して見てるんですもの早く出たいですからね。交換条件は、リユーイの持つてる鎌のケースが欲しいというものでした。今は布に包んでいますが、何かの時に解くのが大変だからです。

皮製ならこの半分で出来ると思うけど・・・等とサンデイ達は次のお店に向います。

パーティ名は赤い靴

道を挟んでギルドの斜め向かい側に細工師の店があります。

ドアの上には、鍔とノミの絵柄の看板が掲げてありました。

ドアを開けながら、おはよう！って挨拶すると、店の奥で何やらごそごそやってた人が振り返ります。筋肉質ですが、背が極端に低くリユーイの肩に届くかどうか・・・

ドワーフだ！いるんだ。そうだよな・・・ドラゴンもいるって言うてたし・・・

ビツクリしてるリユーイをよそに2人は商談です。

「この人が持つてる武器のケースを作って欲しいんだけど。」

「どれ、見せてみな。」

リユーイは鎌を差し出します。

ドワーフは、巻きつけられた布を解くと、しげしげと鎌を見ています。

振ってみて、刃を指先で確認します。

「ニーちゃん・・・これはどこで手に入れた？・・・むしろドワーフの一族でさえこんな金属を作ったものはおらんぞ！それに、この柄の材質は見たこともなければ聞いたことも無い！」

刃先の確認で少し指先を切ったみたいで、いててなんて言いながらも質問します。

「あのね！この人はリユーイって言って、女の子なの。！！！」

サンディの訂正に、ドワーフはリユーイをまじまじと見ます。

最後に、リユーイの胸で止まり、サンディと交互に比較していましたが、納得したようです。

「わるかった。でもな、お前達ぐらいの年頃の娘は、これでもか！！！！つってぐらいの体形してるもんだぞ。着てるもんが男ものだし、言われない限り判らんわ！！！」

「ごめんなさいとリユーイは何故か謝ると、昔から家に伝わるもの

ですと答えました。まあ、嘘ではありませんからね。

その答えに納得がいったのか、神代の名工が打ったものかと關心しながらしばらく鎌を眺めていました。

「良い物を見せて貰ったし、女の子を男と間違えたものもあるし、簡単なものでいいならタダでやってやる。ちよつと待ってる。」

そう言うつと棚から何かのケースを手に取り店の奥に下がりました。リユーイは、暇つぶしに店の見学です。いろんな種類の皮細工、籠等の工芸品が並んでいます。2、3手にとつてみると緻密な仕上げに驚きました。ドワーフは器用だ、とは言われていますがここまです出来るのか！つて実感してます。

「ほれ、こんなんでも良いだろう。」

ナイフのケースをベースにしたようです。鎌の刃先をスツポリと被せて、ずれないように鎌の頭を回すように幅広の革帯で押さえ、皮ケースに付いた金具で止めています。ケースには20cmほどの鎖がついており鎖の先にリングが付いていました。

「使い方は・・・鎌の柄を剣を挟むようにベルトに挟んで、そのリングをベルトに通しておく。そうすれば危なくないし、邪魔にもならん。取り出す時は、鎌の柄を少し抜いて、ケースと革紐の間に親指を入れて持ち上げると、革紐が外れてケースも落ちる。」

リユーイは教えられた通りにやってみました。収納する時はちよつと面倒ですが、取り出すときはすんなりいきます。慣れれば見ないでも出来そうです。

本当に、タダで良いのかと聞いても、とりあいません。

「儲けた！と思えばいいじゃない。家に帰ろう。」

サンデイがニコニコ顔で言いました。

家に戻る途中で、急にサンデイが立ち止まると、ほら！あそこが村の共同井戸よ。と言って指差します。路地の奥がちよつとした広場になっており、そこにはつるべ式の井戸がありました。小さな子が水桶を抱え歩いてきます。

ライムでした。

リユーイはヒヨイと水桶をライムから取り上げます。

「ありがとう、おねえちゃん！」

ライムは嬉しそうにお礼をいいます。そんな彼女にサンディはギルドから受け取ったお金を渡します。え！こんなに？って言いながらもサンディから籠を受け取ると、2人にバイバイしながらどこかに出かけて行きました。

2人がサンディの家に戻ると、テーブルにはお茶の用意がしてありました。前もってライムが用意しておいたみたいですね。

サンディが暖炉のポットからお湯を入れてカップにそそぎます。

しばし時が流れます。

「ねえ！パーティを組まない？」

突然、テーブルに身を乗り出したサンディが言い出しました。

「パーティ??」

いぶかしげなりユーイにサンディは説明します。

- ・パーティとは、冒険者が目的達成のために集まる集団
- ・手に入れたものは、パーティ内で分配。均等配分が基本
- ・パーティでしか受けられない依頼を受けられる
- ・リーダーが必要

・パーティは自分達で好きな名前を付けられる等等

「いいよ！リーダーはサンディで名前は・・・」

「なに言ってるの！リユーイはクラスが私より上なんだからリーダーはリユーイよ!!」

「ライムもリユーイお姉ちゃんでもいいと思う・・・」

何時の間にか、帰ってきたようです。トコトコと籠を両手に持つて台所に向いますが、すぐに帰ってきてサンディの隣に座りました。

「・・・お姉ちゃん・・・ちょっと危なっかしい所があるから。」

その点、リユーイお姉ちゃんなら安心できる！」

断言してます。妹に危なっかしいって言われるのも・・・

「じゃあ、とりあえず！ってことで、俺も結構無茶するところあるから。」

ずっとでいいよ。って言われてますけど、一応念押ししておけば安心です。

何で急にパーティを組む必要があるのか疑問でしたが、どうやらレベルを短期間で上げたいみたいです。今までは、薬草等を調達しながらギルドに売っていましたが、村から遠く離れた森には魔物や野犬等の襲撃を受けるため、まとまった数をそろえることが出来ません。

周囲を気にしながらの薬草採取は、非常に疲れます。それでも、たまにちよつと油断した隙に野犬等に出会ったことがあります。昨日は珍しい薬草を見つけて夢中になってた隙に野犬に囲まれたみたいですよ。

1、2体の野犬や魔物でも、塵も積もれば・・・何時の間にか星2つまで成長してます。レベルが上がれば上がるだけ体力、魔力等も上昇しますから、よりいっそう仕事がいやになります。

「それで、名前はどするの？」

「・・・うっくん！・・・リユイ何かない？」

丸投げですか？それでもリユイは考えます。

少し考えましたが、ふと解決策が浮かびました。・・・パクリでいいじゃん！！でも方向性は考えないと・・・

「どんな名前のパーティがあるの？」

「え〜とね。私が知ってる中では・・・一番強いのが、銀の剣。

その次が、トットコハムハム。女性ばかりのパーティに白い子猫が・・・」

なんか適当です。どんなんでも良いみたいです。

ハア〜って下を向くとライムの靴が目に入りました。ちょっと色あせていますが・・・赤い靴です。

「決めた！・・・パーティを赤い靴と命名する！！」

おおー！！って感じで2人が拍手します。

「良い名前ね。女の子って感じが良いわ。」

「やはり、リーダーだね。良い名前つけるもの！」

ライムはそう言うと席を立ち台所に向います。

昨日より、1皿多い夕食を食べ、就寝となりました。

その夜、リユーイがベッドに入り、しばらくするとドアが少し開き、金髪巻き毛が顔を出します。

「お姉ちゃん・・・いい？」

今夜のお話は、スズメのお宿です。

「むかし、むかし・・・あるところに、お爺さんとお婆さんが・・・

」

最初のクエスト

ライムは眠ったかな？・・・よしよし・・・

(もしもーし！聞こえたら返事願います！)

(なにかしら?)

(どうも明日から2人で、探索をするみたいだけど・・・大型の獣が出てきたらどうしようかと・・・)

(あなたが前に出れば大概の獣いや魔物だつてOKよ。怪我したつて、癒しの光：自己限定版が使えるし。鎌改造版も岩を叩いても壊れない。それに、あなたは気付いてないかも知れないけど、腰の鉞も改造版よ。切れ味抜群！)

(それと・・・あなたが魔法使いたいってことが將軍ものすごく気にしてて、部下に相談してみたいの。そしたらその部下がやる気満々になって・・・レギオンって名付けたわ。鎌改を頭の上に掲げて【レギオン！】よ。但し、絶対に狭いところで使わないでね。) 要するに、盾になれてことだよな。でも、レギオンってどっかで聞いたところあるんだが・・・

(ところで、君の名は？・・・意外と、名前知らないと呼びかけ難いんだけど・・・)

(・・・そうねえ、ほんとの名前はあなたには発音しにくいから・・・みんなと一緒に【姫】で良いわよ。)

(姫なんだ・・・)

そんなこんなで朝になります。

昨日のように鳥の声で目覚め台所に行くと、すっかり身支度したサンデイが待ってます。

顔を洗い、ライムの用意した朝食を、美味しいって言いながら食べてます。

「さて、準備は・・・リユーイは特にないわね。ライムはどう？」

え？・・・ライム？今、お皿下げてるけど・・・なんで？

「良いよ！バッチリ！！」

ライムは台所から大きなリュックを担いで返事をします。

「さあ！出かけるわよ。まずはギルド！！」

「ちよつと、待ったあ！！！！・・・ライムを連れて行くのか？まだ子供だぞ！！」

慌てて、やめなよ！とリユーイが止めますが、これあるから私も冒険者とライムがギルドカードを出します。鉄の星1つ。軽射撃手です。

「ほら！」

ライムが後ろを向きます。リュックの背中に十字弓が括りつけてあります。

遠くから、撃つのか。それならなんとか・・・いや！その荷物はなんだ？サンディなんか籠一つだし、いくらなんでも多すぎだろ、フライパンの取っ手が出るし・・・ライムの背の半分はあるぞ！

「ああ、このリュック？これはライトの魔法効果のある魔法具よ。重くないから大丈夫！」

心配げにな俺を気遣って解説してくれました。何でも、中に入れた物の重さを百分の一にするとか・・・20キロとしても、200グラム問題はありません。

そんなこんなで、3人仲良くギルドに向いました。

昨日より時刻が早いのかギルド内に数人の人影があります。ゴツイ体に一部鎧を金属板で補強した皮鎧、幅広の長剣や大型の両刃斧なんてのを持ってます。・・・ちよつと近づきたくない感じです。

そんな彼らを気にせずサンディがカウンターへ向います。

お姉さん！ちよつと・・・なんて声がするとところを聞くと、昨日言ってたパーティの登録をするみたいです。

チヨンチヨンとGジャンの裾引かれます。下を見るとライムが掲示板を指差しています。

「お姉ちゃん、時間かかるみたいだからあつちで待つてよ！」
ギルドのホールの真ん中ですつと立つてるのも考え物です。

リユーイは、うん！と頷いてライムの手をとって掲示板に向います。

そういえば・・・リユーイは字が読めません。

「なんて、書いてあるの？ライム読める？」

「ライム読めるよ！えーとね。・・・ジギタの根：15本以上、
40エンタ。・・・爆弾キノコ：10個以上、30エンタ。・・・噛
み付きトカゲの討伐：20匹以上：40エンタ。・・・」

いろいろあるみたいです。でも、ライムが掲示板の依頼書を指差しながら呼んでいるのを聞いているうちに何故か一部の文字が読めるようになっていくことにきがつきました。これって??

（文字と発音が合致したみたいね。あなたの核は、あなたの世界の大型コンピューターを凌ぐわ。）

（ご解説ありがとうございます。）

「さて、どれにしようかな？」

サンデイの用事が終わったようです。

「最初なんだから、簡単なので・・・これかな？」

ライムと2人で覗き込みます。

「メルル草の球根50個で銀貨2枚！・・・今ならトレッタ草原
で取り放題！！・・・」

これって、あやしくないか？・・・取り放題って断るところが、
どうも気になるんだが・・・

「良いんじゃないかな。3人もいるんだし。」

「でしょう！！やっと運が向いてきたって感じよ！」

ちよつと、引つ掛かる所もありますが、サンデイ姉妹が納得して
るところを見ると、俺の危惧なのかなあ？って感じでした承します。

「トレッタ草原は、森の南にあるの。最初に出会った森の小道を

途中で曲がれば行けるわ。」

ひょっとして、俺が最初にいた所なのかな？それなら心配ないかも……

「では、【赤い靴】しゅぱーっ！ー！」

トトトトと歩いていきます。

村の門では、門番のおじさんに、女の子2人を連れて行くんだから変なことしちゃだめだぞ！って言われましたけど、サンデイが小さな声で、女の子よ！って告げたらえらくビックリしましたけど……

段々畑の小道を登り森に入ります。この前のように野犬が襲ってくるかもしれないのでリユーイが先頭になります。

森の中は、木立が茂り見通しが利きません。

（獣の気配は無いな……って、俺、気配なんて判るの？）

（解説しましょう！それはあなたの生体感知機能が無反応なためよ。生体以外に動体も使えるから。）

どうも、ご丁寧に！。とりあえず害はなさそうなので便利に使わせて貰います。

サンデイが襲われていた所を通りすぎてしばらく行くと道が二股に別れています。

「ごつちよ！」

どっちかな？って悩んでいるリユーイに、サンデイが指差します。少し歩くと、突然に視界が広がります。

トレッタ草原です。

柴草のような草が、ライムの膝くらいの高さでどこまでも広がっています。

レギオンって？

3人は、草原を歩いていきます。

最後尾の少女は籠を手を持って、真ん中の少女は大っきなりユックをしょって、先頭の少女？は手を頭の後ろに組んで・・・まるでピクニックみたいだ、とリユーイは思ったりしています。

しばらく歩くと、サンデイが遠くの小さな灌木を指差しました。

「あそこよ！あの灌木はこの草原の水場の目印なの。水場に近くにはメルル草が生えてるわ。」

「ラジャー！」

リユーイはコースを灌木に向けます。

「ところで、銀貨2枚ってどのくらいの価値があるの？」

「銀貨はね。1枚で銅貨50枚、50エンタだよ。銀貨1枚あれば、宿屋で1晩泊まれるし、10エンタあれば、食堂でおなか一杯食べられるよ。」

「ありがとね。」

ライムに礼を言います。

1エンタは10円ってところか。銀貨1枚が5000円ってところだね。物価的には日本と同じかも・・・

歩け 歩こう なんて歌いだすと、ライムが教えて！ってねだったりしています。サンデイも交えて3人で合唱しながら歩いています。

突然、草原がそこだけ丸くくり抜かれた広場みたいなところに出ました。真ん中に小さな泉があります。少し離れて数本の灌木が茂っています。

「ここでーす！」

サンデイが宣言します。

「メルル草は、私とライムで集めるからリユーイは見張りね！・・・でも、その前に！」

「ちよつと早いけど、お昼タイムだよ！」

泉の辺に大きな石があります。リユーイはそこに立って、周囲の確認です。・・・異常なし！・・・

ライムがリュックをどっころしょって感じて下ろすと、中をこそそこさき回しながら食器等を取り出してます。

鍋を取り出した時、鍋にひっかかったフライパンが、転がり落ちました・・・弾みで転がり・・・泉にジャブーン！！

すると、泉の水がゴゴゴ・・・と音を立てて盛り上がります。

サンディ達がビツクリして見守っています。

「・・・ここで、泉の精が出てきて、貴方の落としたフライパンはこれですか？って金のフライパンを持って出たら・・・これ投げつけるからな！！！」

リユーイがライムほどの大石を頭上に持ち上げて泉に宣言します。ズズズ・・・と盛り上がった泉の水が引いていきます。

・・・あ！・・・ポイっとフライパンが泉から投げ出されました。やはり、っとリユーイは思ったりしています。

「ねえ、どういうこと・・・」

「お約束ってやつだ。欲に目が眩んで、はいそうです。なんて答えると食べられちゃうんだ。」

「良く判らないけど・・・気をつける。」

そんな事がありましたけど、ライムは手早く食事を作りました。

今日のお昼は、パスタのような焼きうどんみたいなものです。

へっ麺類はあるんだ！今度リクエストしてみよう。と思いながらモリユーイは美味しくいただいています。

「あれ？今日の料理には肉が入ってる？」

「それはね。昨日沢山お金をもらったでしょ。それで、ハムを少し手に入れたからなの。ほんとひさしぶり！」

（そういえば、昨日の48エントをサンディはライムに渡してたっけ。）

サンディは全く料理をしてません。昨日もそうでしたから、ライ

ムが何時もしてるんだと、思いましたが口に出して言うことはありません。人にはいつてはいけない事もあることをリユーイは知っています。

おなか一杯に食べた後は、本日のクエスト【メルル草の球根：50個】です。

リュックから小さなスコップを2個取り出すと、泉から少し離れている地面を掘り出しました。

砂地に小さな2本の葉がチョココンと出ているのがメルル草みたいです。

「リユーイは、そこから周りを見張ててね。草原は魔物も出るから！」

潮干狩りみたいに球根を捜してる2人に、石の上から片手を挙げて答えます。

周囲を見張っていた、リユーイの頭の中でピキンっと警報がなりました。

続いて、目の前に半透明のレーダーのスクリーンみたいなものが展開されます。そのスクリーンに左下の方向から急速に接近する赤い点が3個あります。

（生体監視に何か、引つ掛かったみたいね。）

（便利な機能だけど、何かまではわからないのか？）

（経験は反映するわ。最初の接触までは不明なの）

「作業中止！！何かが来る！」

リユーイは2人を大石の上に向けて敵が来る方向に立ちケースから鎌改を取り出します。

「・・・姿が見えないけど・・・草が倒れて移動方向が分かるわ・・・草蛇ね。」

「草蛇は太さは私の胴ぐらいで、3人分ぐらいの長さがあるよ。毒は無いからね」

2人が敵を確定してくれませんが、あまり嬉しくはありません。

(・・・レギオン・・・)

(え！やるの?)

(ここなら、安心して使えるわ。貴方も、一度試しといた方が良
いと思うでしょ!)

リユーイは、草蛇のやって来る方向に体を向け、鎌改を頭の上に
掲げます。

【レギオン!!】

ドツカーン!と言う音が響き渡ると100mぐらい右側の空間が
歪みます。

ゆらゆらと歪んだ空間から(ウワー!)というときの声が響くと
ともに、抜刀したローマの戦士風の鎧を着た集団で飛び出します。

戦士達は凄まじいスピードで草原を駆け草蛇とすれ違いざまに剣
を振り下ろします。

バシュ!バシュ!!と何かを切りつける音が立て続けに響きます。
血飛沫で、あたりを霧のようです。

戦士達はそのままの速度で、左側に発生した空間の歪みに消えて
行きました。最後の1人がこちらを振り向きピースサインを出して
ます。

あっけに取られていた3人ですが、

「お姉ちゃん・・・あれ、なに?」

ライムの素朴な疑問に、(レギオン・・・大勢なるが故に・・・)
と答えます。

「すごいね!今までに見たことも、聞いたこともないよ!」

(ゴメン、俺も初めてなんだ・・・)使ったことを少し後悔してる
みたいです。

「ほら!行くわよ。草蛇の牙は良い値段で引き取ってくれるわ!」
突然、草蛇の報酬に気が付いたサンデイが2人を促します。

3人は草蛇の受難の場所に近づきます。そこには、細切れになり、

原型を留めていない肉塊がありました。何体の草蛇なのか判断できないほどです。

「あつた！あつた！！」

サンデイが、肉塊を棒でつついてましたが、目的のものを見つけたようです。

「この量なら5、6本見つけれれると思ったけど・・・」
「どうやら3本見つけたものの、不満そうな顔付きです。」

さて、メルル草球根狩りの続きです。さっきの騒ぎで投げ出したスコップを使い片っ端から球根を掘り出していきます。

「こんなものかしら？ライムいくつある？」

サンデイはそう言っていると、片手で顔の汗を拭きます。

「え〜とね。60個はあるよ！」

サンデイが持っていた籠の球根を数えたみたいです。

「それでは、これで終了！村に帰るわよ！」

3人は泉の水で顔を洗うと森の小道に戻りました。

リユイーの技

森の小道を村に戻ります。

初めてのクエストは問題なく終了しました。つとこんな気分であるとかが必ず起こるものなのです。

キュピーン！

リユイーのリーダーに何かがひっかかった模様です。

（うん・・何だ、何だ？）

（リユイーもてるねえ、またなんか来たみたいよ！でも、分からないとこみると、これも新型ね。）

目の前のスクリーンには近づく赤い点があります。でもリユイー達が進んでいるのですから、相手はまだこちらに気付いていないと考えられます。

「ストップ！前になんかいるみたいだ！」

「ストップって？」

「また、蛇かな？」

とりあえず止まりました。ストップとは止まれの事だよってライムに説明します。

「判んないけど・・・いるみたい。こっちにはまだ気付いていないと思う。」

「でも、この道を抜けないと村に帰れないよ。道をそれると森は移動し辛いし、魔物や獣がうじゃうじゃ居るし・・・」

「じゃあ、不意を突いて仕留めよう。」

作戦が決まったようです。サンディは杖を持ち直し、ライムは十字弓を背中から降ろして最初の矢をセットします。リユイーも鎌改を左手でケースから取り外して構えます。

そして、そろそろと小道を進みます。

すると小道の先に、大きなそれは大きな猪がこちらを睨んでいます。

(オツコ ヌシ様みたいだ!) それぐらい大きいのです。
「来るわよ!」

かなり遠くから駆けて来るのに地面が振動します。

「火炎弾!、続けて火炎弾!」

サンデイが魔法を連射します。

「ッテー!」

ライムの十字弓から短矢が飛んでいきます。

巨大猪の顔面に炎が上がり、矢が突き刺さりますが、そんな攻撃はものともしません。さらに突進してきます。

リユーイが前に出ます。左手で鎌改を持ち刃を下側にして構えませんが、持った手はブルブルと震えています。

(逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ...) 繰り返しています。

(... 加速装置!...)

(え?なにそれ?)

(いいから早く、唱えて!)

(加速装置!...)

リユーイの頭の中の何かがカチリといったような気がします。

途端に、周囲の音が消えました。木立から落ちる葉が空中で止まっているように見えます。

(あなたの運動能力等を100倍に高めたわ。今回は一気に最大まで上げたけど、練習すれば自分に合った能力に任意に設定できるから...)

(これって、時間を止めてるの?)

(いいえ、周囲の時間経過は変化しないわ。あなたの能力が上がったことで時間が止まったように見えてるの。その2人には、一瞬であなたが消えたように見えてるはずよ。)

よく周囲を観察してみると、空中で停止したように見えていた木の葉も少しずつ回転しながら落下しています。

(これなら、あの猪も怖くないでしょう?がんばってね!)

猪の突進がスローモーションに見えます。

リユーイは駆け出すと、猪の左側に回ると擦れ違いざま、鎌改を下から上に切り上げます。

切った感覚はありますが音はありません。しばらくすると重低音の悲鳴が上がります。

リユーイは急いでサンデイの方に駆け出します。

左の首付近から血飛沫がゆっくりと舞い上がっていますが、突進の勢いは変わりません。

猪の前に出ると、鎌改を刃を逆さにして構えます。そして駆け出して猪の頭に振り下ろします。

ボキツというような手ごたえとともに猪の頭は地面に落ち、牙が地面に突き刺さりました。

突進したエネルギーが全て猪の首に集まり、猪の体は首を支点に回転します。ゆっくりと回転しながらやがて背中から地面に落ちていきました。

（加速装置、解除！）

リユーイの周りの音が復活します。

「お姉ちゃん！」「ライムが駆け寄ります。

「急に居なくなっただと思ったら、いきなりドサツと猪がひっくり返るんだもん、ビックリしたよ。」

「あなた・・・何をしたの？ジックリ聞かせて貰うからね。でも、その前に！」

「分かってるよ・・・！ライト！それにフライ！」

ライムの魔法により巨大猪は首を下に近くの木に縛り付けられます。最後に出刃包丁をリュックから出して猪の腹を上下に切り裂いて内臓を出します。

内臓は、前もってリユーイが掘った穴にポタポタと落ちていきます。

「お姉ちゃん、ちゃんと埋めるんだよ。血の匂いで別のが来ると困るから・・・」

血抜きは1時間程度かかるとの事です。

「さて、話して貰いましょうか。あなたの不思議な魔法のことを。」

リユーイは、こことは違う世界から来たこと、魔法ではないが魔法みたいな科学の応用した不思議な能力のことを。

最初はそんなバカなと思っていた2人でしたが、無詠唱で電撃を飛ばしたり、加速装置により2人の前から一瞬で消えたりするのを見て信じないわけにはいきません。

「それじゃあ、お姉ちゃんも町みたいな大きなところで一瞬に破壊できるの？」

「出来るよ。でもやらないよ。」

「それにしても・・・隕石落とし・・・恐ろしい技ね。」

技能としてリユーイの能力を認識したみたいですね。魔法だって、結構恐ろしいと思いますけどね。

そんな話をしている内に、猪の血抜きが終わったようです。

ヨイシヨ！とリユーイが担ぎます。

森を抜け、段々畑の小道を歩き村に入ります。

3人の姿を見て、門番がビックリしてます。だって、3人目の若者風女の子がデッカイ猪を担いでいるんですからね。

「こつちよ！」

村の十字路でサンデイが真直ぐに進み、リユーイを呼びます。

「ここが獵師さんの家だよ」

先に入ったサンデイが獵師と交渉しているようです。

「リユーイ、入ってきて！」

ドアが小さいので、猪を肩から降ろして引きずりながら中に入ります。

家の中では獵師のおじさんがそれを見てあごを落とします。

「おいおい・・・いったいどうしたらこんなのをお前らが仕留められるんだ！俺ら獵師でさえ罾でも張らにゃあ仕留められねえぞ！！」

「あの娘がバカ力で、猪の首を折ったのよ。一瞬だったわ。」

「何ッ！あのにいちちゃんは娘っ子？」

おじさんの驚きはさらに増したようです。

「ところで私達は猟師じゃないから、分担が分からないんでここに来たんだけど・・・」

「ああ・・・そうだったな。分担割合は半分だ。猟師の取り分が2割、配分が3割、残り5割が仕留めたものの取り分だ。・・・しかし、これだけの獲物だと、5割をお前ら食いきれめえ。ハム5本と猟師株20枚でどうだ。当然この毛皮はなめして後で持っていくが。」

「毎週お肉食べられるね。」

そんなライムを微笑みながら見ていたリューイは、あらかじめ取引をサンデイに一任してます。

「それでいいわ。」

「よし、取引成立だ。今、株を発行するからな。来期の株だ安心しな。」

さらさらと書類が書かれていきます。

書類とハムを受取り、猟師さんとの交渉は終了です。

帰り際に大物を狩る時は手伝ってくれてリューイは頼まれてましたけど・・・

次にギルドに向います。

依頼完了手続きをし、買取窓口で草蛇の牙を換金して本日は終了です。

夜になり、リューイのベッドにライムが侵入します。

「ねえ、お姉ちゃん。泉でのお話、ライム良くわかんない。」

今夜はそれにしようとしてリューイはお話を始めます。

「昔、昔。あるところに、正直なキコリが住んでました・・・」

洗濯と次の依頼

(姫さん〜。おーい姫さん！)

(呼んだかな？)

(・ ・ ・ レギオン ・ ・ ・ とんでもなかったぞ！ ・ ・ ・ まあ、威力はあったけど ・ ・ ・)

(それよ、それ！船中大騒ぎよ！海兵隊の連中つたら【 旨く行つたゼイ！！イエイ！！ 】ってどんちゃん騒ぎの最中なの。次はどんな衣装でやるか懸賞金を出してるみたいだし ・ ・ ・ それを横目で見ていた連中も次は俺達だつて一緒になつて騒いでるのよ。)

(おかげで兵の士気は鰻登りだけど ・ ・ ・ 將軍は胃潰瘍で寝てるわ。)

(・ ・ ・ 大変なんだ。偉い人つて意外と大変なんだね。)

(まあ、それは置いといて、広域殲滅用が提案されたわ。【 我命じる星の屑 】：直径50mに、船からパルスレーザー砲の一撃が届くの。近接防衛隊の連中が考えたみたいんだけど、意外と使えるかもよ。)

(気が向いたらね。)

(それと、加速装置の練習も大変だろうから、ターボ1、2、3の3段階に加速を設定しといたわ。1で10倍速、2で50倍速、3で100倍速ね。)

(ありがと。正直あれが無いと猪に殺されてたかも。)

(じゃあ、今日も頑張つてね！)

何時もの朝が来てリユーイはごそごそと起き上がります。

(今日一日が平穏でありますように ・ ・ ・) 珍しく祈つたりします。

でも、そういつのつて必ず裏切られるんですよね。

朝食を終えた時にそれは起こりました。

「おねえちゃん。洗濯物出して！今日は赤い靴の定休日でライムお洗濯するんだから！」

リユースはドキ！っとしました。

この世界に放り投げられてから、一度も着替えたこともなく、一度もお風呂に入ったこともありません。トイレは・必要有りませんでした。

「ライム・俺・着替えもってない。」

「「ええ！！今までずーっと着たきりだったの??」「」

2人は驚いています。口に手を当ててビクビクしています。

「出かけるわよ!!！」

サンデイがリユースのてを掴むと、有無を言わずに表に出ます。

「ライムも行きかけたな。」

・拉致られていくリユースを、残念そうにライムは見ていましたが、諦めたのか後片付けを始めました。

家を出てターボ全開爆走モードでサンデイが走ります。右手で掴んだりリユースの足が地面に着いていないかのようです。

それでも、道行く人に（おはよう）って挨拶してますけど・・・挨拶された方は、（だれだっけ？）って立ち止まって振り返ります。

細工師の右隣が村の雑貨屋です。

雑貨と言っただけあって、薬、食料、衣料何でもあります。

お店の前で急ブレーキを掛けずに、90度のドリフトターンをしてドアを打ち破るように雑貨屋に入ります。

お店のカウンターで急停止、リユースが0.2秒遅れて着地したみたいです。

若い女性が店員です。背中に服の上から汗をかいています。

「この娘の服を中と外、下と上合わせて2セット頂戴！」

サンデイが店員を睨みつけるように言いました。

「・・・あのう・・・サイズは？」
サンデイがリユーイをジロ！と見ると、フルフルと首を振ってま
す。

「じゃあ、サイズを計りますね。こちらへ、どうぞー！」
店員さんがリユーイにオイデオイデをします。

しびしび店員さんの後について奥の部屋に向います。

(さあ・・・脱いで脱いで！)

(両腕を開いて、次は上ね。)

(ふん。・・・あら？・・・ほほお・・・)

奥からは店員さんの言葉と、リユーイのジタバタしている音が響
きます。

しばらくすると、げっそりやつれたリユーイとヤッタゼ！って感
じの店員さんが出てきました。

「エエッ！もう一度言って頂戴！」

「はい。こちらの娘さんのサイズはありません！」

「でも、ここは村一番の品揃えだよ？私のもライムのもサイズあ
るの？」

「よく聞いてくださいね。娘さんのサイズはありません。男の子
用のサイズは沢山ありますよ！」

「男物？」

「はい。沢山ありますよ！」

(うん・・・確かにリユーイを初めて見た人は男だと勘違いし
てるようだし・・・胸はライム+ だし・・・背は高いし、強いし、
この際どうでもいいか。要するに洗濯してる間の着替えだし・・・)

「男物、適当に上下と中と外。2セット頂戴！」

店員さんはテキパキと下着と上着を袋詰めになると、リユーイに
手渡します。

「ありがとうございます！」

両手で大きな袋を抱えとぼとぼとリユーイは歩きます。

料金はサンデイが払いましたが、いくら？とはちょっと聞きづらい状態です。

前を歩くリユューイの足元を何気なく見たサンデイは、あることに気が付きました。

「先にもどつて、私寄るところあるから！」

サンデイは来た道を戻って行きます。

「お帰り！どうだった？」

ライムが抱きつきながらリユューイに聞いてます。

「さあ、着替えて！お洗濯するんだから」

渋々部屋に戻ると、着ている物を脱いでます。

・・・これ、どうやって取るんだ！なんて言ってますけど・・・目を閉じて服を無事脱ぎ終えました。

サンデイに買って貰った服を袋から取り出します。

男物です。袖のないシャツとパンツ・・・懐かしさに涙が滲みます。

上着は黒のワイシャツ風のシャツと、黒のストレートパンツです。ちよつと学生風ですね。

下着とGシャツ、Gパンを一纏めになると、部屋を出ます。

ドアの外で待っていたライムにおずおずと洗濯物を手渡しました。

「わあ！・・・ラスカル様みたい！」

トテトテと自分の部屋に戻ると何かを持って帰ってきました。

「ね！似てるでしょ。」

ライムの持ってきたパンフレットには、リユューイにた格好でシヤツを少しひらひらさせた男役の絵姿がありました。

「王国で一番人気の歌劇団の人・・・ライムの憧れなの。」

はあくという返事しかリユューイには出来ませんでした。

ボタンとドアが開きます。

「リユューイ・・・着替えたのね！・・・さあ、出かけるわよ！」

突然の宣言です。

え？と返事をする間も無くサンディに腕をとられ連行されていきます。

「あゝあゝ．．．今度こそ一緒に出かけたかったのにー！」

ライムは残念そうに、洗濯物を抱えて台所に向います。

今度はゆっくりと歩きます。

リユイーの腕を自分の腕に絡ませ、少しリユイーにもたれかかって．．．

そうです！恋人気分状態でゆっくりと歩きます。

そしてギルドに到着です。

「ちよつとね、買い物し過ぎて金欠状態なの。割のいい仕事を急いで探すわよ。」

サンディが小声で言います。

依頼用の掲示板を2人でひたすら探しますが、なかなか良いものがないようです。

「御2人さん。ギルドでデートは関心しないな？」

振り向くと、妙齢の美人．．．それでいてスタイルはサンディに負けず劣らず．．．

皮の鎧を着こなし、ロングソード両手剣を持った冒険者がこちらを見てました。ロングの髪から尖った耳が少し覗いています。

「エルフ？」

「ほう、珍しいか？いくら山村でもエルフくらいはいるだろうに。」

「リユイーは、もっと田舎から来たのよ。それに私達はデートじやなく、仕事を見つけてるの！」

「そっちの男に、肩をあずけていては誰でもそう思うだろうに．．．で、見つかったのか？」

サンディは首をふります。

「そうか・・・こんな話をするのも何かの縁だ。私とこれを受けないか？」

そう言つと右手の依頼書をサンディに手渡します。

依頼：水の精霊に祝福された聖水の入手

場所：精霊は悲恋の洞窟に住む

条件：魔物数が多く1人での依頼は受け付けない

報酬：銀貨20枚

「やるわ！」

サンディは即答しました。

「ちよつと待った！魔物多いんだよ。やられちゃうよ。」

「男が心配性とは・・・情けない。」

「この娘は、女の子よ！」

サンディがリユーイの肩をガシ！とつかんでエルフの前に突き出します。

エルフはじつとリユーイの全身を見ます。

上から下へ・・・もう一度、上から胸で止まりました。

「確かに・・・でも、エルフより・・・」

いつてはいけない事を理解しているようです。

「ところで、私は、ルミナと言う。シルバーの星1つだ。そちらは？」

「私は、サンディ、こいつはリユーイ、後、ここにはいないけどライムでパーティーを組んでるの。黒の星3つ、2つ、1つよ。」

ここでは、詳しい話が出来ないとサンディの家に移動することになりました。

悲恋の洞窟 (1)

「小さいのに、感心だな。」

ルミナはライムの入れたお茶を美味しそうに飲んでます。

「ところで、今回の依頼は難しいの？」

「ここは、きちんと確認しておく必要があります。危険ならばライムを置いて行くのも選択肢です。」

「いや、それほどでもない。・・オークが多いのが玉に瑕だが・・

」

オーク・・結構な相手です。あまり見かけない魔物ですけど、初心者殺しの異名をもつてたりします。」

「それならば、赤い靴からは、私とリユーイってことで・・」

「お姉ちゃん！！・・ライムも仲間だよ。それにお姉ちゃんって攻撃魔法しか出来ないじゃない！！」

ライムがさかさず抗議します。

「俺も仲間はずれは良くないと思うぞ。いざとなれば、昨日の猪みたいに・・」

「さて！・・昨日の猪とは、あの獵師宅の前で解体していた巨大猪のことか？」

「そうだよ。リユーイお姉ちゃんが一瞬で刈り取ったんだから！ライムは自慢そうに言ってます。」

「そうか・・なら、ライムとやらを連れて行っても問題ないと思うぞ。それに補助魔法は洞窟探査には欠かせないからな。」

ライムとリユーイは嬉しそうに、ヤッター！なんていいながらハイツチなんかしてますけど、サンディの胸中はあまり良くありません。

でも、ライム一人を残していくのも気がかりです。

「ウーン・・リユーイがいるなら・・ライム！OKよ！！」

サンディは渋々ながらも同行を許可します。

「……ところで、リユーイ、私と試合をしないか？お前が倒したという猪は……私では無理だ……その实力を見てみたい。」

「試合……でも、防具も木刀もないぞ！……それに俺の武器は剣じゃないし……」

ルミナはリユーイを微笑ながら見ています。

「もちろん、真剣でかまわない。」

「……何ていつているリユーイをサンディは立ち上がらせます。」

「けちよんけちよんにしちやいなさい、なんて言ってますけど……今一つ、リユーイは気乗りしてないみたいです。」

「こつちよ。裏庭なら誰にも見えないからね。」
ライムが台所の裏ドアを開けて2人を案内します。

裏庭は、家1軒分くらいの広さです。

庭の真ん中にルミナとリユーイが歩いていきます。

「さて、では……始めるぞ！」

そう言うのとルミナ後ろ跳びして距離とり、同じようにリユーイも後ろに下がります。

ルミナが長剣を身をねじるようにして右手で抜くと、リユーイは左手でケースを外し鎌改を取ります。そして、右手で腰から鉞改（鉞改造版）を引抜き、逆手に持ちます。

（逃げちゃダメだ！……逃げちゃダメだ！……でも、相手は刃の長さだけでも、1.2mはあるけど……俺の鎌の刃長は30cm程度だし……鉞だって40cm程度しかないぞ。足しても相手の半分くらいじゃないか！！）

ルミナが大上段に構えます。リユーイは映画で見たカンフーの応用です。左手を前下げ、右手を後ろに上げて、足を前後に爪先立ち・

（変わった武器と構えだが……スキだらけだ。……さそってみるか？）

ルミナの構えが八双に変化し、半歩踏み出します。リユーイは半歩下がりながら軸足を中心に体の向きを入れ替えます。そして左右の腕を上下逆の構えに変えます。

（半歩で構えを入れ替えるのか・・・スキではなく自然体???・・・バカナな！打ち込めば全てが分かる!!!）

ルミナが3歩素早く前進し八双の構えから、リユーイに向い斜めに振り下ろします。

（ターボ1作動!）

リユーイが半歩下がりながら体を回転させて長剣の軌道から身を逸らします。

長剣の軌道からリユーイが逸れたことを見て、さらに一歩リユーイの近づいて、今度は長剣を振上げます。

リユーイは左手の鎌の刃で長剣を受けると衝撃に屈することなく鎌を振上げます。そのままルミナに近づき鉈を首筋に突き付けます。

（ターボ解除）

「これで、いいか？」

「十分だ!」

2人は武器を納めます。

「ところで、あのような戦い方は見たことがない。どこで覚えた？師はまだ存命か？」

4人でまったりとお茶をのんでいると、ルミナが突然きりだししました。

「自己流・・・師はいない。ただ、全ての動くは円を描く事を基本としている。」

「そうか・・・円の動き・・・確かに、始めもなく終わりもない、それに比べ私の動きは直線だ・・・負けるわけだな。」

ルミナは自己嫌悪に陥っているみたいです。

こういう時は話題を変えるのがベストですね。

「話をず〜っと前に戻すけど・・・洞窟って言ったよね。どこ

へいくの？」

そうでした。今度は洞窟探検なのです。

「オークが居るって事は、結構深いと思っただけど・・・」

「悲恋の洞窟よ。」

「それって、人間に恋した水の妖精が住むっていうあの洞窟？」
洞窟の名前からして、何かいわく付きの洞窟みたいです。

「歩いて半日、中も広くて、妖精の泉が一番奥にあるって細工師のおじいさんに聞いたことあるよ。」

「そうだ。そして、そこには沢山のオークがいる。」

「ライム、準備しなくちゃ！！」

ライムはそう言うると自分の部屋に帰っていきます。

残り3人で臨時パーティの役割分担を確認します。

洞窟内を歩く時は、ルミナが前、その後をサンディとライムが歩き、最後尾をリユーイ。

戦う時はなるべく壁を背にし、前衛をルミナとリユーイ、後衛をサンディとライム。

洞窟内で手に入れた宝や硬貨等はクエスト終了後に分け合う。均等配分が基本。

食料、水等は赤い靴が確保。薬草、毒消し等の医薬品はルミナが確保。

初めての洞窟クエストです。ルミナという先輩冒険者からいろいろとアドバイスを受けることにしました。

悲恋の洞窟 (2)

3人は朝早く家を出ます。

今日は、洞窟の調査なんですけど、3人の格好はトレツタ草原のクエストと同じです。

ライムが大きなリュックを背負ってますから、まあ、必要なものは全部有るんでしょうけど・・・

ルミナとの待ち合わせ場所はギルドのホールです。

先を歩く2人の足元に気付いたのは、十字路を過ぎたあたりでした。

(あれ?2人も靴が新しくなってる!)

昨日まではパンプス風の靴でしたが、今日は、薄い赤に染められた、皮の半ブーツです。

(そういえば、俺たちのパーティは(赤い靴)だったよな。でも、俺のは・・・!!)

俺は白いスニーカーだ!と下を見ると靴が何時の間にか薄いピンクです。桜色っていうやつです。

(サービスで色を変えてみました。)

(・・・ありがと・・・)

姫が色を変えたみたいです。

(ダンジョンへ行くんですけど?空からサポート出来ないから、残念がってたよ。)

(ありがと・・・と言っておくけど、あまり遊ばないでね。)

ギルドのドアを開けると、テーブルで1人待っているルミナが居ます。

「おはよ!・・・こっちの準備はできたわ。」

「よし!それじゃあ出かけよう。」

ルミナが席を立ちます。傍らの長剣を背負うと、もう片方の肩に

皮袋を背負います。

村を出て段々畑を下に下りていきます。

畑を越えて、橋を渡ってトレツタみたいな草原に出た所で道が分かれていました。

「左の道を行けば町に行けるわ。今回の洞窟は右の道を進んだ森の中にあるの。」

サンデイの言葉に従ってリユーイは右に向かいます。

草原が灌木に変わり、立ち木が密集し始めます。森に入ったので

森の小道（・・あまり人が通らないのでしょう、獣道みたくなってます）をしばらく歩くと突然、前方が開けました。

石組が崩れて苔むした廃墟がそこにありました。

アランがへえ〜って感心してますと、ルミナが先行します。

「こつちだ！」

石組みを右に、左に、まるで迷路です。

3人は慌てて後を追います。

「あれだ！」

ルミナが指差す先には、大きな壁のよう石組みの中にぽっかりと開いた洞窟の入口がありました。

「ねえ、お昼のしようよ！」

これから、どんな冒険になるのか想像できませんが、（オークがいつぱい〜ってことを考えると、ここでちょっと一休みは大切なことかも知れません。

日持ちするビスケットを食べ、水筒のお茶を飲んで休憩です。

「ところで、悲恋の洞窟ってどんな感じなんだ？」

「ほぼ、一本道だ。横道もあるが直ぐに小部屋になる。」

「宝物も、あるの？」

ライムが話に加わりません。

「小部屋にオークが貯めこむことがある。誰かが取っても、直ぐにオークが補充するようだ。」

「だったら、オークを倒すのは不味くない？」

「無理に倒すことはない。しかし、水の精霊に合うには倒すしかないかもしれん。」

「祝福された聖水つって、聞いたことないけど・・・」

「あまり一般的ではないからな。しかし、特殊な儀式には絶対に必要な物だそうだ。」

「さて、十分休んだことだし・・・行くぞ!!」

4人は腰を上げます。

洞窟の入口は2人並んで入れるくらいの大きさでしたが、少し入ると急に広く、高くなっていました。

洞窟内は真つ暗ではなくとところどころに小さな松明が焚かれています。やはりなにかいるみたいです。しかも知能を持っているものが・・・

「我望む・・・ライトーン!」

ライムが魔法の明かりで周囲を照らしました。ライムの頭の上3m程度の所を、人の頭程の光の玉がぶかぶか浮いています。

ほおっつとリユイーが周囲を見渡します。

魔法の明かりで洞窟内の水晶が輝き天井はまるで星空です。

「ライム、様様だな。松明ではこうはいかん。」

ルミナはライムの頭をイイコイコしています。

ルミナ、サンデイ、ライム、リユイーの順に並んで進みます。

リユイーは最後尾ですが、念のために生体感知レーダーを作動させ、鎌改を左手に持ち臨戦態勢です。

(ピキーン!)とリユイーのレーダーが警報を発します。

「前方、右側に何かがある。数は・・・まとまっている。」

ルミナはポケットから布切れを取り出し確認します。

「警備室か・・・そんな数にはならないはずだ。入ってみるか？」
サンデイが頷きます。

少し歩くと右側に行く枝道がありました。

「どうだ、気配がするか？」

「バッチリだ。4体いる。」

「よし、ドアを蹴破つて、爆裂魔法を叩き込む、そして私が左、
リユーイが右だ。」

3人が頷きます。

物音を立てないようにそろそろと4人が進みます。

ドアの前に来ました。

リユーイがドアを前にサンデイの魔法のタイミングを計ります。
すると、ライムがチョコチョコとリユーイのところに行って来ま
した。

ドアを少し開けて鍵がかかっていることを確認しています。

（ライム。なにをするの？）ってリユーイは見てます。

ライムはリュックをこそごそ始めると、小さな玉を取り出しました。
玉にはわっかの付いた紐が出てます。

玉を握り、わっかをもう片方の手で握るとリユーイとルミナの顔
を見て頷きます。

2人が頷き返すのを見ると、ドアをちょっと開けました。

玉のわっかを勢い良く引っ張るとドアの隙間から中に投げ込みま
す。

そして、ドアを閉めました・・・。

（ドォム！！）

低い音が響くとドアの隙間から鋭い光が漏れ出ます。

悲恋の洞窟 (3)

シューウ・・・と薄い煙が漏れ出ているドアをリユーイが蹴飛ばします。

ボタンとドアが吹き飛び中には、ふらふらしながら立ち上がるうとしていたオークがいました。

「右だ！」

ルミナがそう言うのと部屋に飛び込み、背中の中剣を振り抜きながら手前のオークを斜めに両断します。

リユーイも、遅れてなるか！と鎌改の刃裏でオークを殴りつけます。殴られたオークは勢いあまって壁に叩きつけられます。

残り2体も武器を取る暇を与えずにそれぞれ葬りました。

「もう大丈夫だ！」

リユーイは外にいるサンデイ達に声を掛けると、2人は素早く中に入ります。

外で2人きりはちょっと心細かったりしたみたいです。

「あらら・・・派手にやったのねえ。」

へやの中のスプラッタな状態を見てサンデイが言います。

「ライムが一番過激じゃないかと・・・」

「でも、いい判断だ。広場ではこうはいかないが、狭い部屋だと効果的だ。」

そんな会話を我関せずな姿勢で、ライムは獲物を漁ってます。

「何かあった？」

「何も無いよ。銅貨だけ・・・」

「何時も有るとは限らないさ。」

ちよつとがっかりしているライムをルミナが慰めたりしています。

「何も無いなら、さあ、先を急ぐぞ！」

しばらく休んで先に進みます。

トコトコと洞窟を進みます。

相変わらず天井は高く、道は曲がりくねってはいますが、道はきちんとした石畳です。

月明かりの夜の街道を歩いているような錯覚さえ覚えます。

道が大きな岩を迂回したときです。

「さて、ここからは様子が変わる。十分注意するように！」
ルミナが一旦歩みを止めてみんなに注意します。
たしかに、風景が変化します。

「これって……」

「神殿……」

「だよね……」

「そうだ。かつて栄えた王国の神殿跡と言ったほうが正しいけどな。」

「だから、途中で門番みたいな部屋があったのか。」

「……今は、殆どここに詣でるものもない……」

神殿は洞窟内の岩壁をくり抜いて作られているようです。

かなり遠くにあるのですが、ライムの作った（ライトーン）の明かりで神々しい姿を浮かべています。

神殿までの道は一直線で等間隔に列柱が並んでいます。

かつては、列柱の上に据えられていたであろう石像の破片が辺り一面に散らばっています。

「ねえ。なんでこの洞窟を（悲恋の洞窟）って言うの？」

「そうだよね。ってリユーイも頷きます。」

「今では知る人もいないか……そうだな、いわれを話してやるうか？」

「うん！」

道の両側にある列柱の台座に腰を掛けると、ルミナのお話が始まります。

昔、まだそれぞれの部族が独立して暮らしていた頃のことです。この森も、その頃はトレッタ平原の北にある森と一体となった大森林でした。

そして、森にはエルフの王国があったのです。

ある日、エルフの王様は夢の中でお告げを受けました。

この森の岩山の中に大きな洞窟があり、そこには泉の精が住むと・
・

その場に神殿を造り泉の精を大切に守れと・・・

あくる日、王様は王国中に御触れを出し、岩山の洞窟を探しました。
た。

そして、見つけたのです。岩山の洞窟とその奥に湧き出る不思議な泉を・・・

王様は洞窟内の岩肌をくり抜いて、泉を守る神殿を建てました。洞窟の前にも、大きな神殿を立て皆でお参りできるようにしました。
た。

そして時は過ぎて行きます。

神殿には、代々王族から1人の女性を洞窟内の神殿に巫女として差し出していました。

ある国王の時代に、王族には1人の王女がおりました。

誰もが、王女が巫女になるものと思っていました。

でも、王女には・・・好きな相手がいたのです。

それでも、しきたりを破ることは出来ません。

王女は泣く泣く、結婚を諦め、洞窟内の神殿に向いました。

しかし、相手の男は諦め切れません。

その夜、神殿に忍び込み、洞窟内の神殿に向ったのです。

神殿で、残してきた相手の幸せを泉の精に一人祈っていた王女は、じぶんを呼ぶ声を聞きました。

あの人が向えに来てくれたのです。

王国も、しきたりも、2人には関係ありません。

2人で遠くに、誰も知らないような土地へ逃げようと神殿の列柱の道を走りました。

しかし・・・見つかってしまったのです。

警備兵は不審な2人に矢を射ちました。何人も、何回も・・・

そして、ついに矢は当たったのです。

王女の胸を貫いたのです。

男は自分さえここに来なければ。と嘆き悲しみ、その場で王女を優しく抱いたのです・・・

そして、王女を貫いた矢は、男の胸に深く差し込まれたのです。

国王は、いたく悲しみ、せめて来世では一緒になれよ。と2人の遺体を矢を抜くこともせず、1つの棺に収めました。

その時、奇跡が起きたのです。

棺の蓋を閉める正にその時、棺から光が満ち溢れ、清浄な水が溢れ出しました。

そして、あふれ出た水の流れは、2人の棺を泉の奥底に運んだのです。

奇跡は続きます。神殿に湧く泉の水は不思議な働きをするようになったのです。

それは、死んでいない限りどんな病気も怪我も一瞬で全快するというものでした。

何時しかこの神殿の水を（祝福された聖水）と呼ぶようになったのです。

「と、まあこんな感じだな。」

「ふん。」

「悲恋なのね・・・悲恋の洞窟って・・・これ？」

「よくあるような、ないような・・・」

反応はいろいろでした。

悲恋の洞窟 (4)

そうなんだ、悲恋なんだってリユーイは自分に言い聞かせてます。だって、悲恋でしょ！ってサンディにポカリと実力を伴った言い聞かせを受けましたから。

一人だけ、トボトボと列柱を進んでいきます。

何時の間にか、道の周りは池のようになっていきます。水の上に浮かんだ一本道を進んでいきます。

ライムがなにかいるかな？って覗いてます。

何もいないようですが、かなり深いようです。

(ピキーン！)

警戒反応です！目の前に半透明の索的用画面が自動的に展開します。

(赤だ・・・でもまだ遠いな・・・)

「判るか？神殿の入口を見てみる・・・2、3匹こっちを伺ってるが、奥にはうじゃうじゃいるぞ。」

「何とか、一網打尽にしたいとこだが・・・」

「私の魔法は単体用よ。」

「私だって、矢は一本づつだよ。」

無理は言わないでってサンディ達が訴えています。

(協力したら全体攻撃が出来るかも！)

(え！どうやって・・・うん、うん・・・なるほどね。)

どうやら、アドバイスを受けたようです。

「あの・・・提案があるんだが・・・」

皆にジロリ！って睨まれました。

「いや・・・ひよっとしたら、全体攻撃出来そうなんだけど、協力してくれない。」

「リユーイって、全体攻撃できるの？また、(レギオン)使うの？」

「いや、あれは、もつと広いとこじゃないと無理なんだ。俺の単体用攻撃方法なんだけど・・・皆で協力すれば全体魔法と同じように使える方法を見つけたんだ。」

3人は、単体で全体？どうするの？って顔で見えています。

「ライムはさっきの爆弾みたいなやつ、まだ持ってる？」

「洞窟って聞いたから・・・後、10個位ある。」

「じゃあ、説明する。好く聞いてくれ。」

4人は頭を寄せ合って、カクカクしかじか、フムフム！って相談しています。

「じゃあ、判ったかな。タイミングが大事だ。」

神殿に少しづつ近づきます。

リユイのリーダーには赤い点がどんどん増えていきますが、神殿の円柱の影から伺っているオークは2、3匹です。

「作戦開始！」

サンデイが（火炎弾）を神殿に向って打ち込みます。

ドカンつと音がして、神殿の入口付近に火炎が開きます。

ワァー！！と神殿からオークが一斉に飛び出し、こちらに向ってきます。

「次！」

リユイ達は逃げ出します。そして、ライムから貰った小さな玉を道の両側の水面に投げ込みます。

ドムウ！つと光と音がして、大きな水柱が道の両側に立ちました。水しぶきが道に滝のように落ちてきます。

その中を何事もないようにオークが向ってきました。

「いまだ。（ボルト！）」

リユイの動力炉から大電流がバリバリと先頭のオークに走りま

すと・・・後ろのオークに次々と電撃が伝染していきます。感電したオークは体から煙路を出しながら痙攣しています。

リユーイは濡れた床に両手を付いてしばらくバリバリと電流を流していましたが、オークがシュン！と消え始めたことを見て、やっと立ち上がります。

「うまくいったかな？」

「すごい！」

「こんな使い方もあるのね。」

「むちゃくちゃだ!!！」

反応は色々ですが、とりあえず入口までの道は確保したみたいで
す。

オークの残した銅貨を回収しながら神殿の入口に辿りつきました。

神殿の入口の両側に小さな水路が掘られています。

神殿の奥から綺麗な水が流れてきます。この水が先ほどの道の両側にある池を作ったみたいですね。

神殿の中も両側に列柱が続きます。

外の道と違って、柱の間に石像が安置されています。

どんどんとおくに入りますと十字路になっていました。水路には橋が架かっています。

「どうする？」

ルミナが確認します。

「行って見ましょう。まずは右側からね。」

道を右に折れて、石橋を渡ると扉があります。警備室はドアですが、やはり神殿の中は違います。

リユーイは扉のノブを回して少し開きます。鍵は掛かっていないようです。

ライムを見て頷きます。

チヨコチヨコつとライムは例の玉を持ってやってきました。

リユーイとライムが見詰め合うことしばし・・・ライムは頷くと玉の紐を引きます。

リユーイが扉をそつと開くと、ライムは玉を投げ込みます。

ドムウ！！鈍い音がして、とびらの隙間から閃光が溢れます。
リユーイとルミナが扉を蹴破って飛び込みました。

「・・・誰もいない！」

「しかし、見る！ここは食堂らしいな。」

ルミナが剣で示した先には、血にまみれた肉の塊・・・そして、鎖
につながれた足の切れ端・・・

サンデイが慌ててライムの目を手で覆います。

「オークは肉食で、人を食べるって聞いてたけど・・・」

「そうだ。やつらは何でも食べる。人を襲えばこの通り、そして
持っていたものを大事に蓄える。」

ほら！って箱をサンデイに渡します。

なに？って箱を開けると・・・安ものの指輪や首飾り等が入って
います。

「持つて行きな・・・悪いものじゃない。」

サンデイはそつと箱を籠に入れました。

「さて、次は反対側だ！」

部屋の惨劇を見てちよつと足取りが重くなりましたが、反対側の
先にある扉を同じ用にして開きます。

部屋の中はさつきと同じで誰もいません。

いや・・・いました。かつて人だったものが・・・壁の鎖に両手を
縛られ両足を切り取られた遺体が・・・

宝物もありません。

がっかりしましたが、あまり時間を無駄にたくありません。

気を取り直して、4人は神殿の奥に向うことにしました。

泉の精

4人は、神殿の奥に進んでいきます。

通路の両脇に並んでいた列柱が無くなり、水路の幅が広くなりました。まるで、浅い川が流れているようです。

前方に数段の石段に縁取られた泉が見えます。

泉の傍には4体の石像

泉に向って微笑みながら手を差し伸べています。

清浄な、水晶のように透明な水が石段を濡らしながら水路に流れています。

「この石像・ルミナに似てるね。」

「エルフ像だからな。ほら、耳の形が同じだろう。」

ルミナは近くの石像を指差してライムに説明しています。

「ここで、終わりだよね・・・依頼はどうなるの？」

「ここで、いいんだ。」

ルミナは泉の前に跪きます。

光球に照らし出された泉の風景とルミナの姿が合わさると神々しさが漂います。

3人は思わず、何時しかルミナの後ろに下がっていました。

「・・・エル・ミハイラフ・サヌ・マアライカナ・・・我は救いを求めに参りました・・・」

ルミナの不思議な詠唱が始まります。

「・・・サヌア・マヌエト・ミク・リモカナ。我に姿を御見せ給わんことを・・・」

何が始まるの！って感じで3人は見えますが、言葉を出すことはありません。

突然！・・・泉の奥で何かが光りました。
泉の水はぐんぐんと溢れ出してきました。
バシャーーン！！と泉の水がはじけ飛びます。

3人が思わず目を閉じます。再び、目を開いたその先には・・・
神々しい光を光を放ちながら泉に浮かぶ少女の姿がありました。
泉の精です！

絶対にそうです。だって少女の体は泉の水と一体になった水で出て来ますから。

「我を呼んだのは・・・其方か？」

「はい。・・・聖水を賜りたく。」

「フム・・・昔日のエルフ王国は潰え、この神殿はオークの根城と化した。その、オークどもを粗方滅ぼしここまでここまで来たからには・・・与えるに吝かではない。」

「しかし、それには代償を必要とする。瀕死の重症を負っても飲めば必ず全快する力を持つ聖水に、そなたはは何を捧げるのじゃ。」

ルミナは黙ってしまいました。そんなことは聞いてないぞ！って顔に書いてあります。

「あのう・・・ちょっといいですか？」

リユイーが間に入ります。

「ホオ、面白い者が同行しておるな。何じゃ？」

（リユイー、彼女私達のこと知ってるみたい、気をつけてね。）
「姫がこっそり耳打ちしてます。」

「代償って、どんなものですか？」

「別に、命をよこせ。というようなものではない。・・・珍しいもの。宝と呼ばれるものじゃ。」

「宝は持っています。ここまでの道でもオークの宝はありふれたものです。」

「そのようなものは、我も欲しくはない・・・そうじゃ、其の方の腰にあるもので良いぞ！」

泉の精はリユーイの鎌改を指差します。

まあ、確かに珍しいものです。形は何ですが・・・材質はドワーフのおじいさんも判別不可能！冶金工学の賜物ですからねえ。

「ルミナ。聖水は必要なんだな？」

「ああ、それが無いと・・・私は部落に戻れん！」

リユーイは腰に差した鎌改を取出します。

泉の精の許にゆつくりと歩いていき、鎌改を渡しました。

「ふむ、やはりか・・・」

泉の精はジツと鎌改を眺めています。

（私に好く似た、形を持たぬ者達よ。貴方はどこから来ましたか。この世界で何をするのでですか？）

リユーイの頭に、姫以外の思念が飛び込んできました。

（この世界の外から、そして何かをするために！）

（私の願いを成就させるためよ！）

姫も思念の会話に加わります。

（・・・その願いはこの世界に害となりますか？）

（害・・・善と悪はある意味で等価値だから・・・定義立てるに

は・・・）

（害にはならない。少なくとも俺はそう思う。）

（それが貴方の目的に向う姿勢ならば・・・目的は詮索しません。・

・困っている者を最後まで見捨てないで下さいね。）

「良かろう・・・娘よ。これが、求めるもの、祝福された聖水じゃ。」

泉の精の手には何時の間にか小さな小瓶があります。

ルミナの前に進むと、その手に小瓶を渡しました。ガラスの小瓶の中には透明な光を放つ水が入っています。

「・・・我はこの泉を去る。ここにはオーク達の住処になつておるからな。」

エツ！つて感じて4人は泉の精を見ます。

「そんなに驚くこともあるまいに・・・ところで、人間の娘よ。お前達は悲恋の洞窟を知つておつたか？」

2人はふるふると首を振ります。

「悲恋の洞窟はエルフの昔話・・・しかも知る者も少ない伝説じや。ここは無くとも構わぬ。」

「でも、それでは・・・」

「聖水が手に入らぬか・・・心配せずとも、日の当たる神殿の神官に頼めば聖水は手に入るだろうに・・・それに、人の生死を左右する物は本来あつてはならぬ物。これが最後と知れ。」

「でも、それじゃあ、死にそんな人を助けられないよ。」

「生死は人の定め。無理に乱すことはない。・・・今までそのよくな物があるとは知らなかつたであろうに・・・」

3人は頷く。

病気や怪我を治療する薬や魔法はあるが、瀕死の者を救うような代物は聞いたことが無い。

「だから、無くとも構わぬのじゃ。帰るがよい。お前達が立ち去つた後、この神殿の入口を閉ざし、我も立ち去るとしよう。・・・洞窟は、オーク達の住処じゃ。残しておこう・・・」

4人は礼を言うと足早に神殿を出ます。

列柱の中ほど迄来ると、神殿の方から大きな音が響いてきます。振り返ると、天井から巨石がどんどん落ちて見えます。

しばらくの間、落石は続きます。やがて神殿はその中に閉じ込められ、見えなくなりました。

道の曲り角にあつた巨石まで辿りついた4人はちよつと休憩です。

ライムの美味しいお茶とお菓子を頂きます。

「すまない！これのために、お前の大切な武器と交換してしまつて。」

「いいよ。そもそもあれは鎌で武器じゃないし・・・これも有るし。」

リユーイに頭を下げるルミナに、いいよいよって手振ると、腰の鉞改を見せてます。

「でも、伝説の武器だったんでしょ。ドワーフのおじいさんもそんな事言ってたし・・・」

「いや、あれはたまたまおじいさんが見たことが無かったからだよ。問題なし！」

たしかに、この世界の材質ではありませんが、泉の精が鎌を持って戦う事は想像出来ませんし、したくもありませんから特に問題は無いでしょう。

今頃は、壁に飾ってお茶でも飲んでるのかも知れません。

「実は、この依頼は私が個人的に出したものだ。ギルドは通っていない。」

「しかし、依頼は依頼。ちゃんと報酬は払う。全額、赤い靴の取り分で構わない。」

「厚かましいが、一つお願いがあるのだが・・・いいだろうか？」
「どんな？って3人は聞きます。」

しばらく考えていたルミナがリユーイに顔を向けました。

「リユーイをしばらく貸して欲しい・・・そうだな、一ヶ月位だ・・・」

「・・・ええー!!!」「」

3人は思わず叫びました。

ようやく依頼が完了したのですから、報酬たんまり、寝て暮らすをしようと思ってたみたいですね。

「理由は、聞かせてくれるよね。」

「ああ・・・この聖水を持ち帰るためだ。そこには私の部落がある。」

そして明日をも知れない妹がいる。」

「大切なものをこれと引き換えにしたリューイの顛末をみて貰いたい・・・」

「ルミナの部落って遠くなの？」

「山を2つ越えた先にある。・・・エルフの隠れ里だ。あまり、人には知らせたくないがな・・・」

「リューイはどうなの？」

構わない。とリューイは答えます。まだ目的が見えてきませんか
ら広く世界を知る必要があります。

「それじゃ、一旦村に帰って明日出発ということでもいいわね。」
荷物を纏めると、4人は洞窟の入口を目指し歩き出しました。

猿飛び

悲恋の洞窟から帰った翌日、リユーイはサンディの家の前にいます。

「ほら、ハンカチ持った？忘れ物ないの・・・」

サンディが母親のようにリユーイの持ち物を確認してますが・・・まあ、問題はないと思います。なんてたって、リユーイは改造人間食べるものも飲み物も本来必要ないですからね。

「お姉ちゃん、これあげる。」

ライムがそういつて渡してくれたキビダンゴ・・・いや、爆光球のほうありがたいと思ったりしてます。

娘3人？姦しくしていると、ルミナがやってきました。

「準備は出来ているか？だいたい、10日位山道に行く。人間には結構きついぞ！」

3人は改めてルミナの装備を見てみます。

皮の鎧にかわのブーツ、背中には長剣。そして、肩に担いだ小さな皮袋。

少し露出過剰なところもありますが、3人があこがれる冒険者の正装です。

今度はリユーイをサンディとライムが見ます。

GシャツにGパン。腰につけたポーチに鉈のセット。手には身長程の木の棒、先端には金具とワツカが何個か付いています。これは、鎌改が無くなったので代用品を買ったみたいです。最後に肩に斜めに背負った布袋。

ちよつと、冒険者には見えませんね。どちらかと言うと旅人です。

「山は物騒だぞ、大丈夫か？」

ルミナの念押しです。確かに街道を歩くような格好ですからね。

「問題ない！」

リユーイが答えます。

「では、出かけるとしよう・・・サンディすまんがちょっと借りるぞ！」

ルミナが歩き出します。リユーイはライムに頑張るからね、なんて言っていました。急いでルミナを追いかけます。棒の金具がカシヤンカシヤンと音を立てます。熊避けにはなるかも知れませぬね。

「行っちゃった！」

「もう直ぐ、お母さんが帰ってくるわ。それまでにすることがいっぱいあるから・・・ライムも手伝うのよ！」

「うん！」

ルミナ達が村の十字路を曲がり見えなくなると、残念そうに家に入っていました。

村を出て、段々畑を森に入り、トレツタ草原に向った小道を進みます。

トレツタ草原の分岐路を山の方に向かって進むと、段々小道が小さくなり、終いには獣道のようになります。

それすら、何時しかなくなり、2人は深い森の木立を進んでいきました。

2人の行く手を灌木やツタが阻みます。ルミナは長剣を抜いてエイ、ヤッ！つと、邪魔な枝等を払って進みます。

「フウ・・・疲れるな。お前がエルフなら楽なんだが・・・」

なんで？って聞いてみると、エルフは枝渡りが出来るのだそうです。

リスか猿のように枝から枝へと飛ぶことによって平地を歩くように森の中を移動できるのだそうです。

「まあ、無理なことは仕方が無い。」

ルミナは再び長剣で行く手のツタを払い始めました。

（できるよ！）

（え！どうやって・・・）

（貴方の身体能力は人間の10倍。ジャンプすれば、垂直で5m

は軽いし、体重も十分の一に減らせるし・・・それに半重力場を体に形成すれば、長時間の飛行は無理でも、枝から枝に飛ぶことは簡単、簡単。）

（具体的には？）

（イメージして実行かな？細かいところは貴方の電腦と私がサポートするから大丈夫！）

「あのさ・・・さつき枝渡りって言ってたよね。ちょっと見せて貰えるかな？」

親の敵のような形相で枝を払っていたルミナに恐る恐るリユーイが聞きました。

「ああ・・・そうだな。長い旅だ・・・ちよつとまで、見せてやる。」
ルミナはそう言うつと長剣を背中に戻し、体制を整えます。

ひょい！つとルミナが真上に飛び上がりました。

リユーイの真上にある枝に降り立ちます。垂直に5m以上ジャンプしています。

すると、その枝から10m程はなれた木の枝に飛び移ります。さらに次の枝に移りました。

リユーイは生体リーダーで確認すると、青い点がピョンピョンと移動しているのが解りました。

「じゃあ、俺も！」

棒を紐で背中に斜めに背負つと準備完了です。

（確か、イメージって言ってたよね・・・ようし！）

「猿飛び！」

リユーイは垂直にジャンプします。ルミナより高く、そして、他の枝にひょい！つと飛びます。

生体リーダーでルミナの位置を確認すると、その方向へ枝から枝へ飛び移って行きます。

ルミナはしばらくピョン、ピョンと枝を飛んでいましたが、高

い木の梢を見つけると、ちょっと休憩することにしました。

「さて、戻るとするか・・・少し移動しすぎたな・・・」

ルミナが戻るうとして姿勢を変えたその時です。

ルミナが立つ梢にフワリ！っとリユーイが降り立ちました。

ビックリして足を滑らすルミナを慌ててリユーイが抱き抱えます。

「・・・おま、お前は・・・枝渡りができるのか？」

ビックリしたルミナはそう言うのがやっとです。

「枝渡りと似た技だよ。」って誤魔化します。

腕の中でモガモガ動いているルミナに気が付いて、腕を開放します。

赤みが差した顔でしたが、なにやらほっとした表情です。

「ちようどいい。ここで一休みしよう！」

そう言ってルミナは梢に腰を下ろします。

リユーイも向かい合う形で腰を下ろすと、背中の布袋を開き、水

筒の水を飲みました。

（いやー大変だったよ。今静止軌道上にGPS衛星を12個ばら撒いたから貴方の位置は常に把握できるからね。位置が特定できないと色んなバックアップできないからね。）

（GPSって・・・）

（気にしないで、これも、船の連中の精神衛生上のためだから、あなたの手助けをしたいって連中が多すぎるのよ。常に作戦スクリーンに貴方を捕らえていないと安心できないって参謀本部も言ってくるし、次はまだか？って色んな部署の輩が来るしね。）

（大変なんだね。）

（とにかくなるべく厄介ごとに巻き込まれてね。）

それは、違うんじゃないかとリユーイは思いましたが、幸いにも相手には伝わらなかったようです。

「まあ、お前が枝渡りが使えることは確かなようだ。これで、これからの移動が楽になる。」

「まだ、先なの？」

「ああ、森の半分くらいか・・・森を抜け切る所で今日は終わるだ。木の上なら獣や魔物の心配もせずに済むからな。」

「じゃあ、出発するぞ！つとルミナは枝渡りを開始します。」

「ピョンピョンとたちまちリユイの視界から遠ざかりました。」

「生体リーダーのスクリーンを前方に展開します。」

「猿飛び！」

「フン、フワリ・リユイもリーダーの青い点を追いかけてました。」

「どこか別の場所で・・・」

「ほらほら、サボってないで手を動かす。大金払ってんだからちゃんと働いてよね。」

「みんなー、お茶が入ったよー」

「大工の棟梁は冷汗をかきながら弟子達の仕事を見てます。」

「この姉妹の仕事を請け負ったのが運のつき・・・普段の倍のスピードで仕事が進んでいきます。」

「さらにどこか別の場所で・・・」

「姫、位置精度をさらに向上させるべく周回軌道上にGPS衛星を新たに3基設置したいのですが・・・」

「許す！」

「姫、新たな技を考案致しました。カプセル封印型怪獣を用いた召還魔法なのですが・・・」

「やめとけ！」

エルフの隠れ里

2人は森の梢を飛んでいきます。

ピヨン、ピヨン・・フヨン、フワリ・・

流石、エルフは森の民です。優雅に華麗に枝から枝へと移っていきます。

リユーイはというと、慣れてはきているんですが・・少しギコチないです。

でも、イメージしたのが（カム 外伝）の忍術ですからある程度力技になるのは仕方無いのかもしれませんが。

そんな感じで、2時間ほど森を進むと、ルミナの移動が止まりました。

リユーイが急いでルミナの所に行くと、そこは大きな木の上です。降り立った立ち木の先は、ゴツゴツした岩肌むき出しにした山がそびえています。

へへっって感じて感心しながらルミナのいる梢にフワリと着地します。

「今日は、ここで野宿する。木の上だ、獣の心配もない。」
そう言って、背中の袋を下ろします。

確かにこのまま行っても中途半端な場所で野宿となりそうです。
早速準備です。

袋からロープを出して、幹に結ぶと梢の方に斜めにロープを張ります。それを2本。

次に、斜めに張ってあるロープと梢を互い違いに編みこみます。

「この編みこんだ間に、2つに折った布を入れて・・ほら、この中に体を入れて休むんだ。寝相が悪くとも、編みであるから落ちる事はない。」

ルミナは、作業を解説しながら即席のベッドを作りました。

早速、リユーイも隣の梢で試してみました。

中に潜り込むと、ちょっと窮屈ですが、安定しています。これなら高い場所から落ちないで済みそうです。

まだ少し明るいですが、2人は早々と眠ることにしました。

チユンチユン・・・

朝です。まだ日が昇るには少し早いみたいです。朝靄に森が包まれます。

インスタントベッド？を畳み、1つの梢に座って2人仲良く携帯食料を齧っています。

もう直ぐ出発です。

「岩山も森と変わらん。ただ、不安定な岩に飛び乗ると崩れるから注意しろ。出来るだけ大きな岩を選ぶんだ。」

ルミナが岩山の注意をすると、ピョンピョンと飛んで行き、瞬間に見えなくなっています。

森と同じように生体リーダーでルミナの方向を確認します。大分離れてしまいました。

「猿跳び！」

リユーイもフユン、フワリ・・・と後を追いかけます。

2人は岩山を飛んで行きます。

次の日は谷を越え、森を抜け・・・

野を越え、また谷を越え・・・

岩山の窪地に身を寄せ合って眠り、谷川で魚を取ってバーベキュー・・・

そんなこんなの旅を続けること10日目、ルミナの隠れ里がある森に着きました。

「ここだ！この森に私の部落がある。」

ルミナは、そう言っています。リユーイには、今までの森とどこが

違うのか判りません。

「森全体が境界に包まれている。森を見ても、森に入っても、人間には気配等判るわけが無い。」

キヨロキヨロとあたりを伺うリユーイを苦笑いしながら見てます。では、行こうか、とルミナが手近な梢に飛び乗ろうとしたその時です。

ヒュン！、ヒュン！！

ルミナの足元に2本の矢が突き刺さりました。

何時の間にか近くの梢にエルフの男性が立っています。奥にもう1人。

生体リーダーには黄色の点が段々増えていきます。

ルミナを男が指差しました。

「・・・よくも戻ってこれたものだな！」

ルミナは黙っています。

「お前が祠の封印を破つたのを見ていた者がいる。・・・言い逃れることは出来ないぞ！」

生体リーダーの黄色の点は8個、目の前の2人意外に6人が森に隠れています。

「・・・この村に未練は無い！・・・妹に届けたいものがあるだけだ。」

「その妹、いや！巫女姫の病も・・・お前が去った後は悪化する一方だ。いまさら・・・去れ！」

「後生だ！・・・届けるだけでいいんだ・・・」

どうやら、村でなんか仕出かしたようです。村の掟にでも抵触したのかもしれないね。

リユーイはただ、ただ状況を見守るだけです。

その時です。

リユーイの生体リーダーに急速に接近する黄色い点が現れました。みるみる近づいてきます。

そして・・・シュタツ！とリユーイの前に白い布に身を包み、長

い髪を組紐で結んだ1人の女性のエルフが降り立ちました。

ふかぶかとリユーイ達にお辞儀をすると後ろに振り向き梢のエルフに顔を向けます。

「シエム・・・ここは通してあげなさい。長老の命です。」

「ですが・・・その者は掟破り、ましてや、よそ者を村に連れ帰るといふ失態もしてかしておるのですぞ！」

「それを含めてです。・・・長老はルミナの弁解を聞いても良いとまで言っています。」

「しかし・・・判りました。・・・帰るぞ!!！」

シエムと呼ばれたエルフが目の前の梢から消えると、他の反応の次々と消えていきます。

「申し訳ありません。彼は、真面目すぎるものですから・・・」

「ライカ。もういい。それで、長老は申し立てを聞くといったのだな？」

「はい。でも聞くとは言っても許すとは申ししておりません。」

「それはかまわない。掟は掟だ。何も無かったことには出来まい。」

「そちらの方ですが、賓客としてお招きするよう巫女姫様より承っております。」

「さて！妹は・・・大病で臥せっているはず・・・」

「今は、でも、10日程前、突然祠に御出でになり、姉と伴に来るお方を泉にお連れするよう告げられました。その後は昏睡したままです。」

「そうか・・・」

「ご案内します。というエルフに従い2人は森に入っていました。」

エルフの部落は隠れ里、深い森の中にあつて周囲を結界に囲まれています。

用の無いものは入れない。入らせないのが村の掟。

だから村があるのか、有るとすればどのあたりなのか外部の者に

は判りません。

そんな森をよく知るエルフの後を追ってリユーイは飛んでいきます。

しばらく進むと空地が見えました。

森の中に周囲100m程度の空地があり、そこにログハウス風の家が立ち並んでいるのが見えます。

その端に森の梢から、シュタツ！と降り立ち、一番大きな家に3人は歩いていきます。

「お入りください。」

長老の家の前でエルフが言いました。

ルミナは動ぜずにドアを開けて進みます。リユーイも後を着いていきます。

室内は、以外と広く、長老職のエルフが数人壁を背に両側に座っています。正面に座っているのが、大長老という事でしょう。大長老の前には炉が切つてあつて、小さく炎が燃えています。

ルミナは炉の前に座ります。リユーイもそれに倣いました。

周囲からは、のこのこと・とか、よくもおめおめと・とか小声が聞こえましたがルミナは無視しています。

ルミナが、大長老にふかぶかとお辞儀をします。あわててリユーイもお辞儀をします。

「祠の封印を破り、古の地図を持ち出した罪。今更弁解の余地は有りません。甘んじて受ける所存であります。その前に一度だけ巫女姫に合わせて頂きたく参上致しました。」

「・・・」

「・・・今一度、妹に合わせて頂きたく・・・」

「ルミナが生まれた時・・・時の巫女姫は、こう言った。（この者はこの村には過ぎた者・・・）」

「どんな意味かは判らんかった。・・・だが、地図を持ち去り、戻ったということは・・・手に入れたのか？」

「はい。．．しかし、これが最後ともう二度はないと．．」

「そうか．．確かに二度は必要無かるうて．．しかし、あそこはオークの棲家、どんなにお前が武勇に優れていようとも単独では数に飲まれるのは必定．．」

「この者達の助けを借りました。その上、彼女の大切な武器を交換品として差し出しました。」

「．．泉の精の欲しがりし宝とは、この者の武器とはの．．」

「お客人、すまんことをしてしもうた。お客人の武器はもう二度と手には入らぬじゃろう．．．」

「ところで、聖水は何処じゃ。」

ルミナは懐から聖水を取り出しました。

小さなビンに入った聖水は、聖水自体から透き通った青い光を発しています。

長老達は思わずその光に見入ってしまいました。それほど綺麗なのです。

そんな中、大長老が手を叩きます。

お呼びですか。と先ほどのエルフが入ってきました。

「その祝福された聖水をロミナに飲ませない。」

エルフは畏まって、聖水を受け取ると部屋を出て行きます。

「今夜はこの村に泊まりなさい。お客人も一緒に．．沙汰は明日でよかるう。」

ルミナは礼をするとリユーイを伴い家を出ました。

今夜は、古巣．．昔住んでいた家に泊まるようです。

ロミナとオニギリ

チチチ・・チュンチュン・・

朝です。エルフの隠れ里に、ニワトリはいません。

村を取り巻く深い森に住む小鳥達が一斉に囀ってます。賑やかですからエルフの人たちは皆早起きです。

ルミナはリユーイを伴って村の共同井戸に向います。

こんこんと湧き出る石組みの井戸から水を桶に移して顔を洗います。

「軽く朝食を食べて長老に家に行くぞ！」

布でゴシゴシ顔を拭きながらリユーイに告げます。

ベッドが2つだけの小さなログハウス、それがルミナの家です。

壁に組み込まれた暖炉の火を掻き立てポットを据えつけると、火箸の先に干し肉を刺して軽く炙ります。

「ほら、出来たぞ。」

ルミナがパンに焼きたての干し肉を挟んでリユーイに渡します。

リユーイは、お茶の準備です。

「食べながら聞いてくれ・・昨日の件でおおよその察しはついたと思うが・・」

リユーイは頷きます。

「私の家系は古いエルフ王家の末裔だ。この村の祠の巫女として祭祀を代々受け継いできた。」

「母が無くなった時だ、村の者は当然私が後を継ぐものだと思っていたが・・・妹が名乗り出た。」

「私と妹は双子だ・・・しかし、妹は、妹の目は見えないんだ・・

「お姉さんは世界を見てきて・・そして私におしえてね。って・・

「私は、村を出た・・・たまに帰って、村や町、クエスト、珍しい食べ物・・・いろんな事を妹に話した。」

「そして、今年の若草の月に、村に帰って来たら・・・妹が重病と巫女より聞いた。」

「村に生まれ、外に出ることかなわず、まして世界を見ることもなく・・・私には耐えられなかった。あまりにも不憫でならなかった。」

「私は、訳もわからず駆け出した。・・・気が着いた時には・・・祠の前にいた。」

「幼い頃の母の話を思い出した。祠には、エルフ王国の神殿の地図がある。その神殿にはどんな病も治す不思議な聖水がある・・・と。」

「私は・・・祠の結界を壊し中であつた壺の中から古い地図を見つけると村を飛び出した・・・」

「だから、私は罰を受ける。しかし、顛末だけは確認したい。それだけだ・・・」

ルミナは温くなつたお茶を飲みました。

リユーイはなんと言つたらよいか悩んでいます。自分に兄弟がいたら・・・なんて考えてるのかもしれないね。

「ルミナ！長老が御呼びだ！」

家の外で誰かが怒鳴つてます。

「シエイムか。今行く！」

「さて、御呼びだ・・・出かけよう！」

昨日のエルフに先導されて長老の家に向います。

朝早い時間ですが、村の中は賑やかです。

数人連れ立って森に入るエルフ達の背中には弓矢が背負われています。狩に行くのかも知れませんね。

「シエイムです。連れてまいりました。」

エルフの男はそう言って、リユーイ達を中に入れます。
昨日と同じように、村の長老が揃っています。
リユーイ達は大長老の前に座りました。

「揃ったか・・・」

「さて、ルミナよ。その客人を連れて、祠に行くがよい。」

「それと、お前の沙汰じゃが・・・村払いとする。祠から村に帰るに及ばず！立ち去るがよい。」

「そして、御客人・・・戦士の魂とも言わすべき武器を聖水の代替にして頂き、重ね重ね礼を言う・・・これを受けて欲しい・・・」

大長老は後ろから長剣を一振り取出しました。

「エルフ王国健在しころ、国王がドワーフに打たせた長剣じゃ・・・銘を（おにぎり）という。貰ってくれ・・・そして孫を頼む。」

シエイムが大長老より名剣おにぎりを受け取り、恭しくリユーイに捧げ渡しました。

でも、リユーイの武器って元は唯の鎌です。貰っていいのかな？
ってルミナを見ると、貰つとけと目が言っています。

「このような名剣を私が持つても・・・」
少し遠慮して見せます。日本人は謙虚さが売りですからね。

「良い良い。村においても意味が無いもの。そなたに貰われてこそ意味があるというもの。」

では・・・とリユーイは受け取りました。

「さて、祠は男子禁断・・・巫女がご案内します。」

「では、参りましょう。」

何時の間にか2人の後ろに白いフードをまとった女性が立っていました。

長老の家の裏手にある小道を3人は進みます。

村には不釣り合いな敷石で舗装された小道です。

うねうねとした道を歩いていくと、石造りの建物が見えてきまし

た。

「祠の巫女が住まう館です。祠はもう少し先になります。」

サンデイの家の2倍程の館を過ぎると、石造りの小さな祠がありました。

「しばらくお待ちください・・・」

巫女が立ち去りました。

祠は直径1m程の泉を中心に据えて、4方に石柱を組み、その上に薄い石を敷き詰めて屋根とした簡素な造りでした。

石柱には文字を書き綴った布が張り巡らされており、おそらくそれが境界となるでしょう。

泉の奥には石で出来た祭壇があります。古い材質不明な壺が祭られています。

村はログハウスなのにここは石造りってちょっと変だな？なんて考えていた時です。

「お姉さま！」

リユーイが振り返ると、そこにはもう一人のルミナが立っていました。

ルミナが駆け出し・・・もう一人のルミナに抱きつきます。

「ロミナ・・・直ったのか・・・よかった、よかった。」

2人、抱き合いながら再会を喜んでいきます。

でも、すぐに、ルミナは気がつきました。

「ロミナ・・・目は・・・」

ロミナの両目は包帯が巻かれていたのです。

「病は直ぐに良くなりました・・・そして私の目も・・・でもあまりに眩しくて・・・しばらくは見ることが控えろ・・・」

「そうか・・・それならよかった。」

「いいえ。良くありません。聞けばお姉さまは、このままこの村を去るとか、二度と村には戻らないとか・・・」

「おねえさまの姿を見ることが出来ないなんて・・・」

(リユーイ。ちょっとよいか。)

(今、いいとこなんだから、手短に・・・)

(私の所の、早期警戒管制部隊がね・・・今日の話を聞いてたよ。・・・もう、涙を滝のように流してんのよ。それで、これを贈れって言って来てるんだけど・・・)

(なにを贈るの?)

(携帯通信機!・・・今座標セットしたからあと少しで着くよ。空みてて!)

「2人とも、ちょっといいかな?」

ルミナとロミナが振り向きます。

「なんと言ったらいいか・・・とにかく、2人を哀れと思えば贈りものをしたいと言っている。ほら、空から白い花が落ちてくるだろう。あれがそうみたい。・・・とって来るね。」

リユーイの言い訳してみた話の最中に、青いそらから白いパラシュートが降りてくるのを見つけました。

それには及びません。と巫女がシュタツツと枝渡りで回収に行きます。

「お姉さまのお連様は、神託をなされるのですか?」

「いいや、こいつはリユーイというただの娘さ。私より強いかな。」

「戦士様ですか。この度はいろいろとありがとうございました。」

ロミナは改まってリユーイに丁寧にお礼を言います。

「何時までも居ると別れが辛くなる。2度と会えないかも知れないが幸せに暮らせよ。」

「お姉さまもお元気で・・・」

改めて2人抱き合っています。これで、最後ですからね。リユーイもちよつと涙ぐんでいます。

「これで良かったのでしょうか？」

巫女さんがパラシュートを回収したみたいです。

小さな包みが結んであります。それを開けると・・・2つの携帯電話？と手紙が入っていました。

「なになに・・・コンパクトの蓋を開けて赤いボタンを押すと相手のコンパクトに音なる・・・どれどれ・・・」

ルミナとロミナにコンパクトを渡して確かめてみます。

「次に、音が鳴ったほうのコンパクトについている赤いボタンを押すと音が鳴り止んで通話が出来る。その時鏡に相手の顔が映る。鏡を写したい方向に向けると相手にそれが移る・・・できた？」

「やめる時は、青いボタンを押す。そしたら消える・・・ホントだ！」

これさえあれば、遠く離れた2人が顔をあわせて話し合うことも出来ますし、ロミナに遠くの町や村を紹介することも出来ます。

ルミナとロミナは天の神様にお礼を言いました。

船の連中もちゃんと聞いてるんでしょうね。

「これで、思い残すことは無い・・・」

「ロミナ、しあわせにな！」

「お姉さまも・・・リユース様、姉をよろしくお願いします。」

ルミナはシュタツ！つと枝渡りで祠を去ります。もう2度と戻りません。でも、村の様子は何時でもわかります。

安心したルミナはどんどん加速して故郷を離れていきます。

リユースもルミナの存在を生体リーダーで確認しながら（猿跳び）で追いかけます。

盗賊団現る

黄金の月が終わり、灰色の月も半ば近くになりました。

サンデイ達が住む山の村も段々畑の収穫が終わり、出稼ぎに出ていた者達が次々と帰ってきました。

サンデイのお母さんも月初めに帰ってきました。若草の月に出かけてから7ヶ月ぶりです。

ただいま。ってお母さんが帰ってきた時、ライムは真っ先に走っていつてお母さんに抱きつきました。甘えんぼさんですね。

でも、ライムはまだ12歳。お年頃ですから仕方ありません。その後、お帰りなさいってちゃんと挨拶も出来ました。

「あら？サンデイはどうしたの？」

お母さんの素朴な疑問です。

「お姉ちゃんはね、大工さんのお仕事見張ってるんだよ。」

「えっ？」

何かあったのかしら。とお母さんは考えました。でも、家は小さいですけど頑丈な造りです。修理する場所など思い浮かびませんでした。

「あら！お帰りなさい。もう少し後かと思ったけど・・・ご苦労さまでした。」

サンデイは町で働いているお母さんを一度見たことがあります。

小さな宿屋の台所で、それは忙しく立ち回っていました。

「ところで、この家に修理するところってあったかしら？」

「何処にも無いわ。」

「だって、大工さんが来てるんでしょう？」

「あゝ・・・それね。いいわ。話したげる。でも、その前に荷物を置いて来て。ライムお茶を頼むわね。」

そうです。お母さんは未だ荷物を持ったままでした。

「そう・・そんなことがあったのね。」

「そんな訳で、お母さんが帰ると、リユーイの泊まるところがなくなるの。だから、納屋を改造して寝室を作ってるのよ。」

「よく判りました。ところで、何時帰ってくるの？私もお礼を言わないとね。」

「それが・・一月ほど前のクエストで同行したエルフとエルフの故郷へ行ってるの。もう直ぐ帰ってくると思うわ。寝室は後2日で出来上がるから、お布団も用意しなくちゃね。」

家族水入らずでお茶をのんびり飲みながらお話は続きます。だって、半年以上合っていますから。

2日たって、リユーイの寝室が完成しました。大工の棟梁に気前よくサンデイが給金を支払います。

お母さんは、何処で稼いで来たんだろう。って思いましたが、聞くことはしませんでした。

だって、昨日、猟師さんの家に猟師株を買いに行くと、（お前さんちには、20株を渡してるからそれで十分だろ）って言われました。そんなにお金があるはずなのにつて考えてたら、サンデイと一緒に娘が仕留めた大猪と猟師株を交換したと教えて貰いました。

だとしたら、寝室の改造費もなんとか自分達で調達したに違いありません。

「これで、お姉ちゃんが何時戻っても大丈夫だね。」

お母さんの手を握りつばなしのライムが言いました。

「ライムはお姉ちゃんが大好きなのね。」

お母さんはそんなライムを微笑んで見えます。

「うん。だって、強いし、綺麗だし、そんでもって、ライムが寝る時に何時もお話してくれるんだよ。一度もライム聞いたこと無いお話だよ。」

きつと遠くから来たのね。娘達も懐いているようだし、ずっといてくれたらいいんだけど・・・お母さんは、まだ見ぬリユーイにそ

んな感じを持ちました。

そんな日々送っていた時です。村の中を誰かが狂ったように鐘を鳴らしながら通りすぎました。

早鐘です。

サンデイが慌てて通りに出ます。そして左右を先ず確認。・・火事では有りません。

駆け出します。そしてギルドに駆け込みます。

そこには既に、大勢の者達が集まっていました。サンデイもその中に入って行きます。

「・・・とこんなところだ。今一度言うぞ！盗賊団が村外れで目撃された。今は黄金の月が終わり、この村が一番満ち足りた時だ。やつらはそれを狙って来たに違いねえ。・・・」

普段は奥まった事務所にいるギルドマスターがギルドのホールにあるテーブルに載って皆に告げています。

（こまった。）とか、（今ここに冒険者は何人いるんだ。）とか、いろんな人が一斉に話し始めます。

「だまれ！！とりあえず奴等が襲つてくるとすれば、今夜だ。昼にはこねえ。今から段取りを決めるからそこで大人しくしてる。」

「サイズ、カルアちよつと来い！」

集まった中の2人を連れてマスターは事務所に入っていきました。

「おお、サンデイか。例のねえちゃんは来てねえのかい。」

「それが、エルフと一緒にエルフの里に行ってるのよ！」

そうかあ・・・残念。と猟師のおじさんが言いました。

その娘っ子っていうのは例のあれか？そうだ・・・なんか有名になっています。

しばらくワイワイ・ガヤガヤやっていると、マスターが2人を連れて出来ました。

「いいか、手はずを伝えるぞ！よく聞けよ！！」

「村の入口は2箇所だ。南側をサイズに、北側をカルアに任せる。2人とも銀3つだ文句はあるめえ。」

「残りの銀持ちは6人だ。4人をサイズに2人はカルアだ。人選は任せる。」

「そして、残った黒は星3つ以上が14人。ここは7人づつ分ける。」

「最後に黒の星2つ以下だな。屋根に上って援護しろ。何処の屋根でもいい。」

「最後に、質問はあるか？・・よし、じゃあ準備にかかれ！！」

サンデイとライムは自宅の屋根に上り、村に入ってきた盗賊団の迎撃はやらなければなりません。

でも、村人の殆どがこんな時は同じような事をするはずですから、ある意味戦力外通知に等しいものですね。

サンデイは自宅に駆け込みます。

「お母さん・・・」

お母さんは、ギルドでの話しを聞くと早速準備です。

必要なものは、夜食と水筒、魔力補給の小瓶、薬草、毒消しですね。小分けして小さなかばんに詰め込みます。

武器は、おかあさんがフライパン。サンデイが杖、ライムが十字弓とボルトそれに爆光球をポケットに入れます。

家に戸締りをして、家の裏に梯子を掛けます。

水を汲んで屋根に上り、屋根に水を満遍なく掛けます。こうすれば火矢を受けても直ぐ燃え上がりませんからね。

さらに、水が入るものに全て水を入れます。

最後に通りの真ん中にかがり火を準備します。

これで準備終了です。後は、夕食を軽くとって連絡を待つことにします。

夕暮れが訪れ、村の家々からほのかな明かりが漏れる時でした。昼間と同じように早鐘を打ち鳴らしながら誰かが走る抜けます。盗賊団の襲来です。

3人は、ゆっくりと立ち上がると、裏にある梯子を上ります。

最後にお母さんが登り終えると、梯子を3人で屋根に持ち上げました。

ナナイ村の危機

屋根に梯子を持ち上げると、屋根の影に隠れて通りを覗いています。幼い子供を持つ母親は早くから裏山に猟師さんに付き添われて逃げています。

通りは、シーンと静まっています。時折、犬が吠えています。緊張感が伝染したかもしれませんね。待つのはイヤなものです。

お母さんは、ライムが小さい時を思い出しました。あの時も、盗賊団の襲撃があつて、私はライムを背負つてサンディと伴に裏山に隠れたんだわ。

でも、あの人は銀2つ・・・門の所で盗賊と戦つて・・・亡くなったのよ。

今回は、何事も無いといいんだけど・・・

突然村の門の方が明るくなりました。

門の方を見ると、空から炎が降ってきます。

火矢です。盗賊団の襲撃が始まったのです。ワー！！という声が聞こえてきます。

また、火矢が空を彩ります。

「盗賊団はね。部隊を3つに分けてるんだよ。新しい連中は、切り込み隊で、中堅が弓を使い、古株は最後の略奪をするのよ。切り込み部隊は消耗品なの。幾らやられても盗賊団に入りたい者を切り込みを使うから。そして、見所のあるものを中堅、古株と変えていくのよ。」

「じゃあ、後になればなるほど強くなるの？」

「そうね。そうなるわね。」

門の方の戦いが激しくなってきたようです。ワー！！という声に混じって、ガシャガシャっという鎧や武器のぶつかり合う音が

きくなっています。

サンデイは杖を握り直しました。ライムは十字弓を引き絞ってボルトを装着します。

「一人行つたぞー!!」

十字路にある民家の屋根から叫び声が上がります。

サンデイが通りを見ると盗賊団の男が大きな斧を持って走ってきます。

サンデイの向かいの家の屋根から火炎弾が発射され、男に当たります。大きな火柱が上がり、その場に男は倒れました。

サンデイは小さな火炎弾を作ると、家の前の松明を燃やします。それを合図にあちこちの松明が燃え上がります。

これで、しばらく通りを明るく照らすことができます。

「今度は、2人だー!!」

また、門を越えた盗賊が走ってきます。

サンデイが火炎弾を発射します。ライムはボルトを発射しました。盗賊はそれを身を振って避けると、短剣をサンデイ達に投げつけます。

カキン!とお母さんがフライパンで弾き返します。

サンデイが継ぎの火炎弾を発射しようとしてる間に、周囲の家の屋根から火炎弾やボルト、矢等が次々に盗賊に飛んでいきます。たちまち盗賊はその場に斃れることになりました。

「火矢が来るぞー!!」

その声に空を見上げると、火の玉のように一団となった火矢が飛んできます。

火矢はサンデイ達の屋根にも突き刺さりましたが、お母さんが水に浸したボ口布を棒の先につけた道具でパタパタと消していきます。さらに次の火矢がとんできます。ライムも手伝ってパタパタやっ

てます。

でも、上手く消すことが出来なかった家もあるようで、離れたところで火の手が上がりましたが、この状態ではどうしようもありません。

どんどん火矢が打ち込まれます。3人は懸命にパタパタを繰り返します。

「火矢が近づいたってことは、中堅の連中がいよいよ出番ってことよね。」

「そう。これからが本番よ。絶対に躊躇しないでね。相手は人の形をした魔物って考えればいいわ。」

「ライム、頑張るよ!」

3人が決心を固めたその時です。

「破られた!!・・・来るぞー!!」

そう告げた男の人の体に次々と矢が突き立ちます。

「ワー!!」という大声をあげて十数人の盗賊が道を走りながら手当たり次第に物を壊していきます。

十字路に近い家のドアを斧で叩き壊し始めました。周囲の屋根からたちまち矢が飛んで行きます。

「絶対に当たる距離まで待ちなさい!」

十字弓でボルトを撃とうとしたライムに注意します。

家のドアを破る音が近づきます。

パシュ!つと音がしたかと思うとドアを破っていた男のわき腹にボルトが突き刺さります。

サンディが振り返るとライムが真っ青な顔をしています。

「ありがと。私もがんばるからね。」

サンディが励ますとライムは小さく返事をし、十字弓に次のボルトを装着します。

次の一団がやってきました。

今度はサンデイも火炎弾を立て続けに発射します。ライムの十字弓は狙いは確かなのですが、連射することは出来ません。一人ずつ確実にがモットウです。

お母さんはそんな2人を見守ることしか出来ません。だって、武器はフライパンですからね。でも、屋根に盗賊が上がってきたら、これでパカンってやつつけるつもりです。

サンデイ達や周囲の家々の屋根からの猛射により盗賊はサンデイの家の数件手前までしか来る事が出来ません。

でも、盗賊達はこれも作戦の内なのです。

何回か決死隊を投入することで、サンデイ達が疲れるのを、魔力が尽きるのを、矢やボルトが尽きるのを待っているのです。

門からの声や、剣戟の音が小さくなっています。

銀板を持つ冒険者の技量は半端ではありませんが、人間です。疲れもします。・・やはり防ぎ切れないのでしょうか。

こんな時に居ないなんて・・リユーイをちよつと恨めしくなり涙を堪えるために上を向きました。

「え!・・・」

空から何かが降ってきます。

たしか、屋根に上がった時は星空だったよねえー。なんて考えます。

空から降ってきたもの・・流星のように一直線に村の外に落ちていきます。

プシュ、プシュと短い断続音がします。

ほんの一瞬でしたが、確かに流星が落ちてきました。そして、流星は盗賊団の上に降り注いだのです。

(姫様〜これ以上高度を維持できません。落ちますよ〜!)

(それを何とかするのが操船部門でしょうが・・・それでもプロなの！)

(近接防衛用ガトリングレーザー発射！！)

(回頭いそげ！！)

(左舷ガトリングレーザー発射準備よし・・・テッ！！)

(姫様ほんとにやばいですよ！半重力機関がレッドゾーンです！！)

(それじゃあ、軌道位置にシフト移行・・・開始！)

姫の後ろで成り行きを見守っていた將軍は冷や汗をかいています。

(姫、この船で成層圏まで降下するのは、関心しませんが・・・半径2Kmの大型船ですぞ。)

(しょうがないでしょ。リユースから緊急依頼がきたんだから・・・)

(さあ！衛星軌道シフト完了したら宴会よ！！)

(そうだ！今日は俺達が主役だ！海兵隊だけにいい思いはさせないぞ！！)

(((オォー！！))))

確かに土気は上がってるんですが・・・

星の屑

リユーイ達は野を越え、山を越え、ナナイ村を目指して走ります。ピョン、ピョン・・フュン、フワリ・・走ると言うより飛んでるんですが・・・

最後の岩山を越え、森を抜ける時には夜を迎えていました。

このまま村に帰るか、それとも森で一夜を明かすか悩みながら村を眺めた時です。

大きな火の塊が村に向って飛んで行きました。

「盗賊共の襲撃だ！行くぞ！！」

ルミナがそれを見て叫びます。そして、段々畑を駆け下ります。慌ててリユーイも追いかけます。

村の手前まで来ると、盗賊団が手勢を3つに分けて陣取っています。

先頭の集団は村の門辺りで激しい戦闘をしているようですが、まだ村には入り込めないようです。村から100m程度の所にいる集団は、盛んに火矢を村に放っているようですが、まだ村に火の手は上がっていません。時間の問題かも知れませんが・・

最後の集団は人数は少ないですけども・・酒盛りしてます。

「リユーイ、良く見る。あれは、盗賊の襲撃の仕方だ。新入りは一番危険な前衛。それに何度か生き残ったものが中衛で、火矢を担当。最後の連中は古株だ。最後の略奪だけ参加する。しかし、前衛中衛を生き残った連中だ。銀3つの実力以上だぞ！・・さて、どうする？」

リユーイは考えます。

リユーイの身体能力とターボ加速を使えば、ある程度の敵は倒せ

るかも知れません。

でも、ルミナは銀3つ以上の連中が大勢いると言っています。打ちもらしたものが村に逃げ込んだりしたら大惨事になります。それにルミナは銀の星1つ、実力差が有りすぎます。

(姫！いいかな。頼みたいことがあるんだ！！)

(な〜に？・・・あら、大変なことになってるね。)

(この前、狭い範囲の全体攻撃が有るって言ってたよね。あれを、盗賊団の後ろの奴らに出来るかな？)

(星の屑ね。出来るわよ・・・ちよつと間が開くけどその辺は臨機応変にね。)

(では・・・星の屑よろしく！)

(OK！！)

「 後ろの連中は何とかする。ルミナはサンディ達をお願い！ 」
ルミナの返事も聞かずにリユーイはおもむろに立ち上がると、天辺にわっかがついた杖を構えて走り出します。

ルミナはリユーイの後ろ姿に頷いて村の門に向って走り出しました。

(ターボ1！)

リユーイは加速して走ります。走って、盗賊の中衛と後衛の中間にやや離れて急停止。

急に姿現したリユーイに盗賊達はビックリしましたが、姿は十代の女の子です。とりあえず逃げ出さない内に確保しとこ。ってな感じで数人が近寄ってきます。

リユーイは叫びます。

「 この村を助けるために！ 」

「 この村を守るために！ 」

「ナナイよ！ 私は、帰って来たぞ！！」

リユーイは両手を天に大きく伸ばして大きな声で叫びます。

「我願う・・・星の屑！！」

リユーイの叫びになんじや？つてな感じで盗賊が見てますが・・・その中の一人が星空を指差します。

その時！

大空から沢山の光線が断続的に降り注ぎます。まるで流星が盗賊団に向ってきたみたいですよ。

最初の一撃はほんの数秒に満たない時間でしたが、ちよつと間を置いて再び流星が降りそそぎます。

（作戦終了！あとはよろしく！！）

姫からの連絡です。

どんな方法で実行したかは不明でしたが、その威力は甚大です。まだ動ける盗賊が居るのを見たリユーイは、討伐するため駆け出しました。

ルミナは流星雨を門の戦闘の真つ最中に見ました。

リユーイが判らないことを大声で叫んだ途端の出来事です。

門に到着すると、門の中の冒険者と連携してたちどころに3人程倒しましたが、前衛は必死に向ってきます。ルミナはたちまち防戦する側になりました。

そんな時です。

「あれは何だ！」

その場にそぐわない叫びに皆が後ろを振り返ると、流星が雨のように盗賊団の後衛が居るあたりに落ちていきます。

それを見た盗賊達に動揺が走り、戦闘は一気に逆転します。

「ルミナじゃないか！遅かったな。それより今を見たか？」

門を守っていた、サイズがルミナを見つけて声を掛けます。

「あれは、リユーイの技だ。今後衛の方に行ってる。何とかしてくれ！あいつは・・・黒3つだ!!」

「判った。ここは、頼むぞ!」

サイズは、後衛に向って走り出しました。

サイズは走ります。

後衛は盗賊達の古株。その実力は銀3つ以上と言われています。そんな連中の所に、黒3つが挑んだとしても鬨り殺しにされるのは火を見るより明らかです。

中衛の盗賊が立ちほだかるのを一撃で葬りつつ走っていきます。そして、ようやく後衛まで辿り着いた彼が見たものは衝撃的なものでした。

リユーイは杖の中ほどを両手に持ち斜めに構えます。

太った盗賊は、大きな両刃の斧を片手で肩の上に構えています。

リユーイが杖を回しながら、胴を撃とうとすると、盗賊は簡単に斧でその一撃を払います。

払われた杖を体とともに回転させ次の攻撃に出ました。

今度は、斧で杖の中間を打たれリユーイは杖を落としてしまいました。

盗賊はニヤリと笑うとリユーイに斧を振り下ろしました。

しかし・・・リユーイは素早く片足を下げ半身の体制で斧の一撃を避けました。

と、同時に腰の鉞改を素早く抜くと、斧を持つ腕に振り下ろします。

ズバツ！と鈍い音がして、盗賊の片腕が切断されます。

切断された腕を慌てて押さえた盗賊の腹に回し蹴りを叩き込みました。

太った盗賊ですが、リユーイの一撃で体をくの字にしながら水平に飛ばされます。

鉦改を腰に戻して、杖を拾います。

村に向おうとして、こちらを見ている男に気が付きました。杖を構えます。

すると、男が慌てて手を振ります。

「お前が、リユイーか？」

「そうだけど・・・」

「ルミナに頼まれたんだが・・・必要なかったみたいだな。まだ、門は戦闘が続いている。まだ戦えるか？」

それを聞いたリユイーは村に駆け出します。サイズも慌てて後を追いかけます。

盗賊団壊滅

リユーイは、盗賊の後衛を討伐しましたが、村の門付近はまだ戦闘が続いています。

段々畑の続く道を駆け抜けます。

サイズが後に続きますが・・・なにせ、門から走ってきて再び駆け上がるのです。幾ら若いといってもキツイことは確かですから、段々と離れてしまいました。

門の付近は、喧騒と剣戟の音が入り乱れています。

盗賊の後衛は消えましたが、中衛の連中が混じったことにより門の防衛は難しくなっています。

数人、十人の単位で村の中に入り込まれてしまいました。

村の一部に火の手も上がっています。

そんな中にルミナは盗賊を相手に剣を振るいます。

「ヤア！」

叫びと伴に振り下ろした長剣に盗賊がまた一人倒されました。

次の盗賊に向うルミナの長剣は刃こぼれでボロボロです。だって、盗賊達は両刃の斧を使いますし、皮鎧は一部に金属板が使われてます。はつきり言ってルミナ達よりも装備が良いんです。

「ダア！」

横薙ぎに振るった長剣は盗賊の胸に食い込みます。

「ギヤアー・・・！」

盗賊は叫び声をあげて斃れます。

バキ！

嫌な音がしました。

ルミナの長剣が根元から折れてます。長剣の先は・・・斃れた盗賊の片腹に食込んだままでした。

剣が無ければ戦えません。いい獲物です。

倒した盗賊に駆け寄り彼の持つ両刃斧を取り上げようとした時です。

「ルミナ！・・・これを使え！！」

リユイーの声です。

声の方を向くと布で来るんだ物が飛んできます。

受取って・・・中を見て・・・ビックリしました。

だって、そこにあるものは・・・エルフの宝物「オニギリ」です。

でも、今は戦闘中。すかさず装備すると戦いに身を投じます。

それまで使っていた長剣よりも少し短いですが、バランス、重さ

とも申し分ありません。

「ヤア！」

袈裟懸けに切り下ろしたオニギリは鎧まで断ち切りました。

いまは亡きエルフ王国の伝説となるほどの長剣です。今までの長

剣とは切れ味が全く違います。斬りたいと思うものが切れるのです。

「大丈夫？」

リユイーが心配そうに声を掛けます。

「ああ・・・ところで、これは返すぞ！」

ルミナがオニギリを鞘に入れてリユイーに渡そうとしました。

「それは、ルミナが使って！・・・俺には剣が使えないし・・・もと

もとルミナの村のもんだし・・・」

「しかし、これはお前の武器の代わりじゃないか。」

「そう言ってたよね。だから、僕の好きに使っていいわけだし・・・

あげるよ。」

たしかにそうかも知れませんが、リユイーが貰ったものですから、

どう使おうとリユイーの自由です。

「ありがたく頂くことにする・・・」

いいのかな？って感じてしたが、オニギリは名剣です。このまま

ではリユイーが誰に渡すか判らないと思い、ありがたく頂戴するこ

とにしました。

「ここは、任せていいかな？サンデイ達が心配だ。」

確かにそうです。結構な数の盗賊達が村に入っています。

「早く行け！」

その言葉を聴くが早いかリユーイは村の中に飛び込みました。

「お姉ちゃん・・・助けてよぉ〜」

ライムが通りに座り込んで助けを求めています。

盗賊の一人がはなった矢を避けた時にバランスを崩して屋根から落ちたみたいです。

幸い、オシリを打ったぐらいで怪我はありませんでしたが、今は非常時です。通りは一番危険なのです。

直ぐに救助作戦が開始されます。お母さんはフワリと屋根を降りるとライムを抱えます。身近な屋根に上ろうと見渡した時、盗賊の一人と目が合ってしまった。

「Wオー！」

雄たけびを上げながら走りよる盗賊に、サンデイは必死に火炎弾を放ちますが、気が動転しているため中々当たりません。

「オオリヤア！！！」

叫び声と共に振り上げた両刃斧を見て、お母さんはライムに覆いかぶさりました。

・・・でも、何時までたっても体を分断されるような痛みが襲ってきますん・・・

怪訝な顔をしながら振り向くと、盗賊のお腹から棒が斜めに突き出しています。盗賊は事切れていましたが、棒が支えになっているのか倒れることが出来ないでいるみたいです。

若者が十字路の方から走ってきます。

「大丈夫だった？」

若者が助け起こしてくれました。

ライムが若者を見て抱き付きます。涙目上目使いは反則です。

「お姉ちゃん・・・ライム怖かったよー！！！」

「もう大丈夫だぞ！・・ルミナも門の方で頑張ってるし、もう少しの我慢だよ。」

リユーイはそう言うなりお母さんとライムを小脇に抱えてシユタッ！と屋根に飛び移ります。

そこには、涙で顔をクシャクシャにしたサンデイがいました。

「遅かったじゃないのよおー。」

「ご免ご免と謝りながら、2人をサンデイに引き渡すと通り飛び降ります。」

盗賊から杖を引き抜くと通りの真ん中で仁王立ちになりました。

「かっこいいわね。ってサンデイが見とれていると、お母さんが近寄ります。」

「あれで・・女の子なの？ 確かに、体形は女の子だけど・・・」

「そうだよ。ラスカル様みたいでカッコいいんだよ。」

強いとは聞いてたけど・・桁違いの強さね。それに、優しい心の持ち主だわ。

この娘達と何時までもいてくれたら、心強いんだけど・・・

また、盗賊達が通りに走りこんで来ました。

サンデイ達は屋根の上から迎撃します。

そして、よれよれになったところを、リユーイが杖でバシ！つとやるとそれでいちころです。

門の方の喧騒が小さくなってきました。

先ほどの盗賊達を最後に通りに走りこんで来る者はありません。

やがて、門の方から一段と高い勝どきの声が上がります。

サンデイ達3人はほっとして屋根の上に座り込みました。

勝ったみたいです。何とか乗り切ったみたいです。

リユーイは屋根の3人に待ってて！と声を掛けると、通りを門の

方^が走^{って}行^きま^す。だ^って、門^{には}ル^ミナ^が盗^賊と戦^って^いた^ん
です^から^ね。

一夜明けて

盗賊団の襲撃は取り合えず何とかなりました。……って言うかはつきり言つて、殲滅です。

でも、むらの被害はゼロではありません。

家も何件か燃えてますし……死んだ人もいるのです。

村の一番の激戦区である、南門にリユーイは走って行きます。途中参加とは言え、ルミナがそこで戦っていたんですからね。

「あら〜リユーイ君。今頃どうしたのお。」

服のあつちこつちに返り血を付けたルミナが走りこんできたリユーイに絡み付きました。

正直言つて、お酒臭いです。

南門を守っていた人たちの犠牲はそれなりにあつたみたいですが、一段落付いた今は誰が持ち込んだのか皆で酒盛りの最中でした。

そばには、十数人の盗賊が縄で糞虫みたいになってます。

かなわないと見て降参したみたいですが、酔っ払った冒険者につんつんされて呻いてます。

「おおー、お前か。……しかし大したヤツだなー。」

「お前ら！こいつだー。盗賊の頭を討ち取ったヤツは！！！」

サイズが酔っ払いに言うと一緒に（ウォー！）と声が上がりました。

「飲め！」

マスターが大きなカップでお酒をリユーイに渡します。

クンクン匂いを嗅ぐと……アルコールたつぷり、悪酔いしそうですが、周囲の人たちに囃し立てられ……ゴクリ！と飲み干しました。

エライ！！つて一斉に声が上がります。拍手もしてくれませう。

何時までも此処にいらるとんでもないことになるかも！と思ひ、

ルミナを小脇に確保すると戦略的撤退を図ります。

まあ・・早い話が、逃げ出しました。

明日ギルドに来いよーって誰かが言ってますけど、下手に返事なんかしたら大変です。

一目散にサンデイの家に行きます。

「リユーイさんありがとう。もうだめかと思ったわ。」

サンデイの家に着くと戸口にお母さんが待っていました。

そんな事無いです。って謙遜するリユーイを中にいれると、さすがライムがお茶を運びます。

リユーイから開放されたルミナは椅子に座るとテーブルにバタンです。

「わたしは・・酔ってなんかいないぞ〜」

って言ってますけど、これは酔ってる人が言う言葉です。

「私達リユーイのお部屋を造つといたんだよ。」

「エッ!」

ライムの思わぬサプライズにリユーイは吃驚しました。

でも、リユーイはずつとお母さんの部屋に泊まってましたから、今日からは宿屋泊まりだな。って思っていたんです。

「今日は遅いからお休みなさい。」

でも!つと傍らのルミナを見ます。

「それなら、大丈夫。ちゃんと2人が泊まれるようにベッドは2つ置いてあるから!」

サンデイのありがたい言葉です。

ヨッコイシヨ!つとルミナを持ち上げます。

「こっちよ!」

サンデイの後を着いていきます。

「今日は・・ダメかな?」

「なにが、ダメなの?」

「お姉ちゃんのお話・・」

「おかあさんが話してあげる！」
「ワイ！って喜んでるライムは、お年頃の12歳で赤い靴のメ
ンバーです。」

次の朝、と言っても昼に近い状態です。村中が寝坊した状態です
がこれは仕方ありません。昨夜あんなことがあったんですからね。
リユーイ達は4人揃ってギルドに向います。

ギルドのホールにはもう人が一杯です。
ガヤガヤと煩い状態ですがギルドマスターと連れの騎士が登場す
ると、急に静かになりました。

マスターがテーブルに飛び乗りました。

「おめえら、良く眠れたかー？」

「「「オオー「「「」

「昨夜は大変だったが、村に大きな被害は無かった。そして、盗
賊団は壊滅できた！！」

「「「オオー「「「」

「ここに居る騎士は盗賊団の討伐を国王より受けた騎士団の代表
だ。彼らからの感謝と礼金をたっぷり頂戴した。」

「「「オオー「「「」

「そこで、謝礼の分配だが・・・昨夜の騒ぎで、死んだヤツもい
る。怪我したヤツもいる。村の家も何軒か焼かれています・・・そこで
だ。これらの費用を差し引いて、平等に分配するが文句のあるヤツ
はいるか？」

マスターは周囲を見渡しましたが誰も文句をいう人はいませ
ん。

「じゃあ、一人銀貨1枚になる。足りない分はギルドから補助し
よう。」

「それと、昨夜の戦闘でレベルが上がったヤツもいるだろう。カ
ウンターで確認しながら受取るんだ。いいな！！」

「「「オオー「「「」

一斉にカウンターに並びます。
お姉さんが一人づつ箱に手を入れさせてレベルの確認をしています。

上がった！とか同じだ・・・とか声がします。終わった人は別のお姉さんから報酬を受取ると帰っていきます。

リユーイ達の番になりました。

サンデイとライムは共に黒の星3つに上がりました。

ルミナも銀の星2つです。

ところが、リユーイは・・・銀の星3つに一気に上がったのです。周囲が騒然としましたが、サイズの一言（こいつが頭をやっつけた・・・）を思い出して、それだけの実力があるのか・・・なんて自己完結してます。

「お姉ちゃん、強いもんね！」

ライムの言葉に頭を掻いてます。

報酬を受取り帰ろうとしたところを騎士の一人に呼び止められました。

「これをお前に進呈する。」

騎士は一振りの長剣を差し出しました。

「おれは、剣を使えないんで・・・お気持ちだけ受取ります。」

騎士はしばらく悩んでましたが、代案を提示することにしました。

「では、此処でお前が使える武器の代金を我々が負担することにしよう。マスターにその旨伝え置く。」

それならば、とありがたく受取ることになりました。

早速武器屋に出かけます。

でも、リユーイには、剣は使ったことはありません。さて、どうしようかと悩みましたが、今持つてる杖は振り回したり、殴ったりと結構使いでが良いことに気が付き、杖を作って貰うことにしました。

木の棒ではなく、鋼の棒です。棒の上には、飾りを付けて其処に

4個の鉄のわっかを入れます。杖を付くと、チャリンって良い音がするんですよ。

リユーイは昔見た山伏が持ってた杖を頭に描いて、注文をつけます。

あの杖を悪者に向ってエイッヤツ！って構えたらちよつとカッコ良いな。って思ったりしてるとみたいです。

武器屋から帰る道では、盗賊達の亡骸を投降した盗賊達が台車に乗せています。

傍には冒険者と騎士が目を光らせて彼らの監視をしていました。別の台車では盗賊達の武器や鎧を回収しています。

「盗賊の亡骸は川沿の広場で荼毘にするの。墓は作らずその場に埋めるのよ。回収した金属は村の物になるんだけど・・・多分、町に売りに行くはずよ。」

サンデイが彼らの仕事を見ながら説明してくれました。

「投降した盗賊はどうなるの？」

「それは、罪状次第だ。盗賊行為を1回すれば、鉾山で5年の重労働。2回で10年。3回以上は死ぬまでだ。」

ルミナが答えてくれます。

獵師さんの依頼 (1)

サンデイ達が家に戻ると直ぐに昼食の時間です。

お母さんが簡単な料理を作って待っていました。

(これ！パスタに似てる。) ってリユーイは思いましたが、意外と小麦が取れるところでは、同じようなものが食べられているのかも知れませんね。

「皆に、報告があるの。」

えっ何々？って感じでパスタを頬張るのがちよつと止まります。

「ええーとね。お母さん、この村の食堂で働くことにしたから・

サンデイとライムは吃驚しています。

「銀色の月が終わっても町に行かなくてもいいの？・・・ずっとライムと居られるの？」

ライムはそう言ってお母さんに抱き付きます。

何時も家の事をキチンとしていますけど・・・やはりお母さんと一緒にいるのが決まっています。

「でも、良く仕事があつたわね。」

サンデイは現実的です。やはり気になりますよね。

「なんでも、村から遠くないところに洞窟が見つかったそうよ。

オークばかりらしいけど、冒険者の初心者向けにちよつどいいって、村を訪ねる人が多いらしいの。」

()()(悲恋の洞窟だ！)()()

最深部の神殿は岩崩れで埋まってしまうましたが、洞窟自体は残すって泉の精も言っていました。

初心者用の洞窟として有名になったみたいですね。でも、オークが集団で出てきたらどうするつもりなんだでしょうか。

そこは、あまり気にしないことにしました。だって、泉の精はもういませんし、赤い靴が二度と行くことは無いと考えたからです。

「何時までも続くと良いわね。」
お母さんに甘えるライムを見てサンディが優しく微笑んでいます。

リユーイ達の部屋を作ったために、悲恋の洞窟での報酬は残り残っていませんが、盗賊の討伐で赤い靴は銀貨4枚を手に入れました。でも、銀色の月を過ごすには少し足りません。少し家族？が増えましたからね。

何と言っても、ナナイ村は山村です。銀色の月は、その名の通り深い雪に包まれます。そうなっては、狩りもギルドの依頼もすることが出来ません。

冬越しの仕事をするならいまの内です。
そんな訳で、早速次の依頼を探すことにしました。

早速、次の日、朝早くからギルドに4人で出かけます。
でも、その前にちょっとより道して、リユーイの武器を取りにいってきます。

武器屋はギルドの隣です。昨日頼んだ時に、明日には出来ると言っていました。

「おはようございます。・・・頼んだものは出来てますか？」
「おお、出来取るぞ。これで良いのか？随分と重いものになってるが・・・」

ドワーフのおじいさんが壁に立て掛けてある金属棒を指差します。
「これね！・・・重いいい・・・」
ライムが棒を持ってみましたが、ビクともしません。

「そんなに重いのか？」
ルミナが持ってみます。片手では無理・・・両手でようやく持ち上げられました。

そんなに重くなったのかな？と少し心配意しましたが、リユーイ

が持つと片手で楽にもつことが出来ます。

グルグルと回してみましたが、大丈夫です。

「どうもありがとう。いい出来だよ！」

棒を杖のように床に付くと、上に付いてるわっかがチャリンとなりました。

武器を受取り、今度こそギルドに出かけます。って言っても、隣ですけど・・・

ギルドに入ると、何時もと違って数人の冒険者が依頼用の板に張られた依頼書を眺めています。色々決めかねているようですね。

サンディ達が近づくのを見た冒険者が声を掛けます。

「ヨオー！確か・・・リユーイとか言ったな。俺達のパーティに入らないか？俺達は皆銀だ。ここで稼いで、来年は王都に行く。どうだ。付いて来ないか？」

「リユーイは赤い靴のメンバーなの！変な勧誘しないでね！！」
サンディがピシヤリと言いました。

サンディの剣幕に男達はスゴスゴ引き下がります。そして、再び依頼の検討です。

サンディ達も依頼書を見て回ります。
なるほど、男達が悩むのも無理ありません。

薬草探しと獣の討伐だけしかありません。薬草は報酬が安すぎますし・・・獣は熊や狼ばかりです。ルミナやリユーイだけなら可能でしょうが、サンディやライムには荷が重過ぎます。

ここは、地道に薬草かなあ・・・なんて考えているサンディの前に新しい依頼書が張り出されました。

「えつと・・・獲物の番求む！・・・山で狩猟の獲物を獣に取られないように番をして欲しい。期間は5日、報酬は銀貨5枚とハム5本。」

サンディは張り紙を剥がすと受付のお姉さんのところに持って行

きます。

「ああ、これですね。詳しくは猟師さんに聞いてください。」

猟師さんの家に行くとき数人の猟師さんが猟の準備をしています。弓矢の弦を張り替えたり、矢じりを研いだり、罠のバネに油を差したり大忙しです。

「あのぉー…獲物の番の依頼を受けたんですが…」
サンデイがそう言うと猟師さん全員にギロツって睨まれてしまいました。

タジタジでどうしようかな？って考えていると一人の猟師さんが奥から出て来ました。

「こらぁ、脅かしてどうするんだ！…すまないね。…お前達この間の娘っ子かぁ？」

「はい。獲物の番の依頼を受けました。」

「すまねえ…明日から狩りなんで若いやつら気が立ってるんだ。お前達なら問題ねえ。お前ら、こいつらだぞ。あの猪を狩ったのは！」

どうやらこの間の猟師さんは猟師達の頭領だったようです。

その言葉に、全員の顔つきが変わります…サンデイ達をジツクリと眺め、嘘だろう？って顔で見えます。

「明日の早朝、夜明けと共に山に向う。5日間の間、俺達は狩りをする。その獲物は一箇所に集めておいて、次々に狩りをする。お前達はその獲物の番をすることだ。匂いに釣られて肉食の狼等が繰るかも知れんからそのつもりで準備しな。それと、山に4泊するからその準備もな。」

「判りました。明日の朝、ここに集合で良いですね？」

「それじゃあ、よろしく頼む！」

家に戻ると早速準備です。

冒険者の食事は自前が原則ですから、4人分が5日分。それと飲

料水です。料理に使う鍋と食器も必要です。

着替えも1式用意し、毛布も4枚持つていきます。それに魔力補給の小瓶を4本、薬草と毒消しも準備します。

こんなものか・・・とテーブルにそれらを並べ、4人に分配します。ライムは大きなリュックに入れて、残りを3人が布の力バンに詰め込みます。後は武器を持つだけですが、リユーイはサンデイに背中に背負う大きな籠を持たされました。途中で薪を入れるんだそうです。

獵師さんの依頼 (2)

次の日の朝早く、まだ星が出てる内に4人は家を出ます。

出かける時にお母さんが早く帰るんですよ。って言っていましたけど、まるでピクニックに行くような雰囲気です。

先頭のルミナは皮の鎧にオニギリを背負って布のカバンを肩に掛けています。

次のサンディは、普通の町娘の服装で、魔法の杖を持ち、肩には布カバン。

ライムも服装はサンディと同じで大きなリュックを背負っています。リュックには十字弓を乗せてます。リュックは重量軽減率百分の一ですから、重くはありません。

最後のリユーイは、GシャツとGパン。腰に鉈改と腰に小さなバツク。そして、鋼の杖です。今回はさらに、籠を背負っています。

獵師さんの家に着くと、家の周りが騒音で溢れています。

漁師さんと漁師さんの荷物を運ぶ沢山の人でいっぱいです。そして、皆それぞれかってに話してますから、騒々しいったらありません。よく近所から苦情が来ないものです。

「オメエら！静まれ！！」

頭領の一喝で、一瞬に喧騒がシーンと静かになりました。

「準備は出来たか！！」

「……オオー……」

「よし、出発だ！、獵師、荷駄、冒険者の順だ。いいな！！」

ぞろぞろと獵師さんの家を離れ村の門に行列を作って出かけました。

一列に並んで、段々畑を通り、森に入り、山に向います。

ルミナと一緒にルミナの故郷へ行った時にも森を通ったんですが、途中から道を変えています。

獣道を通っているようです。そこは、灌木も、ツタも少なく歩きやすい道でした。

森を抜けると、岩山です。

大きな岩の陰で、皆で昼食を取ります。リユーイが岩の上に乗って周りを見ると下の方に村が見えました。

岩山を少し登ると、また森が広がります。ここが目的地でした。大きな岩が小さな岩に張り出して屋根のようになっていきます。

村人は荷物を其処に纏めて帰って行きます。そして、5日後に獲物を運ぶためにまた戻って繰るのだそうです。

「今日から5日、ここで獲物の番だ。まあ、今日は獵がねえから、実のところは明日からだな。ゆっくり休むのも仕事の内さ。」

頭領の言葉に従い、荷物の傍に赤い靴の基地・寝る場所を確保します。

獵師さん達は厳つい男達ですので、基地の傍に小さな焚き火を作り早めの夕食です。

「お姉ちゃん・・・お話して!」

ライムのおねだりにしようがないなあっというながら昔話を始めます。

リユーイの昔話は、サンディヤルミナでさえ聞いたこともありません。3人とも真剣な面持ちで聞いています。

次の日の朝早く、獵師さん達は5人づつ、2組に分かれて狩りをするみたいです。

「じゃあ、俺達は行ってくるが、食料の番を頼む。それと、獲物が取れる度に一旦戻るから、その時に一服出来るよう、湯を沸かしておいてくれ。じゃあな!」

そんなことを言いながら、沢山の罾を担いで森に入っていきました。

食料を入れた荷物は岩棚の奥のほうに押し込んであります。取り合えずは、焚き火用の薪の確保と水の補給ですが、薪は昨日ここに来るまでにリュウイ背負い籠一杯に集めて来ました。

ルミナのもう少し確保すべきだ！との意見で、再度リュウイが籠を背負って出かけて行きました。ついでに谷まで降りて水を確保するつもりです。

サンデイ達も仕事です。まずは焚き火の番、これはサンデイが担当です。ルミナとライムは周囲に簡単な杭を打ち、杭と杭の間に糸を張り巡らせます。其処に鈴を所々に付けると、立派な警報装置になります。猟師さんが引つ掛からないように所々に赤いリボン結びました。

サンデイは、焚き火の周囲を周りから石を運んで炉のように組んでいきます。

次に、膝ぐらいまで石を積み、横に棒を渡してポットを載せてお湯を沸かします。これで、猟師さんが何時戻ってきてても大丈夫です。

こんなものかな？ってサンデイが周りを見渡していると山のような薪を背負って両手に水桶をぶら下げたリュウイが戻ってきました。ご苦労様。って言いながらサンデイが水桶を受取ります。

リュウイは全く疲れていなくなりましたが、ライムに指示された席に座ります。席と言っても手ごろな石の上に畳んだ毛布を置いただけなんですけどね。

焚き火の岩棚側に4人が座り、外側はリュウイとルミナです。ポットを熾き火に移動して、大鍋に適当に野菜とお肉そして塩とハーブと水を入れます。炉にかけてしばらくすればスープの出来上がり！ですね。

昼過ぎに猟師さんが2人獲物を担いでやってきました。鹿のよう

ですが頭がありません。

大まかな解体と血抜きはすんでいるとの事で、岩棚の隣にある窪みに入れました。獲物の上に枝を渡して、葉の多い枝をかけて置きます。こうすれば日に当たりませんし、夜露に濡れることもありません。

後は、よろしく。って少量を手に出かける猟師にスープを勧めます。

こりゃいい。あつたまる！ってよろこんでお椀からスープをかきこみます。

猟師さんが帰ってしばらくすると別のチームの猟師さんが獲物を持ち込みます。

やはり、獲物の解体等は終わっていて前のチームの獲物の上に重ねます。

猟師さんによると今年は獲物が多いとのことですが、でも、こんな時は獲物を狙う獣達も群れを作って移動してくるそうですから、油断するな！って念を押されました。

お茶を飲んで、やはり食料を持って仲間の所に帰っていきます。

猟師さん達は、今夜はこの場所に帰りません。罾を仕掛けた場所の近くに皆で野宿をするんです。

そんな訳で今夜から、獲物の番の本番です。

まだ夕方にも成っていませんが、ルミナとリユーイは一眠りすることになりました。夜更けに起こして貰い、サンデイ達と交代するためです。

「じゃあ、おやすみなさい」

リユーイ達がサンデイの後ろで毛布に包まると、サンデイとライムは薪を手近な所に積み上げ、魔法の杖と十字弓を何時でも使えるように準備します。

「お姉ちゃん・・・ちよつと心配だね。」

「イザとなれば、2人を起こすから大丈夫よ。」

山は、日が暮れると急に静かになりました。

渡り狼の襲撃

山の夜は暗く静かに更けて行きます。遠くで無視の鳴き声が聞こえます。

でも、サンデイ達の周りは違います。

目の前の炉には焚き火が燃えていますし、頭上にはライムの作った光球が2個クルクルと回ってます。

昼間ほど明るくは無いですが、十分周囲の状況は確認できます。

「お姉ちゃん。まだ起こさないの？」

「もうちょっと、寝かせてあげましょう。ほら、あの星があの岩に隠れたら起こしましょう。」

「うん！」

2人ではちよつと寂しいみたいです。周りが静かですから、岩ねずみの動くガサガサと言う音にも、思わず武器を構えてしまいます。

そんな話をしていると、チリリン・っって鈴が鳴りました。

え！って感じで2人は鈴の鳴った方を見ると、鋭い目が光球の光を反射しています。

そして、その数は少しづつ増えていきます。

「ライム。2人を起こしなさい！！」

「わかった！！」

ライムが後ろを振り返るとリユーイとルミナは既に身支度をしています。

なんで？って2人を見てますが、リユーイは元々寝る必要がありません。ルミナは剣士ですから、獣の殺気を感じ取ったみたいです。

「ルミナ。左を頼む！」

焚き火の前に移動して襲来を待ちます。

獣の光る目は更に数を増していきます。もう20匹以上いるみたいです。

やがて、1匹が光球で照らされた岩場に現れました。

狼です。でも普通の大きさではありません。ヤギ位の大きさの狼です。

「渡り狼だ！リユーイ油断するなよ。こいつ等あの大きさと群れで狩りをするんだ！！」

余りの大きさにちよつと引き気味の3人にルミナが注意します。

サンデイとライムは岩棚近くに移動して杖と十字弓を構えます。

前に焚き火が盾代わりです。

ルミナは焚き火の左側に立ちオニギリを肩に担いで構えます。

リユーイは焚き火の右側の獲物を保管している岩の窪みの前です。

焚き火に薪を追加して、鉄の杖を斜めに構えています。

何時でも来い！の状態ですが、狼は中々襲ってきません。相手を焦らして隙が出るのを待っているようです。

「ガウオン！」

一匹の狼が、ルミナに飛び掛ります。

「ウオツ！」

ルミナは、気合の入った声と共にオニギリを狼に向かって振りぬくと、ズシャ！と狼の頭部が2分しました。

「次！」

と言ってますけど・・・狼は遠巻き状態です。

「ライム。混戦になったら爆光球を投げて岩棚にサンデイと避難しろ！」

リユーイが怒鳴ります。これね。ってライムはポケットのふくらみをポンポンと手で確かめます。

「ガオオン！」

一際大きな遠吠えが響くと、狼が一斉に襲ってきました。数匹が1つの群れで襲ってきます。

リユーイは鋼の杖を風車のように回します。ガツン！、ガツン！と狼に鋼の杖が当たりますと、重さと遠心力が合わさった衝撃力で狼をへし折ってしまいます。

1つの群れを始末すると次の群れに向って体制を整えます。

ルミナは身の軽さとオニギリに切れ味の良さで、動きに隙を生じないように長剣を振るいます。

ズシャ！・・シユパツっていう感じです。

サンデイとライムの姿は焚き火の炎の影になっているためか、狼は襲ってきません。

それでも、ルミナを狙う狼を火炎弾と十字弓の発射するボルトで1匹1匹倒していきます。

4人協力して渡り狼と死闘を繰り返している時、それは起こりました。

1匹の他の狼より巨大な狼が、ガオ！っとライムに飛び掛りました。焚き火を全く怖がりません。

そして、狼の体には、ライムの放ったボルトが2本も刺さっているのです。

わぁ！っとライムは頭を抱えます。その声に皆がライム見ました。ズシャ・・重い音がしました。

ライムが恐る恐る頭を上げて前を見ると、子馬程の狼がリユーイの投げた鋼の杖で岩に縫いつけられています。

杖を手放したリユーイに、また群れが襲い掛かります。

リユーイは腰の鉞改を左手に持ちます。

(姫！分身する。コントロールよろしく！)

(了解!・・ターボ2でOKよ!)

「ターボ2!!!」

リユーイが叫びます。体の何処かで、カチッ!とスイッチが入ったのを感じます。

「分身!!!」

リユーイが叫ぶと同時にリユーイの姿がぶれていきます。そして・
・2人に分かれました。別れた2人がまたぶれると・・・4人になりました。

4人のリユーイが別々に鉦改を構えます。

走りこんできた狼を4人のリユーイが1匹ずつ対峙します。

1人のリユーイは横薙ぎに狼を弾き飛ばし、別のリユーイは狼の頭部に鉦改を叩き付けます。更に、別のリユーイは・・・

サンデイ達は開いた口が塞がりません。

それでも、襲ってくる狼を個別に倒していきます。

更に、4人のリユーイが同時に4匹の狼を倒しました。そして、

それ以降は襲ってくる狼はおりませんでした。

やっと、短いようで長い渡り狼の襲撃を退けたのです。

3人と4人のリユーイは座り込んでしまいました。

すると、リユーイの数が4人から2人に、2人から1人に数を減らしていきます。ブースト2の効果を姫が切ったのです。

3人はそんなリユーイを不思議そうに見てました。

「リユーイ!前から変わってると思ってたけど・・今のはなんなのよ!!!」

何かサンデイが怒ってますけど・・

「ああ・・分身ね。・・体の移動速度を究極まで上げると出来るんだ。でも疲れるかえら余り使いたく無いんだけどね。」

「なるほど・・体術の一種か。4人に別れたのではなく、4人に

見えるように高速で動くのか・考えただけでも疲れるな。」

ルミナが一人で納得してます。似たようなことが出来る人がいるのかも知れませんね。

「お姉ちゃん。ありがとう！」

ライムは感謝のハグです。内心リユイーが一番嬉しかったりします。

「でも・・・これどうするの？」

ライムは死屍累々の渡り狼の群れを指差します。

取り合えず一箇所に集めます。明日来る獵師さんに報告すれば、どうすればいいか教えてくれるかも知れません。

一難去って・・・

山に朝日が昇る頃、サンデイ達は朝食の準備です。

昨夜は殆ど寝てないんですが、お腹は関係ありません。

焚き火に鍋を乗せて、とりあえずスープとお茶の準備です。

皆でモグモグ食べていると、岩陰からニョキッと猟師さんが首を出しました。

「おつ！いい時に来たみたいだな。」

獲物を担いできた猟師さんは早速ご相伴にあやかります。

更に、猟師さんが、獲物を担いできます。

「いやぁー今年は大漁だぜ。」

結構、罨に掛かる獣が多いみたいです。

そんな中。

「だれだー！これを殺つたのは！！！」

頭領の大きな声が山々に木霊します。

岩陰を指差しながら此方に近づいてきます。余りの威圧感にライムは半ベソかいてます。

確か、そつちは・・・例の狼よね？でもあれだけ怒るとは・・・ひよつとして山の神？

「そつちの狼なら俺達皆で殺つたけど・・・」

「狼じゃあなくて・・・いや、狼だな・・・とにかく、あのデッカイ狼を殺つたのはだれだ？」

リユイーが恐る恐る手を上げます。

「おめえか・・・頼みがある。あの毛皮を譲ってくれ！」

「え・・・??？」

話を聞いてみると、狼の毛皮を身に着けていると、他の獣に襲わ

れないという言い伝えが獵師仲間にはあるのだそうです。

実際、頭領も擦り切れています。確かに狼の毛皮のようなものを着ています。

今まで、危険な獣に襲われなかったのもこのせいだ。と断言しますが・・・

そんな訳で、昨夜の狼の襲撃で倒した狼の毛皮を貰いたい。中でも、一番大きな狼の毛皮は頭領自身に譲って欲しいということのようです。

特に、通常の狼より大型の渡り狼の毛皮は獵師達の間では垂涎の品なのだ教えて貰いました。

そして、あの巨大な狼に至っては、持っているだけでも尊敬されるのだそうです。

「いいよ。譲ってあげる。」

「ありがたい。何れこの礼は・・・」

「礼もいいよ。特に困ってないし・・・。それより、あんなのが未だ来る可能性はある？」

「いや、今までの目撃例からはあの群れで終わりのはずだ。」

なら、問題ないです。また来たら大変ですけど、これで終了と聞いて少し安心してます。

「オラア！狼の毛皮を剥ぐぞ！こっちへ来い！！」

頭領が若い獵師さんに指示して、サツサと毛皮を剥いでいきます。

「な、何なんですか！このでかいの！！」

「おれんだ！傷を着けるなよ！！」

シュツ、シュツと短い音が連続して聞こえます。

次々と獵師達が獲物を担いでやってきます。

来た傍から頭領は毛皮を剥ぐ作業に参加させます。だって、数が数ですからね。

粗方毛皮を剥ぐと岩山の下の方に穴を掘って狼を投げ込みます。そのままにしていると場合によっては別の獣がやって来ることがあるそうです。

いや〜疲れた！って言ってる猟師さんに簡単な食事を提供します。だって、もうお昼近いんです。野菜ごった煮に干し肉を入れた簡単なものですけど、皆さん美味しく頂いたようです。

後を頼む！って言いながら猟師さんは自分のパーティに戻ってきます。

また、赤い靴の4人になりました。

「薪を取って来ようか？水も残り少ないし・・・」
そう言ってリユーイは籠を担いで、森に入っていきました。

3人は、昨夜の来襲で破損した警報器の修理です。それが終わると、森からルミナが数本の木を切ってきました。3m程度にそろえると横木を渡し、簡単な柵になるようにツルで縛り上げます。

「これを岩棚の前に置くから、危険だと思ったら後ろに隠れるんだ！」

「わかった。昨夜みたいな時だね。」
ライムとサンデイがちょうど入れるぐらいの大きさです。

リユーイが戻ると少し早い夕食です。

今夜はリユーイとライムが先番を勤めることになりました。

満天の星空の下、焚き火の前に、毛布に2人包まって、リユーイの昔話にライムは耳を傾けます。

そんな健気な姿に天は味方をしたのでしょうか、サンデイ達と交替しても特に何も起こりません。

今夜は静かに時が流れます。

夜がけると、また、猟師さん達が罾に掛かった獲物を担いできました。

やはり今年は獲物が多いようです。岩の窪みは獲物で溢れ雨露を防ぐ木の枝を押し上げています。

「おめえら、今夜が最後だな？・・今朝、罾を調べてたら4箇所も何かに襲われた後だった。他の連中が仕掛けたのもそんなのがあったそうだ。渡り狼とは違う。もっと大食らいなヤツだ。ここにはまだ狼の匂いが染み付いてるから大丈夫とは思うが、気を付けるに越したことはねえ。」

「忠告ありがたく受け取っておく。せいぜい熊だとは思うが・・」

「いや！熊じゃねえ・・俺には判る・・」

そう言いながら頭領は去っていきました。

頭領は猟師のプロです。そのプロが熊じゃないと言ったら・・それは何なの？って疑問を持ちましたが、この山にそんな獣がいるなんて聞いたこともありません。

でも、今夜は最後だから、盛大に焚き火をしてお肉を焼いて、お茶を飲みながらリユーイのお話を聞こうと言うことになり、準備を始めます。

「・・というわけでみんな幸せにぐらしました。めでたしめでたし。」

「なるほど・・罾に掛かった鶴を助けると、服を作ってくれるんだな・・覚えておこう。」

「お嫁さんになってくれるんだ。・・お婿さんはどうしたら来るのかな？」

今夜は（鶴の恩返し）みたいですが、ちゃんと伝わったんですね。疑問です。

「ねえねえ・・次は？」

ライムは面白かったのか、次のお話をリクエストしてます。
え〜とね・・・なんてリユースイが考えていた時です。

「大変だ！！直ぐ来てくれ！」

猟師さんが息も絶え絶えに走りこんできました。

サンデイが水を飲ませると少し落ち着いたのか、せいぜい言いながら仲間が襲われていることを話はじめました。

「どつちだ！」

ルミナが叫びます。

「この方角だ。焚き火があるからそれが目印だ！」

ルミナが走り出そうとするのをサンデイが止めます。

「みんなで行くわよ！」

知らせてくれた猟師さんに後を頼み、皆で走り始めます。

ライムが造った光球が周りを照らすので足元は万全です。

遠くに明かりが見えます。多分猟師さんが言った目印の焚き火でしよう。

近づくくとバキバキと木が折れる音がします。

熊とは違う。ルミナは確信しました。

銅竜との戦い

「獵師さん達の野宿する焚き火が遠くに見えるようになった時です。周りの森の木が、バキバキと折れる音がしました。熊なら精々ガサガサです。もっと大きな何かが居るようです。」

【アクセル！】

ライムがルミナに加速の魔法をかけたようです。アクセルだと・・大体2倍速ぐらいですかね。

「ありがとう。体が軽くなったぞ。」

ルミナが後ろ手に手を振り、オニギリを抜いて構えます。

リユーイは鋼の杖を持って、恐る恐る焚き火に近づいていきました。

その時、森の中からヌ〜と大な顔が出てきました。

「「キヤー！！」」

サンディとライムは思わず尻餅を着いてしまいました。だって、そこに現れたのは大きなトカゲだったからです。

「気をつける。トカゲのようだがこいつはドラゴン！銅竜【アンバードラゴン】だ！！」

ルミナが叫んでます。

素早い身のこなしでドラゴンを翻弄しながらオニギリで斬り付けますが、ドラゴンの鱗によって剣の刃が滑るみたいです。深く斬ることが出来ません。

リユーイはというと、ターボで加速しつつ、鋼の杖で殴りつけているのですが、やはり有効打が少ないようです。

2人の邪魔にならない様に、サンディの魔法が炸裂しますが、元

々ドラゴンの鱗は魔法低減の効果を持っているため、余り役に立ちません。ライムの十字弓はドラゴンの鱗には強度不足・・・はつきり言ってちょっと辛いなって言う状態です。

ドラゴンの武器は長い尻尾を鞭のように使った攻撃と、両手足の爪、そして大きな口から覗く牙です。

近づくとも尻尾で牽制し、ちょっとでも隙を見せると口がガブンと来ます。

でも、ルミナとリユーイが戦っている合間を見て、サンディ達は傷ついた獵師さん達を安全な場所まで運ぶことが出来ました。治療も、薬草で何とか成りそうです。

「お前の分身攻撃で何とか成らないのか？」

リユーイは首を振ります。リユーイの身体能力は10倍です。でも、その力で重い鋼の杖を振るってるんですが・・・鱗に跳ね返されているようです。鱗の弾力性が半端じゃありません。

段々とルミナのオニギリを振る様子に疲れが見え始めました。スピードはそれなりに保っていますのでドラゴンの攻撃も何とか回避してますが、元々スタミナがあまり無いみたいです。

リユーイは何を思ったか、鋼の杖を振りかぶり、槍のようにドラゴンへ投擲します。

なんとか、鱗を破って少し肉に食込んだみたいです。すかさず、駆け寄ると、両手で杖を掴み叫びます。

【ボルト！！】

ドオオオン！！と耳をつんざく音が響きます。リユーイの動力炉から過大電流がバチバチと流れていきます。

「ギヤオオオー」

これには、ドラゴンと言えども耐えられなかったみたいです。

一声叫ぶと体を振り回してリユーイを振り解きました。そして、突き刺さった鋼の杖を手でどうにか引き抜くと半分にへし折りました。

一瞬攻撃が緩んだと見たルミナがジャンプして傷口をオニギリで抉ります。

「グアア」

あまりの痛さのためでしょうかドラゴンが「身を捻りました。その動きでルミナが弾き飛ばされてしまいました。」

次は、リミッターを切って、ターボ3で行くしかないかも・・・なんて考えている時です。

（腰のバックから、懐中電灯みたいなものを取って！）

後ろ手で探すとそれらしきものがありました。早速取出します。

（左手で持って、親指の所にあるスイッチを指で捻る！）

姫の言うとおりに捻ってみました。

「ギユワァ・・・」

懐中電灯モドキの・・・丁度光が出る所から、細い糸のような紫色の光が1m位伸びました。中心はそれこそ1mにも満たないような強烈な光を放つ線ですが、周囲3cm位はボーっとした紫の光が染み出ているように見えます。

（プラズマ・ソードよ！長剣のように使えるから。でも、物凄く切れ味がいいから自分と味方を斬らないようにしてね！）

「ギユオン・・・ギユオン・・・」

プラズマ・ソードを振るたびに空気が電離される音が響きます。剣を振りかざし、素早く周囲を確認します。

猟師さん達はサンディ達が後方に避難完了です。ルミナはサンディの肩を借りて撤退中です。

周囲には誰もいないみたいです。

【ターボ2！】

リユーイは加速するとドラゴン目掛けてジャンプします。

そして、プラズマ・ソードを横薙ぎに一閃。

ドラゴンの背面に着地すると、目を閉じて残心です。

「ドサア！」

ドラゴンが振り向こうとした時・・・大きな音がしました。ゴロゴロと何かが森を転げます。

シューウ・・・と言う音も聞こえます。

リユーイが残心を解いて、プラズマ・ソードを構えて後ろを見ると・・・首から血を噴水のように噴出すドラゴンの姿がありました。頭はどこかに転げたようです。

プラズマ・ソードのスイッチを戻すと紫色の光はすうっと懐中電灯モドキに吸い込まれていきます。

それを腰のカバンに詰め込むとみんなの所に戻って行きました。

3人は呆気に取られて見ていました。

光で物が切れるなんて聞いたこともありません。光の剣なんて伝説の中にもありません。

大体、伝説の剣なら、ルミナのオニギリがそうなんです。それが切れないものを簡単に切り裂くなんて・・・

「何とか成ったよ！」

「お姉ちゃん！！！」

戻って報告するや否やライムのハグに危うく倒れそうになってます。

「あれは、なんだ！」

「ああ・・・あれね。魔道で作られたこの棒に【ボルト】の強力なヤツを閉じ込めるとあんな感じになるんだ。でも、【ボルト】10回分以上の力を使うんで余りやりたくないんだけどね。」
適当に誤魔化します。

「私には・・・使えんか。」

ルミナはガツカリしてます。

「リユイーは・・・見方だよね。」

サンデイは念を押します。

「当たり前だろ。俺は、赤い靴のリユイーだし！」

「そうだよね。」

騒ぎを聞きつけた頭領がやって来ました。

「何なんだ、この騒ぎは。トンでもないのが出たって聞いて来たが・・・!!」

サンデイの指差した先を見て、頭領は仰天しました。

だって、そこには首の無いドラゴンが立っていたからです。

「これは・・・銅竜じゃないか!・・・この山にはこんな物はいないはず・・・」

どうやら、銅竜は此处から北のほうへ山5つ以上離れた所に生息しているみたいです。

「この間の渡り狼といい、今回の銅竜といい・・・この山はおかしくなったかもしれん。」

ドラゴン・ハンターの印

銅竜との死闘を終えて、サンデイ達は元の獲物の集積所に戻ります。

怪我をした猟師さん達は別の猟師さんがおぶって運びます。

頭領は別の仲間の元に引き返しました。明日は早く戻って来ると言っていました。

岩棚の所には知らせてくれた猟師さんが盛大に焚き火をしてました。

ライムはポットでお湯を沸かし、皆にお茶を入れてあげます。疲れた体にはお茶が一番ですからね。

お茶を飲んで一息入れたところで、交替で眠ろうとしましたが・眠れません。眠ろうとして目を瞑ると、ドラゴンのグア！っと開けた口が飛び込んでくるんです。

ここは、1つ・・・と言うことで、リユイーの昔話で紛らわせることになりました。

「昔、昔・・あるところに・・」

「何時も、昔だよ。そんなもって、あるところって何処なの？」
ライムの素朴な疑問ですが・・それは、聞いてはいけない事なんですよ。

ほら、リユイーの顔が引きつってますし、変な汗もかいてるですよ。

「とにかく、昔なの！・・それで、俺も知らない位遠いところだから、あるところって言うんだよ。」

逆切れ寸前です。

「話を戻すね。・・・あることに、お父さんとお母さんと、お

兄さんと妹が住んでました。」

「今回はお爺さんじゃないのね。」

「うん。どうやら少し若い世代の話のようだ。」

と、こんな感じでお話が続きます。途中、ライムの質問攻撃や、ルミナとサンデイの的外れな感想が入りますが、時間つぶしには丁度いいかも！です。

明け方近くになって「ヘンゼルとグレーテル」のお話は終わりましたが、サンデイ達は白熱した議論を始めました。

「最初に村に入るのはライムでいいな！」

「次は私で、ライムと村の中を攪乱すればいいのよね。」

「最後は、私がオニギリで一毛打尽！」

リユーイはなんの作戦だろう？って聞いてます。

「魔女を全て倒したら、村の東半分は私が貰う！」

「西は私が貰うわ。」

「そしたら・・・ライムの分が無いじゃない!!！」

どうやら村の襲撃の計画を練ってるみたいです。でも、何処の村？・・・3人の会話から少しずつ理由が判って来ました。

昔は家だったんだから、今は村ぐらいに発展してるはずです。それは、お菓子の村。悪い魔女が一杯住んでいます。だから、村の魔女を全てやつつけてその後で美味しく村ごと食べる計画です。

しかし、どうやったらこんな展開になるのか不思議ですね。

ワイワイやってると何時の間にか朝になっています。

今日は狩猟の引き上げの日です。昼ごろには村人が獲物を運ぶために山に上がってきます。

サンデイ達は残った食料で朝食をたっぷり作ると早めに食べることにしました。

後は、猟師さんに振舞います。

昨夜助けた獵師さん達が朝食を終えるころに頭領達が罾と獲物を担いで帰ってきました。

先ずは一服とお茶を飲んでましたが、朝食が余っていると聞いた途端お碗を持って焚き火の鍋に駆け寄ります。すっかり鍋は綺麗になりました。

「ほら。回収してきたぞ！」

頭領が銅竜の牙をリユーイに投げてよこしました。

この牙だけでもいい値段で取引されるとのことです。更に、ギルドに行けば討伐の証拠とすることが出来ます。

「しかし、怪我は負ったが死んだ奴はいねえ。獲物も例年より多いし、何と言ってもこの渡り狼の毛皮は俺達獵師の宝物だ。全員に配っても余りある。いい仲間同士の取引に使えるってもんよ。」

頭領は、焚き火の傍に座って、年期の入ったパイプでタバコをプカリって吸ってます。

お茶の入ったお椀を片手に持って、見るからに終わったぞ！って感じに見えます。

リユーイは曲がった鋼の杖を傍において隣に座ると、腰のバックからタバコを1本取出しました。

焚き火の薪を1本手に取ると、タバコの火を付けます。

スー・・・パ・・・

思わず顔が綻びます。この世界に来る前、リユーイは真面目に勉強と仕事をしてましたが、唯一、悪友との付き合いで覚えてしまったのがタバコです。

昨夜、懐中電灯モドキを掴んだ時に気が付いたみたいです。

それまで、吸いたいたいも思ってみなかつたんですが・・・頭領のパイプを見て思い出したみたいです。

ジーツ！っとライムが睨んでますが、リユーイは気が付きません。

でも1本でやめて吸殻を焚き火に放り込みました。

猟師さん達は忙しそうに獲物を木の棒に括りつけてます。罾も纏めて担ぎやすそうに縛りつけました。

リユイー達は特にすることはありません。空荷の背負い籠を見た頭領がこれを運んでくれって、獲物を幾つか籠に放り込んで出ます。

だいたい終わってたかなって皆で周りを見渡していると村人が大勢岩棚まで上がってきました。

獲物を村人に託して、猟師さん達は罾を運びます。怪我をした猟師さんは仲間が肩を貸して移動開始です。

ゆっくりと岩山を降り、森に入り・・・ナナイ村に帰りました。

猟師さんの家の前で報酬を受取ります。

一旦家に戻ると、夕食にはまだ早い時間なのでギルドに向ってレベルが上がってないか調べてみることにしました。

でも、その前に、武器屋さんに寄ります。

「おめえ、この杖どうやったんだ？」

ドワーフのお爺さんが吃驚してます。

リユイーが訳を話すと静かになりました。

「そりゃ・・・仕方が無いの・・・2、3日待つとね。」

曲がった葉がねの杖を持って奥に行ってしまった。

ギルドに行くと何だか様子が変わります。マスターが腕を組んで待っていました。

気にせずにカウンターのお姉さんにレベルアップの確認をします。サンディとライムが1つ上がって、黒4つです。ルミナとリユイーは上がりません。レベルが上がるほどなかなか上がらないんだそうです。ちょっと残念ですね。

左手のカウンターにリユーイがドラゴンの牙を乗せた時です。それまで腕組みしながらジツと此方を見ていたマスターが近づいて来ました。

「やっぱり、おめえか。銅竜とはいえ立派なドラゴンだ。しかし、おめえの武器は杖だったはず。ドラゴンの鱗では弾かれてしまうんだが・・・」

「おねえちゃんは光の剣を使っただよ！」
ライムが答えました。リユーイは変な汗をかいています。

「光の剣？・・・まあいい。それでだ、レベルは上がらなかったがおめえらに御褒美だ。カードを貸しな。」

マスターが皆のカードを集めると奥に入っていきます。
しばらく待つとマスターが戻ってきました。

「ほらよ。カードの下をよく見る。赤の小さな宝石があるだろ、それがドラゴンを倒したチームの印だ。そして、これはおめえだ。赤の宝石と青の宝石が並んでる。これがドラゴン・ハンターの勲章だ。」

皆にカードを渡すと頑張れよ！って言いながら事務所に入ってきました。

これが、噂に聞くドラゴン・ハンターの印なのかとルミナは感動しています。

サンディ達は、そんな物かという感じですが。経験の差がこうなるのでしょうか・・・とりあえずは皆喜んでます。

隣のカウンターに出したドラゴンの牙は銀貨10枚になりました。これで、杖の修理が出来るってリユーイは喜んでます。

クロスボー改

ギルドで赤い靴のメンバーは、ドラゴン・ハンターの印を入れて貰いました。

家に帰ると、4人はテーブルに膝をついて眺めています。

「昔、王都のギルドで一度だけ見せて貰った物と同じだ。」

「これって、役に立つの？」

「宿は割引いてくれる。武器や防具もだ。それと、他の冒険者に一目置かれる立場になることだ。」

「私が、見たときは、酒場の喧嘩だったかな。壮年の剣士がギルドカードを見せた途端、喧嘩が収まった。不思議に思った私は剣士を問い詰めると、これと同じカードの印があっただ。」

「ふん．．でも割引は魅力よね。」

でも、他の冒険者とは違うんだぞ！ってことがカードの違いで表されていることに優越感を持ってたりしてます。

まあ、このメンバーなら悪用はしないでしょうし、少しぐらい天狗になっても問題は無いでしょう。

（しかし、すごい切味だったな。）

（物質を構成する原子をプラズマ化するから、なんでも一応切る事が出来るわ。）

（切れないのも有ってこと？）

（霊体は無理。それに再生能力が高いものも無理かなあ．．）

（ええ．．オバケ居るの？）

（似たものは居るよ。）

ちょっと、ブルーになってます。でも、オバケみたいなものには、

ルミナが役に立つかも！と考え気が楽になってます。

ルミナ オニギリ オニが切れるなら、オバケもできるかも！

連想ゲームみたいな考えですけど・・・以外とホントだったりするかもです。

「ちよっとリユーイ聞いているの？このカードなんか凄いものらしいわよ。」

「ああ、聞いているよ。でもね、良いことばかりじゃ無いんじゃないか？って考えてたんだ。」

「確かに、それはある。ギルドランクを無視した依頼が舞い込む可能性が高い。積極的にドラゴン・ハンターの印を表に出すのは控えるべきだろう。」

「そんな・・・割引なのに・・・」

そんなことでその日は終わりました。

数日後、リユーイは杖を受取りに武器屋に向います。ライムが一緒です。

ライムは、十字弓をもう少し威力が上げられないか、相談したいとリユーイに付いてきました。

「こんにちは。」

「オオ・・・おまえか。出来取るぞ。」

そう言っただワーフのお爺さんが取出したものは・・・なんか、前と変りない鋼の杖です。

「そう、ガツカリするな・・・握ってみろ。」

リユーイは杖を握ってみます。

「うん・・・あれ？・・・太くなってる！」

「そうじゃ。芯の部分に魔法強化を施した材料を使っている。強度は数段上がったるはずじゃ。」

「そんな感じだね。」

リユーイはビュンビュンと杖を振る回しています。

「あのう・・・」

「うん、どうした？」

「これ、もつと威力が上がリませんか？」

「どれ、貸してみろ。」

ライムはお爺さんに十字弓を渡しました。

「フォーム・・・これは、初心者用か・・・改造は無理じゃな。」

ライムはガツカリしてしまいました。だって、少し改造すれば威力はずっと上がると思っていたからです。

「まあ、そんなにガツカリすることもなかるうて。買い換えれば良いんじゃない。」

そう言つて、2丁の弓を取出しました。

取出した弓は、速射性を重視したものと威力を重視したものです。

片方は一度の操作でボルトを連続して3本発射できますし、もう片方はライムの弓より威力が1.5倍ほどあがっています。威力が増したことで、特殊なボルトの発射も可能です。

ライムは悩んでしまいました。

これから、もう直ぐ銀色の月です。無駄遣いは出来ません。

「これって、幾らぐらいなの？」

「1つ銀貨4枚だ。」

「この2つを改造して合体できる？」

ドワーフは出来ると答えます。そして、弓の値段は銀貨6枚。

「じゃあ、鋼の杖の修理費と弓の購入改造費合わせて銀貨10枚・・・それにこれでどう？」

リユーイはタバコとマッチを取出しました。

おじいさんはタバコとマッチをしばらく見つめてました。その用途を聞くと吃驚します。

「魔法以外の火をつける道具か・・・そしてパイプの要らないタバコは・・・」

「良いじゃろう。明日取りに来い！」

家に帰るとサンデイが心配そうにリユーイ達を待っていました。

リユーイは銀貨10枚を持ってましたが、ライムは銀貨1枚で改造を依頼しようとしてましたから、多分お金が足りずにガツカリして帰ってくると思っていたんです。

「ただいまー！」

とライムは元気にドアを開けます。

「どうだったの？」

「うん。凄いのが出来るよ。改造できないから新しいのを買って改造するんだよ。」

「ええ！・・・そんなにお金持って無いじゃない！」

「お姉ちゃんが払ってくれた。それでも足りないみたいなんで、お姉ちゃんの持つてる物を足したんだよ。」

「リユーイ。なにをあげたの？」

「ああ・・・タバコとマツチかな。ここには無いみたいで喜んでたよ。」

「ドラゴンの牙の代金も全部？」

「もう、何も残ってない。」

ホントにもう・・・サンデイは少し怒ってます。でも、今後の事を考えるとライムの武器強化は必要です。

銀色の月がほんとに始まる前に、もう少し依頼をこなさなければ、長い冬は越せないかも知れません。

明日からは地道に薬草取りをしなければね。と思ったりしてます。

次の日、昨日と同じようにリユーイとライムの2人で仲良く武器

屋に向います。

「お爺ちゃん。できたー！」

「おお、出来取るぞ。ほれ、これじゃ。」

動滑車を使った複雑な弦の張り方ですが、使用方法は今までと変わりません。

簡単な、照門の前に細長い箱が有り此処にボルトを2個入れるのだそうです。連射は2個まで、しかし威力は十字弓の倍の性能だそうです。

しかも、威力が増したおかげで、特殊なボルトを打つ事が出来ます。

「この弓は・・・そうだな、クロスボー改と名付けるか・・・特殊弾を撃てるぞ。サービスで、炸裂弾を3個と煙幕弾2個をつけてやるわい。」

「ありがとう！」

2人で武器屋を出て家に帰ろうとした時です。
ギルドの石壁になにかの看板が出てました。

「当ギルドで ドラゴン・ハンター でしたー！」
宝くじ・・・そんな感じの看板です。

サンデイ達のお婆さん

本格的な冬が訪れる前に、もう少し手許金を確保しとこう。ってことで、現在ギルドの依頼掲示板と睨めっこの最中です。

この前も、依頼件数はあまり多くはなかったんですが、今回はもっと少ないです。

「どれも、変りは無いわね。この辺から行こうか。」

「あれ？この依頼・・・お婆ちゃんからだよ！」

サンデイが掲示板の端から依頼書を取ろうとしたら、下の方の依頼書を見ていたライムが何か気が付いたようです。

「ほら、村外れのお婆ちゃんからの依頼だよ。」

その依頼書は、冬支度の準備をして欲しい。報酬銀貨1枚。って書いてあります。

冬支度ってどんなのかなって思いましたが、銀貨1枚はこの種の依頼では破格です。

「これ、お願いしまーす。！」

サンデイは受付のお姉さんに依頼書を持っていきました。

お婆ちゃんの家は村外れにあります。前に行った悲恋の洞窟のある森まで進み、手前にある小道を森伝いに歩くとお婆ちゃんの家が見えてきました。

お婆ちゃんは、サンデイ達の父方のお婆ちゃんです。

でも、何故サンデイ達と離れて暮らしているのでしょうか。その理由は・・・

「お婆ちゃんー！」

小さな家に近づくとライムが大きな声でお婆ちゃんを呼びました。

すると、扉が開き、中から、お婆ちゃん？・・・お姉ちゃんが出てきました。

「おお、ライムか、大きくなったねえ。サンデイもこの前来た時よりも確実に美人になってるよ。・・・うん！私の遺産だ。」

リユーイの頭にはでっかい疑問文が浮んでます。でも、ルミナは直ぐに気が付きました。

サンデイのお婆ちゃんはエルフ族なのです。ライムを抱き上げて振り回している時チラッと髪が乱れ尖った耳を見つけたからです。

でも、見かけはどう見ても20代です。サンデイのお母さんより遥かに若く見えます。

「まあ、中に入れ。依頼の話はそれからだ。」

お婆ちゃんの家は1Kです。小さなテーブルに椅子2つ。そして傍らにはベッドが置いてあります。

4人を適当に座らせると、お婆ちゃんがお茶を入れてくれました。

「ところで、そちらの2人は誰だい。1人は私と同じエルフ族らしいが、もう1人は見かけない種族だねえ。」

「リユーイは、少し・・・大分変ってるけど、人間だよ。」

「そうかい・・・まあ、ライムがそう言うなら人間ってことにしていてやるよ。」

(俺のことバレてる?)リユーイは冷や汗をかいています。

「それと、もう1人のお嬢さんもいるみたいだけど・・・」

(私のこともバレてる?) 姫様も指輪状態ですが冷や汗をかいています。

「やくねえ・・・ここ来たのは4人だけよ。」

「そうかい・・・そうしところかねえ。」

久しぶりにお婆ちゃんに合えて嬉しかったのか、ライムが今まで

の冒険をお婆ちゃんに披露します。

お婆ちゃんは、そうかい、へ〜、ほほーなんて言いながら聞いていました。

「リユーイとやら。随分と孫が世話になったようだね。感謝するよ。」

「いえ、こちらこそ・・・ですよ。」

「ところで、貴方は冒険者なんですよね。」

お婆ちゃんの姿は村の婦人が着るような長いスカートにエプロンではなく、ロングパンツにシャツ姿だったからです。

「よく判ったねえ。なるべく判らないような格好をしてるつもりなんだが・・・」

右手の剣ダコを見ればイヤでも判ります。とはいえません。

「ところで、依頼の件ですが・・・薪割りではないですよね。」

「ああ、その話だね。実は、町のギルドからの依頼なんだが1人では、ちよつと心細いと思って、依頼したのさ。」

「依頼の依頼ですか・・・」

「違う。依頼の手伝いだ。下の森に灰色熊がいるらしい。その討伐だよ。灰色熊1匹なら私1人でもなんとかなるが、どうやら夜叉が一緒にいるようなんだ。夜叉の討伐をお願いしたいんだが、どうかね。」

夜叉ってなんだ？っていう顔をしているリユーイに胴竜より小型のトカゲよ。ってルミナが教えてます。

「夜叉って強いんですよ。できるかなあ。」

「お前達はドラゴン・ハンターなんだろ。十分可能なはずさ。」

「さて、仕度をするから待ってておくれ。」

そう言つと、ベッド脇の木箱から鎖帷子を取り出して着装します。

また、木箱をゴソゴソやってましたが、杖を1つ取出すとサンディに放り投げました。

「この前ダンジョンで見つけたやつだ。サンデイにあげるよ。」
受取った杖をよく見ると、杖の天辺に大きな魔道石が金属製の爪
でしっかりと取り付けられてあります。

「これって・・・この色だと、炎の杖！」

「そんな名前だったかしら・・・私が持つても使えないし・・・
サンデイなら使えるでしょ。」

たしかに魔法の杖ですから、サンデイには使えます。しかも、こ
の杖、魔力を使わずに火炎弾を撃てるのです。そして、火炎弾の魔
法をこの杖を使って行くと、1つ上の魔法、火炎球を打てるのです。
火炎球はその名の通り、火炎が球状になって飛んでゆく魔法で着弾
すると数mぐらいの範囲で高価があるものです。

サンデイはありがたく受取る事にしました。これで、赤い靴は結
成当時より武器が全員上昇したことになります。

「さて、準備が出来たわよ。」

お婆ちゃんは、片手剣を腰の後ろに差し、金属性の銀の弓を持っ
ています。

お婆ちゃんの家を出ると、みんなで森に向います。

リユーイは生体レーダを起動しました。緑の点が森中に点在して
ますが、黄色や赤色はありません。

「結構人が森に入っているみたいだね。あっちこっちから気配が
する。でも殺気を持ったのはいないな。」

「よく判るね。その気配だが、この頃この森に初心者が多く入る
ようになってね。煩くなったよ。」

「では、もっと奥か。悲恋の洞窟まで行って、そこで一休みしよ
う。」

ゾロゾロと悲恋の洞窟まで獣道を歩きます。たしかに、あっちこ
ちに人影を見るようになります。

洞窟が何処にあるか判らずにうろうろしてるみたいです。

朽ちかけた神殿に到着して此処で一休みです。

「ここが、悲恋の洞窟か・・・ライム位の時長老から聞いた昔話が本当だったとはな・・・」

お婆ちゃんが考え深げに言いました。

「でも、お婆ちゃんはライム達と一緒に何で住まないの？」

「私が息子の嫁より若く見えるのは問題だろう。それに私は現役だから世界中を飛び回ってるしね。」

そんなもんかなあ・・・ってリユーイは考えてますけど、見掛けは結構大事なんですよ。

一休みが終わった所で、再度リユーイは生体レーダを起動します。

探知範囲ギリギリのところには赤い点が集中してます。

数匹ではありません。数十匹が一箇所に集まっています。

「見つけた！・・・数十匹いるぞ！！」

リユーイ達はリユーイの示した方向に歩き始めました。

灰色熊Vsお婆ちゃん

リユースの後をぞろぞろと皆で歩いていきます。

お婆ちゃんとルミナとリユースだけなら枝渡りや猿飛びでヒョイヒョイて移動出来るんですが、サンデイとライムはどちらかと言うと人間ですからそんな器用な真似は出来ません。

でも、リユースが先頭で、鋼の杖を使ってエイ！って灌木やツタを払ってくれるんで、そんなに疲れないですみます。

リユースが片手で止まれ！って合図をだします。

茂みからそっと覗くと、沢山の生き物がうじゃうじゃいます。

「手前の小さいのが羅刹、その後ろが夜叉だ。」

ルミナが教えてくれました。そう・っってリユースは答えました。あまり嬉しくありません。だって、小さいっていう羅刹がリユースサイズ、夜叉はリユースの1.5倍です。そんなのが20匹ぐらい居るんですから、正直、銅竜1匹を相手にした方が楽なんじゃないかなって思ったりしてます。その上、何かの恐竜映画で見たラプトルとか言う恐竜にそっくりです。きっと獯猛何だろっなあ、って思ったりしてます。

「そして、奥に居るあの熊が、サンデイのお婆ちゃんの言う灰色熊だ！」

リユースは声を出しそうになって、慌てて口を押さえます。

灰色熊の大きさは、この間倒した銅竜程の大きさです。

(どうしようって言うんだ！このお婆ちゃんは！！)

(聞こえてるわよ・・・さて、貴方の実力、見せて貰いましょうか！)

「サンデイとライムは木登りが出来る？」

「出来るよ。」

「じゃあ、この大きな木に登って、木の上から援護してくれない。俺と、ルミナは枝を飛びまわることが出来るから、ヒット・エンド・ランで一匹づつ始末するから。」

「それが一番かもな。」

ルミナも賛成してくれました。

それじゃあ、ってサンデイ達が木にするすつと登っていきます。

枝が大きく張り出したところにサンデイ達は辿り着いて、そこに立ち上がりました。背中を幹に押し付けているので体制が崩れる事もありません。

サンデイは杖を握り締めて火炎球の詠唱を始めます。ライムはクロスボウにボルトをセットします。最初のボルトは2本とも炸裂弾です。

2人が枝に辿りついたことを確認したルミナとリユーイは素早く枝渡り、猿飛びで枝に飛び移りました。

「ホォー・・・結構連携が出来てるじゃないか。どれどれ私も準備するか・・・」

お婆ちゃんも枝渡りをして更に遠くの枝に飛び移ります。

羅刹も夜叉も未だリユーイ達に気が付いていないようです。

リユーイはサンデイ達に手を振ると、目標を腕で示します。

2人は頷くと、サンデイは魔法を放ちます。そしてライムはクロスボウのトリガーを引きました。

【火炎球！】、「ばしゅ！、ばしゅ！」

羅刹の群れに火炎球が炸裂します。数体が衝撃で吹き飛ばされました。続けて「ドカン！、ドカン！」と炸裂弾が群れを引き裂きま

す。

「今だ！」

リユーイは枝から飛び降りながら鋼の杖で夜叉を叩き潰します。その反動を利用して猿飛びで枝に緊急離脱、この繰り返しを続けていきます。

ルミナも同じようにオニギリを振るって羅刹を葬って行きます。

「へえ〜・・やりますねえ。枝渡りはエルフだけかと思ったけど、出来る種族もあるんだねえ。長生きはするものねえ。」

遠くから、4人を見てるようです。

「さて、あつちが終わらない内にこつちも終わらせないとね。」

お婆ちゃんは枝から高く飛ぶと、灰色熊目掛けて銀の弓で矢を撃つていきます。全て当たりです。

たちまち10本程の矢が灰色熊の背中に突き立ちますが、全く気にしてないようです。

「通常では、やはりダメね。貫通矢を使うしかないか。」

お婆ちゃんは銀の弓に魔法を込めると、銀の弓が変形していきます。・・それは、長弓になると周りに光の雫を散らしはじめました。灰色熊の真上高く枝渡りを行います。その頂点近くで、銀の弓を引き絞ります。

【貫通矢・・2本！】

素早く咻くと矢を射掛けます。

「シユタ！、シユタ！」

灰色熊の体内深く矢が突き立ちます。矢羽がようやく体表面に出るくらい深く刺さっています。

「グワァッ！」って灰色熊が叫び上を見ます。

どうやらお婆ちゃんが原因だと認識したみたいです。

お婆ちゃんが降り立った木に体をぶつけて、お婆ちゃんを振り落

とそうとしますが、その前に次の枝に飛んでいきます。

【貫通矢・・・2本！】

飛びながら次の攻撃です。

リユーイ達は地道に一匹づつ片付けて行きます。

夜叉を粗方片付けて、今は羅刹を相手にしてるんですが・・・素早すぎて中々攻撃が当たりません。

【アクセル！】

ルミナが枝に飛び移った一瞬の合間に、ライムは加速の呪文を放ちます。

「リユーイお姉ちゃんには何故か効かないんだよね。」

「でも、リユーイは自分で出来るから・・・」

同士撃ちの危険性から攻撃を一時中断してるサンデイ達です。

【ターボ1】

リユーイも自分で何とかしたみたいです。みるみる2人の攻撃スピードが増し、羅刹の動きに追従していきます。

たちまち2匹の羅刹が倒されました。

（キュピーン！！）

リユーイの頭に警報が鳴ります。

（なんだ！）

素早く生体レーダで周囲を確認します。

特に異常は無い様ですが、ふと、気が付きました。お婆ちゃんに動きがありません。さっきまで大きな生体反応の周りをヒョイヒョイと動いてたんですが・・・

（不味い！・・・【ターボ2】）

ヒュンつとリユーイの姿が消えました。

「これまでかもね・・・まだまだいけると思ってたんだけど・・・」
灰色熊の上を飛びまわって攻撃してたんですが、運悪く枯れ枝に

飛び移ってしまい、そのまま落下してしまいました。

落ちた衝撃で足を挫いたらしく立つ事も出来ません。

灰色熊には、十数本の貫通矢が体内深く突き立っているんですが、此方に迫る動きを見るとあまり効いていないようです。

そのままの姿勢で銀の弓を引き絞ります。

シユタツ！つと熊の顔面に突き刺さりますがやはり効いてません。

お婆ちゃんは腰の片手剣を握ります。

(最後はこれだね。)

目の前に迫った灰色熊目掛けて片手剣を振り下ろします。

ドガ！って大きな音がしました。

お婆ちゃんの片手剣は地面にめり込んでます。

(???)

何なの？って感じです。確かに目の前にいた灰色熊に片手剣を振り下ろしたはずですが。

でも、剣は空を切って地面にめり込んでます。

(ドガ！って音がしたわよねえ・・・)

改めて周囲を眺めます。

するとそこには、鋼の杖を振り下ろしたリユーイが立っていました。

(確か、あの娘はずっと向うにいたのよねえ・・・でも此処に居る。しかも私が見えないくらいの速さで重い一撃を灰色熊に放ったと言っの・・・)

「大丈夫？お婆ちゃん！」

「ええ・・・大丈夫よ。灰色熊はどうなったの？」

「今の一撃でやつつけたみたいだよ。」

(とんでもない娘だねえ・・・銀のドラゴン・ハンター伊達じゃな
いってことかねえ)

「どれどれ・・・ほお〜死んでるね。お見事！」

お婆ちゃんは銀の弓を杖代わりにして灰色熊を確認します。

「お婆ちゃん。リユーイ。何処なのー！」

「此処だよー！」

サンデイ達も羅刹を全て片付けたようです。大声で呼んでいます。

お婆ちゃん秘密

「おおーい！ってサンデイ達を呼びます。」

ガサガサ・・・と音がして茂みからライムが顔を出します。葉っぱや小枝が金髪巻き毛に引っ掛かっているのは、まあ・・・お愛嬌って所かもしれません。

後からサンデイ、ルミナが藪を避けてやってきます。

「お婆ちゃん！怪我したの？」

ライムは心配そうです。そんな孫娘に笑って答えるのもお婆ちゃんの仕事です。

「大丈夫だよ。ライムを見て元気になったから・・・いちっ！」
でも、やはり痛いみたいです。

「待つて！・・・【ヒール！】」

ライムはお婆ちゃんに癒しの魔法を掛けました。

すーっっつと痛みが引いていきます。ちよつと杖無しで立ってみます。大丈夫みたいです。

「やはり、としかねえ。枯れ枝に飛び移るなんて・・・」

ルミナとサンデイは灰色熊を杖でつんつんしながら調べてます。

「でかいな。銅竜と同じぐらいだぞ。」

「ええ・・・でも、この矢は？」

「ああ、これが。魔法弓で強化された貫通矢だ。今ではあまり使える者がいないはずだが・・・とんでもない婆さんだな。」

「でも、結局、リユーイが殺ったのね。」

「間違いない。背骨を折られてる・・・と言うか、体の真ん中を鈍器で殴られたって感じだな。あの杖で強引にぶん殴ったに違いない。」

「皆おいでー！」

お婆ちゃんが呼んでいます。

サンデイ達は急いで戻りました。

「灰色熊を倒したから、これで依頼は終了だよ。一旦家に帰りま
すか。ところで、お前達、夜叉と羅刹の換金部位は確保したかい？」

「うん。たつぷり手に入れたよ。」

ライムはバックを手でポンポンしました。

「では、ここにはもう用はないね。帰るとしますか。」

テクテクと5人は森の道？を戻って森の外に出ます。

森を迂回する小道を辿るとお婆ちゃんの小さな家に到着です。

早速、暖炉に火を起してポットを乗せるとお茶の準備をします。

お茶は何時ものようにライムが入れます。

とんでもない1日でしたが、暖かいお茶を飲むとそんな疲れも飛
んでいきます。

「さて、そろそろ依頼の報酬を上げないとね。」

お婆ちゃんはそう言つと、服のポケットから銀貨を1枚取り出し
てサンデイに渡しました。

「それでだね、今回の灰色熊なんだが・・・倒したのは私でなくリ
ューイだ。あの灰色熊の討伐報酬は銀貨20枚。でも今持ち合わせ
がなくてねえ・・・だから、銀貨20枚に相当するものを上げようと
思うんだが・・・」

「いいですよ。サンデイが貰った杖だつて、結構な値段でしょ。
それでいいです。」

「そうかい・・・でもねえ・・・！そうだ、あれを上げよう。ちょ
っと待ってておくれ。」

お婆ちゃんはベッドの脇の木箱を開けると細い鎖を編みこんだ腕

輪を4つ取り出しました。

「これは、守りの腕輪だよ。付けると薄い魔法の防護幕が広がるんだ。そうだねえ・・鎖帷子程度かねえ。」

「それって、凄く高価なものだと思うのだが・・1個金貨1枚以上は確定だぞ！」

「でも、私には、此れが有るし・・。」

お婆ちゃんは、着ている鎖帷子を指差します。その鎖帷子も魔法具ですから、確かに必要ないですけど・・。

「それに、そんな魔道具は迷宮の深いところには結構あるんだよ。現に4つあるじゃろう。貰っとくれ。」

4人はありがたく受取りました。でも、リユーイには必要ないんですよ。人間より遥かに頑丈・・いや柔軟ですからね。

「それじゃあ、これでしばらくお別れじゃ。もし、王都のギルドに行く事があったら会う事もあるかも知れないね。あそこでは、「疾風エリア」と呼ばれてるから何かあれば呼んでおくれ。」

「またね。お婆ちゃん！」

4人はお婆ちゃんの家を出て村に帰って行きました。

「さて、帰ってみたいだね。どれ、私も帰るとするか。」

お婆ちゃんは家を出ると玄関に鍵を掛けます。すると・・。家は形を少しづつ変え始めました・・グニユグニユと形が変わり、大きな岩に変化します。

「ge , s l f o p n !」

聞きなれない呪文を唱えると、お婆ちゃんの足元に魔方陣が発生し短く発光し始めます。

次の瞬間、お婆ちゃんの姿は消えてしまいました。

どこかの部屋

「どうであった？」

「確かに噂の通りの実力です。」

「我が国に組込むことは可能か？」

「無理でしょう。彼・・いえ彼女を御するものはこの世界には居らぬでしょう。」

「では、始末するのか？」

「それも、無理でしょう。」

「さすれば、どうする？」

「このままで良いかと。決して害には為らぬと思います。かえってこちらの助けになるかと。」

「害がないのであれば、対応は任せる。」

「はい。」

サンデイ達は村に戻るとギルドに向います。

ギルドの換金カウンターのお爺さんに夜叉と羅刹の換金部位を渡します。

ライムのバックからポロポロと牙が転がり落ちるのを見たおじいさんは吃驚しています。

「これをどこで？」

「下の森の奥に一杯居たんだよ。」

「ちよつと、待つとれ。」

「??？」

しばらくすると、マスターがやって来ました。

「おお！おめえ達か。ところで、これなんだが・・この辺には居ない奴なんだ。」

マスターが夜叉と羅刹の牙を指で弾きながら言いました。

「お前達も気を付けた方がいい。この所、魔物の生息範囲が乱れている。今までの経験で判断したらとんでもないことになるぞ。」

「とりあえず、下の森には初心者注意の看板ぐらいは出すとするか。」

お爺さんから受取った換金額は銀貨5枚・・依頼額より大きいです。

家に帰り皆で楽しく夕食を食べ、暖かい暖炉の傍でリユーイの昔話を聞かせて貰います。

次の日の朝。ナナイ村に今年初めての雪が降りました。

これから若草の季節まで、ナナイ村の村人は深い雪の中で暮らします。

ナナイ村の外へ

「行くぞ！」

「お姉ちゃん。がんばれ！」

雪国の楽しみと云ったら、スキーです・・いや、スノーボードです。段々畑の道の雪を固めて畑の側面を曲線状に固めると丁度パイプを半分に切ったような形になります。畑をえっちらおっちら登ると、さあ、スノーボードの始まりです。

リユーイは少し心得もありましたし、姫のサポートもあります。たちまち村一番のスノーライダーになりました。

でも、なんでこの世界にスノーボードがあるのかって？

それは、とある冒険者が雪道を降りるのに、たまたま持っていた盾に乗ったという逸話があります。ですから、冒険者はスノーボードが出る事が条件の一つになっているギルドもあるということです。

リユーイの後をルミナが、その後をサンデイが続きます。皆さん、まあまあ腕です。最後はライムですが、彼女はリユーージュです。この方が凄いと思いますが、この村では評価の対象外です。ひとしきり遊部と、皆さん雪だるまになってます。

家に帰り、お風呂に入るとお母さんの夕食が待ってます。

この前の大猪で猟師株を沢山貰ってますから、お肉がたっぷり入ったシチュウを美味しく頂きました。

お茶を飲んだ後は、暖炉の前に輪になってリユーイの昔話が始まります。

「昔々、ある王国の王妃様に、赤ちゃんが生まれました。女の子です。そのお祝いに・・・」

今夜は「眠りの森の美女」みたいです。

聞いてる方は相変わらずみたいです・・・

「そうか！糸車の針を刺すと結婚出来るのだな・・・痛そうだな。」

「1人だと相手が早く見つかるのね・・・でも、ライムが居るから。」

「よかったねえー」

お母さんも一緒に聞いています。そして、こんな話は聞いたことがない。この子は一体何処から来たの？って思っていたりしています。

「そうだ！お母さん。私達ね、この間、お婆ちゃんと仕事をしたんだよ！」

「え！・・・お婆ちゃんが村に来たの？」

「うん。お婆ちゃんからの依頼がギルドにあったの。」

「何か言ってた？」

「何も！・・・でも仕事のお礼は貰ったよ。」

「そんなことあったんだ・・・」

「そういえば、王都に来る事があればとか言ってたような気がする。」

サンデイが話しに参加します。

「お婆ちゃんって冒険者だよな。強いなの？」

お母さんはちよつと困ってしまいます。だって、とっても強いとは言えません。そんなこと言ったら、教えて貰うなんて言い出さないとも限りません。

お婆ちゃんは冒険者ですが、もう1つの顔を持っています。それは、冒険者の監視です。

冒険者は強いのが普通です。でも、冒険者が悪事したら誰が止めるのでしょうか。

普通では止められません。それを止めるのがお婆ちゃんの仕事なのです。

国内のギルドを巡回しながらマスターと情報を交換し必要な措置を行うのが本当の仕事なのです。

そう言う意味では、冒険者OF冒険者なのです。

「そうね・・・ルミナさんくらいかな？」

当たり前障り無いところを告げます。

「いや、私よりは上だ！」

「でも、リユイーに助けられてたわよ。」

え！って感じでリユイーを見ます。この子はお婆ちゃんより強い？

信じられないって感じで見てます。実際強いです。多分この世界

では最強でしょう。バックアップも居る事ですし・・・

「ところで、お母さん。お願いがあるんですが・・・」

お婆ちゃんとサンデイが切り出しました。

「あら？なにかな？」

「若草の月になったら、私達・・・王都に行きたいんだけど・・・」

「魔物の生態系が変化してるってマスターが言ってたわ。裏の山

でも銅竜が出るくらいだし・・・」

「お婆ちゃんも何かしてるようだけど、私達も自分達で調べたいのよ」

多分そんな事だろうとは思ってたけど・・・

でも、村を出るなら、町や都市に行くよりも王都の方が心配ないかもしれない。と思いました。

何てたって、この子達のお婆ちゃんがいますから。

「・・・良いわよ。このまま村に居る方がお母さんとしては、心配無いんだけど・・・たまには外も見た方が良いのかも。でも、2つ約束して頂戴。」

「1つは、王都に行ったら、お婆ちゃんに最初にご挨拶する事。」

「もう1つは、毎年、銀色の月には村に帰る事。」

お母さんはサンデイの前に指を1本つつ立てながら念を押しします。

「判ったわ。約束する！」

「ヤッター！」

サンデイ姉妹は大喜びです。

リユーイもこの村しか知りませんので王都行きは嬉しい話です。

新しい情報が入ってくるかも知れません。

ルミナはその場では表情を変えませんでした。その夜、コンパクト型携帯通信機でロミナに王都へ行く事を得意げに報告してました。

次の日からは旅の支度です。王都まではずっと歩いていかなければなりません。馬車もあるんですが、4人分の馬車代はバカになりません。

急ぐ訳ではありませんし、とことこと歩いていく事にしました。

王都に続く街道は下の森に入る岐路を真直ぐに行けば出られます。

街道に出れば、旅人目当ての宿場町があります。ほぼ、1日程度歩けば次の宿場町に辿り着けるようになっていくようです。

宿場町のギルドで依頼をこなしながら旅を続ければ旅費の心配も少なくなります。

どんよりとした雪を降らせる雲が少なくなり、お日様が顔を出す日が多くなった、ある日。

サンデイ達は未だ雪が解けきれないでいる通りに出ました。

お母さんは家の扉の前で4人を見送ります。

「……では、行ってきます！」

「銀色の月前には必ず帰るのよ。それと、お婆ちゃんに宜しくね。」

「！」

村の十字路までは、振り返りながらお母さんに手を振ります。
十字路を右に曲がるとそこは、もう新たな冒険の入口です。

女の子の依頼 (1)

まだ雪が残る段々畑の道を4人はトコトコと降りていきます。

森への岐路に差し掛かった時、皆で振り返ると雪山の麓にナナイ村が小さく見えました。

これから半年以上、冒険の日々が待っています。

もう、後ろを振り向かずに、真直ぐ街道を目指して歩き出して行きます。

朝早く家を出て、ちよつと疲れたかな？って感じたころ、街道に出ました。

さすが街道と言うだけあって、石畳が敷き詰められています。でも、車のわだちがしつかりと石畳を刻んでいます。此処まで磨り減らすにはかなりの年月が使われたでしょう。そんな、由緒正しい街道です。

「この街道を右に進めば王都に行けるの。街道の出発点は王都だから、この道を辿っていけば間違うことなく王都に行けるのよ。」

サンデイが物知り顔に話すのを3人は真剣に聞いています。

「後は、道伝いに歩いていけば、町にいけるはずよ。でも、その前に！」

ここでちよつと一休みです。

今回ライムは例のリュックを背負ってません。皆と一緒に布製のカバンを肩から下げてます。

カバンの中から、パンを取り出し軽いお食事です。最後に水筒のお茶を一口ゴクンと飲みました。

リユーイは、鋼の杖の上部のワツカにはハンカチを縛り付け、石付きには木の栓を捻じ込んでいます。でないと、杖を付く度にカチ

ン、チャリンって音がするんです。

他の3人も武器意外に木の杖をつきながら歩きます。身長より少し短い位の杖ですが、3本を組み合わせて布を巻くと簡易テントが出来上がります。

山裾の小さな丘を登ると今日の目的地となる町が見えてきました。放牧場の脇を通り、小さな小川の石橋を渡ると辺りは一面の畑です。今年の耕作が始まったのか、畑の一部は耕された跡がありました。

畑の中を街道は真直ぐに続いています。

所々に休憩用の広場が設けられています。馬車が数台程度休めるような広場には、夏の日差しをさけるための数本の木立が立っていました。

そんな休憩所を2回程利用して最初の町に辿り着く事ができました。まだ、夕方にも程遠い時間ですが今日は此処に一泊する予定です。

町の入口には、門番が数名待機しており、町へ入る旅人から税を徴収しているようです。

ルミナはそんなこと知らないよ。っていう風に通り返けようと思いました。

「ちょっと待て！・・・困るなあ、旅人の通行税は知ってるだろうに？」

「おいおい、何時から冒険者から通行税を取るようになったんだい。後ろの3人も冒険者なんだが・・・」

そう言ってギルドカードを胸元から取り出します。

「・・・！そうならそうとカードを出してくれば済むものを・・・」

後ろの3人も行っついていいぞ！」

門番さんはブツブツ言いながらも通してくれました。

「所で、宿は何処だい。」

「宿屋なら、この道を真直ぐだ。」

ありがとっつて門番さんに言いながら通りを真直ぐに歩いていきます。

「今のつて・・・」

「ああ、通行税ね。旅人が町の入る時の税金だよ。それで、町の石堀や、街道の整備をしてるんだ。町に入れば、とりあえずは魔物や獣の心配をしなくて済む。警護料みたいなものだと思うてる。」

「じゃあ、冒険者から税金を取らないのは何故なの？」

「町が襲われた時に役立つて貰いたいからさ。」

サンデイとルミナの会話を、へ〜そうなんだ。つてライムとリュイが聞いています。

旅はいろんな事が判るから勉強になるねーつて、後ろの2人が話しています。

門番さんの言った通り、宿は直ぐ見つかりました。酒瓶とベッドの絵の看板は結構目立ちます。

宿の1階は酒場です。まだ飲んでる人はいないみたいです。

カウンターの太ったおばさんのところへ行っつて宿の交渉です。

「こんにちは。4人いいですか？」

「ああ、大丈夫だよ。1部屋ベッドが2つだから2部屋になるけどいいかね。」

「それでいいです。」

「じゃあ、朝飯込みで、1人銅貨30枚だ。」

ライムが4人分の代金を払います。

「部屋は2階だ。これが鍵だよ。」

おばさんはライムに2つの鍵を渡します。

「その前にギルドに行つて来ます。あと、夕飯を食べられる所はありませんか？」

「ここで良ければ、1人10エンタで食べさせるけど・・・」

「では、お願いします。」

ライムが布のカバンからお財布代わりの皮袋を開けて銅貨40枚を支払いました。

ギルドは何処でも目立つ所にあります。流石、町のギルドだけあつてナナイ村よりも大きな石造りです。

ギルドの扉を開いて中に入ると、中の構成はあまり変わりません。中央に広間があつて、テーブルと椅子が置いてあります。壁際には依頼板がありいろんな依頼書が張つてあるようです。広間の奥にはカウンターがありギルドのお姉さんがここにこししながら4人を見てます。

「いらつしやいませ。旅の冒険者ですね。カードを拝見しますので皆さん御提示願います。」

4人は胸元からそれぞれのギルドカードを取り出してお姉さんに渡しました。

お姉さんは4枚のカードを受取ると、何やら大きな日記帳みたいなものを書き込んでいます。

「・・・！！！！これ、君達のよね。」

4人は一斉に頷きました。

「その若さで・・・このランクで・・・今は緊急の依頼はありません。発生した時は真つ先に連絡したいんですが、宿は何処でしょうか？」

サンデイが場所を教えます。ああ・・・あそこですねって納得してくれました。

「最後に、この町を出る時に一度立ち寄ってくださいね。」

そう言って4人のギルドカードを返してくれました。

4人は掲示板に行つて、適当な依頼を探します。旅はまだ続くのですから、短期、高額、簡単な3拍子が揃ったものを見つける必要があります。

「これなんか、どうかね？」

リユーイが見つけたものは、猪退治です。畑を荒らして困つてるみたいです。

「これも、いいかも！」

サンデイが見つけたのは、薬草採取です。でも薬草の周りに狼が沢山いるので取る事が出来ないようです。

「どれどれ、どちらの報酬が高いんだ・・・猪か。じゃあ決まりだな。」

その時、小さな女の子がギルドに入つて来ました。

カウンターまでとことこと歩いていくと、爪先立ちして、お姉さんにお話しています。

「まだ、取ってきてくれる人は見つかりませんか？」

「まだ、ちよつとね。狼が沢山いる割には報酬が安いのかもね。」

「そうですか・・・でもそれ以上は・・・」

女の子はしょんぼりしながら帰っていきました。

「何か、訳ありのようね。」

「お姉ちゃん。聞いてきてよ。」

サンデイに残りの2人も頷きます。

サンデイはカウンターのおねえさんの所に行つて訳を聞きました。

「あの子のお母さんが病気なんです。でもその病気には特效薬があるんですけど、あいにく町には切らしてまして・・・それで、依頼を出したんですけど、薬草の周りが何時の間にか狼の縄張りにな

ってるらしく、誰も取りに行かないんです。」

「お姉ちゃん可哀相だよ。」

「健気な子供だ。」

反応はいろいろですが、此処はひとつ頑張ろうかって感じですよ。

「その依頼。赤い靴が受けます！」

「エッ！・・・でもあなた達が・・・いえ！お願いします。」

早速お姉さんから場所を教えて貰い、明日早朝に出かけることにしました。

女の子の依頼 (2)

ギルドから宿に戻ると夕食です。

根菜と燻製肉のごった煮でしたが、今日一日歩いて来た4人には、とても美味しく感じられました。

でも、此処は酒場も一緒なんですよ。

「おい、ネエちゃん達こっちに来てお酌でもしねえか？」

そんな野次があつちこつちから聞こえてきますが、4人は完全に無視しています。

「おいおい、何時まで待たせるんでき。おれはな、ドラゴン・ハンターのガイル様だ。冒険者なら敬意を示めさせてんだ！」

「そんな大それたものなら、証拠を見せな！」

あまりにも煩いのでルミナがギョッて見ながら言いました。

「あ〜ん？俺の言葉じゃあ信用できねえってか・・・此れが証拠だ！」

いきなりルミナ目掛けて鉄拳が飛んできましたが、リユーイにあつさと拳が掴まれてしまいました。

「へ〜え。大した事無いのね。」

ルミナがそういつた途端に、仲間の男が剣を抜いてリユーイに打ちかけます。

その剣もリユーイがあつさと指2本で摘んだりしています。

そして、拳の方はギョツと軽く握りホイって手放します。剣の方は指で少し捻りました。もう鞘には戻らないでしょう。

2人は覚えてるって言葉を浴びせると何処かに走り去りました。

食事の続きをしてると、数人の男達が入ってきました。

「此処に、ドラゴン・ハンターを愚弄した奴がいると聞いてきた

んだが・・・」

その言葉に、周囲で飲んでいた男達がサンディ達を指差します。

「お前らか？ドラゴン・ハンターがどういう位置にいるか判っているのか？」

「判ってないけど・・・あいつ等本当にドラゴン・ハンターなの？」

「彼らがそう言っているし、ギルドも今日ドラゴン・ハンターの一行が来たと言っている。間違いないだろう。」

「じゃあ、ドラゴン・ハンターのライセンスはどういうものか見たことあるの？」

「知ってるに決まってる。カードの下の宝石だ。カードは偽造できねえから、カードで直ぐに判るはずだ。」

「じゃあ、これは？」

ルミナはリユーイにおいでおいでをすると、近寄ったりリユーイの胸の中からギルドカードを取り出します。

そして、男達の目の前にひらひらと・・・

途端に男達の顔色が変わりました。

「これは、ドラゴン・ハンターの宝石。そしてドラゴンの討伐章・・・間違いない！」

「失礼した・・・おい、あの2人組みを牢に入れとけ、とんでもない偽証だ。唯では出せん。」

大盛りに盛られたごった煮をやっと食べ終わると今日はもう大事な事ありません。

早々と就寝です。疲れた体は直ぐに夢の世界に旅立たせてくれました。

次の日の朝早く、町から北の山に向いました。

宿屋のおばさんに簡単なながらもお弁当を作ってもらいご機嫌です。

「ねえ、薬草って何時もの薬草？」

「え〜とね。．．ケアやジギタじゃないわね。．．クアル草って書いてある。」

「どんなの？」

「待ってね．．膝ぐらいの高さで、茎は2本、葉は4箇所突起がある。って書いてあるわ。」

それだけ特徴があるんでしたら直ぐに判りますよね。

山道に入ると、ルミナとリユーイに周囲を監視してもらい、サンデイ姉妹はクアル草探しです。

特徴がある割には見つけづらいのしょうか．．．でも、きのこなんかも、最初の1個は中々見つからないんですが、1個見つけると次々に見つけることが出来るんです。きっと同じなんですね。

「有った！」

ライムが飛びつくようにクアル草へ走りこむと同時に、ガアウ！っと何かがライムに飛びかかりました。

ブン！ドコッ！．．バタ！

リユーイの鋼の杖が一旋すると飛びついた何かが弾き飛ばされ近くの立ち木に叩きつけられました。

「狼だ。灰色じゃないが、群れがいるぞ！」

飛んでった物体Xをジツと見てたルミナは皆に注意します。

バウ．．ガウ．．ガウ．．

4人の周りに狼が段々と増えていきます。

「殺ル視かなさそうだぞ！」

ルミナはオニギリを構えます。

近くの大木を背にサンデイ姉妹がバックアップ。前衛がリユーイとルミナで防戦態勢です。

ガウ！・・シュパツ！

飛びかかる狼をオニギリが両断します。

バウ！・・ドン！

横殴りにリユーイの杖が当たります。

フユン・・グアア！

ライムのカロスボー改のボルトが狼の顔面を直撃しました。

狼は少しづつ後ろに下がると、キャンキャン・・鳴きながら茂みの奥に逃げていきます。

「確かに、狼の群れが居るって言うてたけど・・ほんとに居たのね。」

サンデイがそう言うて辺りを見ると・・有る、有るほんとに一杯ありました。

とりあえず、両手に一杯取ってカバンに詰め込みます。

ついでに狼の牙も集めます。大事な換金属材料ですからね。

そして、サツサと帰りました。また、狼が来るかも知れませんか
らね。

山道を降りて麓に出てきました。

この辺は眺めが良いです。遠くに町が見えますが、大分小さく見えます。

ライムのお腹が、グーって可愛らしく鳴いたのを合図に昼食となりました。

葉っぱとハムを挟んだパンを食べ、水筒のお水を飲んでる時でした。

「・・・たすけて・・・」と遠くで聞こえます。

ルミナは慌てて、コンパクト通信機をパタンと閉じてカバンに入

れました。妹に景色でも見せてのかも知れませんが。

リユーイは生体リーダーで周囲を探ります。

「追われてるみたいだ。」

杖で右側を指しました。

林の中から、誰かが飛び出しました。

「助けてくれー！」

叫びながら、転がるように斜面を降りてきます。

グオオオオー！

林の木々を押し倒しながら大きな猪が飛び出しました。

背中に矢が2本刺さってます。

どうやら返り討ちにあってるみたいですね。

「こっちだ！」

ルミナが男に叫びます。男は気付いたらしく、こちらに駆けて来ました。

大猪も一緒に追いかけてきました。

サンディとライムは攻撃したくても男が邪魔で出来ません。

ルミナはオニギリを上段に構えた時です。

リユーイが男が躓いて前のめりになった僅かの隙を突いて、鋼の杖を投げつけました。

ビューン・・・ドス！！

ドオオオン！！

猪の頭を突き破り、杖の重量とスピードに負けた猪の巨体が一瞬浮き上がり転倒しました。

土煙が上がってます。

サンディ達の頭の後ろには大きな汗がタラリと落ちてます。

「あの杖を真直ぐ投げるか？・・・普通出来ないぞ！」

「あの時の猪よりは小さいね。」

「お姉ちゃん。凄い！」

お三方の反応にリユーイはちよつと照れてます。

「おめえさんが、やったのか？・・・ありがたや、ありがたや・・・助かった男に拜まれてしまいました。」

男は散々4人にお礼を言つて町に帰つて行きます。

でも、リユーイ達は、4人で猪の解体です。内臓はリユーイが掘つた穴に埋めました。獣が来るかも知れませんがね。

リユーイの杖に両足を結び着けて、ヨイシヨつと担ぎます。そのまま、とことこと町に戻りました。

町の肉屋さんに行きました。

「あのう・・・これ、買つてくれませんか？」

サンデイがカウンター越しに話かけます。

「どれ？」

肉屋さんは秤を取り出しました。

ドン！

カウンターの前にリユーイが大猪を下ろしました。

「ええー！！！」

肉屋さんが吃驚してます。だって、可愛い4人組みで取れるものはウサギぐらいだと思つてたからです。

「買い取れませんか？」

「買い取れる！・・・銀貨10枚でどうだ！」

「いいですよ。」

直ぐにお肉屋さんはお金を払います。だって、どう見ても銀貨15枚以上はするのです。ちよつと低めに言つたのですが、それで相手は承諾したのです。気が変らぬうちに・・・です。

その足で、ギルドです。

ギルドのお姉さんに、クアル草を渡しました。

「量が判らなかつたので、この位で・・・」

「そんなには、要らなかつたのよ。でも助かつたわ。ありがとう。

・ ・ ・ はい。これが報酬よ。」

「これは、あの女の子へのプレゼントということ・・・」

「でも、依頼は依頼だわ。」

「では、依頼されなかつたことで・・・」

「そしたら、あなた達は1日ただ働きになるでしょ。」

「別の報酬がありましたので・・・これ、換金してください。」

サンディは狼の牙を大量にカウンターに乗せました。

「ほんとに狼の棲家だつたのね。・・・はい。これが代金の銀貨

3枚よ。」

「これでいいです。では女の子によろしく。」

4人がギルドを出て直ぐ、男がギルドに飛び込んできました。

「あの大猪を杖一振りて倒した奴がいるぞ。女4人で、その猪は肉屋に吊るされてる！」

「何だと！」

ギルドの冒険者がぞろぞろと飛び出して行きました。

「別の報酬ね・・・確かに。・・・でも、あれも討伐依頼があつたはず。後で届けましょう・・・」

次の町へ

宿屋に帰ると、おばさんに宿泊代を払って、もう一晩厄介になります。

早々と夕食を取っていると、ギルドのお姉さんが女の子を連れて入ってきました。

「あ！良かった。この子がね。どうしてもお礼を言いたって言うもんだからつれて来たんだけど・・・」

「どうも、ありがとうございます。早速、お母さんに飲ませることが出来ました。見る見る熱も下がって・・・本当にありがとうございます。」

「そんなにお礼を言われると困るかな。・・・よかったね。良くなつて。」

皆うんうんと頷いています。

「そうだ！貴方達が倒した猪なんだけど・・・あれ、討伐依頼の対象なの。それで、これはその報酬よ。討伐の証拠が欲しかったけど、第3者の証言と肉屋のお肉で良しとします。」

ライムが受取った紙包みには銀貨6枚が入っていました。皆さんラッキー！って顔しています。

「ではこれで・・・さっ帰るわよ。」

お姉さんは、小さな女の子を連れて帰りました。

「お母さん元気になって良かったね。」

「うん。一石二鳥だね。」

「なにそれ？ライム判んないよ。」

「んーとね。鳥を取ろうと投げた石が、狙った鳥に当たった後で別の鳥にも当たったんだ。それで、一石二鳥って言うんだよ。」

「へー・・・偶然って怖いね。」

そんな話をしながら夕食を終え、早々とお休みです。

「ここだ。ここにいるってギルドのねえちゃんが言ったぞ！」
「おおい、酒だ。．．それと此処にとんでもなく強い冒険者が居るって聞いて来たんだが？」

「冒険者なら4人組みが泊まつてるよ。明日発つらしく早々とお休みだよ。」

「うりゃ．．遅かったか。どうすりゃ強くなれるか聞きたかったんがなあ．．」

「おめえの頭じゃ、聞くだけ無駄じゃろ。」
「そうだそうだ、うるせいや．．っと酒が入った冒険者が騒いでいます。」

そんな喧騒など気にせずサンディ達は眠っています。

もつとも、リユーイだけは起きています。だって、睡眠不要に改造されていますからね。

（ねえ、姫さん。ここに俺がいる理由って何なんだ？．．その内、判るって言ってたけど、まるで判らないぞ！）

（うゝん．．説明するのが難しいので、もう少し待って！でも、凄く切実な問題なんだよ。こんな世界が幾つもあるのせいで滅びているの。今回は貴方が居るんで直接介入してるんだけど．．）

（それと、姫さんの部下達はとりあえず大人しいの？）

（今んとこはね．．でも、虎視眈々と出番を狙ってるわ。機関部の連中も何時の間にか小惑星に核パルスエンジン仕掛けたみたいだし．．主砲部隊もメガ粒子砲の出力を制御するために徹夜続きでシミュレーション繰り返ししてるし．．樂觀できない状態ってとこね）

（苦労してるね。将軍は大丈夫なの？）

（入院してる。頭痛に胃潰瘍に顎がはずれたみたいなの．．）

（たいへんだねえ．．）

こんな話をしながら長い夜を過ごしています。

次の日、朝早く宿を出ます。また、おばさんにお弁当を買って満足そうな顔をしています。

その足で、ギルドに行つて、町を出る手続きをしました。

「そう。行つちやうのね・・・残念ねえ。」

そんな事をお姉さんは言っていました、それはそちらの事情のことです。

町の門で門番さんにお別れを言つて、次の町に向かいます。

まだ、若草の月が始まったばかりです。遠くの山はまだ雪が沢山残っています。

朝日が昇るまでは大分時間が有ります。皆、マントの前を合わせて少しでも寒さを防ぎます。

街道を行く旅人はサンデイ達だけです。

街道を歩き出して、最初の休憩所に着くころにようやくお日様が昇りました。

水筒のお水を飲んでみると、沢山の馬車が通ります。

その内の何台かは、休憩所で一息入れるみたいです。

サンデイ達が座っているベンチみたいな岩の前にも1台の馬車が止まりました。

太ったおじさんが降りて来ました。

「やあ、お嬢さん達は旅人かい。こんな朝早くからご苦労さんだね。」

「のんびり歩くんて早く町を出たんです。おじさん達は商人なの？」

「そうだよ。村や町を回る行商さ。昨夜は野宿さ、宿代もバカにならないからね。」

そんな事を言いながら、広場のはずれのほうにコンロを降ろしてこれから朝食のようです。

サンディ達は商人と別れて、街道を歩き出しました。

次の休憩所は小川の近くにありました。

ここで、お弁当です。休憩所は、歩きの旅人に丁度良い間隔で設えてあるようです。

すると、次の休憩所で休むと、その先に町が見えるはずですよ。朝食を終えて街道を歩き出した途端、とんでもないものが眼に入りました。

橋が壊れています。

川下に歩いて橋を探そうと思ったんですが、丁度良い物を見つけました。

川岸に大きな立ち木があるんです。川幅は約10m程度。これなら、猿飛びで向こう岸に渡れます。

まず、サンディをお姫様抱っこしてピョンと立ち木の枝に飛び上がると向こう岸にヒョイって猿飛びします。

次に体重を重力制御で軽くして走り幅跳びみたいに一気に川を跳び越します。

そしたら次はライムの番です。同じ様にピョン、ヒョイって対岸に渡ります。ルミナは枝渡りの要領で同じ様に川を飛び越えました。
・・でも、行商のおじさんはどうするのでしょうかね。

街道を余所見しながら歩いていきます。

でも、一面畑であり、珍しいものはありません。遠くでお百姓さんが牛で畑を鋤いてるぐらいです。

てくてく歩くとまた休憩所です。遠くに次の町が見えてきました。ここで、しばらく休憩を取ると、また歩き出します。

今度は、町が見えるためなんとなく元気が出ます。

やっと町に着くと、前と同じように門番の人にギルドカードを見せて中に入ります。

とりあえずギルドに向いました。

ギルドで登録を済ませます。そして、街道の橋が壊れている事を報告します。

橋の修理はギルドの仕事です。依頼を出して誰かにやってもらうのです。

依頼板を見て、明日の仕事を探します。

「これなんか、どうだ。・・・護衛求む。銀貨20枚。サムズ市まで。食事は当方持ち。」

「いいわね。でも用心棒って？」

「金目の商品が多いと商人は護衛を雇うんだ。基本は馬車だから、歩かないで済むぞ。」

「ライムはそれにしたいな。1日歩くと、疲れちゃうんだもの・・・」

という訳で、カウンターのお姉さんに詳細を確認します。

明日の朝、さっき入った門と反対の門の所に集合ということでした。

商人は1人でなく、10台の馬車が連れ立った商隊ということでした。もちろん、護衛の4人は馬車に乗る事が可能だそうです。

早速宿屋に行き、後はゆっくりお休みです。

馬車の旅

次の日の朝早く、町の西側の門に出かけます。
今日からサムズ市まで移動する商隊の護衛を行うためです。
門の近くには大勢の人達が集まっています。

何人かで歩き出すもの、馬車を走らせるもの、様々な人たちがいました。

「あれじゃない!」

サンデイが沢山の馬車が集まった一角を指差しました。
ルミナがスタスタとそこに歩いていきました。

「私達は商隊の護衛をするために来たのだが、依頼元は貴方達でよいのか?」

「ああ、ここでもいいよ!」

恰幅のいいおばさんが馬車を降りてきました。

「お前さん、1人かい?」

「いいや、4人だ。」

ルミナはリユーイ達に手を振って合図します。

3人はルミナの所に駆け寄ると、おばさんに挨拶をしました。

「へへえ・・・女の子ばかりの冒険者かい。戦士が2、魔法使いが1、補助が1・・・仲間としては問題無しだねえ。」

「それでは、よろしく願いますよ。ドルコイ、サイネスちよつとおいで!」

おばさんは大声で名前を呼びました。

「なんだ。サミーネ。」

太ったおじさんとやせたおじさんがやってきました。

「サムズまで護衛をしてくれるお嬢さん達だ。」

サミーネと呼ばれたおばさんは、リユーイ達の紹介をしてくれました。

商隊は、3家族で編成されており、サミーネおばさんが取仕切つてるみたいです。

10台の馬車に夫婦、息子や娘達が分乗し、馬車を動かしているようです。

「それじゃあ、出発したいが・・・貴方達をどの馬車に乗せるかねえ・・・」

サミーネおばさんが迷っているようなので、ルミナが経験から割り振ります。

リユーイが先頭、ルミナが最後尾、サンディとライムは一緒に真ん中です。

先頭馬車はサミーネおばさんが手綱を取っています。御者台にリユーイは一緒に座りました。

高いところなので周りが良く見えます。

「みんな・・・出発するよ!!」

御者台に立ち上がり大声で後ろの馬車におばさんが叫びます。

そして、石畳の街道をゴトゴトと馬車は走り出しました。

街道を歩いている時は気になりませんでした。街道の道幅が所々広くなっています。

不思議そうに見ているリユーイに、あれは馬車がすれ違う場所だよって、おばさんが教えてくれました。

馬車は徒歩で歩く旅人の2倍程度の速度で進んでいるようです。

朝早く出発した徒歩の旅人を追い抜いて行きます。途中の休憩所も2つ素通りします。

そして、3つ目の休憩所で昼食になりました。

「こんな食事で申し訳ありません・・・」

ライムより少し年上の女の子がスープ鍋と硬いパンを持ってきてくれました。

「上等だよ。では、頂こうかな。」

ルミナはそう言って、バックの中からお椀を取り出すと、鍋からお玉でスープを掬います。

皆も同じようにスープを貰い、パンを頂きました。

「何も出ないといいね。」

「いや、その内なにかありそうだ。・・・銀貨20枚はこの種の依頼では破格なんだ。街道の情報を知って慌てて依頼したみたいだ。」

「何があるの?」

「そこまでは判らん・・・でも商人達の情報は確かだ。」

そんなことを話しながら昼食を食べています。

リユーイが休憩所の周りを見ると遠くに村が見えました。でも、この速度で進むと今日の宿泊場所は別の所になりそうです。

「さあ、出かけるよ!」

サミーネおばさんの声でまた馬車は街道を走り出しました。

街道をひたすら西に向います。さっき見た村に入りましたが、村の中央を走り抜けます。

次の休憩所も素通りです。そして村を出て2つ目の休憩所で馬車は止まりました。

休憩所の近くには泉があり、少しはなれています。林もあります。

「今日は、ここで野宿だよ。女の子は水を汲みな。男の子は焚き木を取って来な！」

サンデイ達は食事のお手伝いです。リユーイとルミナはリユーイ達より年下の男の子達と林に焚き木を取りに行きました。

リユーイ達が戻るころには野菜と干し肉のごった煮が出来上がっていました。

取って来た焚き木を焚き火の脇にどかっと置いて、夕食です。

その夜は、リユーイ達と3家族の旦那さん達が交代で見張りを行います。旦那さん達とリユーイが最初の番をして夜遅くにルミナ達と交替します。

基本、リユーイは眠らなくても問題ないので、ルミナ達と交替した後でも目を閉じて寝たふりをしてます。

「リユーイお姉ちゃんのお話が無いとつまんない・・・」

「そうだな・・・今後の為になると何時も聞いていたんだが・・・」

「でも、リユーイの話って、一度も聞いたことが無いのよ。一度ぐらい聞いた話が出てくるかなって思ってるんだけど・・・」

それはそうです。だって、リユーイのお話はこの世界のお話では有りません。でも、理解出来てるってことは不思議ですね。

そんな時です。

カサ・カサカサ・・・

何かが動く音がします。

リユーイは目を開けると素早く生体レーダで周囲を確認します。

目の前に展開された半透明のレーダ画面に黄色の点が近づいてくるのがわかります。

黄色は、まだこちらに敵意を持たない印です。

サンデイ姉妹は臨戦態勢ですが、ルミナはまだオニギリを持ってもいません。

「どうした？」

ルミナが杖を持ってキョロキョロと辺りを見ているサンディに声をかけました。

「何かいる！・・・でも何処なのかわかんない！！」

「大丈夫だ。敵意は感じられない・・・」

ルミナも判っているようです。攻撃を仕掛けられない限り、こちらから攻撃する必要は有りませんからね。

翌朝、野宿した周囲を確認すると、犬の足跡が見つかりました。

近くの村からでも夜になって逃げ出して来たのかも知れませんがね。

朝食をテキパキと取ってから出発です。昨日取って来た焚き木の残りは馬車の下にある網に乗せてあります。焚き木が取れない場所で夜を明かすための準備みたいです。

昨日と同じ様に、休憩所を飛ばしながら進みます。

そして、お昼は、途中の村で取りました。

4人の昼食代はサミーネおばさんが払いました。食事込みの護衛報酬の1つですからね。

昼食休憩を利用してギルドに行って情報収集です。

ナナイ村と同じ様に小さいながらも石造りのギルドです。

カウンターのお姉さんに、街道の情報を聞くと、この村と次の町の間で盗賊騒ぎがあったとか、もっと先では魔物が積荷を奪ったとか、・・・色々話を聞くことが出来ました。

いよいよ、護衛の本領を發揮せねばならないのかも知れませんがね。

そんな話を聞かされたので、帰る途中の武器屋で炸裂ボルトを5本購入しました。しめて銀貨1枚です。

リユーイ達が戻ったことを確認して、馬車は出発します。

「どうだったね？」

サミーネおばさんがリユーイに尋ねます。どうやらギルドに行つた事を知つてゐたいです。

「この先が怪しいみたいだ。出来るなら夜は町に泊まりたいが・

」

「やっぱりね。商人仲間も同じ様なことを言つてたよ。でも、この先はしばらく村が無いんだよ・・今夜も野宿だよ。」

サミーネおばさんは馬車を早めます。少しでも条件の良い休憩所を見つげるために。

メギドの火

小さな村で昼食をとった後は、馬車をひたすら走らせませす。街道のこの辺りは、林が迫っているので野宿するには少し物騒だからです。

馬車を駆るサミーネおばさんは、もう少し行くと山裾を離れ、広い丘陵地帯になると教えてくれました。

ガラガラアゝ

突然、後ろの方で大きな音がしました。

リユーイは御者台から身を乗り出すように後ろを見ると、馬車の1台が転倒して積荷を街道にばら撒いています。

「馬車が！」

「ドオーオ!!」

リユーイの声で、おばさんは馬車を急停止しました。

馬車の車輪を固定して、後ろの様子を2人で見に行きます。

「こりゃ、時間がかかるねえ・・・荷も多いし、他の馬車に分配する事も出来きゃしない。予備の車輪を積んでる馬車は誰だい？急いで修理するよ。」

リユーイは、周辺を急いで確認します。

今の所は、生体リーダーに反応はありません。

ルミナとサンデイ達も馬車を降りてきたので、3人に車列の前と後ろの見張りを頼みます。

馬車の修理はの2人のおじさんが後ろの方の馬車から車輪をこころと転がしながら持つてきました。

その間におばさんの指示で横転した馬車から荷物を奥さんと子供達が運び出します。

空荷になった馬車を、リユーイとおじさん達が一緒になって、エイ！って元に戻します。

最後はリユーイ1人で馬車を支えている隙に、おじさん達が車輪を取り付けました。

「あんたが、力持ちで助かったよ。」

おばさんから、お茶を受取ったリユーイは苦笑いで誤魔化します。

「荷を積んだら出発するけど、どうやら車軸にヒビが入ってるよ。うだ。あまり早くは進めないねえ。」

がっかりした様子でおばさんが、子供達の荷上げの様子を見てます。

「随分頑丈な梱包ですね。」

「判るかい。あれは、東方から船で運ばれてきた食器だよ。土で出来てるらしいんだけど、ガラスの光沢があるのさ。貴族達に飛ぶように売れるんだけど、壊れやすくてね。運ぶのに苦労するよ。」

多分、陶器か磁器なんだろうとリユーイは思いましたが、この世界にもあるんだ。って少し懐かしくなりました。

ルミナが後ろから走ってきました。

「だいぶ、馬車が連なったぞ。少し煩くなってきたが、まだ掛かりそうか？」

「いや、もう直ぐ終わりだよ。・・そうだね、この先の街道が広くなったところで先に行ってもらおうかね。悪いけど、後ろの奴らにそう言っとくれ。」

そんな事を言ってる内に荷上げは終わったようです。

「それじゃあ、出発するよー！」

サミーネおばさんの合図で車列はのろのろと街道を進み出しました。

少し、進むと街道が広くなったところにさしかかりました。

おばさんは馬車を道の端に寄せます。車列が全て道に寄ると、後の馬車が次々と追い越していきます。

だいぶ、後ろに馬車が居たいです。

すれ違う馬車は、大丈夫かい？・・気をつけてな！なんて声を掛けてくれます。

商人同士の連帯感というか思いやりというか・・でも、知らない人達が心配してくれるのは嬉しく思ったりしています。

後ろの馬車がなくなったことを、最後尾の馬車からルミナが手を振って知らせてくれました。

おばさんは馬車を出発させます。

村を出る時は馬車の速度も結構速かったのですが、今は歩くより少し早い程度です。

山裾に続く、森や林を真近に見ながらのろろと馬車は進んでいきます。

リユーイは生体レーダをずっと展開していますが、今の所反応はありません。

山裾を少し離れた所に休憩所がありました。

今日はここで野宿です。

近くの森がありますが、今のところ反応はありません。

でも、心配なので、男の子達が薪を取りに行く時には一緒についていきました。

その夜、サンディ達と交替してルミナと焚き火の番をしていると、生体レーダに反応がありました。

「・・・来たよ！」

「ああ・・凄い殺気だ。森からだな。」
「サンディ達を起してくれ。俺はおばさん達に連絡する。」

2人は手分けして皆を起します。

ドルコイとサイネスおじさんは小型の弓を持ってきました。おばさん達は鍋やフライパンです。

おばさん達は子供達を馬車から離れた藪の中に隠しました。

「相手は、森からやってくる。数は多い。盗賊か、魔物かはまだわからない。」
リユーイが状況を皆に説明します。

「方向が森なら、馬車を背にして戦えるわけね。」

「リユーイと私が街道で戦う。サンディ達は馬車の影から援護だ。サミーネさん達も援護してくれるとありがたい。」

テキパキとルミナが指示を出します。落ち着いて指示を出すところを見ると、安心出来るんですね。でも、赤い靴の本当のリーダーはリユーイなんですけど・・

焚き火に薪を沢山入れて少しでも周囲を明るくします。ドルコイさんが簡単な松明を何本か作っていました。

戦闘が始まったら、街道に投げて周りを照らし少しでもリユーイ達の戦闘が楽になるように考えてみたいのです。

街道に出たリユーイは鋼の杖を構えます。

「森の間際まで来てる！」

「ああ、盗賊じゃないな。・・魔物だ！」

ルミナがオニギリを肩を回すようにしながら抜いて構えました。

ギャアー!!!

手に棍棒や、小型の剣、斧等を持ったオークが、わらわらと森か

ら叫び声を上げて飛び出してきます。

「宝をねらってきたのか？厄介な奴らだ。．．リユーイ皆殺しにしる。こいつ等、人は食べるし、女は慰みものだ！」

最初のオークをシュパつとオニギリで切り裂きながらルミナが叫びます。

リユーイも鋼の杖を回転させながら次々とオークに、その杖を叩きつけていきます。

馬車の後ろから、松明が街道に2本、3本と投げ込まれました。

明るくなった街道に、オークが轟いています。

ズドオンつと音がして何匹かのオークが吹き飛ばされています。ルミナの魔法とサンデイの爆裂ボルトのようです。

馬車に近寄ったオークはドルコイさん達の弓矢によって倒されていきます。

「しかし、とんでもない数だな．．リユーイ何とかできないか？」

（姫さん．．姫さん。緊急事態発生！）

（状況は、判ってるわ。．．メガ粒子砲で森の森を攻撃します。後15秒後に攻撃可能！攻撃最終命令は貴方に任せます。）

（え！）

（艦首方向最終調整！．．メガ粒子砲、最低出力で発射シーケンス開始！．．目標GPSで最終補正！）

（ええ！！）

（メガ粒子砲発射後の環境測定用無人探査機射出！！）

（えええ！！！！）

一生懸命、オークと戦いながら事態の進捗に着いていけないようです。

（メガ粒子砲発射オールクリアー。リユーイ！合図よろしく！！）

はあくつと息を吐きます。一応、自分達の事を考えて準備してくれたみたいなんですけど・・・どんなことになるやら考えただけでも気が重くなります。

「皆良く聞け！・・・今までにない術を使う。森の間隙を攻撃するから、とりあえず何かにしがみ付け！！」

リユーイは大声で皆に注意します。

リユーイは急いで回りのオークを片付けました。次のオークがやってくるまでに少し間が開きます。

「天、私の願いを聞き地上の悪を滅ぼしたまえ！・・・【メギドの火！！】」

ドドオーン！！

その言葉と同時に、天空から眩い紅蓮の光が降り注ぎ、森の一角が爆発しました。

ドドオーン！！・・・ドドオーン！！・・・ドドオーン！！

さらに、光が何度も振り注ぎ周囲を爆発させます。

ルミナ達は咄嗟に馬車にしがみ付きましたが、激しく大地が蠢きます。

「何なのこれ・・・」

サンデイが泣き声を上げてます。

おばさん達は地べたに尻餅をついて馬車の車輪にしがみついています。くわばら、くわばらの状態です。

そんな中、リユーイは1人で動けずにいるオーク達を葬っています。

地面の振動が収まった時には、動く事が出来るオークはいません

でした。

リユーイは周りを見ながら生体レーダでも敵がないことを確認します。

完全にオークの群れを葬ったようです。

(残存放射能反応無し・・メガ粒子砲攻撃に伴う環境変化は認められず・・リユーイOKだよ!)

(ありがと・・・でも、次は穏便なやつでお願いしますね・・)

(考えとくわ。・・・さあ、皆!宴会だよ。将軍は寝てるから飲み放題ね!!)

なんか、遠くからオオー!っていう声も聞こえています。

「痛たた・・何時もながらとんでもない術を使うな・・味方で良かったよ。」

ルミナが馬車に肩でも打ちつけたのか痛そうに歩いてきます。

「お姉ちゃん・・こつちが死ぬかと思っただよ・・」

焚き火の方に歩いていくと、ライムがヨロヨロと馬車の下から這い出してきました。

皆、体のあちこちを押さえながら、イテテテ・・って言っています。どうやら、着弾と爆発の振動であちこちぶつけたみたいですね。

「イテテ・・いや、参ったよ。あんな魔法は始めて見るね。しかし、とんでもない威力だ。」

サミーネおばさんが腰を押さえながら言いました。

今は未だ見えてませんが、明るくなったら森の惨状を見てまた吃驚するんでしょうが、今はそんなことは誰も知りませんからライムが入れてくれたお茶を飲んで、とりあえず一息入れています。

サムズ市到着

次の朝です。

皆さん、眠りから覚めて・・・そういえば昨夜は・・・って周りを見た途端、吃驚してます。

だって、昨日の夕方には休憩所の近くまで迫っていた森が跡形もありません。

でっかい穴ぼこがあっちこっちに開いています。穴の周りにはオークの骸があちこちに散らばってます。5体満足なものはありません。そして少し煙が出てるところもあります。

「あれって、夢じゃなかったのね・・・」

サンデイが無表情な顔で言ってます。

「とんでもねえな・・・王宮魔道師でもここまでではしないぞ。確か【メギドの火】って言ってたな。どんな火なんだ？」

ルミナもブツブツ言ってます。

「まあ、とりあえずは良かったよ。あんたがいなけりゃ、今こうして吃驚してもらえないからね。」

反応は色々ですけど、とりあえずはOKみたいです。

みんなでオークの残骸を調べて換金材料を探しましたが、何も持たなかったみたいです。ちょっと残念でしたね。

馬車の調子も悪いのでぐずぐずしてるわけには行きません。みんなで朝食を食べて、次の村に出発です。

ゴトゴトと荷馬車は走ります。歩くより少し早い程度ですが、今の所車軸の方は大丈夫みたいです。

昼過ぎには、次の村に到着しました。

早速、荷馬車の修理です。上手い具合に作り置き的車軸がそのま

ま使えるみたいで、修理に時間は掛からないとのことでした。

とりあえず、リユーイ達は村のギルドにオーク討伐の報告に行きました。

「ええー！あのオークを全滅させたんですか？」

カウンターのお姉さんは信用してくれません。

「ああ、やつつけたぞ。ついでに地形も変ったけどな。」

「あのオーク達には報奨金が掛かってまして・・・」

「それは、要らない。他の依頼のついでにやったまでだ。ちなみに使った魔法は【メギドの火】だ。それ以外ではあのような惨状は起きない。森の一部を消しちまったから、報奨金で相殺だ。」

呆気を取られている内にギルドを後にしました。

馬車に着くとサミーネおばさんが馬車に弁当を配っています。

サンディ達も受けとって馬車に乗り込みます。

馬車に揺られながらお弁当を食べるのも気持ちがいいものです。

遠くの景色を眺めながらパクパク食べているとおばさんがお茶をポットから出してくれました。

「いやぁー女の子ばかりの冒険者だからどうなるか心配だったけど、やるもんだねえ。後、1泊野宿をするとサムズ市に着くよ。そしたら、お別れだけど、チームの名は何ていうんだい。次も頼みたいからねえ。」

「・・・赤い靴って言うんです。」

「女の子らしい名前だねえ。そういえば皆赤い靴を履いてるんだへへえ・・・」

おばさんは昨夜のオークを退治出来て機嫌がいいみたいです。

街道と都市について色々教えてくれました。

そして、リユーイ達が王都に行くことを知ると、カレミーという宿を尋ねるように言いました。

「私の紹介だと言うんだよ。それで泊めてくれるから。」
きつと知り合いの宿だろうと思ひ、解りました。と答えます。

山裾を遠く離れた休憩所が今晚の野宿場所です。

明日はサムズ市に到着します。そんなことを皆さん考えているよ
うで、ちよつとウキウキした雰囲気です。

でも、4人は昨晚のオーク襲来を思い出して、しつかり焚き火の
番をして夜を過ごしました。

次の日、朝早く馬車を走らせると、昼過ぎになって、遙か彼方に
大きな建物が見え出しました。

サムズ市にある教会の尖塔です。

夜は尖塔に明かりが灯り、遠くを通る旅人の目印になります。ち
よつと灯台みたいですね。

サムズ市に近づくにつれ高い城壁が見えてきました。サムズ市は
商業都市です。貴族は居りません。一番偉い人は市長でしかも商人
なんだそうです。

貴族がないので兵隊もおりません。しかし、高価な商品はある。
・・・ということが高い城壁に囲まれています。

夕方にはまだ早い時間にサムズ市の東門をくぐりました。

門をくぐったところで、門番による積荷の検査です。

やはり、違法な商品もあるらしく、馬車1台1台を入念に検査し
ます。

検査が終わると、サミーネおばさんが通行税を払います。積荷は
ここが終点なので税がかかりません。リユーイ達も冒険者の特権で
税免除です。

サミーネおばさんは税を払い終わるとリユーイ達の所に来ました。

「ご苦労だったね。オークの時はもうだめかと覚悟したんだが、いい酒のさかなさ。はい。これが報酬だよ。そっちが空いてる時はまた利用させて貰うよ。」

おばさんはそう言っただけでリユーイに銀貨20枚を渡しました。

サミーネおばさん達と別れると、リユーイ達はギルドに出かけます。

さすがに市だけあって、いろんなお店が通りに店を出しています。きつと明日はサンデイ達に連れられてショッピングになりそうです。十字路を2つほど過ぎると立派な石造りの2階建ての建物が見えてきました。ギルドの看板が扉の上にかかっています。

扉を開けて中に入ると、広いですがいつものギルドの風景です。

カウンターのお姉さんのところに行って登録を済ませると、依頼板のチェックです。

「西に行くような依頼は無いみたいね。」

「早々あるものじゃない。少しの間、このサムズで休息して、また旅に出よう。」

「ライムも歩けるよ。もう大丈夫だよ。」

3日程でしたが馬車の旅は結構楽でした。また歩くのかと嫌な気持ちもありましたが、目的地は王都です。まだ、半分も来てません。

「これなんか、面白そうだけど・・・」

「どれどれ・・・ジギタ草至急求む。20本以上必要。報酬は銀貨1枚。」

「率は良いけど、今時分生えてるのかな？」

「2、3日はサムズに居るんだし、気晴らしに出かけるのもいいかも。」

「でも、時期はずれだから依頼を受けないで出かけよう。」

ギルドを出て適当な宿を探します。

宿はギルドの目の前にありました。酒場と兼用の宿です。

2泊分の宿代を払うと、酒場の隅で食事を出してくれました。

「それでよ。森のオークが全滅した。ってことだ。」

「そんじゃ、あの森のあたりはもうあぶなくねえってことだな。」

カウンターでお酒を飲みながら男達が噂話をしています。

「しかし、どんな技なんだ。森が無くなるような魔法は聞いたことが無いぞ。」

「若い娘っ子の4人組みらしいぞ。ギルドの噂ではな。」

「ほう・・しかし、それは無いな。王国の宮廷魔道師あたりが出張ってきたんじゃないかと俺は思うぞ。」

「いや、ギルドの話だと、いやに具体的だったな。剣を背負った娘に、鋼の杖を持った娘だそうだ・・・丁度あの4人組みみたいに・・・!」

リユーイ達は食事を終えて、部屋にかえってお休みです。

とんとんと階段を上がっていきます。

「あいつ等か?」

「あいつらだ。しかし・・魔法使いには見えんな」

使ったのは魔法じゃないんですけど、この世界の人には魔法と映るんでしょうね。

今夜は、久しぶりのベッドとフトンで寝られます。野宿と違って安心して皆さんお休みです。

オバケ退治

トコトコと4人が森へ行く小道を歩いています。

ジギタ草は森の木の傍によく生えています。そんな訳で近くの森に行つて探す事にしました。

途中で木こりのおじさんと会いました。

「おめえら、何処へ行くんじやあ？」

「森に行つて薬草探すんだよ。」

ライムが元気に答えます。

「森にや、でっかいオバケが出るんじや。おめえら、氣をつけてなあ。」

「ハア、イ！」

木こりのおじさんと別れ、4人は森に入つていきました。

オバケつて、あれだよな・・・この世界にもいるんだろうか？なんてリユーイは考えてます。

「オバケつて何？」

リユーイは、ライムに聞いてみました。

「え〜とね。いろんな種類がいるけど・・・大ツきくて、口がこんなで・・・目がドローンとしてるんだよ。」

「????？」

どうやら、リユーイの考えてるオバケと根本的に違つてるようです。まるで怪物です・・・あつてるかも！です。

「オバケつて倒せるの？」

今度はルミナに聞いてみます。

「ああ、倒せるぞ！いいか、上から下にぶった切るんだ。いいな。」

此処まで来ると、サンデイにも聞いてみたくなりました。

「オバケってどこにいるの？」

「ん〜とね。いろんなところにいるけど、普段は木の上かな。」

絶対、お化けと違います。でも、今回はジギタ草を集めなければなりません。上手くいけばオバケに合えます。

森の木の根元付近をあっちこっち探し回ります。

でも、やはり季節が早いんでしょうか、なかなか見つかりません。

「もうちょっと、日当たりの良い方に行ってみる？」

サンデイの提案に皆で少し東に移動しました。

まだ遠くの山は雪が残っていますが、この辺りはぽかぽかと暖かです。

「あつた！・・・でも小さいよ。」

最初の1本はライムが見つけました。

確かに小さいですがギザギザの葉はジギタ草の特徴です。

辺りを探すと・・・あるわあるわ・・・あつと言つ間に20本以上が集まりました。

「この辺は暖かいのね。ナナイ村だと、新緑の月にならないと取れないんだけど・・・」

サンデイは感心しています。

「さて、昼も過ぎたことだし、引き上げるぞ！」

ルミナが号令をかけます。

皆、は〜い！って返事をしてますけど・・・

ガサガサって森の中を歩いていきます。西に真直ぐ歩けばさっきの小道に出るはずですからね。

ガサガサ・ガサって進んでる時です。

ピギャー!!ピギャー!!

「オバケだ・・」

ダダダァーって4人は逃げ出します。リユーイもオバケってどんなの?って思ってますけど、付き合って逃げ出します。

ピギャー!!ピギャー!!

段々と声が大きくなってきました。

「逃げ切れんか・・皆!殺るぞ!!」

ルミナはそう言うとおニギリを引き抜いて構えます。

サンディ達も覚悟を決めたようです。

リユーイは良く判らないけど、取り合えず鋼の杖を構えます。

ガサガサッと木立がざわめいたかと思ったら、木立の上の方から首がニューッと降りてきました。

ピギャー!!

ニワトリのでっかい頭ですが首が異様に長いです。

「ヤバイ!オバケの目が攻撃色だ。来るぞ!」

ルミナはそう言うなりおニギリをニワトリの頭に振り下ろしましたが、首がヒョイって曲がって当たりません。

オバケが首を回しながらサンディに迫りましたが、サンディは魔法の杖で、えい!って火炎弾を頭にぶつけます。

ポカン!ツて軽い炸裂音がしましたがオバケは気にした様子もあ

りません。

「ルミナ！弱点はないのか？」

「こいつは、キメラなんだ。鳥と蛇とトカゲを合成した生き物だ。とにかくしぶとい。先ず、頭を落として、それから胴だ。胴は木立の上の方にいるはずだ。」

リユーイは猿飛びで木立の上の方の枝まで飛び上がりました。

そこには、大きなトカゲが木々に足をかけています。首は蛇になって木立の下の方に伸びています。

「ドーツリヤ！」

鋼の杖をトカゲの背中に叩きつけましたがボヨンと跳ね返ってしまいました。

とんでもない弾力です。

（姫さん！聞こえる？）

（感度良好！！）

（あれ・・・使いたいんだけど・・・高いところでも大丈夫かな？）

（フンフン・・・確かに使い所だね。大丈夫よ。いい訓練になるでしょう。）

（それで、下に仲間がいるんだけど・・・）

（大丈夫よ。20m上空から出現。落下しながら長剣の一撃。しかる後に地上2mで回収。これでいいでしょ。）

（OK！）

（では、最終命令はそつちでお願い。・・・てめえら、出番だぞ！準備はいいな！！　オオオオ！！！！）

（だいじょうぶだよね・・・たぶん・・・）

「皆、一時避難少し離れろ！！」

【レギオン！！】

ドツカーン！と言うおとが響き渡ると、（ウラー！）というとき
の音が上空から響くとともに、抜刀したローマの戦士風の鎧を着た
集団で飛び出します。

戦士達は落下しながら、オバケの胴を作っているトカゲに、すれ
違いざまに剣を振り下ろします。

バシュ！バシュ！！と何かを切りつける音が立て続けに響きます。
血飛沫で、あたりを霧のようです。

戦士達はそのままの速度で落下するかと思いましたが、地上2m
ぐらいに発生した空間の歪みに消えて行きました。最後の1人がこ
ちらを振り向きピースサインを出してます。

ドダアーンつと木立の上からオバケが落下してきました。

リユーイは走り寄ってまだギャピーって鳴いているニワトリ頭に
鋼の杖をボガ！って叩きつけました。

オバケ殲滅です。

あつけに取られていた3人ですが、サンデイ達は1度見てるんで
すよね。

「なんだ。あれは？」

「お姉ちゃんの魔法だよ。【レギオン】って言うらしいけど・・・」

「リユーイは戦士を、1個中隊何時でも出せるのか？」

「いや・・・どうしようもない時は、出すけど・・・あまり出した
くないけど・・・」

「戦士だか、魔道師だか解らないが、王都ではあまり使用しない
ほうが良いぞ。王宮魔道師でさえ今の技は再現できん！」

なんだかんだ言いながら、オバケの換金部位を探します。ニワト
リ頭のトサカがそれです。ルミナがオニギリで切り離しました。

オバケを退治して少し進むと森の小道に辿りつきました。

少し疲れましたが、森の小道をサムズ市に向って歩きます。

トコトコと小道を辿り、サムズ市のギルドに行きました。
ギルドのお姉さんに交渉です。

「あのう・・・依頼があつたんですが、いまの季節では無理だと思つて依頼を受けなかつたんですけど・・・どうやら手に入れたんで持つてきました。報酬は頂けますか？」

「ああ・・・ジギタ草ね。でも難しかったでしょ。いいですよ・・・
ちゃんとありますね。はい。報酬の銀貨です。」
サンデイは銀貨を手に入れました。

次に左の換金所に行きます。

「あのう・・・これ、換金したいんですが・・・」

「どれ・・・!!こ、これはオバケ・・・」

「だめですか？」

「いや、だめじゃないが・・・お前達が倒したのか？・・・いや、倒さない限りこれは無理じゃな・・・ちよつと待て!!」

ドワーフのおじいさんは奥の事務所に下がりました。

やがて、エルフのおねえさんがやって来ました。サンデイが換金を依頼したトサカを見てます

「確かに、オバケのトサカですね。・・・これには討伐依頼も出ています。依頼報酬と換金で金貨2枚ですが、よろしいですね。」

はい!つてサンデイは返事をしました。ピカピカの金貨を2枚受け取ります。

またね!つてギルドのお姉さんに手を振つてギルドを後にすると、サムズ市内のウインド・シヨップینگです。

いろんなお店がありました。旅はまだまだ続きます。皆でお茶を飲んで、早めに宿に帰りました。

「それでよ。森のオバケが退治された。ってことだ。」

「そんじゃ、あの森のあたりはもうあぶなくねえってことだな。」

カウンターでお酒を飲みながら男達が噂話をしています。

「しかし、どんな技を使ったんだ。オバケを退治するってことは簡単じゃねえぞ！」

「若い娘っ子の4人組みらしいぞ。ギルドの噂ではな。」

リユイー達は食事を終えて、部屋にかえってお休みです。
とんとんと階段を上がっていきます。

「あいつ等か？」

「あいつ等だ。しかし・・・そんな風には見えんかな。」

不思議なメイドさん

次の日の朝、リユーイ達はギルドに向います。

護衛の依頼があれば馬車に乗れますし、無くても出発前にはギルドに連絡しなければなりません。

早速、受付のお姉さんに出発の手続きをしてもらいます。

「あのう・・・出発前にカードの更新をした方が良いと思うんですが。」

「そうだな・・・オバケも退治したし、ランクが上がってるかも知れんな。」

お姉さんの忠告にルミナは皆のカードを集めます。

お姉さんがドデンっとカウンターの下から出した水晶玉を順番に手に持ちます。

別の箱にそれぞれのカードを差し込むとカチャって音がしてカードの記載が変化します。

「ワ〜イ！黒の星4つだよ。」

「私も同じよ。強くなったものね。」

「銀の3つか・・・フム。悪くない。」

「・・・？」

「お姉ちゃん。どうしたの？」

ライムが硬直したリユーイを見て、聞きました。ついでにカードを覗き込みます。

「え！・・・色が違う・・・」

ライムの声に2人が駆け寄ってリユーイのカードを手に取りジッと見つめました。

「金のカードとも違うのか・・・でも、カードに金の縁取りははじめて見るぞ。」

「この白い宝石は？」

「あのですね。私も始めて見るんですが・・・どうやら実力は金だけど経験が銀って判定されてるみたいです。その白い宝石はオバケの討伐章ですね。」

「皆さんのカードにも着いてるはずなんですが・・・」

「あ！付いてる。でも、小さい・・・」

「段々大きくなりますよ。もっとオバケを退治すると。」

「そうなんだ。ってリユイにカードが戻ってきました。」

基本的には銀の星4つになるんですね。」

今度は、依頼板の所に行って、依頼書を皆で探します。

やっぱり、歩くより馬車がいいですからね。」

「あつた！」

「どれどれ・・護衛求む。王都まで。報酬銀貨10枚。但し、女性に限る！」

「報酬は妥当な額だ。でも、女性限定が気になるな。」

「行ってみれば解るでしょ。皆強いし、変なことにもならないと思っわ。」

サンディは依頼書を手にとって、受付のお姉さんの所に行きました。

「これをお願いします。」

「やっぱり、選んでくれたわね。女性限定であればあなた達ぐらいしかないから、そう書いたのよ。」

「では、これって・・・」

「あなた達への指名依頼ってこと。パーティの半分が黒では、はつきりと指名するわけにはいかなかったのよ。」

「しかし、指名依頼となれば報酬は破格のはずだ・・・」

「破格よ。書いてあるでしょ。銀貨10枚って。それは、1名に

付き10枚つてことよ」

そんな訳で、リユーイ達は依頼者の待つ西の門に向います。途中の武器屋でライムの炸裂ボルトを補給します。今回は、手持ち金も多いので10本買いました。

そして、小ぶりの長剣を2本買い込みました。ルミナがリユーイに剣の使い方を教えるのだそうです。

門の手前のお菓子屋さんでおやつを買い込み、カバンに詰め込みます。

リユーイは皆がお菓子を選んでる隙にパイプとタバコを買い込みました。素早く、腰のバックに収納します。ライムに見られたら、色々言われそうでしたから。

西門に着くと、小奇麗な馬車が3台並んでいます。その他に馬車はありませんし、旅人らしき人もおりません。

サンデイが馬車の傍に立っているお母さん位のご婦人に声をかけました。

「あのう・・・護衛を依頼されたのは、あなた方でしょうか？」

「あら、若い方々ですね。そうですよ。王都まで、お嬢様をお守りください。」

サンデイは成り行きを見ている3人に手を振って、オイデオイデをします。

とことこやってきた3人をおばさんはみてます。やがて、4人が揃ったところで、カードの確認を要求しました。

4人のカードを見るや、吃驚してます。

「サミーネが、「若いがとんでもない連中だ！」って言った訳が解ったわ。これなら安心できます。そーですね・・・前に2人。後ろに2人をお願いします。」

リユーイがライムと前の馬車に乗り、ルミナとサンディは後ろの馬車に乗り込みました。

皆が乗ると馬車は出発です。

西門をくぐり、石畳の街道をガラガラと音を立てて馬車は王都に向いました。

サムズ市から王都までは馬車で5日程度の旅になります。歩くと2週間ぐらい掛かるかもしれません。

王都の前にルーディック市がありますが、ルーディック市までは小さな集落が点在してるだけになります。

そんな訳で、4日間は野宿することになってしまいます。

「ワッ、凄くいいね。このクッション！」

ライムは感激してます。この前の馬車は荷馬車でしたが、この馬車は貴族が使うような乗用馬車です。車輪には貴重なバネが使われていますし、内装のソファもふんわかです。

リユーイはスポーツタイプの車を思い出したりしてます。道路の僅かなでこぼこをシートにゴツゴツ感じるのが似てるみたいです。

「あなた達は何処から来たの？」

リユーイ達の乗る先頭の馬車には先に2人が乗ってました。紺のワンピースを着て白いエプロン・メイドさんみたいです。

「ナナイ村からだよ。ずっと、東のほうにある山の村なんだ。」

ライムが答えました。メイドさん達はサンディより少し年上のようですがとても綺麗です。

「でも、あなた達は冒険者なんですよ。強いんだよね。」

もう1人のメイドさんが話しかけます。

「ライムは・・・ライムとサンディは普通だよ。リユーイお姉ちゃんもルミナお姉さんが強すぎるんだ。」

「こんなことが・・・」

ライムはメイドさん達に今までの武勇伝を話し始めました。
時々、メイドさん達がリユーイをチラッと見るので、リユーイは
少し赤くなっていたりします。

そんな話で時間が過ぎていきました。

「

ドオオ!!!」

御者の声と共に馬車が止まりました。

外を見ると休憩所についたようです。太陽も真上にありますから、
昼食を兼ねた休憩を取るみたいです。

リユーイは外に飛び降りると、ヨイショ! ってライムを馬車から
降ろしてあげます。

ライムはありがとって言ってサンデイの方に走っていきました。

「その杖をちよつと見せてくださいませんか?」

メイドさんの1人がそう言ったので、リユーイはどうぞ! って手
渡しました。ライムの話で興味を持ったみたいですね。

「ええー!!!・・・重いいー!」

メイドさんは片手で支えきれず両手でしっかりと握っています。

「結構、重いでしょ。でもお気に入りなんですよ。」

笑って受取るリユーイをメイドさんはジト目でみてます。

リユーイがサンデイ達と合流するのを見て、もう1人のメイドさ
んが近寄ってきます。

「どうだった?」

「とんでもない重さだ。確かに鋼の杖だ。あれを振るえるなら大
型の獣でも一撃だろう。」

「しかし、彼女の強さの根源は力ではない。」

「そうだ。【メギドの火】そして【レギオン】聴いたことも無い。
しかし、その威力は、凄まじい限りだ。森を瓦礫に変える等、だれ
が信じる。私も見るまでは信じられなかった。」

なんか2人で密談してます。

リユーイ達が待っているとメイドさんがお弁当とお茶を分けてくれました。

簡単にパンに野菜とハムをはさんだお弁当です。
ゆつくりと休憩を取って出発です。

馬車にリユーイ達が乗り込むと、さっきのメイドさん達と違う人が乗り込んできました。でも一応メイドさんみたいです。

がたがたと馬車が走ります。途中の集落で一度止まると、民家から薪を買い込みました。夜の焚き火様ですね。

今度のメイドさん達もライムの話に興味深く聞いてます。
そんな中、ふとライムは話をやめてリユーイを見ました。

「ねえ、お姉ちゃん。【レギオン】と【メギドの火】って何なの？魔法の効果は判るけど・・・言葉の意味がわかんない。」

2人のメイドさんはお互い頷きあいます。真相が聞けるかも知れませんがね。

「え〜とね。まず、【レギオン】は、昔の軍隊の単位だよ。千人ぐらいかな。大勢をさす言葉でもあるんだ。」

「へ〜え・・・だから一杯戦士が出てくるのね。」

「そして、【メギドの火】だけど・・・神様のお話で、神話って言うのがあるんだけど、その中にね、メギドっていう都市の話があるんだ。メギドはね。町中の人が悪い事しかなかったんだ。それに怒った神様が天から光りを落として、その都市は滅んでしまったんだ。」

「なるほどね。だからお空の上から光りが降ってきてドカーンってなるんだね」

「聞いたか？軍隊の編成単位と都市の名だ。」

「はい。でもそんな名前は聞いた事ありません。」

メイドさんは2人でコソコソ話してます。

馬車の外は一面の畑です。

農家の人たちが馬や牛を使って畑を耕しています。

街道はそんな中をずっと西に向って続いています。遠くに、休憩所が見えてきました。

太陽がだいぶ傾いてきましたので、今日は此处で野宿になるでしょう。

王女様はお転婆娘

休憩所で野宿する者はリユウイ達だけです。

馬車を降りると、メイドさん達がおばさんの指示の元で、テキパキと夕食の準備です。

リユウイ達も手伝おうとしましたが、焚き火の番を仰せつかって4人とも小さな焚き火を囲んでいます。

「すみません。これお願いします。」

メイドさんが鍋を持ってやってきました。

はいよ。っとルミナは鍋を受取ると慣れた手つきで棒を3本組み合わせて、紐で鍵のようになった薪を吊ると、その鍵に鍋を掛けます。

「あまり、煙を出すなよ。美味しいシチューはとろ火で長時間だ。」
リユウイは盛大に燃やそうとして薪を加えようとしたが、その一言で止めてしまいました。

後ろの方ではメイドさん達がおばさんの指示でテーブルセットを組み立てています。

どうやら馬車に折りたたんで収納しているみたいです。

そこに、別のメイドさんがやってきました。

「どうぞ、こちらにお座りください。」

さっきのテーブルに案内されました。テーブルには白いテーブルクロスが掛けられています。

4人はさっさと席に着きました。

「ここで、野宿だね。」

「まさか、野宿でテーブルに着くとは思わなかった・・・」

4人を見て、おばさんは馬車の扉を開けました。すると、そこから、軽そうな鎖帷子を着込んだ少女が降りてきました。少女は4人の対面に座ります。

「お嬢様。この者達が今回の警護を行います。紅い靴という少女達です。」

おばさんが少女に説明します。

「大儀である。護衛は要らぬと申したが、乳母様にはかなわぬ。・ギルドカードを見せて貰えぬか？」

何か、凄いお嬢様らしいですが、リユイーは首にかけたギルドカードを外すと少女の前に置きました。

少女はカードを手にして観察しています。

「フム。銀4つで金の縁取りは始めて見る。討伐章は2つ・・・」
少女はおばさんにカードを渡します。おばさんが丁寧にカードを返してくれました。

「私は王国の第2王女、エリーナだ。オバケ討伐を行うため王都からまいったのだが・・・貴方達に先を越されたようだ。」

「1人で十分と言ったのだが・・・親衛隊を着けて、自分まで着いて来るとは・・・過保護で困る。」

4人はしばらく、ポケーっとしてます。だって、王女様ですよ。偉い人です。そんな人が目の前にしかも、オバケ退治をしようなんて・・・なんてお転婆な！

開いた口が塞がらない状態ですが、いち早く回復したりリユイーが質問します。

「あの・・・王女様って言ったら、お城で舞踏会なんかで忙しいん

じゃないですか？」

「そんなことは無い。父も、お前の好きにしてよい。出来ればこれ以上城を壊すな。と言っておる」

(それって、じゃじゃ馬で、お転婆で始末におえないから、なるべく外にいる。ってことだよな・・・多分。)

(世の中って広いね。私も似たような事言われた事があるわ。)

(やはり・・・)

「しかし、幾ら武芸に秀でて、王女様がオバケ退治とは・・・」
「国民を苦しめる魔物を討伐するのは、上に立つ者の使命と考える。」

「確かに、そうだけど・・・ちょっと、違うような・・・」

「ところで、王女様のお年はお幾つですか？」

サンデイが復活しました。

「今年で16じゃ。そち達は？」

「ルミナが18、リユーイと私が16、ライムは12だよ。」

サンデイは紹介しながら答えました。

「ほ・・・同い年か・・・同い年の少女は皆私から逃げてゆく。話相手になつて貰えぬか？」

「いいですよ。」

サンデイは即答しました。

そんな話をしてる間にメイドさん達が料理を並べます。

シチューとサラダそれに柔らかなパンです。

食事が終わるとリユーイ達は焚き火の番です。

そこにおばさんがやってきました。

「黙っていて申し訳ありません。姫様は優しく、正直な方なのですが・・小さい時から女の子らしい遊びに全く興味を持たず、貴族の男の子達とチャンバラごっここの毎日・・気がつけばギルドカードで銀を持つほどの武芸を身につけれ・・」

「俺達は気にしてませんよ。上に立つ方が、優しくて正直なら何も問題ないじゃないですか。」

「それは、そうなんですが・・それを直ぐ実行なさると問題です。」

「何時飛び出すか判らないものですから、メイドに扮した近衛兵が直ぐに姫様に同行できるようにしてますけど・・」

「かく言う私も、銀2つです。」

4人は吃驚しました。だって、自分達がいなくても十分やっていける人達です。

でも、なんで自分達を雇ったんでしょうか？ちよつと判らなくなりました。

「姫様の同行者はだいたいいつもこの位の人数なんです。今回も何時もの通りオバケだ！つて姫様が飛び出しそうになった所を、慌てて馬車に押込めて出発しました。でも、オバケは皆さんに退治されていきました。そして、現場に行ってみると・・姫様は大変興味を持って、帰り道を貴方達と同行したいと言い出したんです。・・それに、この所、街道に出没する盗賊団が気になりました。・・100人を超す盗賊団では私達だけでは対処出来ません。ですから、護衛と言うのに偽りは無いんです。」

乳母様と王女が言っていました。・・苦労してるようです。育て方が少し不味かったみたいですね。

「大丈夫です、気にしてませんから。・・それに、同い年の女の子と同じように遊べないなんて・・お気の毒ですね。明日は、王女

様と一緒に馬車に乗せて頂けませんか。ライムのお話で少しは和むかと思っんですが・・・」

「それは、是非お願いします。」

おばさんはそう言うのと馬車の傍に行き、王女様と話をしているようです。

その後で、メイドさんを集合させました。何か指示しているようですがここでは良く聞こえません。

3人のメイドさんが焚き火の傍にやってきました。

「今夜は私達が番をしますから、寝てても大丈夫ですよ。」

メイドさんが不寝番をすと言ってますが、寝てもいられません。だって、依頼内容は護衛ですからね。

適当に交替しながら寝る事にしました。

でも、少しは楽が出来ると言う事で、ライムのお願いです。

「昔、昔、あるところに、1つの王国がありました。王様には1人の王女様がいましたが、王妃様はおりません。王女様が生まれた時死んでしまったのです・・・」

「ほう・・・小人を7人集めると王子様が来るんだな・・・ドワーフで代用できるかな？」

「・・・そんな王国があつたかしら？」

「おとぎ話だね、これ？・・・でも、聞いたこと無いよ？」

「やっぱり、王子様が来るんだね。ライムもそう思ったもの！感想はまちまちでしたが、ライムには好評だったようです。」

（姫さん！姫さん！）

（盗賊100人ってどうするんだよ。ばらばらに攻めてきたらどうしようもないよ。）

（船を利用すると広域攻撃になるし、海兵隊だと後で回収するの
が面倒だし・・・）

（大型怪物相手は準備万端なんだけど・・・盗賊相手じゃね・・・
！！）

（なにか、閃いたとか・・・）

（良く聞きなさい。先ず、ターボで加速状態にして、杖を回しな
がら自分も回転しなさい。次に重力場を制御して地上数センチを高
速で移動しながら敵に近づくと・・・触れる相手は全て杖に当たっ
てポーンと飛んでいく・・・いいアイデアでしょ。名付けて、【ダブ
ルサイクロン】これで行きましょう。）

（なんか、目が回りそう・・・）

（大丈夫！そんな柔な改造してないから。・・・じゃあ、頑張つて
ね。）

ちょっと不安でしたが、何とかかなりそうだと自分に言い聞かせま
した。

ダブルサイクロン

次の朝。

焚き火の番をしているメイドさんに、おはようを言っ、鋼の杖を使ってトレーニングです。

クルクルと回すとバトントアラーのように見えますね。

頭の中で、行進曲が流れると、一人でトアリングの始まりです。クルクル前で回し、腰に回すと上に投げ上げ、クルクルと落ちてくるのを左手でキャッチ。そしてまた前で回します。

パチパチと拍手があります。

え！って後ろを見ると、ルミナが長剣を持って立っています。

「まるで、踊ってるみたいだな。しかし、あの杖を……。まあいい。ほら！」

そう言っ、長剣を放ってきました。

パシ！と長剣を受取りました。

「構える！」

ルミナの一言で、思い出しました。剣の使い方を教えるって言うてました。

とりあえず、剣を抜き剣道の竹刀の構えを思い出して構えます。

切っ先を相手の喉笛に……。正眼の構えですね。

「ほお……。変わった構えだが、筋はいい。」

ルミナはさつと剣を抜くと……。えい！ってリユーイに鋭い突きを入れます。

リユーイはすかさず軸足を後ろに下げ、体を半身にします。

「なるほど・・・その構えは、防御用か・・・今度は攻撃してみる！」
リユーイは剣を上段に構えます。

そして、えい！って半歩踏み出しながら剣を振り下ろしました。
ルミナはトンって後ろに飛んで剣を避けます。

「ふむ・・・やはり、遅いというか・・・素人というか・・・」

「ちょっと、見てな！」

ルミナの剣舞が始まりました。

剣を片手で回し、両手でも回す。回しながら体を入替えると攻撃に隙がなくなります。

どの部分をとっても円を描いています。ですから、攻撃が止まる事はありません。

「やってみろ！」

リユーイはルミナの動きを再現します。全く同じ動きで・・・一度動きを見てますから、シュミレーションは数十回電脳世界で行っています。後は体で再現ですが、これは制御特性上、シュミレーションをモーションにただけですから問題はありません。

ルミナは吃驚しました。ルミナ自身がエルフ族の中で例外的な武道家であることを自覚してます。その動きを一度みただけで再現しているのです。

「いったいどんな才能なんだ・・・思わず首を傾げます。」

後は実戦ですが、ルミナもリユーイの強さは十分知っています。そして、以外と素人であることも。

真剣でのかけひきは経験をつませるしかないと思ったりしています。

リユーイは長剣をジッと見てます。刀と違って反りが有りません。そして両刃です。

これだと、居合いは無理かな？なんて暢気に考えてました。

「見ました？」

「見ました！」

「棒術も凄いですけど……ルミナ様のご教授で、ど素人があのような達人の動きに！」

「是非、我が部隊の指南役に……」

焚き火をしながらリユーイ達を見てたメイドさん達ですが……勘違いしてますよ！

リユーイ達が練習を終えて戻ってくると朝食です。

テキパキとメイドさん達が準備して、食事を終えるとサツサと片付けます。ほんとに、親衛隊なんでしょうか、ちよっと心配ですね。

馬車は王女様とサンデイ姉妹が一緒です。リユーイは先頭で、ルミナは最後の馬車に乗りました。

ガタガタと馬車は進みます。

王女様が今までの冒険を聞きたいという事なので、ライムがダイジェスト版でお話します。

「それで、銅竜が出てきて私達の攻撃がぜんぜん利かない時に、リユーイが光の剣でエイ！ヤア！！ってやると竜の首がバタンと落ちたのよ！」

「ほう……光の剣とは、我也見たことが無い。それほどの切味なのか？」

「うん。そしてあまりの切味で切った所からあまり血も出ないみたいなの。」

「一度見てみたいものだな……」

盛り上がってるみたいです。

馬車の中には小さいながらもテーブルがあり、そこにお菓子を載せて、皆でつまみながら話をしてます。

話の内容はちょっと物騒ですが、女の子同士のお話等ひさしぶりの風景に乳母のおばさんはニコニコしながら姫様を見てます。

日中は何事も無く過ぎ去り、夜は焚き火の周りでお休みです。メイドさん達が火の番をしてくれまから少し安心です。異常があれば直ぐに起してくれまからね

でも、その夜。月も無い深夜になって、リユーイの頭の中で警報が鳴り響きました。

慌てて、生体レーダを展開します。すると、街道にそって、東と西の2方向から赤い集団が少しずつ近づいてきます。

リユーイはマントを跳ね除けると、サンデイ達を起します。何事なの？ってこつちを見ていたメイドさん達にも、訳を話します。

直ぐに、メイドさんは走って全員を非常召集します。集まったメイドさん達を見てリユーイは吃驚しました。だって、10人が全て武装してます。

長剣が5人、弓が2人そして魔道師の杖を持っている3人です。乳母さんは大きなフライパンを持ってました。

そこに、王女様がやってきました。王女様も長剣です。何か、軍隊みたいだとリユーイは思ったりしてますが・・・親衛隊って軍隊ですよね。

「リユーイとやら・・・来るのか？」

王女様の確認です。

「はい。街道の前後から接近してきます。数は不明ですが、かなり多いものと・・・」

「ふむ・・・例の盗賊団と見てよからう。さて、作戦じゃが・・・」

「ちょっと、待ってください。・・・敵が馬車の北側で合流するみたいに動き始めてます。・・・街道にはもう、1人もおりません。」
「そうか。相手の殺気を辿り動きをそこまで読めるとは・・・いや、今は作戦であつたな。北側となると馬車を盾に出来る。剣を持つものは、馬車の前。魔道師は馬車の中。弓は馬車の上じゃ。敵の攻撃と同時に光球を打ち上げる。弓は炸裂弾を先ず使え。盗賊団を壊滅させる。解つたな！」

リユーイ達は直ぐに配置に着きます。後ろの馬車の上には、サンデイ姉妹が乗ってます。

王女様とメイドさん達が馬車の前で待機したのを見て、ライムが全員に【アクセル】の魔法を掛けます。身体加速呪文ですからかなり有利になります。

リユーイは少し前に出ると、【ターボ1】と呟きます。加速性能はアクセルを遥かに凌ぎます。次に、体の半重力制御です。少しずつマイナス重力を上昇させ、地上数センチで釣合をとります。少し前後に動いて制御の具合を確認します。

「ねえ・・・彼女、浮いてない？・・・なんか動いてるようにも見えるけど・・・」

「気のせいよー！」
何処にでも、見てる人はいるようですね。

リユーイは前方をジッと見てます。
視覚モード、パッシブ赤外線・・・いま、リユーイは世界を温度で見えています。

わらわらと集まって、少しずつ近づいて来るのが解ります。
リユーイが鋼の杖を手にして前方をジッと見ているのを、全員が見守ってます。

距離が100m程になったとき、リユーイは片手を上げました。そして、杖を構えます。

それを合図に魔道師達が光球を上空に何個も打ち出しました。馬車の周りが明るく照らし出されます。遠くの方も夕暮れ時位の明るさです。

「ウヲオー!!!」

その暗がりの中から盗賊団が一斉に飛び出してきました。

盗賊団に向って、ライム達が炸裂弾を発射します。魔道師さん達が火炎弾を続けざまに発射します。

ドガン!、ドガン!・・バァン!!

盗賊団の集団の中で盛んに爆発が発生しますが、そんなの関係ねえ!状態で突っ込んできました。

盗賊の先頭は、もうリユーイの目の前まで来てます。

リユーイは、手に持った鋼の杖を目にも留まらないほどの速さで回しはじめました。リユーイ自体もクルクルと廻りだします。

【ダブルサイクロン!】

リユーイが敵の襲撃の声に負けないように叫び声を上げます。

そして、独楽のように回りながら、敵の中に飛び込んで行きました。

バコン、バン・・バコン・・

リユーイの鋼の杖に接触して弾き飛ばされる音が薄暗い中に木霊します。

それでも、盗賊達の群れは怯みません。

ルミナは最初に接触した盗賊を大上段から袈裟懸けに切り伏せま

す。返す剣で更に1人を切り倒します。

乱戦にならない様に近づく盗賊を弓と魔法で牽制しますが、次々と盗賊は襲ってきます。

王女様とメイドさん達もルミナに負けずに盗賊達を切り伏せています。

乳母さんも、フライパン振り回して応戦しています。戦闘斧とフライパンでどっちが強いかというと、絶対に戦闘斧なんです。名人は筆を選ばないというか・・・フライパンでバコンって顔を打ち付けてます。ひよっとしたら、王女様のパーティで一番強いのかも知れませんね。

ブーンっとな音を立てて、リユーイが戻ってきました。

クルクル状態からピタッ止まって、鋼の杖を構えます。杖の先と後からポタポタと血が滴っています。

馬車の周囲を移動しながら、盗賊達に鋼の杖を打ち付けます。

段々と襲ってくる盗賊の数が少なくなったかと思っていると、突然逃走を始めました。

すると、なにやらズン・・・ズン・・・という規則正しい振動が近づいてきました。

全員??の状態ですが、リユーイの生体レーダには大きな赤い点が近づいてくるのが解りました。

鉄人登場

リユーイの生体レーダには北から近づく大きな赤い点が映ってます。

そして、ズン・・ズン・・からズシン・・ズシン・・と振動が大きくなりました。

なにか巨大なものが近づいてきます。

魔道師さん達が音がする方向に向かって光球を打ち出しました。

闇の中に映し出された物は・・

巨大な熊です。とんでもなく大きいです。リユーイ達の5倍以上の背丈があります。

ライムが射程ギリギリの状態も気にせず炸裂ボルトを発射しました。

ボン！って体に当たりましたが、全く気にならないようです。

サンディと魔道師さん達が火炎弾を連射します。

熊の大きな体のあちこちに炎がぶつかり炸裂しますが、さっきと同じで全く効果がありません。

リユーイが走って行き、すれ違いざまに熊の足に鋼の杖を叩きつけました。

上手く、弁慶の泣き所に当たったんですが・・効果無しです。

「こんなの、どうすんだよ！・・逃げるしかないのか？」

ルミナがそんな光景を見て呟きます。

「ほう・・合成獣か・・いったい何頭の熊を合成したのだ・・合成獣ならば制御している者が居るはず・・」

王女様は冷静に対処方法を考えてるみたいです。

(どうすんだよ・・・全く攻撃が利かないぞ。)

(今こそ、あれを使う時・・・呼んで！)

(呼んでって、誰を呼ぶんだよ。)

(呼んで！・・・鉄人を、呼んで！)

え！ってリユーイは考えました。鉄人・・・何か、やな予感がします。

でも・・・他に方法も思いつきません。

リユーイは思いつきり大声で叫びました。

「出るおー・・・鉄人！！」

これは不味い・・・誰もが思ったその時にリユーイの大声が聞こえます。

でも、誰がこんな所に来るのでしょうか・・・そんな皆の思いが重なった時です。

「ガウ・・・」

空の上から声がしました。皆で空を見上げます。

大熊も一緒に空を見上げてます。

すると、何か巨大なものが落ちてきました。

ズシン！と降り立ったものは・・・

頭を白い布で巻き、その顔は白地に赤の隈取です。筋肉質の体を黒い衣で覆い、足には不思議な2本歯の齒肝を履き、背中には何やら色んな武器を背負ってます。そして、腰の長い刀に手を添えると大熊に対峙しました。

リユーイは、頭を抱えました。

どう見ても、弁慶さんです。しかも、ロボットです。そして、大熊と同じ位大きいのです。

こんなデザインどっから仕入れてきたんでしょう。

弁慶さんがリユーイを見つけました。ガウって言ってます。どうやら攻撃命令を待ってるみたいです。

半ば焼けになってリユーイは叫びます。

「行け！・・・鉄人！！」

その言葉で弁慶さんは素早い動きで大熊に迫ります。すれ違いざまに、ガウ！と短い声をあげたかと思うと、ガシャン！！と大きな鏝鳴りが響きました。

静寂が辺りを覆います。

あまりの出来事が続けざまに起きたので誰も声も出ないみたいです。

突然、弁慶さんが片足で地面を蹴りつけます。

ドゴン！っと大きな音と共に地面が揺れます。

すると、大熊が斜めに2つに分かれて、バダン！っと振動を伴って斃れました。

弁慶さんはすれ違いざまに居合い抜きで大熊を両断したみたいです。

弁慶さんは首を回して大熊を確認すると、下駄の下からロケットの噴射炎を上げて上空に去って行きました。

ライムがまたね〜って手を振ってます。

リユーイは頭を振って気持ちを切替えます。

生体レーダには周囲に敵対反応はありません。とりあえず危機は去ったと言えます。

馬車の裏に回ってみると、皆さん焚き火の廻りで、メイドさんが入れたお茶を飲んで一息入れています。

リユーイが戻るとお茶のカップが渡されました。

「何処まで、そこが見えない奴だ。あの、「ダブル・サイクロン」ってやつだが、よく目を回さないな。」

ルミナの賞賛？に、鍛えてるからなんて答えています。

「それより、あの巨人だ。鉄人と言ったな。あれだけで1個大隊の戦力がある。是非とも召還魔法を教授願いたい。」

王女様が詰め寄りますが・・・あれの原理はリユーイにも想像がつきません。

「一子相伝の召還技なれば・・・お教え出来かねます。」
もっともらしく言い訳してたりします。

「でも、かつこいいですね。あの化粧・・・シビれますわ。」

「そうです。あの衣装・・・丈夫振りが際立ちますわ。」
どうも、感性がリユーイと異なるようです。

そんな事を焚き火の廻りで話していると何時しか東の空が白んできました。

明るくなつたのを見計らって出発の準備をします。準備に関わらない者達は総出で周囲の確認をします。

昨日の盗賊の討伐状況を確認するためです。

馬車の周囲に20人程度。リユーイがクルクル回って居た場所には数十人の盗賊が斃れていました。

とりあえず、そのままにしておき、最初の集落でギルドに言付けを頼むことにします。

そして、馬車が走り出します。

見渡す限りの畑の中に所々林があります。そこには数軒の集落があるはずです。

その日は何も起こらず、夜も何も起きません。

そんな日が2日続いた昼過ぎです。
遠くに巨大な都市が見え始めました。王都です。

ようやく辿り着いたという感じです。お婆ちゃんもこの王都のどこかで暮らしてはるはずですよ。

王都の東の門にこの街道は続いているとのことですよ。

「ところで、赤い靴は何処に宿を取るのだ？」

王女様がサンデイに聞きました。

「カレミーという宿に行ってみようかと思ってます。」

「カレミーか・・・どこかで聞いた名なんだが・・・」

「姫様。疾風様が利用してのお宿ですよ。」

「おお・・・そうであった。エリア殿の常宿であったな。」

「あのう・・・ひよつとして、今のお話は、疾風エリアのお話ですか？」

「そうじゃ。王都で10指に入る冒険者の疾風エリア殿だ。お前達知っておるのか？」

「ライムのお婆ちゃんだよ。」

「なんじゃと！」

そんな訳で、お婆ちゃんの話はライムが話し始めました。でも、詳細はサンデイが話します。

お婆ちゃんもエルフだけど人間と一緒にその子供の子供がサンデイ姉妹だと説明します。

「なるほど・・・確かにエルフの年齢は不詳じゃ。そうか、一緒に仕事をしたのか・・・」

しきりに、王女様は関心しています。

乳母のおばあさんも、常宿が分かればたまに城に招待して姫様のお相手に・・・そうすれば少しは城に落ち着くかもと考えてたりしま

す。

それに、疾風エリア殿の親族なら安心できます。なんていつても、あの人は・・・

夕暮れを迎えるころに、王都の東門につきました。

馬車の紋に気がついた守備兵は隊長を呼びに駆け出しました。

王都に入る列に、リユーイ達の乗った馬車も並びます。王都には大勢の旅人や馬車がやってくるため、門の番兵さんは大忙しです。

それに、番兵以外に守備隊が常駐してます。番兵が不審を感じたら後は守備隊の仕事です。

そんな中、列の脇を守備隊長が走り抜けます。

そして、リユーイ達の馬車に着くなり、兵を御者台に上げ、御者を交代させました。

馬車を列から外して、東門に向います。

隊長は王女の馬車を見つけると、扉の下の足場に足を乗せて中の王女に話しかけます。

「王様が心配しておいでです。この度のオバケには別の動きがあると賢者の予言もありました。早く王にお目通りを・・・」

「解つておる。・・・ところで、門をくぐったらこの者を、カレミに連れて行って欲しいのだが。」

「了解であります。」

足場から飛び降りると、前方にかけていきました。

「ここままで、よいじやろう。護衛ごころうであつた。」

王女様はそう言って、懐から2枚の金貨をサンディに渡しました。

「これでは、多すぎます。」

「よい。面白いものを見せて貰った謝礼じゃ。それとこれをやる。城の守衛に見せれば私のところに案内してくれる。また、話相手になってくれ。」

王女様からライムは指輪を貰いました。小さな花の絵がついたメ

ダルがついてます。

門をくぐると、大きな通りがずっと続いていきます。

なんか迷子になりそうです。

4人が馬車を降りると、隊長が待っていました。

「お嬢さん達は冒険者とお見受けする。先ず、ギルドに案内するのでワシの後についてまいね。ギルドの手続きが終了次第、カレミに案内する。」

親切な守備隊長にお世話になることにしました。

そつだ！お城に行こう

さすが王都のギルドです。

でっかいです。4階建ての石造建築物。大通りに面して石柱まで立ってます。凝った彫刻がいたるところにちりばめられて・・・日本でしたら世界遺産登録確定って感じの建物です。

入口の扉だつて、リュウイの背の2倍ほどあります。

そのまま中に入ると、基本的な配置は変わりませんが、奥のカウンターには綺麗なお姉さんが数人並んでいます。

その中の1人に皆のカードを渡して、王都のギルド登録は終了になります。

大通りに出て、隊長さんの後をカルガモみたいにトコトコついで行きます。

しばらく歩くと、路地がありました。路地を少し進んだ所で、隊長さんが止まりました。

「ここが、カレミーじゃ。」

そう言つて隊長さんが看板を指差します。

確かに、カレミーと書いてありますが・・・小さな宿屋です。

「では、これで失礼する。くれぐれも気をつけてな。」

去つていく隊長さんに、ありがとう！つて皆で手を振つてお別れします。

それでは、とカレミーの扉を開き、中に入ります。直ぐにカウンターがあつて、太ったおばさんがジロリつて此方を見てます。

「あのう・・・ここは、宿屋ですよ。泊めていただけないでしょうか？」

「ああ・・・宿屋だが、泊めるかどうかは別だね。見たところ冒険

者のようだが・・・もっと良い宿屋は他にもあるはずだよ。」

「それが・・・サミーネさんが王都へ行くならカレミーを尋ねると・・・」

「サミーネの紹介かい。・・・悪かったね。問題ない、泊めてあげるよ。4人なら丁度4人部屋があるよ。1部屋1晩、銀貨1枚。どうだね。」

「「お願いします!」」

「食事は左に3件目のアクネがいいよ。カレミーの客だと言えばサービスしてくれるはずさ。」

4人は部屋に荷物を置くと早速食事に出かけました。

そんなところに、エリアが帰って来ました。

「どうだい、何か解ったかい？」

「手がかり無し・・・洞窟の規模からかなりな合成獣だと思うんだが・・・何処にもいない。」

「冒険者が此処にも来たよ。サミーネの紹介さ。」

「そういえば、姫様が帰って来たようだ。明日にでも守備を確認せねば・・・」

「あのヤンチャ姫だね。今度は何を？」

「オバケ退治だそうだ。」

そう言っただけで部屋に帰って行きました。

リユーイ達はアクネで夕食を食べて宿に帰ります。

アクネの若い夫婦が2人で経営している小さな食堂です。奥さんはカレミーのおばさんの子供だとか・・・カレミーに泊まってるというと、食事の後に美味しいジュースが付けて来ました。

2階の4人部屋に戻ると今日はこれでお休みです。

さすが都会と言うか、人の多さに酔ったみたいで、今夜はライム

のおねだりもありません。
皆でお休みを言っと、ベッドに入りました。

ようやく空がしらみ始めた頃にリユーイは起き出して杖を振りま
す。

こうして振ることにより体になじませるのです。ブンブンと音を
立てて振り続けますが、流石に声を出さないためか苦情はありません
でした。

一頻り杖を振ると、今度は長剣を抜いて、舞うように素振りを続
けます。時折、ヒュンヒュンって風を切る音がしますが、この程度
ではやはり誰も気がつかないようです。

すっかり夜が明けて朝になるころにリユーイの練習は終了です。
皆まだ寝てるんだろな……って思いながら、部屋に戻ってベッ
ドに潜り込みました。

リユーイ達の隣の部屋の扉がガタンと開き、エルフの冒険者がす
っかり身繕いを済ませた姿で現れました。

スタスタと通路を歩き、階段をトントンと降りていきます。

「おや……でかけるのかい？」

「ああ……何か、殺気じみた気の高まりを感じてね……」

おばさんにそんな挨拶をして、宿を出て行きました。

リユーイ達が部屋を出たのはすっかり太陽が顔を出した後のこと
です。

王都の朝のざわめきで起きたというのがホントのところですかね。
皆でおばさんにはようを言っ、アクネに出かけます。

その後で、ギルドに向いました。

リユーイとしては、1日ぐらい王都の見学をしたかったので、

それは依頼を兼ねながら、と言つ意見に逆らえませんでした。

ギルドの依頼・・・王都での依頼ってどんなものなの？・・・みんなの興味は一緒のようです。

ギルドに着いて早速依頼板に向います。

「・・・あまり、変わり映えしないな・・・」

楽しみに覗き込んだ掲示板の依頼用紙にはそれほど変わった依頼はありませんでした。

でも、薬草採取なんて依頼は王都のまわりではちよつと無理なような気がします・・・

「でも、こんな依頼始めて見るよ！」

どれどれ・・・と、ライムが指差す依頼書を見ると・・・迷子のチャッピーを捜してください。礼金、銀貨1枚・・・って書いてあります。

「この依頼は危険だぞ！・・・だいたいチャッピーがどんなものか書いてない。とんだ化け物がチャッピーってことも有るわけだ・・・」なるほど、書いてありません。これを犬や猫と思つてはいけませんですね。

でも、それを指摘するルミナって・・・こんな依頼の経験を持つてるのでしょうか？

王女様から頂いた金貨も残っていますので、今日の所は様子見です。

依頼の内容はそんなに変わることはないという事がわかれば今日のところはお終いです。

「そう言えば、王女様から指輪を頂いたんだわ。」

サンディの言葉に、これだよ！ってライムが手を翳して見せます。中指に光ってますね。

皆でお城に向います。

お城の大きな尖塔がランドマークになってますので、解らなくなることはありません。

お城は王都の城壁の中に、更なる城壁で守られています。城壁の門番さんにライムは指輪を見せました。

門番さんが吃驚して、お城に走って行きました。

しばらくすると、メイドさんを1人連れてきます。

そのメイドさんは、馬車でいっしょだったメイドさんでした。

「お待ちしておりました。さあ、こちらにどうぞ！」

メイドさんが4人を案内して城に入ります。流石に、城の正面ではなく、城の雑用を行う者達が使用する扉からでした。

でも、城の中は天井が高く、綺麗な絨毯も床に敷かれています。

城内部の角々には金属製の全身鎧を着けた兵隊さんが見張ってます。メイドさんは城の中を自由に通行できるらしく、リユーイ達4人が停止を命じられることもありませんでした。

階段を2階に上がり、さらに3階に移動します。

少し通路を歩き、大きな扉の前で止まりました。

コンコンと扉を叩きます。

すると扉が中から開き、部屋のメイドさんが現れました。でも、この人も馬車で一緒だった人です。

「王女様がお待ちです。」

そう言っつて、4人を部屋の更に奥にある部屋に案内してくれました。

「よく来たな！」

王女様は、4人に長椅子を勧めます。

自分も、反対側の席に着くと、すかさずメイドさんがお茶とお菓
子を持って5人の前にそつと並べていきます。

「無事にギルドと宿に着く事が出来ました。」
サンデイがお礼を言います。

気にするなっつて王女様は言いましたが、ふと何か思い出したようです。

「言いにくい事ではあるが・・・お前達の事を親衛隊が城中に話してしまったようなのだ。女の子4人でオバケが倒せるわけではない。巨大熊もせいぜい小熊程度であったのでは？と懐疑的だな。」

「城に来た時に手合わせを願う騎士が多いのだが・・・2、3人相手にして貰うとありがたい・・・」

げ！・・・小さな声でリユイーが嘆いてます。

「お姉ちゃん・・・受けて立つよね！」

ライムに言われては、後にも引けません。しぶしぶながら受けることにしました。

準備は任せておけつて王女様が言ってます。

メイドさんの1人がササーっと部屋を出て行きました。きっと準備の連絡ですね。

何でこんな事に・・・リユイーは少し後悔してます。

闘技場のオバケ

メイドさんが入れてくれた紅茶を皆が飲んでます。

しばらく時が経った時、そろそろかな．．．って王女様が席を立ちます。

こっちだ！って声に4人は王女様の後をトコトコと着いて行きました。

2階に下りて、1階に下りると通路を奥に歩いて行きます。どうやら城の中庭のようです。

「ここだ！」

王女様が扉を開きます。

そこには、30m程の円形の闘技場と数千の人が入ることが出来る観客席がありました。

「リユーイ様はこちらに．．．」

メイドさんがリユーイを闘技場に案内してくれます。

「お前達は私と一緒にだ．．．」

サンデイ達は王女様とロイヤルシートに座ります。

「おお．．そちらが例の娘達だな。ワシはこの国の王じゃが．．

気にせんでよい。娘の友になってくれて嬉しい限りじゃ！」

気さくな王様ですね。近所のおじさんみたいです。

サンデイは改めて廻りを見渡しました。

どう見ても2千人以上います。ひよつとしたら城の中の全部の人？って感じです。

王女様が立ち上がりました。

「皆のもの、よく聞け！．．ただ今より、王国第1軍の、部隊長

ガルト対赤い靴のメンバー、オバケ殺しのリユーイが戦う。」

リユーイは、ギョギョツとしました。

だって、ある意味お祭りイベントだと思っていたからです。当然勝たせてくれるものと思ってました。

対戦相手もこっち向いておいでおいでをしています。とても強そうです。

メイドさんは隊長から5m程の所にリユーイを立たせると、ササーっと帰って行きました。

相手の隊長さんは金属鎧に兜被っています。身長程の抜き身の長剣を脇に突き刺していましたが、リユーイを見て、その長剣を片手で掴みました。

リユーイも鋼の杖の金具を固定していた布を解きました。杖の先の木のカバーも外します。

「一本勝負！・・・悔いを残すな！！・・・始め！！！」

王女様の声で試合が始まりました。

王女様の声が終わらない内に隊長は脇に刺した長剣を掴み、一気にリユーイを頭上から両断しようと襲い掛かってきました。

【ターボー！】

すかさず、加速して体をひねり斬撃を避けると、ヒュンヒュンと鋼の杖を回して相手目掛けて振り下ろします。

でも、隊長も身体加速を使えるようです。剣で受け止めず、リユーイと同じ様に打撃を避けました。

「ほ・・・リユーイ殿も加速が使えるのか。しかし、隊長はさら

に加速できるぞ。」

「分身できるということか？」

「滅多にはやらないが・・・最後の手段というやつだ。」

王女さまとルミナが闘技場の2人から目を離さずに会話しています。

「やるな・・・しかし、これは防げまい。」

隊長の体がぶれて行きます。ぶれながらニユーッと両側に伸びて2人に分身しました。

でも、体がたまにぶれて見えます。

片方の隊長は長剣を大上段に、もう片方は斜め下に構えました。

「【ターボ2！】分身！！」

リユーイの体からリユーイがもう1人歩き出して2人になりました。さらに、2人のリユーイから別のリユーイが歩きだします。

体のぶれもありません。1人のリユーイが4人に分身したのです。

4人のリユーイは各自ばらばらの構えを取ります。杖を回すもの、斜めに構えるもの、自然体で構えるもの・・・

「リユーイ殿も分身出来るのか？しかも、4人だと・・・」

「ああ・・・以前1度見たことはある。あの時は渡り狼の群れを全滅させた。」

リユーイ達は簡単に2人に分離した隊長の剣を弾き飛ばしました。2人掛かりですからね。ちよつと卑怯ですけど、これも実力です。隊長はブレタ体をビニョーンとくっ付けると元の1人になりました。

リユーイも、2人づつ歩み寄って2人になり、また歩み寄って1人になりました。

「大変です・・・ガルト様が怪我をして倉庫から出てきた所を保護されました。」

メイドさんの1人が息せき切って王女さまに報告します。

「隊長は・・・ほれ。あそこに居るじやろうが・・・」

王様が、ハアハア・・・言ってるメイドさんに指差した時です。

隊長の体が膨れたかと思うと、金属鎧を内側から破って毛むくじやらの怪物が現れました。

頭は、鰐。体はゴリラ。背中には蝙蝠の羽が生えてます。尻尾は頭と同じ鰐のようです。

「オバケか・・・誰が城の中に！」

見るからに醜悪な姿に、王女様は思わず顔をそむけました。

「皆を安全な場所に！」

王女さまの命令でメイドさん達が一斉に観客の避難誘導を開始しました。

たちまち闘技場はリユーイとオバケ・・・と隠れてみてる王女様達+サンデー達だけになりました。

リユーイは周囲を見渡しました。だれも居ません。隠れてますけど・・・

左手で腰のバックから小さな懐中電灯モドキを取り出します。

そして、上部のスイッチを指先でひねると・・・ジョワア！！ってプラズマで生成されたソードになりました。

「あれが・・・光の剣・・・綺麗だ！」

「私では光りもしない・・・どうやら持ち主を選ぶ剣みたいだぞ！」
ルミナは残念そうに言いました。王女様も残念そうです。

オバケはガオオー！！と叫びながら闘技場の足元に拳を叩き付けました。そして、その拳を上げると、その拳には大きな棍棒が握られていました。

そして、リユーイに向ってその棍棒を大きく振り上げると、ビューンと叩きつけました。

ヒョイってリユーイはそれを避けます。

リユーイは、プラズマソードを逆手に持つとシュタッと飛び上がります。そして、高速でオバケを切り刻みました。

パタ！つと闘技場に降り立ちます。

プラズマソードのスイツチを切って、元の懐中電灯モドキにする腰のバツクに戻しました。

スタスタと歩いて鋼の杖を拾います。

オバケの所まであるいて、杖でドン！って殴りつけると・・・ドタドタドタ・・・とオバケがばらばらになって崩れ落ちました。

「見事！」

王女様が顔を出すと拍手しました。サンデイ達も、メイドさん達も、王様も・・・どっかから現れました。皆、隠れながら見てたようです。

ぱちぱち・・・と拍手の中をメイドさんに案内されて闘技場を出ます。

「イヤー・・・見事であった。しかし、オバケがあのような醜悪なものであるとは思わなんだ。」

王女様の部屋に行くと王女様はご機嫌です。

「父がこれを取らせるようにと・・・」

王女様は銀のサークレットを取り出しました。

「何でも、邪神を退ける力があるとか何とか言っておったが、リユーイ殿にはどうでも良いだろう。」

「ありがたく頂戴します。
被ると少しカツコ良くみえます。ちゃんとメイドさんが鏡で見せてくれました。」

「また遊びに来るねーって、お城からかえることにしました。
何時の間にか夕暮れみたいです。とりあえず食事をして帰ることにしました。」

カレミーの宿に、ドタドタとエリアが帰って来ました。

「おや？・・・どうしたんだね。イヤに慌ててるね。」

「城にオバケが出た！・・・退治したみたいだが、誰が退治したか不明だ。」

「急いで着替えるとまた出かけるみたいです。」

「あんたも、大変だねえ。」

ドタドタドタ・・・と走り去る姿を見ておばさんは呟きました。

「「ただいま！」」ってリユーイ達が帰って来ました。」

「お帰り！・・・いい仕事は見つかったかい？」

「無かった・・・また明日探すの！」
ライムが答えています。」

まあ、サミーネの紹介だし、それなりの腕はあるわけだ。ギルドの仕事も良し悪しが有るって言うし、無理に仕事を見つける必要はないわね。

2階の部屋に帰っていく4人を見て思ったりしています。

「そういえば・・・あの子のつけてたサークレットは見たことが無かったけど・・・途中で買ったのかしらね？」

森の泉の猪退治

今日も、朝早くからリユーイの稽古が始まりました。

一頻り、杖と長剣を振り回した所へライムが顔を出しました。

「お姉ちゃん。出かけるよ！」

え！って感じで驚いてますけど、・・・ああ！そう言えば、と思いつ出したみたいです。

ゆっくりしてたから良い依頼が無かったのかも知れない・・・だったら朝早く出かければ、という訳です。

4人は、朝早すぎて人通りも少ない大通りを歩いてギルドに向いました。

こんな朝早くでも、ギルドの大きな扉は開いています。ひよっとしたら閉じる事が無いのかも知れません。

4人が入ると「おはようございます！」ってお姉さん達が挨拶してくれました。

当然、4人並んでお辞儀をして、ご挨拶です。礼儀知らずって言われたくありませんからね。

依頼板の所に行ってみると、こんな早くでも先客がいました。まだ為り立ての男の子達です。

一生懸命採取依頼を探してるようです。

ライムが「おはよう」って声をかけると、「なんだよう・・・ちっちゃい子はおっちに行つてな！」って言ってますけど、この位の男の子は生意気盛りですからね。

ライムは膨れてますけど、ルミナは微笑んでいます。

皆で依頼板を調べます。やはり、良いのは無い様です。

「此れなんかどうかしら？」

「どれどれ・・・猪討伐。北の森にある泉付近で猪の目撃情報あり。至急討伐されたし。報酬：銀貨3枚・・・」

「少し報酬が高いが、至急ならば納得だ・・・採取依頼をするための討伐であれば皆の為にもなる」

ルミナは納得したようです。

ルミナが納得すれば問題ない、とこれを受けるために依頼書を外して、カウンターのお姉さんに渡します。

依頼Tmと討伐の証明を確認して出発です。

一旦宿に戻って、アクネで朝食を取って出発しました。

大通りを北に進むと城門があります。門番の兵隊さんに北の森の場所を聞くと、この道を真直ぐと言う事です。

「頑張つて来いよ！」って兵隊さんに元気付けられトコトコと北の街道を進みます。

途中でお茶を飲みながら休憩していると、畑に出かける農家の荷馬車が通りました。

挨拶すると途中まで乗せてくれるそうです。

「ヤッター！」ってライムは喜んでいます。

農家のおじさんに泉の場所を聞くと、この街道を森に進めば看板が出ているので判るそうです。

森がもう目の前まで来た所で、荷馬車を降りると、おじさんにお礼を言つて森に入ります。

森の木々の若葉はまだ少ししか出ていません。そんなわけで森の中は明るく遠くまで見通せません。

しばらく進むと、看板を見つけました。

「森の泉この先」と書いてあります。そして、看板の示す方向に小道がのびています。

4人は矢印の方向に歩き出します。

森の中をジグザグに小道は続いていました。

前方が少し開いてきました。森の泉に近づいたようです。

突然、前方がガサガサと音を立てたかと思うと、「出たー!!」
って男の子達が此方に走ってきます。

4人の脇を男の子達は猛スピードで通り過ぎました。

「何だろ?」って4人は思ったりしてますが、とりあえず臨戦態勢です。だって、猪の討伐に来たんですから、「出たー!」が猪である可能性は高いのです。

恐る恐る4人は小道を進んでいきます。

突然に森が開かれて広場みたいな場所に出ました。

中央に泉が湧き出して、森の中に小さな小川を作っています。

そして、依頼の物は・・・いました。泉を挟んだ奥に3匹います。大きさは、リユーイが退治した大猪の半分位ですが、それでも十分大きいです。

リユーイが左廻り、ルミナが右回り、サンディとライムが此処でポルトと魔法で退治することにしました。

「いくよ!」

一声かけてリユーイとルミナが走り出します。ライムは中央の猪にポルトを発射しました。

ズデン!と中央の猪が倒れました。

「やああー!」ってリユーイが鋼の杖で猪に打ちかかりました。

ボギ！つて嫌な音を立てて左の猪が倒れます。

「ソレ！」

ルミナがオニギリを振るうと、ズバ！つと猪の頭が落ちます。あつという間に3匹の猪を退治することが出来ました。

「以外と簡単だったよね。」

サンデイが皆にそういった時です。

突然、リユーイが杖を振り上げたかと思うと、サンデイ目掛けて投げつけました。

ビューン！・・・ドス！！・・・ドサツ！

鋼の杖は、サンデイの顔の直ぐ傍を通りすぎて後ろの何かに突き刺さったようです。

サンデイはギギイーつと音を立てるように首を回してみると、大きな猪に鋼の杖が突き刺さっています。

「ご免！・・・とつさだったんで声を出す暇も無かったんだ」

リユーイは取り合えず謝ります。

サンデイはハアハア・・・言いながら今更ながらにショックを受けていますが、リユーイに悪気が無い事は判っています。背中をバシッ！つと叩いただけで許してあげました。

大猪から杖を抜くと、倒した猪の牙を集めます。これが、討伐証明になるからです。

でも、猪の肉はどうしたかというと、内臓を抜いて大まかな血抜きをした後で、立ち木を2本切り取り簡単な櫓を作りました。

櫓に猪を4頭乗せると、リユーイが櫓を引きます。

森の小道はガサガサと藪が引つ掛かって大変でしたが、街道に出

るとそれなりに楽になります。

ずるずると街道を引きずっていくと、朝方リユーイ達を乗せてくれた農家のおじさんに会いました。

丁度、作業が終わって帰るところみたいです。

サンデイが交渉して、猪1頭で王都まで乗せて貰える事になりました。

「しかし、こんなに貰っていいのかな？ワシの家だけでは食いきれんぞ。」

「良いんですよ。まだこんなにありますから。ところで、王都の肉屋さんを知っていたら紹介してください。」

「ああ、いいとも。このまま乗っけていくぞ。」

ガラガラと進む荷馬車はラクチンです。

夕暮れ前に王都の北門に着きました。

門番の兵隊さんは今朝挨拶した人です。「おお！大漁だな。」つて言いながら通してくれましたので、猪を1頭進呈することになりました。

「いいのか？こんなにもらって・・・」

兵隊さんは喜んでました。今夜は門番仲間で猪鍋かもしれませぬ。

「ここが、行き着けの肉屋だが・・・オオイ！客だぞー！！」

農家のおじさんは、そう言いながらお店に向って怒鳴ります。

「聞こえてるよ・・・何だ此れは？」

「この子達が売ってくれるって言っただが・・・お前さん、買うかね？」

「此れだけの猪をこの季節で・・・買っぞ！銀貨4枚だ。」

「銀貨3枚でいいです。その代わり、この部分を下さい。」

「ああ・・・いいとも。待っとなれ！」

肉屋さんはたちまち皮を剥いでサンディの望んだ部位を切り分けてくれました。

「また、肉が取れたら家において、何時でも買い取るからな。」

肉屋さんを出て、ギルドに向います。

「泉の猪退治を受けた、赤い靴です。討伐しました。これが討伐証明です。」

カウンターの上に猪の牙をバラバラとカバンから取り出しました。お姉さんは牙を1個1個丁寧に確認しています。

「はい。猪の牙4頭分。確かに受取りました。これが報酬です。」
お姉さんは、牙をトレイに入れると、カウンターの下から銀貨を3枚出してサンディに渡します。

次に向うのは、アクネ食堂です。

「これで、美味しい料理をお願いします。残りは使ってください。」

サンディがリユイの担いできた猪の腿肉を渡して言いました。
出てきた料理は、野趣溢れた猪肉の香草焼きです。とても美味しく頂ました。

代金を払おうとしたんですが、受取りません。残りの肉で十分だということですよ。

「ご馳走様って言うと宿に戻ります。」

カレミーのおばさんに金貨を渡すと、しばらく此処に泊まりますと言って、2階に上がります。

今日は良い稼ぎをしたということかい……っておばさんは納得しています。

その夜遅くにエリアが宿に戻りました。

「おや？遅いね。晩飯はすんだのかい？」

「アクネで猪のシチューを頂いた。猪討伐をした者がいるらしい。門番達も貰いものだと言って猪1頭丸ごと焼いていたし、肉屋にも少し出回っているようだ。でも、アクネは冒険者から貰ったといっていたが・・・」

「確かにこの季節の猪は珍しいね。」

エリアは自室に帰っていきます。おばさんは明日にでも娘の所で、ご相伴にあずかろうなんて考えてました。

オバケってなに？

エリアはギルドの2階にあるラウンジでお茶を飲んでいました。でも、カップの中身はあまり減っていません。この所の出来事を考えてるみたいです。

（王女様は、オバケ退治だ！って出て行ったんだけど・・・オバケは退治された後だったって言ってたのよね・・・）

（そして城に出たオバケも王女様の友人が退治したって言ってたわね・・・）

（そして、昨日はこの季節珍しい大猪を退治した冒険者がいたと門番が言ってたわ・・・）

（凄腕の冒険者が居るってこと・・・その冒険者がどうやら女の子のパーティらしいってことまでは分かったけど・・・）

（こういう時に限って個人情報の開示は出来ません・・・って、私もギルドの関係者じゃないの！）

考えてる内に段々ヒートアップしてきたようです。

すっかり冷えたお茶をガブって飲んで階段を降りていきます。

カウンターのお姉さんの、王都登録冒険者リストをサツと取り上げ、パーティの欄をササーッと読んでいきます。

「だめですよ・・・返してください・・・」ってお姉さんが言ってますが、ギロ！って睨んで黙らせませす。

「・・・んん！・・・これは、サンディ達か！」

エリアの頭で素早く、映像が再現されます。

エリアが片手剣を振るより速く飛び込んで鋼の杖を振るって灰色熊を倒したのは・・・リユイーです。

「ホイ！・・・返すよ」

エリアはリストをお姉さんに返します。

そして、ギルドを出て行きました。

「全く・・・来たなら、来たで挨拶ぐらいしに来ればいいのに・・・」
ブツブツ言いながら王都の人ごみに紛れていきました。

一方そのころ、お城の王女様は・・・

メイドさん達と倉庫の探索です。隊長さんが大怪我をして倉庫から出てきたという情報を元に、倉庫を調べているんですが・・・かんばしくありません。

居るのは、鼠ぐらいです。メイドさん達がキヤーキヤー言いながら退治してますけど・・・

倉庫の一角から扉まで何かを引きずった後がありました。これは隊長が傷つきながら這い出した跡だと考えられます。

でも、最初に隊長を此処に連れてきた者達の足跡らしきものは何処にもありません。

「やはり、何も残っておらぬか・・・この件も迷宮入り、王宮7不思議が1つ増えてしもつた。」

「彼女達を呼びましょうか？」

「・・・そうだな。退治した者の意見も聞くべきだろう・・・」

リユイ達は、王都の町並みを見物してました。

ナナイ村と違って、お店がみんな大きくて品揃えも豊富です。

広場には屋台も出てます。皆でベンチに座り、串焼きを食べながらジュースを飲んでます。行儀が少し悪いですね。

さて、次は貴族館でも見ようかな！って立ち上がった時でした。リユイの小さなサークレットがブルブルと震えます。

「ちょっと待って！・・・なんかサークレットが震えるんだけど、これって何だろう？」

「それって、王様から頂いたのよね。・・・おいで！ってことかしら？」

「多分、そんなことだろう。」

「行ってみようよ。・・・あそこのお菓子・・・美味しいんだよ。」

お城の門の所に行くと、メイドさんが待っていました。

直ぐに3階の王女様の部屋に案内されます。

「待っておったぞ。・・・まあ、かけたまえ。」

メイドさんがどうぞ！って椅子を引いてくれます。

高そうなテーブルセットで美味しいお菓子を食べながら、王女様のお話を聞くことになりました。

一昨日のオバケ騒ぎですが、入れ替わられた隊長さんは、誰に襲われたか解らないとのこと。何故か気がいたら大怪我をして倉庫の隅に居たと言ってるそうです。

また、隊長さんの部下は、闘技場までずっと傍にいたと言っており・・・そうすると、隊長さんは何時オバケと替わったのでしょうか。確かに謎ですね。

「謎はまだあるぞ。退治したオバケは消えてしもうた。何も残さずにな。お前達と出会った場所でのオバケも同じだ。やはり、時間とともに消えておる。」

「面白い話をしてるじゃない！」

突然、窓際から声がしました。

皆が窓を一斉に見ますと、エルフのお姉さんが立っています。

「エリア殿か・・・」

「お婆ちゃんだ！」

王女様とライムが？と互いを見つめます。

「ライム！お久しぶり。来てるなら、来てるって連絡すればいいのに・・・。」

「エリア殿の知り合いなのか？」

「サンディ姉妹は私の孫よ。だから、お婆ちゃんでもいいんだけど・・・ライムとサンディ、王都では私のことは、エリアさんって呼ぶこと！いいわね。」

お婆ちゃんなんだけど、確かに見かけは若いし・・・お婆ちゃんと呼ばれるのはイヤなのかも、って納得して2人も頷いてます。

王女様とメイドさん達は？？？の状態ですが、エルフの長命と姿を固定できるということは誰でも知ってることです。最終的には・・・フーン、そうなんだ。と納得するしかありません。

「私も、お話に参加したいわねえ。」

エリアさんはそう言うのとテーブルに脇の方から椅子を持ってきて座りました。

「エリア殿がどこから話を聞いてきたか知らぬが、このオバケ騒ぎには謎が多すぎる。」

「それは、私も感じてるわ。前のオバケ騒ぎの時に多分此処で作ったであろう場所まではわかったわ。しかし、何も痕跡がないのよ。」

「ちよっと、気になったんですが・・・」

リユーイの言葉に全員がリユーイを見つめます。

「・・・聞きづらくなっただけど・・・オバケって結局何なんですか？」

「オバケはキメラだ。というか、キメラが多い。何種類かの生物を合体して作られている。・・・偶に同一種を合体する場合もあるがな。」

「キメラを作る魔法は、エルフの歴史をもつてしても存在しないの。でも、切って付けたわけではないのは確かね。」

（姫さん。何言ってるか解る？）

（解説しましょう！・・・彼女達が言っているのは、医学的な結合ではなく遺伝子的な結合を持って作られたということね。）

（フランケンシュタインではなく、又エに近いってことかな。）

「あのお・・・誰かが、新しい魔法を考案したとか・・・」

「それは、十分に考えられる。・・・しかし、新しい魔法ならここ千年は誰も作っていない。もし出来たなら、どの国でも大魔道師として国王に次ぐ地位を与えられるだろう。・・・しかし、誰も名乗らんのだ。」

「誰かが世界征服を狙ってるとか・・・」

「！！！」

「それは、また斬新なかんがえかただねえ・・・でも、そうするとオバケは兵器として開発・・・なんとなく納得しちやいそうだねえ。」

「仮定だよ。・・・飛躍しすぎてるし・・・」

リユーイは慌てて否定します。

「しかし、一番的を得ているやも知れぬ。王国を含めて近隣諸国の大魔道師と言われている者の消息を調査せよ。大至急だ。」

メイドさんが慌てて部屋を飛び出して行きます。

「それと、問題が1つあるわよ。今までオバケを退治したのは、リユーイだけだと言うこと。」

「確かに・・追いついた者は居たが退治したものは初めてだ。つまり、退治する方法を考えねばならぬと言う事じゃな。」

確かに、最初のオバケは「レギオン」次はプラズマソードですから、この世界の人には無理な話です。

「基本的に切れないことにはないです。でも、相手の回復力というか再生能力が半端じゃないので、それを上回る速度で切れば倒せません。若しくは、切断面を焼いて再生能力を低下すればなんとか・・レギオンは千近い斬撃ですし、プラズマソードの切断面は焦げますからね。」

「深い傷を負わせて、火炎弾を打ち込むという事で対処できると・
・フム、やってみる価値はありそうじゃな。」

王女様はなにやら考え込んでいます。

そんな、王女様をエリアさんはニコニコしながら眺めています。

オバケ退治の依頼書は2つ

お城の王女様の部屋で密談してる最中です。

どうやったら、オバケを退治できるか……難問ですね。

「そう言えば……もう1つ方法があったな。あの大熊だ。……確か、あれは……そうだ。リユースの召還魔法で退治したのだったな。」

「なにそれ？」

「確か……鉄人と呼んだと思うが……身長はギルド建屋程の巨人だ。異国の容姿で、片刃で反りの深い剣で一刀の元に切り伏せた。しかも怖ろしい程の剣速で、剣を鞘に入れた音で我等に切った事を知らしめたぐらいじゃ。巨人は別としてもあれほどの益荒男は恐らくこの世に居るまい……」

「そんなに早いのか？」

「「見えません(でした)」」

「確かに異常な再生速度と言えども一瞬に体を両断されてはどうしようもあるまい。……それも、退治方法のひとつと数えて良いだろう。」

皆さん考え中です。確かに方法はあります。でも、再生速度を上回る攻撃方法はそんなに多くはありません。

「確か、赤い靴は冒険者であったな?……では、長期の契約も可能と言っただけだ……」

「ちよつと待ってください。直接契約は不味いです。赤い靴のランクはまだ銀1つ程度……ギルドを通す必要があります。」

エリアが王女様の話に駄目だします。

そうなんです。

金カードであれば、ある程度の融通は利きますが、銀カードで低レベルとなると、王女様の勅命を「ハイ、そうですか。頑張ります。」って聞く訳には行きません。そんなことしたら誰もギルドを使用しなくなります。

ギルドは冒険者への仕事の斡旋所でもあるわけですから、ギルドを通すのがスジとなる次第です。

「しかし・・・他に引き受ける者はおらんぞ！・・・それにギルド仲介ではリユーイ達が我の命を断る事も可能となる。」

「それは、此处で念押しします。・・・それに万が一、リユーイ達以外が引き受ける場合も想定されます。それは、金額を抑えることで可能と考えますが、

2チームを募集すれば宜しいかと。」

「・・・では、期間は今年の灰色の月半ばまでとし、報酬は金貨10枚。仕事はオバケの調査とオバケ退治とする。・・・これで良いか？」

「そんなものかと・・・但し、契約時に特例として王女様より調査費用として別に報酬を与えればリユーイ達の宿代も問題ないでしょう。」

「では、ギルドに依頼してまいれ。」

そんなわけでリユーイ達は半ば強制的にオバケ退治の手伝いをさせられることになりました。

でも、宿代は別に出してくれるなら故郷に帰るときは金貨10枚を持って帰れるわけですから、そんなに悪い話でもなさそうです。

後は、リユーイ以外にもオバケを退治できる方法を4人で考えればいい事ですし・・・

しばらくするとエリアさんが帰ってきました。

「ギルドとの話は着きました。明日の朝には依頼板に表示されます。但し、「依頼は公平に」の原則通り、依頼を受けるTmは先着になります。」

ギロつてエリアさんがサンディ姉妹を見ます。ちゃんと早起きるのよ！って無言の圧力ですね。

ライムは、アワワ・って言ってますけど怖かったのかもしれない。

「それでは、早く帰って、寝ますので・・・」と言って城を後にしました。

次の日、朝早くギルドにリユーイ達は向います。

とりあえず、日の出前に行けば、依頼を取れなくてもいい訳位は出来るだろう・・・って極めて曖昧な考えでリユーイに起して貰いました。

朝早くからギルドの広間は人が溢れていました。

依頼の中には、遠くまで行く必要のあるものもありますから、仕方ありません。

リユーイ達はバラバラになって依頼板の依頼書を探します。

オバケ・オバケ・・・と言いながら探してる4人を他の冒険者達は奇異の目で見てますが、そんな事は気にしません。

「あつた！」

ライムは、勢い良く依頼書を高く掲げました。・・・俗に言う「取ったどー！！」状態です。

他の3人が急いで駆け寄ります。
確かに、オバケ調査と討伐の依頼書です。

「ライム・・良くやったわ!」

うんうんとサンディは頷いてます。リユーイとルミナは、パチパチと拍手してます。

カウンターのお姉さんの所に持っていきますとリユーイ達のランクの確認です。

「黒2つに銀1つ・・銀に金の縁取り!」

お姉さんは始めて見たのか、リユーイのカードを見て驚いてますが、赤い靴の平均レベルは銀1つ程度なのでしょうか?さらに確認されました。

「この依頼は、あなた達にはちょっと荷が重いような気がするけど・・・」

「大丈夫ですよ。既に、オバケを4体退治してますし・・その内の1件は王女様も見てますから。」

サンディのオバケ4体退治に周囲の視線が一斉に集まりました。

(あれが・・。どうやったたら倒せるんだ。・・小さい娘もいるぞ!・・)等々と囁き声が聞えます。

「では、依頼します。この依頼は、一定期間、王女様の指揮下に入ることになるので、至急お城に向ってください。この依頼書で王女様に会えるはずですよ。では、御武運を!」

「解りました。」

リユーイ達はギルドを後にしてお城に向いました。

お城の門にはあのメイドさんが待ってました。早速、王女様の部

屋に案内されます。

すると、そこにはリユーイ達以外にもう1組の冒険者のTmが王女様の前でお茶を飲んでました。

「来たか・・・2組としたのは正解だったようだな。」

先客のTmも全員女性ばかりです。

その中の黒髪から尖った耳が覗いてる人が此方を見ました。

「我々は、竜の牙のメンバーだ。ランクはもう直ぐ金になる所・・・
そちらは？」

「赤い靴の者です。ランクはようやく銀1つ・・・ってところかな。」

「竜の牙から見ればランクはかなり低い・・・しかし、赤い靴はオバケを既に4体倒しておる。その内、2体は我の目の前でだ。その実力は侮るものでない。」

銀1つに軽蔑した眼差しを向けた竜の牙のメンバーに王女が告げます。

途端に彼女達の顔色が変わります。

（どうやって・・・倒せるの？・・・王女様がウソを言うとは思えないし・・・）ヒソヒソ声で話しています。

「王女殿・・・申し訳ないが、どうやったら銀1つにオバケが退治できるか教えて欲しい。」

「話してやるう・・・それより、リユーイ達も席に着け。」

「先ず先に言っておく。リユーイ・・・カードを出してみる。」
リユーイは王女様にカードを渡します。

王女様は、そのカードを竜の牙のメンバーに渡しました。

「これが彼女のカードじゃ。実力は金・・・但し、経験が浅いために銀でいる。」

「では、実力は・・・これは、竜の討伐章・・・これほどの者達とは、存じませんでした。」

「よい・・・それで、倒し方だが・・・色々方法はある。」

王女様は昨日のお茶会で得た知識を纏めます。

1つ目は、相手の再生能力を超えた傷を与え続けること。

2つ目は、切った場所を焼いて再生させないようにすること。

3つ目は、真つ二つに切断すること。

今までの退治方法からこのような方策が取れる事を説明しました。

「この者は、オバケを一刀両断したのですか？」

「実際には、この者が召還した巨人により倒されたのだがな。」

「・・・俄かには信じられない。私と勝負出来ないか？」

「止めておけ、この者の分身能力は4体まで分離できる。そして、その武器は・・・リユーイ彼女にそれを持たせてやれ。」

リユーイは鋼の杖を黒髪のエルフに渡しました。

渡されたエルフは持ち上げようとして、驚きました。片手では持ち上げる事も出来ません。

「それを片手で風車のように回しながら戦うのだ。剣で受ける等不可能。体ごと持っていかれるぞ。」

「しかも、分身しながらそれをやるだけの能力がある。」

竜の牙の連中は驚いてます。ひよつとしたら、彼女1人の能力は彼女達を大きく引き離しているのかも知れません。

試合で試そうとしましたが、王女様はそれを無駄だと言い切つてます。

ひよつとしたら……最初から王女様は彼女達に依頼したかったのかも知れない……そう思い始めました。

3本の矢

王女様の部屋で2つのTmの顔見せが終わると、早速オバケの会議です。

何時の間にか、エリアさんも来てました。

「よいか。オバケによる人心の混乱を防ぐとともにオバケの討伐、そしてオバケがどうして造られているか・誰が、何のために・・・」
「オバケ退治と調査の2つを行う事になるのね。」

王女様とエリアさんが仕事を整理していきます。

「今回の依頼に応募してくれた2つのTmは、それなりに実績がある。・・・しかし、現在は単一で出現しているオバケが複数同時に出現した場合は対応が取れなくなる可能性が高い。」

「通常の戦士が対応できるかを見極める必要があるってことね。」

「ここで、2つのTmを分割して、戦士Tmと魔道師Tmに分けようと思う。」

「2つのTmとも、戦士2名と魔道師2名で構成されてるしね。」

「しかし、極端に分離しては作戦上の支障も有るだろう。」

「戦士Tmには魔法使いが必要だし、魔道師Tmにも戦士がいるってことよね。」

「よって、戦士Tmには、私の近衛から魔道師を1人付ける。魔道師Tmには、我とエリアがいれば十分だろう。」

「2つのTmの連絡は、近衛に持たせている魔道石による念話を用いる。」

皆真剣に聞いていましたが、リユーイは頭の中に？が浮ぶと、？が段々と大きくなりそっちはかり気が移ってしまい、王女様とエリアさんのお話なんか馬耳東風の状態です。

「ウム！・・・リユーイ・・・聞いておるのか？」

突然、王女様に問いかけられて、ビクッ！って体を硬直させてます。

「何を考えておったのじゃ？」

「・・・いや・・・あのぉ・・・どうしたらオバケを探せるのかな？って考えてました。」

「フム・・・確かに疑問じゃろう。しかし、よい方法があるのじゃ。・・・ギルドの相互間通信網を使う。さすれば、王国内外のオバケに関する情報は直ぐに分かるという寸法じゃ。」

「ギルドと言えば・・・おかしなことがあるのよね。・・・王国外でのオバケの話は聞かないのよ。」

「王国限定じゃと！」

皆、ちよつと考え込んでます。

幾ら王国の領土が広いと言っても、オバケが王国限定となると原因はこの国、若しくは他国からのテロ行為となります。

王女様には王国が狙われる理由が思いつきませんし、竜の牙の皆さんも他国でこの王国の悪口を聞いたこともありません。

「そう言えば・・・北の国では竜の被害が増えているって、聞いたことがあります。でも、竜はオバケではありません。」

「似た話は、東の国でもあるのね。灰色熊が今年は当たり年ってね。」

「私も聞いたことがあります。ベテランの冒険者が、（近年討伐依頼の内容が変わってきてる。より大型で凶暴な獣が多くなった。）
つて。」

「異変は王国だけではないと言う事じゃな。」

「やはり、オバケに限定しては本題を外すことも考えられますね。」

「フウム……。」

「あの……ギルドをこの件に加えることは出来ないんですか？」

「どういうことかな？」

「先ほど、ギルド間の通信網があるって言っていましたけど……それを使って過去と現在の様相の変化を調査して貰うんです。オバケ出現の報告も大事ですけど……変化がどのように起こっているのかも調べておく必要があるよな気もするんですけど……。」

「比較調査って訳ね……そういう調査依頼ならギルドは受け付けられると思うよ。」

「なるほど……以外と重要なことが解るかも知れぬな……この際だ、父と交渉して博士達の協力と転移陣の使用を承諾させよう。」

そんなことをその日一日話し合い、夕暮れと共に散会となりました。

この続きはまた明日のことですね。

宿の部屋に車座になって、4人で今後の事を話し合っています。

「なんか、大変なことに巻き込まれたけど……大丈夫だよな。」

「Tmを解散するのではなく、2つに分けて1つの仕事をするのだから、問題なからう……。灰色の月には一旦、仕事を終えることも打ち合わせ済みだ。」

「そうよね……。」

「ライムは調査部隊だし・・・エリアさんと王女様も強いみたいだから大丈夫だよ。」

「でも、お姉ちゃん達と離れるの・・・ヤダなあゝ・・・」

次の日お城に行くと、昨日の顔ぶれが揃っています。

メイドさんにテーブルに連れて行かれ、早速、お茶が出されました。

「皆、まつてたのよ。」

「揃った事だし、始めるか。」

「昨日の話が続ける。先ず、オバケ調査とオバケ退治の依頼だが、オバケに限定しては本筋を外すことになる。よって、依頼名称を（3本の矢）と改名する。名称変更に伴う報酬の変更は無い。但し、連携を図るため住食をこちらで提供する。お城の客間に住まえるのだ。」

「次に、ギルドの件だが・・・協力を図ってくれる事になった。また、城の博士達もこの件で動く事を了承した。」

「先に3本の矢と言ったが、我等の行動も3つに分かれる。」

「オバケ達を退治する部隊。・・・ミケナイ、マルチナ、リユーイ、ルミナ。それに近衛の火炎魔道師のポーチナの5人だ。・・・リーダーはミケナイとする。」

「次に、オバケ達が出現した周辺を調査する部隊。・・・ヘンネ、ユーミン、サンデイ、ライム、エリア・・・そして我がリーダーとなる。」

「最後に、分析と対策検討を図る部隊。・・・城の博士とギルドがこれに当たる。今日は来ていないが、必要な時には向こうからやってくるだろう。以外と変人が多いが頭は切れる。」

「そして、父から転移陣の使用許可を貰った。ポーとエリアそし

て我が使用すれば各々の部隊を目的近くの町まで移動することが可能だ。」

「各自、装備等に問題があれば申し出るように。・国の仕事を請け負ったのだ。これを機会に武具等を新調するのもよからう。」

「あのく・鍛冶屋を紹介してくれませんか。」

「どうするのじゃ？」

「剣を作つて貰いたくて。・武器屋では良いのが無いんです。」

「じゃあ、出かけましょう！・どうせ、後は部屋割りでしょう。」

エリアさんは、リユーイを立たせると手を引いて部屋を出て行きました。

お城を出て、大通りを歩き、少し路地に入ります。

石造りの低い建物が並んだこの周辺は王都の職人街となっております。似たような建物の並びを見ながら歩いていくと、1つの建物の前でエリアさんは止まりました。

「こんにちはく・」

扉を開けると軽く店主を呼びました。

奥のほうから、カンカン・と聞えていた槌音が止むと、筋肉質の小柄なお爺さんが奥の扉を開いてやってきました。

「誰かと思えば・お前さんかい・今日は何だね？」

「連れの武器を造つて貰いたいんだけど・」

「坊主のかい？」

「・あのね！・この子は女の子。」

ドワーフは下からリユーイをスキャンします。下から上へ・・・上から下へ・・・胸で止まり、その小さな膨らみを、哀れむように見えます。

「すまなかつた・・・では、お嬢さんの武器を持つてことか？」

「そうよ。リユーイ。杖をお爺さんに渡しなさい。」

ドワーフは受取った杖の重みに吃驚してます。

「この子は、剣も持つてるけど・・・数打ちの剣よ。剣を忘れないように持つてるだけだわ。」

「その剣も、見せてみる！」

リユーイは肩に担いだ剣をドワーフに渡します。

ドワーフは剣を鞘から抜いて長剣をしげしげ見てました。

「・・・確かに、数打ちだな。・・・どんな剣が欲しいのだ。エリアはお得意様だ。少しは相談に乗ってやる。」

「・・・折れず、曲がらず、良く切れる・・・そんな刀が欲しいんですけど・・・」

ドワーフは考え込みました。今彼女が言った事は、剣を打つドワーフ達の理想です。でも、折れない剣は曲がってしまいます。逆に曲がらなければ折れてしまいます。その限界ギリギリに両者の特性を持たせる事を要求しているのです。

過去に、1つだけ成功例とされた剣がありました。伝説の剣オニギリです。

ふと、ドワーフは気がつきました。

（この娘は何と言った・・・刀と言った・・・剣ではないのか？刀とは聞いたことが無い。前振りから推測するに剣の一種だとは思うが・

・)

「お嬢さん・・申し訳ないが、刀と言う武器を打った事が無い。簡単な絵を書いてくれないか？」

リユーイはドワーフが差し出したペンで、さらさらと紙に描き出します。

刃の長さは1m程度、刃に少し反りがあり、片刃です。柄は別構造でたつた1本の釘で止められます。鞘は皮ではなく木で作られるみたいです。

「こんな感じの武器ですけど・・」

「見たことも、聞いたこと無い剣だな・・何故反りがあるのだ？」

「引いて切るからです。刀は切るために特化した武器です。」

「この波目は、鋼を何度も叩いて伸ばし、折り曲げ、また伸ばし・其の過程で生じる刃紋です。」

この娘は今なんと言った・・叩いて伸ばし、折り曲げて伸ばす・・俺達は叩いて伸ばすが、1回きりじゃ・・この娘はそれを何度も行うと言っておる。

どんなものが出来るかわしにも判らんが、この国ではまだ誰もそんな技法は知らんはずじゃ。

訓練それとも試合

鍛冶屋さんにリユーイは刀を作ってもらおうと頼んでるんですけど・・・

鍛冶屋さんはそんなの見たこと無いって言ってます。

確かに、リユーイが元住んでた世界でもレアな武器ですからね。

「造り方で、他に知っている事があれば教えて欲しいのだが？」

「え〜っと・・・確か、純度の高い鉄・玉鋼を使って・・・最後に刀を真つ赤に焼いて、お湯に入れるんだと聞いたことが・・・」

「玉鋼とは？そしてお湯に入れるとは？」

「玉鋼とは、砂鉄から造る極めて純度の高い鉄です。そして、お湯に入れるのは焼き入れと言って・・・刀の価値がこれで決まる程です。昔、ある刀鍛冶は、弟子が間違ってお湯に手を入れた時、その手を切ってしまった程に秘密な部分があります。」

「微妙な温度が影響するということか・・・」

「何とかありますか？」

「ああ・・・造ってやるとも・・・エリア、感謝するぞ。」

ドワーフの鍛冶屋さんは、喜んでます。

ドワーフ界鍛冶屋の最高傑作・・・オニギリ・・・これを越える可能性が出てきたからです。

聞いた限りでは、2つの鍵があることが解りました。鉄を叩き、鍛造で多重積層構造を造る事。そして、完成直前の焼入れです。

今までは、鉄鉱石を熱して、叩いて形を作り、研いで終わりです。更に、彼女は砂鉄で作ると言っていました。

砂鉄は純度が高いのですが・・・それを形に纏める事は困難です。

(フウ〜ム・・・鉄の純度を要求するのだな・・・しかし、純度が高すぎると、折れる原因にもなる・・・)

ブツブツと呟きながら店の奥に入っていました。

「じゃあ、またね！」

エリアさんが店の奥に軽い挨拶をして、リユーイを外に連れ出します。

「大丈夫よ。お爺ちゃんだけど・・・腕は確かだよ！」

リユーイにエリアさんは、そう言ってくれましたが、さて、どんなのが出来るのかは想像出来ません。

でも、がんばってくれるみたいですから・・・そこそこ期待できるかもしれませんね。

お城にトコトコと歩いていくと、門の所にメイドさんが待つてました。

「エリアさんは、王女様がお待ちです。リユーイさんは私に付いて来てください。」

「じゃあねえ・・・」

軽くリユーイに手を振ってエリアさんは城の中に入っていきます。リユーイはメイドさんに連れられて城の2階にある部屋に案内されました。

「ここが、リユーイさん達の部屋になります。どうぞ中へ！」

扉を開けて中に入ると、真中のリビングルームの両側に部屋があります。

「帰ってきたか・・・リユーイはこっちだ。」

右の扉が開いて、ルミナがおいでおいでをしています。
トコトコと部屋に入ると、大きなベッドが3つありました。

「窓際は頂いた。・・真中はポーチナが取ってる。リユーイはここだ。」

ルミナが壁際のベッドを指差します。まあ、どっちでもいいことですけどね。

トントンつと扉が叩かれました。扉が少し開いて、ポニーテールの女の子が顔を出しました。

「お茶がはいりますよ。・・来て下さい。」

ばたんと扉が閉まると、2人は顔を見合わせました。

「今のが、ポーチナだ。・・さて、竜の牙とご対面だ。」

2人は扉を開けて、リビングに入りテーブルの席に着きます。
竜の牙の2人はもう席についてます。

ポーチナが自分のカップと4人のカップにお茶を注いで、お茶会の開始です。

「エルフの戦士は珍しいな。・・魔法は使わないのか？」

「生憎と、双子の妹が魔法を極めている。・・私はこれだけだ。
ミケナイというエルフの問いにルミナが背中のおニギリを叩きま
す。」

「そうか、我々エルフの言い伝え通りというわけだな。・・私も姉

に魔法を譲っている。」

エルフは通常魔法力が人間よりも高いのですが、双子が生まれると、片方に全て移るみたいですね。でも、もう片方は通常のエルフより強靱な肉体を得ることになるんですよ。

「まさか、討伐章を銀で見るとは思わなかったわ。・・ホントに強いよね。」

マルチナは人間です。リユーイを興味深々で見つめます。

「私、見てました・・毎朝鍛錬してるんですね。まるで舞踊を見てるようでしたわ。」

ハーフエルフだと言っていたポーチナも会話に参加してきます。

「どうだ・・此処で何時出勤するか判らん時を過ごすより、訓練がてらに立合ってみないか？」

「面白い・・確かに暇だ。」

「やるんですか？では、リユーイさん相手をお願いしますね？」

「わたしは・・応援しますね！」

立会い場所は、リユーイが隊長さんに化けたオバケを退治した闘技場です。

いったい何処で知ったのか知りたいくらいに観客がいますが、軍服を着てるところを見ると、城の警備部隊の人達みたいです。

「お姉ちゃん・・がんばれー!!」

サンディとライムも来てます。ホントにこの城の情報網は不思議なくらいに広がりますね。

第1回戦はミケナイとルミナです。

どちらも珍しいエルフ戦士ということで観客の応援も力が入って

ます。．．でも、どちらも美人で、観客が男性なのが原因だとリュイは冷静に分析してます。

「では、行くぞ！」

「オオ！」

闘技場の真中で、ミケナイとルミナが見合ったかと思っただ瞬間に、上空に飛び上がりました。

枝渡りの応用です。エルフ戦士の戦い方は空中戦なんです。

上空に飛び上がりながら互いに剣を抜刀してガシ！．．ガシ！と打ち合います。

上ったものは当然落ちてくるわけですが．．その状態でも、剣戟の音がします。

着地と同時に互いが後飛び．．直ぐ剣を上段に構えて相手に向って走りこみ、ガシン！と互いに鏢がかみ合いました。

「やるな！」

「フン．．お前もな！」

互いにピョンっと飛び跳ねて距離を取ります。

ルミナが舞いを舞うように剣を回しながら少しずつミケナイに近づきます。

「！．．それは、．．【舞闘剣】．．話には聞いていたが．．」

ミケナイは剣を正眼に構えます。舞闘剣の剣スジは円の動きです。初めと終わりがありません。隙が無いのです。

でも、一撃を交して相手の動きを止めることが出来れば．．．

ガシンと剣がぶつかりました。

一瞬、取ったとミケナイは思いました。

でも、ルミナはぶつかった剣の反動を利用して素早く体を反転します。

そして、ミケナイの首すじにピタッと剣を押し付けます。

ちよつとでも、どちらかが動けばミケナイの首から鮮血が飛び散るような状態です。

ガチャン・・・とミケナイの手から剣が滑り落ちます。

「参った！」

ミケナイの降伏宣言です。

ウオオオオー・・・と闘技場が沸きました。

ルミナはミケナイが落とした剣を拾うと、相手に渡します。

「ありがとう・・・しかし、【舞闘剣】か・・・話には聞いていた。だが、それを使うものは、隠れ里の者のみ・・・」

ミケナイは自分の剣を調べてます。刃のあちこちに深い傷が刻まれています。

ルミナが剣をしまうのを見て、驚きました。はつきりとは判りませんが・・・傷が見えませんが・・・

「ルミナ・・・お前の剣は・・・その剣は・・・まさか！」

「オニギリだ！」

スタスタと闘技場を出るルミナをミケナイは呆然として見送りま
す。エルフ界の伝説・・・【舞闘剣】の使い手が・・・オニギリを持つ

者が今日の前にいるのです。

魔法の使えないエルフにとっての憧れ・オバケ退治は依頼通り
行うまでも、ルミナに師事して【舞闘剣】をなんとかものにした
い・

そう思うと、ルミナを追って闘技場を後にしました。

さて、次はリユーイとマルチナです。

2人が闘技場の中央に出た途端、ワアアアアアアという喚声が上
ります。

鋼の杖を持ったリユーイと馬鹿でかいハルベルトを持ったマルチ
ナが互いの武器をガシン！と打ち合わせると3m程の距離を置いて
対峙しました。

普通の人なら片手ようやく持ち上げられる鋼の杖をクルクルとバ
トンのように回して回して相手の隙をリユーイは窺います。

マルチナはハルベルトを斜めに構えジツとリユーイを見えます。
微動だにしません。

まずは小手調べ・リユーイは体を回転させながらクルクルと回
していた杖を片手に持ち替えてハルベルトの柄に杖の先を打ちつけ
ようとしました。

マルチナは僅かにハルベルトを持ち上げると、ガシン！と柄の石
突に近い部分で受け止め、その運動エネルギーを利用してハルベル
トを回すように斧をリユーイに叩きつけようとしました。

リユーイもハルベルトとの衝突を利用して体を回転させる事で一
撃を回避すると同時に、反対側への攻撃に移ります。

一旦、攻撃を始めると止まる事ありません。

でも、この攻撃はリユーイが昔、カンフー映画を見てたことで体
を動かす事が出来るのですから、人間何が役に立つかわかりませんね。

マルチナの攻撃は、後の後って感じの攻撃です。自分からは攻撃に出ませんが、余程、動体視力が良いのでしょうか。・的確に、攻撃を見切って反撃してきます。

男でも振り回すのが大変なハルベルトを相手の攻撃の力を借りて動かしているようにも見えます。

(この子・・【アクセル】使ってるよ！)

(加速状態なのか?・・道理で、動きに追従出きる訳だ・・)
(どうするの?)

(【アクセル】ってどの位持つの?)

(人によるけど・・以外と短時間よ。・・だって、その間動いてるんだから・・)

(じゃあ・・この方法で・・)

突然、リユイーの攻撃速度が上がりました。でも、加速してるわけではありません。今までよりも体の動きが少し上っただけですが、末端部分の杖の先は凄いです。スピードで回転してマルチナに打ちかけます。

マルチナは最初は的確に攻撃をさばきながらリユイーに打ちかかって来ましたが、段々と攻撃が散漫になり・・ついには、攻撃を受け流すのがやっとの状態です。

そして、

「ヤア！」

と掛け声とともにヒュンッと空気を切り裂いた杖をマルチナは避ける事が出来ませんでした。

思わず目を閉じたマルチナですが、幾ら待っても衝撃はありませんん・・・

マルチナが目を開けると、首スジにピタリと杖が止まっています。

ガシャン・・・とマルチナはハルベルトを離します。

「負けましたわ・・・【アクセル】で有利でしたのに・・・」

闘技場にワアアアアアという喚声が上がります。

どうやら、試合が終わりました。

怪我もなく無事に済んで良かった・・・なんてリユイーは考えてました。

ミケナイの驚き

オバケ退治Tmの皆さんは、現在部屋でお茶会の最中です。魔道師のポーチナがメイド服でお茶をお給仕してます。数時間前までの、ちよつと気まずい空気はありません。闘技場での戦い済んで、気は晴れて……って感じです。

「……すまん。少し高慢でいたようだ。」

ミケナイが頭を下げるとマルチナも同じようにリユーイ達に頭を下げました。

「……いや、私は頭を下げられる程の実力は無い。……運が良かっただけだと思っている。」

「運も、実力の1つだ。……ところで、さっきの舞闘剣……あれは、エルフの隠れ里に伝わるものと聞いたことがある。それに、その剣は……あの伝説の剣なのか？」

ミケナイは気になる事をストレートに聞いてみました。エルフ界でも、隠れ里を知る者は少ないのです。

ミケナイがまだ小さい頃、お母さんにしてもらったエルフの伝説の中に不思議な隠れ里とそこに伝わる、かつての技術、剣術そして名剣の話がありました。

（その名剣はどんな魔物でも一撃で倒せることから「オニギリ」と銘を付けられ、鉄の剣をも切ることが出来るのよ。）

（剣術は連続する攻撃が円を描き、まるで踊っているかのように見えるの。それで、舞闘剣って言うんだけど……隠れ里にしか伝わっていないって聞いているわ。）

ミケナイは、冬の山村で炉辺で聞いたお母さんの言葉を思い出しています。

あれから、100年位過ぎてます。一緒にきいてた兄弟、姉妹は今何処にいるのだろうか？村はまだあるのだろうか・・・この依頼が終わったら、直ぐにでも会いに行こう！って決めました。

「・・・同族には隠せないか・・・確かに、私は隠れ里のものだ。そして、この剣はオニギリ・・・長老にたくされたものだ。」

ルミナは今までの出来事をミケナイ達に話しました。

妹ロミナの病気と、唯1つ治せる方法・・・

悲恋の洞窟・・・

隠れ里からの追放と長老から託されたオニギリ・・・

「・・・そうだったのか・・・私でも、治せる方法があるのなら・・・たぶんそうしたと思う・・・」

ミケナイはルミナの長い話を聞いてそう言いました。

「ではルミナさんは、もう2度とロミナさんと会えないんですか？」

「ああ・・・直接にはな。・・・しかし、話は出来るし、姿も互に何時でも見ることが出来るぞ。」

ルミナはそう言って腰のポーチから、コンパクト型通信器を取り出しました。

「この中の鏡に相手が写るんだ。・・・ロミナと分かれる時、天から授かった・・・」

天から授かった・隠れ里では、神様がまだ現実のものとして存在しているのでしょうか・

3人は不思議そうにコンパクトを見つめています。
リユーイだけはちよつと冷や汗をかいてますけど・

「ところで・・1つお願いがあるのだが・私に、舞闘剣を伝授してくれ・頼む！」

ミケナイがテーブルに頭を付けてルミナにお願いしています。

「・・いいぞ。リユーイにも教えてるしな・それ程、難しくはない。リユーイは一度見ただけで覚えたみたいだからな。」

3人はその言葉に吃驚しています。

世界には、沢山の武術家があります。それぞれ長い経験の末やつと辿り着いた武術のほずです。それを見ただけで覚えられるのでしょうか・

マルチナはさっきの試合を振り返ってみました。

最初は確かに自分が有利だったと今でも思っています。

でも、時間と共に、自分の行動が先読みされていったような気がしてきました。

（自分の修行したハルベルト槍術がリユーイにマスターされた・

）
「しかし、その剣は早めに修理したほうがいいな。オニギリと打ち合ったんだ、ボロボロだろう。」

ミケナイは鞘から、長剣を取り出しました。

あちこち刃が欠けてます。また何箇所かは、オニギリの斬り箇所がV字形に入っています。

「オニギリ・・・確かに切味は鋭い。・・・剣をも切り刻むとはこのことだな・・・」

「切味なら上に行くものがある。」

ルミナは立ち上がると、オニギリを持ちテーブルの上の花瓶をジッと見据えます。

オニギリを鞘から抜くと、シュン！って花瓶の上を払いました。花瓶に差されていた花がゆっくりとテーブルに落ちました。

「横一文字に花の茎を切っても花びらが落ちる事もなく、花瓶も倒れず・・・正に伝説だけの事はある。」

ミケナイがオニギリの切味に感心しています。

ルミナは、そんな感心ごとを気にせずリユーイを見据えます。

「リユーイ・・・光りの剣で花瓶を切れ！」

リユーイはルミナの顔を見ました。頷くのを見て渋々席を立ちます。

腰のポーチから懐中電灯モドキを取り出すと・・・

【ターボ1】と小さく呟きました。これで剣速が10倍に跳ね上がります。

腕を振ると同時にプラズマ形成スイッチを操作して、1m程の細かいビームを形成します。

テーブルの花瓶に向かって数回腕を振るった所で、スイッチを切り懐中電灯モドキをポーチに戻しました。

3人はリユーイを見てましたが良く解りませんでした。

腕を振ると同時に糸のような光りが棒の先から現れ、テーブルの

上を数回行き来したかと思うと終わりでしたから・

リユーイが席についたのを見て、もう終わったの？と不審におもいましたが、ポーチナが手に持ったカップをテーブルに戻した時に、その結果が解りました。

カチャ！つとテーブルの皿にカップが戻された時です。

パシャ！つという音を立てて、花瓶が四散しました。

まるで、自分からわれたような感じですよ。

数辺の欠片に分かれた一つをミケナイは手に取ってみました。

確かに、切られています。割れたものではありません。

「・・・今のが光りの剣か・・・光りのスジが何度か行き来したのは見えたが・・・これ程の切味なのか・・・」

「防具、防御魔法に関係なく切れるようだ・・・しかし、切れ味があまりにも良すぎる・・・為に、リユーイはあまり剣を使いたがらない・・・」

「確かに、乱戦になると危険だな・・・しかし、頼りにもなる・・・」

光りの剣は我々にも使えるのか？」

「以前試してみたが・・・剣すら出すことが出来なかった・・・何でも特殊な技を必要としており、我々には習得出来ないそうだ・・・」

「・・・あまりの業物は、世界を乱す・・・確かに、我々には過ぎたものだ・・・」

そう言つとミケナイは席を立ちます。

「この剣では、討伐には耐えられん・・・城下の武器屋で剣を手に入れてくる！」

「それでしたら、私が一緒に参ります・・・武器と防具は王女様がお支払いになりますから、気に入つたものをお探しください。」

ポーチナが慌てて、ミケナイの同行を申し出ます。
2人が出かけると、部屋には3人残りでしたが、特にすることもありません。

こんな時は・・・部屋に戻ってお昼ねですね・・・

数日が過ぎていきました。オバケの情報は入ってきません。
サンデイ達は城の倉庫を再度調査してるみたいですが、状況はあまり芳しくないようです。

ルミナはミケナイに舞闘剣の教授です。
それなりに剣を使ってきたミケナイですが、今までの動きと余りにも異なるためか、中々思うように体が動きません。

「本当に、リユーイはこれを一度見ただけで覚えたのか？」

「本当だ・・・しかし、その前にリユーイの形を見たが、少し、舞闘剣に似たものであったことも確かだ。」

肩で息をつくようになったため、少し休む事にしたミケナイでしたが、遠くで何も持たずにゆっくりとした動作を繰り返していたリユーイをボンヤリと見ました。

「まるで、踊りの練習だな・・・あんな練習に意味があるのか？」

「1人では・・・そうだな。演舞というぐらいだから踊りと見ても良いのだろう・・・だが！」

ルミナは遠くで練習していたリユーイを呼び寄せます。

走ってきたリユーイに、2人の演舞をミケナイに披露することを了承させました。

「よく見ている。最初はゆっくり始める・・・最後は私の最高速で

対応する。演舞が何かわかるはずだ。」

ルミナはそう言って、リユーイに始めるよう促します。

リユーイの動きにワントempo遅れて、そして向かい合ってルミナは演舞を始めました。

最初は距離をとっていましたが、少しずつ距離を狭めます。

ミケナイは最初では宮廷での宴会に向いているような優雅な2人の舞を見ていましたが早くなるにつれ、突然に理解しました。

2人は舞を舞っているではありません。

徒手空拳で戦っているのです。

足を払うと、相手は体を捻りながら回避を行い、その回転を利用して攻撃に転じます。

回転しながら斜めに相手の懐に入り急所への打撃を、腕で払い流して、その腕を折る動作に入ります。

段々と演舞の速度が上り、2人が交差するたびにパシ！・パシ！と袖や裾の空を切る音だけがミケナイには聞えるだけです。

そして、唐突に2人は拳を打ちつけた状態で停止しました。

「全部が攻撃と防御なのか・演舞か・なるほど舞闘剣に似ているところがあるな。」

「それが解れば十分だ。・全ての動作が流れるような円を描く・

」

「リユーイ・私にその演舞を教えて欲しい・」

「いいですよ。・これは基本動作ですから、体操代わりに毎朝稽古できますからね。」

倉庫の調査とリユイーの刀

次の朝早く、闘技場で4人がゆっくりとした動作で演舞をしています。

闘技場には、お城の近衛隊の人達や、兵隊さんが早朝の練習で剣を打ちあい、剣戟の音が煩いぐらいですが4人はそんなことは気にせずひたすら静かに・ゆっくりと体を動かします。

闘技場の片隅で演じる4人の演舞を見ていた者がいました。

「・・・ねえ、あの人達なにやってるのかなあ？」

「・・・私、知ってる。あの人・・・確か隊長さんに化けたオバケを退治した人だよ。」

「でも・・・踊ってるよね・・・あんなダンスは始めてみるけど・・・まだ、お城の演芸会は先だよね？」

「・・・判らない時は？」

「聞いて見る！」

トコトコ・・・とメイドのお姉さん達がリユイー達の所にやってきました。

4人は、なに？って感じですよ。

「・・・あのう・・・そのダンスは・・・何なんですか？」

メイドさんの1人がおずおずと尋ねました。

「これか・・・我々の朝の練習だ。拳法という攻撃手段なのだが、その攻撃と防御の基本をゆっくりとした動作で体になじませているのだ。」

「全身運動に繋がるので、この後の武器を使った練習の準備運動にびったりなんです。」

「剣は腕の延長と考えれば、この練習は十分に役に立つ。」

「どうです。一緒にやりませんか？・・美容にもいいし。スタイルもよくなりますよ。」

メイドさん達は一斉に頷き、リユーイの指導を受ける事にしました。

「動作の基本は円を描く事にあります。手、足が体から離れる時に息を吐き、体に引き寄せる時に息を吸い込みます。・・こんなふうに・・。」

メイドさん達はダンスみたいに見えたこの練習がとんでもない負荷を体を与える事に気がつきました。

直ぐに、息が荒くなり体の動きと合わなくなります。普段使わないう筋肉が悲鳴を上げてます。

でも！・・美容とスタイルには代えられません・・頑張るのみです。

次の日の朝、闘技場にやってきた4人は吃驚しました。

メイドさんの数が2倍に増えているのです。

更にその次の日には、お城中のメイドさん達が集まっていました。

こうして、リユーイの指導を受けたメイドさん達は毎朝闘技場の半分を使って演舞に余念がありません。

さらに、リユーイが護身用にと攻撃方を伝授したりしましたから大変です。

毎朝、闘技場から・・ハッ！・・ハッ！ハッ！ハッ！っという声が響き

拳が空気を切る音と脚が大地を踏みしめる音が響きます。

「おい・・・あいつらメイドなんだよな？」

「見たとおり、メイドだろ。」

「あいつらに・・・お前勝てる気がするか？」

「無理だ。剣で挑んでも懐にもぐりこまれて一撃・・・恐ろしい・・・」

遠巻きに演舞を見てる近衛兵達がぼそぼそと自信なげに言葉を交しています。

こうして、このお城の名物、戦うメイドさんが生まれるんですけど・・・

これは、このお話にはあまり関係ありませんので、このへんにときますね。

話は、ドドーンつと変って、サンディ達は調査の真つ最中です。

お城の倉庫に隊長さんがいたことから何らかの手がかりがあるかもしれないと、再度調査を大々的に行ってます。

近衛兵を使って、倉庫の荷物を全て外に出し、荷物の梱包を引き剥がして一つ一つ中身を確かめていきます。

また、すっからかんになった倉庫を皆で端から端まで歩いて手がかりを探します。

天井にも、梯子を掛けて近衛兵が一区画毎に探しています。

「何も無いな・・・」

「でも、普段通り隊長さんは執務していたと言っていましたから、倉庫以外で入れ替りは不可能ですよ。」

5人が倉庫の真中あたりまで調査を進めていた時に、倉庫の外で

荷物の調査をしていたエリアさんがやってきました。

「荷物に不審なものはなつかたねえ・・・ただ、箱の残骸が結構あるねえ。整理整頓をサボってたようだねえ。」

「残骸だと？」

「荷の梱包にまみれてけっこうな量があつたねえ。」

「それだ！」

王女様は外に出ようと思いました。

「待つてください。・・・これは・・・ちょっと見てくれませんか？」

王女様はくるつと方向転換して、サンデイのところに行ってきます。

「これ・・・床のタイルの色が変わってるんだよ。」

ライムが床を指差して王女さまに言いました。

詳しく調べると、少し色が変わってるというか、新しいタイルが床の1区画に広がっています。

近衛兵を呼び寄せるとタイルをはがします。

床を人の背丈の2倍程の広さでタイルがはがされ、そこに現れたのは魔方陣でした。

「これは！」

「魔方陣のようだねえ。」

「至急、博士を呼ぶのじゃ！」

しばらくすると数名の博士達が弟子を引き連れて現れました。

「これじゃ。魔方陣の目的を探るのじゃ。」

王女様の言いつけの前に博士達は魔方陣に並ぶ記号の意味を探りはじめました。

弟子達に魔方陣の模写をさせています。

そんな作業を見ていた王女様は、ふと、外の荷物の件を思い出しました。

「サンデイ。最後まで倉庫の確認を頼む。我は荷を確認した後、部屋に戻る。」

そう言っただけで倉庫を出て行きました。

サンデイ達4人は、倉庫の残り半分の調査を開始します。

エリアさんは天井を調査していた近衛兵と残りの天井付近を調べ始めてます。

少し進展があったようですが、まだまだ謎は解けないようですね。

そんな日が続いたある日、リユーイのところに木箱が届きました。持ってきたメイドさんは鍛冶屋さんからのお届け物です。って言うてましたから、大まかな見当はついてます。

「開けてみないのか？」

ミケナイが興味深々で聞いてきます。

「刀を作ってもらったんだ。でも、初めて作るみたいだからあまり期待しないほうがいいよ。」

「そういえば、あの時、エリア殿と鍛冶屋に行ったみたいだな。・
・王都の鍛冶の腕も見たい。やはりここは披露するのがスジではな

いか？」

ルミナにもそう言われては、お披露目するしかないようです。腰から鉞改を抜くと、木箱を縛ってある紐をスイ！って切りました。

木箱の蓋を開けると、そこにはやや反った感じの棒みたいなものが入っています。

小さな鍰がついているので、剣の一種なのでしょうけど・・・横幅がありません。オニギリの半分以下の横幅です。

皆の失望をよそに、リユーイは箱から刀を取り出しました。

リユーイの手の中の棒を再度見たミケナイは少し驚いています。

唯の棒のように見えたものは鞘のようです。でも、普通の長剣の鞘は皮製ですが、そこにあるのは木の鞘です。たぶん2分割で造られているのでしょう、所々金属の環でしっかりと止められています。柄の部分は金属ではなくこれも木のようです。そして、滑らないように細かい糸が斜めに交互にまいてあります。

鍰の部分は相手の剣を受けるために通常は大きく張り出していますが、この刀はまるでコインをそこに合わせたような、小さなものでした。

「リユーイ・・・抜いてみる。」

リユーイはルミナに急かされ、あわてて、ハンカチを口に咥えました。

そして、刀を柄と鞘を片手に持ち両手を広げるように抜きました。

皆の目が、見開きます。

そこには、片刃の反りのある長剣があります。

剣の横幅は小さな硬貨程、長さはリユーイの片腕より少し長い位、そして、鋭い切っ先・・・

でも・・・本当の驚きは別です。その刃の部分は濡れているように見えるのです。

鍔の部分から切っ先まで・・・静かな渚に打ち寄せる波のような波紋が幾重にも重なって見えるのです。

ガチャリ！

リユーイは水平に持っていた刀を左手で垂直に立てます。

（この剣は・・・なんだ！・・・片刃なのは刃に反りがあるからだろうが、意味があるのか・・・）

（あの刃に付けられた波紋・・・美しいが意味はあるのか・・・）

3人は不思議な剣を何時までも見ています。

リユーイは刃先にカケや曇りがない事を確認すると、鞘にパチンと戻します。

「色々と聞きたい事はあるが・・・その剣の刃先の波紋は何だ！」

「たぶん、鍛造過程で生じたんだと思うよ。ちよつと鍛え方に注

文つけたし・・・」

「そんな刃先でオバケを斬れるのか？」

「斬れると思うよ。斬ることに特化したのが刀だし・・・」

「オニギリより斬れるのか？」

「解んないけど・・・試してみる？・・・ポーチナさん系持つてる？」

ポーチナが自分のポーチからお裁縫セットを取り出すと糸を身長程引き出しリユーイに渡しました。

リユーイはテーブルの上に乗ってシャンデリアに糸をぶら下げます。

「この糸を斬ることが出来る？」

早速、ミケナイが試します。ミケナイの長剣は、金貨10枚の新
品です。武器屋で一番良い品を買ってきたばかりです。

「デエイー！」

気合一閃長剣で糸を斬ろうとしましたが・・・糸は長剣の振り払わ
れたほうに一緒になびいてしまい斬れません。

次は、ルミナです。

「ハアッ！」

ヒュンっという空気を斬る音がしましたが結果はミケナイと同じ
です。

「よく、見ててよ・・・ハッ！」

ヒュン！っ！と空気が斬れる音がしてリユーイは刀を振り切ってま
す。

そして、ユラユラと糸がテーブルの上に落ちました。

「何故斬れる・・・オニギリでさえ斬れないものを・・・」

「だって、2人とも糸を一点で斬ろうとしてるでしょ。俺は、線
で切ってるの。この違いかな。」

「線で斬るとは？」

「えーとね・・・たとえば、この花瓶を斬ろうとするよね。ミケナ
イヤルミナは剣でこうなぎ払うようにするでしょ。切る場所は点に
なるよね。」

「俺の場合は、花瓶に刀が当たる瞬間から刀を手前に引いている
の。そうすると・・・こういうふうに線で斬ることになるわけ。こ
の動作がしやすいように刀には反りが入ってるんだけど・・・」

「要するに、我々は力で斬っているが、お前は技で斬っていると

言いたいのか・・・」

「そこまでは、言わないけど・・・ルミナは舞闘剣を使えるよね。あれだって円の戻りは俺の動作と同じだよ。」

ルミナは再度糸に向って剣を振るいます。今度は奥義の舞闘剣での斬り方ですね。

ヒュイ！っと空気を切る音がして、糸がテーブルに落ちました。

「なるほど・・・線で斬るか・・・良い事を聞いた。」

「待て、それでは私だけが斬れないことになる。リユーイ今から特訓だ！・・・何としても極めて見せる。」

「私はどうなるのですか？」

「マルチナはハルベルトだろ。斬るといふより打撃武器だから今のままで良いと思うよ。」

「そうですね。安心しました。」

トロール退治は暇つぶし？

王女様の部屋で調査隊の皆さんはお茶の時間です。

別に午後3時というわけではありませんが、飲みたい時がその時間なのです。

カタン・・・とカップを王女様が置きました。

「・・・それで、博士の話じゃと、唯の転移魔方陣・・・というらしい。唯、記号の一部が変化しているようなので、その意味を調べておるそうじゃ。」

「唯の、転移魔方陣？・・・それなら、わざわざタイルの下に隠すようなものでもないでしょうに・・・」

王女様の言葉にヘンネが返します。

「でも、記号の変化って気になるわね・・・」

「急いでたんで間違えたんだよ・・・きつと。」

こちらは、サンディとライムです。

「魔方陣の記号は厳密だわ。・・・間違えたとは思えない・・・」
ライムの冗談に、しっかりとした答えを返したのはユーミンでした。

でも、「x x x x」と「x x x x」の違いでは、間違いとも意図的とも取れますね・・・

そんな違いなんですけど・・・これまでにこのような間違いをおかした魔道師はおりません。

そうすると意図的になります、そこが、また問題なのです。

魔方陣のちょっとした違いにどんな影響があるかについては詳しく調査された事はありません。

博士達は図書館に閉じこもって過去の魔法実験の結果を調べます。

「まあ・・・期待はしていないが、もう少し待てば何か判るかも知れん・・・待つしかなかるうて・・・」

王女様はそう言うと言とメイドさんが注ぎ足したカップを手に取り、グイ！って一口飲みました。

・・・苦い！！って顔をしています。

話は变つて、こっちはリユーイ達です。

リユーイの刀も手に入れましたし・・・後はオバケの出現を待つだけになりましたが、そんな時に限って出ないものです。

「・・・ギルドの連中は何をしているのだ？・・・早く探して欲しいものだが・・・」

「でも、出ないならそれに越した事はないと思うんだけど・・・」

「前にもオバケを倒せるという話は聞いたことがあるが・・・もし出たら、先ず私達にやらせてくれ・・・ダメならリユーイに譲るから・・・」

「いや・・・俺を頼りにされても困るんだけど・・・」

退屈なので、オバケ退治の順番を決めてるみたいです。

「あのう・・・退屈でしたら・・・ギルドで難易度の高い依頼を受けたらどうでしょうか？」

「・・・それだ（よ）！！！！」

ポーチナの提案にリユーイの腕を掴むとミケナイ、ルミナ、マル

チナが部屋を飛び出してきました。

(待つてくださいい!) 慌てて、ポーチナは4人の後を追い掛けていきます。

ダダダアアアアと廊下を走り、階段を駆け下り、城の中庭を走りぬけ・・城門の衛兵に(マタネ!) って挨拶をすると、王都の町を土煙を上げながらギルドに向いました。

ボタン! っつとギルドのドアが開きました。

ギルドのカウンターにいたお姉さん達は吃驚しました。

だって、凶悪な目付きをした女の子が3人・・ボロボロになった女の子を引き摺ってやってきたからです。

ズンズン・・と3人はカウンターまで歩いてくると、カウンターをバン! っつと3人が叩きました。

「今ある依頼の中で、一番凶悪なのはどれ!」

カウンターのお姉さんは顔を見合わせました。(それは、貴方達です!) とは、言いたいですけど言えません。急いで、討伐依頼書を捲りながら調べます。

「あのう・・此れなんか・・」

恐る恐る1枚の手配書を差し出しました。

3人がずずーっつと覗き込みます。

(・・山奥のトルル退治?)

「あのう・・ダメですか?」

お姉さんがおずおずと尋ねました。

キッ! っつとミケナイに睨まれて、小さくキヤ! っつて言っています。

「先ずはこれで、我慢しよう・皆もいいな！」
ルミナの言葉に2人が頷きます。

「場所は・・そんなに遠くない・山2つほど北だ。滝の傍の大岩の亀裂に洞窟の入口があるそうだ。」

「洞窟か・光球の魔法が要るな・ポーチナは出来るかな？」

「・ハア、ハア・出来ますよ・いきなり走らないで下さい・体力ないんですから・」

ようやくギルドにたどり着いたポーチナはそう答えると、ミケナイの持つてるポロポロの少女を介護してます。

あっちこっち擦り傷だらけの少女をポーチナがハンカチで拭いていると・不思議な事に見る見る傷が塞がっていきます。

破れかけていた服までが修復されていく様子をいつのまにかポーチナは呆然と見守っている事に気が着きました。

（自己修復の魔法？それに自己治療・そんな魔法って聞いたことも無いけど・）

「ウウウウン・・此処何処？」

「ギルドよ。北の山の奥に行つてトルル退治するみたいだけど・」

とりあえず、ポーチナはリユーイに状況を伝えました。

「おお・気がついたな。腕が鈍らないようにトルル退治をするぞ。」

「その前に、食料等の調達だ・出来次第出発するからな！」

そんなこんなで、5人は王都から北の山に向う街道をテクテク・と歩いていきます。

その後、ギルドから雑貨屋へ素早く移動し、5日分の食料と肩から下げるカバンを購入して、王都の北の門に集合しました。その間ポーチナは王女様に報告をしてトル退治の許可を貰います。だって、今はオバケ退治の依頼遂行中ですからね。本来はその期間中は他の依頼を受けられません。でも、腕が鈍らないための訓練を兼ねて・・・ということとで理解を得られています。最も、オバケが出た場合は直ぐに戻る事が条件でしたけど・・・

数時間・・・休みも取らず、ひたすら歩くと周囲は森に囲まれます。森の中の比較的開けた場所を探すと、此処で野宿となります。

ルミナとミケナイ、リユイーの3人では枝渡りでサツサと先に行く事が出来ませんが、マルチナとポーチナの2人にはそんなことが出来ません。

そんな訳で、無難に歩いて進むことにしています。

パチパチと焚火が弾けてます。

携帯食料で簡単な食事を済ませると、ポーチナが皆さんにお茶を配ります。

リユイーは腰のポーチから、前に手に入れたパイプにタバコを詰めて、プカリって一服です。

「お前・・・タバコを吸うのか？」

ミケナイが驚いたようにリユイーに尋ねました。

戦士系の連中は、戦闘時の息切れを毛嫌いするために、タバコを嗜む人は大変少ないのです。

「・・・ちよつとね。ライムには黙っててね・・・」

「では、私も・・・」

一緒になつてパイプ煙らせ始めたのはポーチナです。

「王女様の前だと・・・遠慮しないとイケないので、中々吸えないんですよ・・・」

「さて、最初はリユーイとポーチナでいいな。星が両手の幅に動いたら、交替だ。」

ルミナは、そう言うとサツサと横になります。他の2人も同じように焚火の傍で横になりました。

焚火の番は森の中の獣達の襲撃に備えて必要なことなんですが・・・今日ばかりは森の熊でさえ、5人に近づきません。だって、殺気が駄々漏れ状態なんです。

下手に襲撃しようものなら・・・明日は熊鍋に決定つてなことになるってみんな知ってるみたいです。

ムーオン？

殺気ムンムン・・というか、ジャジャ漏れ状態の3人+2人が森を過ぎて、山道に差し掛かっています。

4人の足並みは少しの乱れもありません。でも、ポーチナは体育系の人ではありませんから、さつきからヒーヒー言ってます。

気の毒がって、リユーイが休憩を提案しても、ギロ！って睨まれるだけです。

それでも、ようやく3回目に休憩提案で、やっと了承して貰えました。

10分程度休むと、また出発です。

上り坂がきつくなつたところで、ついにポーチナがボタン！って倒れてしまいました。

慌てて駆けつけたリユーイが見たものは・・目を回してるポーチナでした。

それからは、リユーイがおぶって進みます。でも、他の3人はホッとして見てるだけです。

普通では考えられないスピードで進んでいるリユーイ達は2日目の夜には、後少して問題の滝まで着くところまで来ていました。

今晩は此処で野宿して、明日の昼前にはトル退治だと意気込んでの野宿です。

食事の後、3人は直ぐにお休みでしたが、リユーイとポーチナは此処でも、最初の焚火の番です。

「今日は、ありがとうございました。」

お茶を飲みながらパイプの煙を煙らせているリユーイにポーチナ

はお礼を言いました。

何といつても、ずっとおぶってくれましたからね。

「いいよ．．．気にしないで！」ってリユーイは言いましたが、ホントに気にならない負荷だったんです。何といつても動力は原発³基分。ぜんぜん苦になりませんでしたからね。

「明日は、いよいよトロール退治ですね．．．頑張ってくださいね。」

「．．．ところで．．．トロールって何？」

そうです。リユーイはトロールってこの間初めて聞いたのでした。

明日、トロール退治をするって言うからには、少しトロールについて聞いてみる必要を感じたのです。

ほら、よく言いますよね。（敵を知り、己を知ればなんとやら．．．

）

「トロールですか．．．知らない事のほうが驚きですけど．．．ひとことと言えば巨人です。」

「強いのか？」

「力は、森の熊さんよりも強く、高い建物なんかひとつ飛び、鳥だ！いやロケット花火だ．．．いや、トロールだ！って巷でも言われているんですよ！」

「要するに動きが素早くて力持ちな巨人なんだ！」

「．．．要約するとそうなりますね．．．」

「それで、戦う上で注意する事なんかある？」

「トロールを見かけで判断しない事！唯それだけです。」

「判った。ありがとう。」

次の日の朝、朝からシチュウウという一般では考えられないような朝食を食べて、腹ごしらえは十分です。

山を少し登って、後は下り坂となった所で滝が見えてきました。華敵の滝みたいな立派な滝の傍に大岩が重なったような入口がポツカリと口を開けていました。

傍に行ってみると、見上げるような入口です。リュウイの背丈の3倍程あります。

洞窟を覗いてみると、中は真っ暗です。

早速、ポーチナが光球【シャイン】の魔法を使って洞窟内を明るく照らし出します。

「では、私が先に行くぞ！」

「まで、私が先だ。」

「私が行きますよ！」

例の3人が言い争いを始めました。

リュウイは（しょうがないなあ・・・）と思いながら、傍らの草を引っこ抜いて簡単な籤を作ると、3人の前にハイ！って籤を出します。

3人は？ってリュウイを見てましたが、直ぐに順番を決める籤だと気付いて草の茎をリュウイの手から引き抜きます。

ミケナイ、マルチナ、ルミナの順番です。

「悪いな・・・先に行くぞ！」

ミケナイは長剣を引き抜くと洞窟の奥に進みます。

4人は、少し遅れて進みました。

「いたぞ！・・・トルだ・・・覚悟！！」

洞窟の奥のほうからミケナイの声が聞えてきました。どうやら、戦闘開始のようです。

ガシン・・・ガシン・・・と武器がぶつかる金属製の音が段々と大き

く聞えてきます。

そして、リユイーが見たものは・
ムーオンです・テレビで見たアニメの主人公そのものが大きく
なって、ミケナイと戦っていました。

・確かにムーオンは、ムーミ〇・トルルって言われてましたけ
ど・

リユイーのヤル気度はドベンって限りなくゼロに近い値まで低下
してしまいました。

でも、ミケナイは決して弱い冒険者ではありません。どちらかと
言くと熟練者です。そのミケナイの攻撃をデツカイ棍棒で防いでい
ます。

確かに、素早い・

そのまま、何回か打ち合っていました。勝負は尽きません。・
ミケナイの息遣いが激しくなっています。

更に何回か打ち合うと足元がふら付いてきました。

「2番手。マルチナ！」

リユイーはそう叫ぶと、ターボ1でミケナイを救援に行きます。
お姫様ダツコでミケナイをポーチナの所まで運ぶと、ポーチナに
介護を頼みます。

そして、マルチナの戦いを見学します。

マルチナはターボを使って高速の斬撃を叩きこみます。
でも・その攻撃を・ボヨンってムーオンの体は受け止めてし
まいます。

マルチナのハルベルトの斧は切れ味はそんなに良くありません・
どちらかと言うと打撃力で切断するという感じの武器です。

とすると・打撃系の武器は、ムーオンの何処に間接があるか判

らないほどの皮下脂肪により跳ね返ってしまうのかも知れません。
マルチナがハルベルトで斬撃を繰り返して放っているとき、相手の
棍棒でハルベルトが弾かれてしまいました。
慌てて、リユーイは叫びます。

「3番手。ルミナ！」

ルミナはオニギリを抜くとススーってムーオンの前に移動しまし
た。

シユタ！って飛び上がると袈裟懸けに斬りつけます。

スイーってオニギリがムーオンの体に食込みます。

「おお・・・お！」

皆が感心して見守る中・・・切り裂かれた体がピタンってくっ付き
ました。

切れ味のいい刃物で切った体は直ぐにくっ付けることが出来るっ
て聞いたことはありませんけど・・・

リユーイは気になったことを試してみる事にしました。

「助っ人。ポーチナ！」

え！・・・私？・・・自分を指差しながらポーチナは吃驚してます。

「そう。ちょっと試したいんだ。ルミナが切ったら、直ぐにその
場所を火炎弾で焼いて欲しい。」

「短詠唱での火炎弾ね・・・判ったわ！」

そんな外野の事情に関係なく次々とルミナはムーオンの体を切り
刻んでいきます。

「火炎弾！・・・火炎弾！・・・火炎弾！！」

ポーチナが火炎弾を連続発射していきます。

すると・・・切り裂かれた肉体の組織を焼かれた箇所は、再びくっ

付く事がありません。

みるみるムーオンは切り傷だらけになっていきます。

「ミケナイ。マルチナ・もう一度行ける？」

傷だらけのムーオンを見て、2人は頷きました。

「では、狙いはルミナとポーチナが付けた傷を抉るように！
2人は再度戦いに身を投じます。

おにぎり3つ

山奥の洞窟にいたトルル・・・それは、見かけはムーオンですが、とても強い生物です。

通常の剣速では、軽く棍棒で防がれてしまい・・・

打撃を与えれば、ボヨーンって弾かれ・・・

ようやく斬る事が出来たかと思えば、見てるそばから傷が塞がります。

リユーイの機転でポーチナの魔法攻撃を併用して傷口を焼いてしまえばそれまで、って所まではきましたけど・・・

「まだだ。斬って、斬って・・・斬りまくれ!!」

ミケナイが3人を励ましています。

3人掛かりで、ポーチナの火炎弾連続攻撃の併用で、ムーオンの傷口がどんどん広がり、そして深くなっていきます。

気のせいか、少し動きも鈍くなってきたようです。ミケナイの攻撃がきちんと当たるようですし・・・

しかし、それでもムーオンは、デツカイ棍棒を振り回して、3人の攻撃を防ごうとしています。

このままでは、3人のスタミナ切れでムーオンの勝ちになりそうな気配が濃厚です。

(姫さん・・・聞える?)

(はい!・・・なんでしょか?)

(あの巨人に弱点って無いの?)

(あんたバカ?・・・あれは生物!・・・中枢神経を切断するか、血流制御の心臓を止めればいいでしょうに・・・)

(でも・・・あれの首って何処?・・・それに、心臓の位置って俺と

同じ?)

(確かに・・・首は判んないわね。・・・心臓の位置は貴方の視覚をCTスキャンモードに変更すれば判るかも?・・・でも、あの体だと脂肪が厚くて攻撃は難しいかもね。)

(困ったな・・・)

(困る事無いでしょう!簡単に片付けられるでしょうに!中枢神経そのものを破壊すればいいのよ。)

(頭ねえ・・・さつきから攻撃して、傷は付くんだけど・・・そうか!!!)

(閃いた?)

(うん。結果は判らないけど・・・方法を1つ見つけた。・・・相談にのってくれてありがとう!)

(何だか判らないけど・・・何とかできるなら、それでいいわ。ダメなら貴方が殺りなさい!)

「ミケナイ!!・・・来てくれ!!」

リユイーの叫びを聞きつけ、攻撃の手を緩めてミケナイが急いでリユイーの許に跳んで来ました。

「何だ?・・・まだまだやれるぞ!」

「いや、ミケナイの体力じゃなくて・・・此れをゴニョゴニョ・・・」

驚いて、リユイーをマジマジと見るミケナイに、背負った刀を抜いて渡します。

ミケナイは渡された刀の感触を確かめます。

今持っている金貨10枚の長剣に比べて、少し軽いですがその切れ味はあの時に見せて貰いました。

ルミナのオニギリと負けず劣らずの切れ味を持っています。

「いいのか?・・・お前が殺ればいいと思うのだが・・・」

「最初に攻撃したのは、ミケナイだね。・・・だからトロールの最後はやはりミケナイに・・・」

ミケナイはその言葉に嬉しそうに頷いて、長剣をその場に残し刀を持ってムーオンに向っていきます。

ムーオンに対してルミナとマルチナの波状攻撃とポーチナの火炎弾攻撃はずっと継続しています。

そんな2人の正面攻撃に対して、ミケナイは斜めに走って行き、そして高く飛び上がりました。

「逝け!!!」

裂帛の叫びとともに、ミケナイはムーオンの耳に刀を突き通します。・・・そして、肩に飛び乗ると、柄まで刺し通して捻ります。・・・

「・・・」

突然の出来事に誰も声が出ません。

ムーオンのまん丸黒目玉が、どんよりと光りを無くし・・・裏返って白目となりました。

巨体がグラリと揺れたかと思うと・・・ズダーン!!!と斃れました。

「殺ったの?」

「ああ・・・ミケナイが倒した。」

ポーチナの言葉にリユーイが答えます。

「斬れる相手じゃなかったが・・・」

「脳を破壊した。耳は脳に直結している。しかも肉が付かない場所だ。ルミナ達が前面で攻撃してくれたからミケナイの不意打ちに対処出来なかったようだ。」

「なるほど・・・弱点を狙ったわけだな。」

ルミナとリユーイが話していると、ミケナイが刀を下げやって

きました。

「ありがとう・・・花を持たせて貰って・・・」

ミケナイはそう言うのと刀をリユーイに差し出しました。

リユーイは首を振ると、背中の刀の鞘を外してミケナイに渡します。

「俺には、別の刀があるから・・・これはミケナイにあげるよ・・・それと、トルルって鬼の一種だよね・・・それを倒したこの刀・・・銘を「鬼斬り」って呼びたいんだけど・・・」

「ありがたい話だが・・・いいのか？・・・こんな剣はもう2度と手に入らないだろうに・・・」

「ちよつと待て・・・オニギリはこの剣だぞ！・・・しかし、確かにトルルを倒しているし・・・」

「ミケナイ・・・貰って欲しい・・・やはりオバケ退治には通常の剣では不足する・・・それと、ルミナ。オニギリは剣の銘だけど、鬼を斬るか斬った場合はその銘を名乗る資格があると思うんだ。あの意味名誉称号みたいな銘だと思うんだけど・・・」

「この剣が生まれた時の銘ではなくて、この剣で鬼を退治したことから生まれた銘だというのか・・・」

「後で、妹さんに聞いてみたら？きつとそんな昔話が聞けると思うよ。」

「あゝ・・・そろそろ此処を出ませんか？・・・トルル退治も終了しましたし・・・」

ポーチナの提案に、思わず顔を見合わせ笑い始める4人でした。そうです。とりあえず終了なのです。

ところで・・・討伐の証明は・・・何と！トルルの足にある足環でした。

フラフープみたいな足環をミケナイが担いで岩の洞窟を出ようとしたときです。

洞窟の奥から何かが近づいてくる足音がします。

ドスン・ドスン・という大きな足音です。

そういえば、この洞窟にトロールが何匹いるかは、依頼書には書かれていませんでした。

「最後は俺ってことになるのかな？・皆逃げて昨夜泊まった所で待つてくれない？」

リユーイの提案に4人は渋りましたが、やっとの思いでトロール1匹を倒したばかりです。体力もあまり残っていません。

リユーイの馬鹿げた攻撃力をルミナはよく知っています。

「任せる！・だが無理はするな！」

ルミナはそう言って尚も食い下がるミケナイとマルチナの服を掴んで出口に向います。

ポーチナが去り際に光球を2個、リユーイの頭上にあげました。

リユーイは4人にバイバイって手を振っています。

「急げ・リユーイの戦闘力はお前達の想像を遥かに超えている。巻き込まれるぞ！！」

ルミナは3人を急かせます。洞窟を出て、山を登り、大木の陰に隠れました。遥か下に大岩が作る洞窟を見る事が出来ます。

リユーイは、4人が洞窟を出たことを確認して後を振り向きます。

洞窟の奥のほうからムーオンが2匹でできます。

どうやら、この洞窟の奥はトロール達の住処のようです。

腰のポーチから懐中電灯モードキを取り出して親指でスイッチを力
ちって操作すると1.2mのプラズマソードの出来上がり・
上段に構えると【ターボ1】と小さく唱えます。

たちまち、ムー〇ンの動きが緩慢に見えてきます。

ダン！つと地面を蹴って飛び上がると、最初のムー〇ンの大きな
顎の下を横に払います・ポトンつと首が落ちました。

リユーイは倒れるムー〇ンを台にして更に飛び上がります。

続いて奥から出てきたムー〇ンを頭から真つ二つにします。

斃れた2匹から足環を回収していると、奥からまた足音が響いて
きました。

一々倒していると限がありません。

急いでリユーイは洞窟を出ます。そして入口の大岩に、プラズマ
ソードを突き刺しました。

「はああ・・・！」

渾身の力をプラズマソードを伸ばすとプラズマに電気を送ります。

プラズマは電気を通します。しかもリユーイが一気に送りこんだ

電力は原発3基分・

大岩の内部の結晶状態で閉じ込められていた水が一気に蒸発して
水蒸気爆発を起しました。

ドドオオオン！！

大岩が大爆発した後には、洞窟の跡もありません。土石で埋めら
れてしまったようです。

リユーイはしばらく様子を見ていましたが、何か動くものもあり
ません。

完全にトロールの洞窟は閉鎖したようです。

左手に持ったプラズマソードのスイッチを切って懐中電灯モードキ

に変えると、腰のポーチに戻します。

大きな足環を2個持ってルミナ達が待っている野宿に向いました。

「何なんだ、あの剣は？」

ミケナイが叫んでます。

「リユイーが使う光の剣だ。．．一度私も持ってみたが．．光りの剣を出すことも出来なかった．．」

ルミナがボソボソと小さな声で説明してます。

「とんでもない威力ですね。何故大岩が爆発したのか不明です．．魔力も感じませんでした．．」

ポーチナが、あの爆発は魔力ではないと否定してます。

「あ、来た。来た．．ヤッホー！．．此処だよ！」

マルチナが山道を上ってきたリユイーに手を振りました。

リユイーも気が付いたみたいで手を振ってます。

「どうにか片付いたよ．．」

「二匹殺ったのか．．凄い威力だな．．」

リユイーの報告を聞いたミケナイは持ってきた足環2個を見て驚いています。

「光りの剣で斬った．．ということか？」

「一匹は首を落とした．．もう一匹は真つ二つ．．」

ミケナイの確認に、リユイーは状況を説明しました。

「お前がこの「鬼斬り」を手放す理由が判ったよ．．でも、そうすると、お前も「鬼斬り」を持つてるといことになるな．．」

「そうだね。あの剣に名前は無いから・・・此れからは」おにぎり
って呼ぼうかな・・・」

リユーイはにっこり笑いながら言いました。

「そうすると・・・おにぎり3つですね・・・私のは・・・おにぎり
にはなりません・・・残念です。」

マルチナが恨めしそうに言いました。

「私も持っていないですよ・・・さあ、帰りましょう!」

ポーチナはそう言って帰途を促します。

5人が王都に戻ったのは2日後でした。

肩に担いだ報奨金

途中の森で野宿すると、次の日の昼下がりには王都に凱旋です。フラフープみたいなトロルの足環は重いのでリユーイが担いでいます。

ボタンとミケナイがギルドの扉を開きます。

目の据わった3人（ミケナイ、ルミナ、マルチナの3人です）がズンズンとカウンターのお姉さん目掛けて歩きます。

お姉さんは思わず逃げようとしたが、恐怖で動けません・

「終わったぞ！・・トロル3匹退治終了だ。・・トロルの洞窟は破壊したので、もう2度と出ることは無い！」

ミケナイは、そう言ってリユーイの背中からフラフープを3個を取ると、ドン！ってカウンターに置きました。

「「ええー！」」

ギルドの中が一瞬騒然となります。

トロルが足環をしているっていうことは結構誰でも知っていますが、見ることは滅多にできないのです。・・大体、見た人はトロルにやられてますから・・極まれに逃げ帰った者達がそんな話を広めています。

此処に、その足環があるのです。

「ちょっと待ってください・・鑑定の者を呼びますから・・」

お姉さんはそう言って奥に引っ込むと、ドワーフのお爺さんを連れてきました。

「これか？・・・トルルの足環ってのは・・・」

お爺さんは、1個を手にするとう念に調べています。手に持ったり、叩いたり、振ってみたり、噛んで見たり・・・

「確かにトルルの足環だ。わしらより更に深い洞窟のドワーフの作品じゃ。」

「それでは、討伐完了ということでもいいな？」

ルミナが念を押して確認します。

「はい。確認がとれましたのでOKです。・・・少し待ってくださいね。」

「所で、この足環じゃが・・・譲って貰えんかの？」

「いいぞ！・・・幾らで買う？」

「金貨50を出そう・・・」

「「売った！」」

ルミナとミケナイは即答しました。最大の功労者のリユイーの意見は完全無視です。

「まっとなれ。」ってお爺さんも奥に行ってしまった。

手持ちぶたさの5人の所にギルドの外からお姉さんが帰ってきました。

「皆さん・・・此方をお願いします。」

扉の外に向って叫んでいます。

すると、3人の男が袋を担いでやってきました。

啞然と見ている5人の前に袋が3個置かれます。

「ご苦労さまでした。報奨金の金貨1200枚です。商人ギルド

の金貨だけでは足りなかったので銀貨が混じってます。ごめんなさい！」

「ええ……」

5人が吃驚しています。だって、そんな高額な依頼だったとは思わなかったからです。

そこに、お爺さんもやってきました。

「これが買取り金じゃ。金貨150枚・確かに渡したぞ！」
5人の前にまた1つ袋が増えました。

「どうします？…皆で分けますか？」

「…やはり、王女様に事情を説明したほうが…」

「そうだね。」

ポーチナを除いた4人で袋を1つずつ担ぐとお城に向います。

そういえば、何も言わずにお城を飛び出してきたことを思い出しました。

城に近づくにつれ、5人の足取りは重くなります。

お城に入り、王女様の部屋に近づく頃には、引き摺るような足取りです。

トントンと部屋をノックします。

「開いてるぞ！」

王女様の声がやけに低く聞えます。

そう…つと扉が開くと、リユーイが扉から飛ばされるように入ってきました。

「何だ？・・・1人か？・・・」

「いや・・・それが、その・・・あれでして・・・」

「なんだ？・・・そういえば、何処かに行っていたようだが・・・」

突然扉が開き、4人が倒れるように部屋に飛び込みます。・・・覗いていたようですね。

「ポーチナもいるのか。訳を話してみよ。」

「しょうがないなってポーチナが経緯を説明します。」

ふんふん・・・と王女様は聞いていましたが、トロールを退治したと聞いて、「何！」って飛び上がりました。

「ちよつと待て・・・では、トロールを斬ったというのか？」

「正確には、斬ってもあまり効果が無かったので、耳から刀を差し込み脳幹を破壊した・・・後の2匹はリユーイが斬った・・・という次第です。」

王女様はしばらく考えていました。

「トロールはオバケに近いものではないか・・・と考えていたのだ・・・斬って、焼く・・・は効果があったか・・・それと、脳幹を破壊して倒したということはオバケにも応用できそうだな・・・」

「それで、ご相談なんですけど・・・」

「なんじゃ。その情報の褒賞金は弾むぞ。」

「いや・・・そうじゃなくて、トロール退治の報奨金と足環を売ったら・・・」

4人は袋をドン！ってテーブルに置きました。

「金貨1350枚になつたんです。どうしましょう・・・」

王女様は、その金額に吃驚してましたが、やがて笑い出しました。
「ハハハ・・・いや、悪気はない。すまん・・・そうか・・・あまりの大金に使えないか・・・」

「それなら、私が貰おう。オバケ対策費として有効に使おう・・・しかし、トロール退治が金貨無しも気の毒だ。350枚はお前達と調査をしているサンディ達で別けてはどうだ。」

そうすると・・・5+5ですから、10人です。1人金貨35枚・・・なんとなく使える金額になります。

じゃあ、これで・・・と王女様の部屋を出ようとした5人を王女様
が呼び止めました。

「ちょっと待て・・・近頃、闘技場でメイド達が怪しい動きをしているのだが・・・その方達何かしらぬか？」

ギク！って5人の動きが止まります。
だって、関係者そのものですからね。

「それは・・・リユーイ達の演舞を真似してるんだと思います・・・ルミナが美容にいいっていいましたから・・・」

ポーチナがルミナのジト目を気にせずに報告します。

「そうか・・・美容にいいのか・・・そうか・・・よし！行っていいぞ。」

5人はささーっと部屋を出ます。

絶対、明日は王女様も混ざってるぞ！って思いながら自分達の部屋にダッシュです。

自分達に用意された部屋に戻るなり、部屋に鍵を掛けます。これ以上面倒にまきこまれたくありませんからね。

用意されてたお茶のセットでポーチナが皆にお茶を入れたくれま
した。

やっと一息ついたって感じです。

トルル相手のほうが気が休まります。

そんな、ほつとした雰囲気の中、窓のカーテンが揺れました。

そして、何時の間にかリユイの隣でエリアさんがお茶を飲んで
ました。

「面白い事してきたねえ．．誘ってくれたらよかったのにねえ．．

「すみません．．」

「いや、それはいいんだけどねえ．．刀でトルルは斬れたかねえ．

「．．
斬るんじゃないかと、突き刺しました．．斬る事も出来たと思
います．．試してません。」

「．．しかたないねえ．．他にににか必要なことはないかねえ．．

「それでしたら、お願いしたい事があります．．爆発する槍は
作れませんか？先端は刀と同じ鍛えで．．」

「調べて見ようかねえ．．」

エリアさんはそんなことを言っていました。が何時の間にかいなくな
りました。まるで忍者みたいです。

「爆発する槍って？」

「うん。俺達にはおにぎりがあるけど・・・マルチナは有効な武器はないでしょ。刀で突き刺せるなら、同じ鍛え方の槍でも突き刺せると思うんだ。そして、それが爆発したら・・・一発でトロールを倒せるよ。」

ルミナの問いにそう答えました。

「ありがと!」ってマルチナはリユイーを抱きしめています。

ちょっと嬉しいリユイーでしたが・・・よく考えると同性なんですよね。残念でした!

雷槍ゲイボルグ

「そうなんですか・・・」

「残念だねえ。」

マルチナの槍を作ってもらおうと、リユーイの刀・・・現在のミケナイの鬼斬りを造ってくれたドワーフの工房に行ったところ、主のお爺さんは国に帰ったらしく、工房を弟子に譲っていたみたいだ。刀鍛冶で、新しい技を覚えたことから、ドワーフ仲間に伝えたいらしいのだが、いないとなると後継者ではちよつと心もとない。

エリアさんはそれだけ伝えると早々に帰っていったが、マルチナの落胆する姿はちよつと傍にもよれない状況だ。

ドヨンとしたオーラに包まれてテーブルに顔を伏せていた。

(なんか暗くない!)

(実は、・・・という訳なんだ。)

(何とかなるかも。要するに刺さってドカンな槍なんですよ。)

(簡単に言つと、そうなる。)

(冶金部門のガス抜きに丁度いいわ。出来たら連絡する)

リユーイはマルチナの傍まで歩いていくと、そつと背中を抱しめてあげます。

「俺には無理だったけど、俺の守護者がマルチナに贈るって言ってる。もう少し待っててね。」

「ホントですか・・・信じちゃいますよ・・・」

ドヨンとしたオーラがみるみる薄れていきます。

「おいおい、大丈夫なのか？」
「たぶんな、私も以前これを貰った。」

ルミナはそう言っつてミケナイにコンパクトを見せています。
パカってひらくと、ルミナそっくりな少女が此方を覗いてる。
今日は、皆さん御揃いでお茶会ですか？（なんて言っつるけど・・・
元気で何よりだ。

ところで、誰も知らない船の中はどうなっつてるかというところ・・・

（・・・という訳だから、何とかしなさい！）

（言っつていることは判ります。それなりの重さで良く刺さる・・・
これは何とかかなりますが、爆発させるとなると、問題です！）

（別に、爆発させなくても、いいのよ。そういう風に見せる事が
出来ればいいの！）

（姫様！ あらかじめ槍に高電圧をチャージしておき刺さったシ
ョックで開放させ、体の水分で水蒸気爆発させる。ということでは
？）

（それでもOK！ 出来るの？）

（リユーイ様でしたらわけなく出来ませんが、一般人では・・・）

（そのアイデア！ うちの部署が参戦しましょう！！）

（っつて！ アンタ確か？）

（保全局です。要するに、高電圧を一時的にチャージすればいい
ことですよね。）

（そうだが・・・）

（柄の部分に積層コンデンサを仕込めばいいのです。後は、穂先
の両面に電極を付ければ放電は可能です。）

（穂先はセラミックとチタンの傾斜合金を想定してましたから、

電極の代わりに出来ます。ええい！思い切って二股にしましょう。(

(後は、安全装置だが・・・着点後方45度に円形に防御フィールドを展開させる。)

(何とか、なりそうね・・・そうすると、この槍の名は、ゲイボルグってことでもいいわね！)

(雷槍と呼ばうかと思いましたが、要望は爆裂槍ですからそれでもいいでしょう。)

(うゝん。雷槍も捨てがたいわね・・・いいわ、【雷槍ゲイボルグ】これで行きましょう！)

と、こんな感じで頑張ってるようです。

話は、リユーイ達に戻ります。

トロール退治を基に役割分担を考えてるみたいです。

「ポーチナの火炎弾攻撃の中を私とミケナイで攻撃する。」

「相手が弱り初めたら、マルチナが傷を更に深くする。」

「最後は、ルミナが私が急所を斬って終わりだ・・・」

「しかし、急所が何処か判らんぞ。」

「その時は、斬って斬って斬りまくる！」

何か、かなりアバウトな方法ですが、そんなんで倒せるのでしょうか。それに、自分の役割が無いのも気になります。

「あのう・・・俺は何を？」

「見てればいい。ポーチナのお守りと保険担当だ！」

ミケナイさんの即答です。

それはないだろうって思いましたが、口には出しません。

でも、4人でどうしようもなければ、参戦するしかないのですから確かに保険です。

この世界のことですから、リユーイがあまり表に出るのも考えものです。

こんな感じで、なんだかんだ話が進んでいるのか横に逸れているのかわからないようなお茶会をしていると、（ピンポン！）ってリユーイの頭にお知らせベルが鳴りました。

（どうやら、何とかできたんで、そっちに送るね。後、5分後にリユーイの前方10mに落とすから、回収よろしく！）

（あと、4分55秒！）

「マルチナ。来い！」

マルチナの腕を掴むと部屋を飛び出します。

ルミナ達も、何だ？って感じでとりあえず後を追いかけてました。

（あと、4分00秒）

階段を下りて通路に出ます。とにかく落下物の対処です。広い場所が望まれますが・

城の闘技場に出ると、そこにはメイドさん達に混じって王女様が演武の最中です。

「おお、リユーイではないか。この演武とか言うものは中々いいぞ。お前達も・・・」

王女様はリユーイを見たがめて、演武をさそいましたが、闘技場の盛況を見た途端、ガックリと首を落とすと、急いでどっかに行っていました。

（あと、3分05秒）

頭の中で無常な宣告が響いてきます。

次にひらめいた場所はお城の広場です。今度はマルチナを抱えて

走ります。

通路をダダダって走り抜けると、お城の広場に向いました。最後の扉を開けると・・・そこには、他国からの来客でしょうか。豪華な馬車が止まっています。

直ぐに回れ右をして、とにかくお城の通路にある扉を片っ端から開けていきます。

(あと、1分10秒)

ボタンと扉を開けると、小さな中庭です。メイドさんが数人テールでお茶を飲んでました。

「あらら、リユーイ様。・・・見つかってしまいましたね。ここは、私達の憩いの場所でしたのに・・・」

「そんなこといいから、ちょっとどいて！ 出来れば外に出て欲しいんだけど・・・」

中庭の広さは20m程度の四角形をしています。これなら、リユーイの前方10mへの着弾は何とかなるかもしれません。

「ようやく追いついたぞ。って、何してるんだ！」

ルミナ達がリユーイの後を追いかけてましたが、ようやく停止したんで追いついたみたいです。ハアハアって息切れしてますけど。

皆が揃ったので、リユーイは少し前に出ます。

「出来れば、少し下がってね。いま、天からマルチナの武器が降ってくるから！」

天から降ってくるって言葉に、えっ？って思いましたが、リユーイの言葉にウソはない事も知っています。

(あと、10秒)

ヒューーンって音が頭上高いところから聞えてきます。皆で上を向くと、何かキラって光りました。何かかんでもないスピードで落ちてきます。

「誰でもいい。結界を早く！」
はい！ってメイドさんの誰かが防護壁を展開します。

ドドオーン！！

凄まじい音とともに地面が一瞬揺れました。土ぼこりで前がよく見えません。

ようやくほこりが納まってそこに見えるものは、大きく陥没したクレーターの真中に1本の槍が突き刺さってます。

メイドさん達のお茶会時点の美しい芝生は跡形もありません。げっ！って感じです。後で王女様に怒られそうです。

「マルチナ。あれが天の贈り物だ！」

リユイの声で、マルチナはクレーターを下りていきました。エイ！って槍を引き抜きます。

槍の全長は3m程。2つに分かれた穂先は片方だけでも片腕程の長さがあります。そして、その色は王女様が使白い陶磁器のように真っ白です。柄は見たことない金色が混じった金属ですが、全体の重さは今まで使っていたハルベルトとそれ程変わりません。

真っ白な穂先はあれほどのスピードで落ちてきたのに傷1つ有りません。

それにしても、不思議な穂先です。

少しねじれの付いた穂先の刃に指を当ててみました。

「イタ！」

ちよっと触れただけでしたが、指先に血が滲んでいます。とんで

もない切れ味です。

(その辺に立木がないかな?)

(なんで?)

(【雷槍ゲイボルグ】の機能を確認するためよ。今、操作方法を伝えるわ!)

リユーイの頭に操作手順が転送されてきました。

「何があつたのだ?」

王女様がやってきました。

「マルチナに天から槍を授かりました。今、マルチナが持っているものがそうです。」

「フム、しかし、この状況は・・早速だが、あの報奨金を使わせて貰うぞ!」

まあ、仕方ありません。それにもう差し上げたお金ですし、自分達が出す訳ではありませんからね。

「王女様。立木を1本頂けませんか? マルチナの槍の機能を確認してみたいんです。」

「1本位なら、容易いものだ。太くなりすぎて困っているのがある。こつちだ!」

王女様に連れられて皆は歩いていきます。

通路を奥に進むと、扉を開けました。

そこも、さつきと同じような中庭ですが、こつちの方がかなり広いです。30m四方はあるようです。そして、真中に大きな木が立っています。

なるほど邪魔です。もう少し小さければ程よい木陰でお茶会なんか開くの都合がいいんですけど。

「これだ。太くなりすぎてどうにも出来ん。斬るなり、焼くなり、好きにしてよいぞ！」

王女様のありがたいお言葉に従います。

早速、マルチナを呼び寄せます。

「この槍【雷槍ゲイボルグ】の使い方教える。」

「エッ！ この槍で突き刺すんじゃないんですか？」

「突き刺す事も出来るけど・・・これは、こんな事も出来る。」

リユーイは槍の柄を握って、動力炉から腕を通して大電流を柄にチャージします。

みるみる内に2つの穂先間に小さな稲妻が走り出しました。

「俺の魔力を槍に与えると槍は雷を帯びる。だから、雷槍なんだ。これだけでも、威力は十分だけど、ホントの威力はそんなじゃない。い。」

マルチナが振り回す槍から小さな稲妻が走るのを見て、見学の皆さんは吃驚してます。

「マルチナ。投げろ！」

リユーイの声に、マルチナは槍を立木に投擲すると、ズン！と穂先が軽く根元まで刺さってしまいました。

そして・・・

バゴオオン！！

大きな音と共に立木が吹っ飛びました。ゆっくりと立木上部の木立が降ってきます。

幹は粉々に弾けて周囲の壁にへばり付いてますが、マルチナの後方には不思議な事に木切れ1個も飛んで来ませんでした。

「凄まじい威力の槍だな。銘はあるのか？」

「【雷槍ゲイボルグ】内側から爆裂させる槍だ。」

王女様の問いにリユーイはそう答えました。

星1号作戦

マルチナはゲイボルグを、刺繍の付いた綺麗なハンカチでナデナデしています。

他の4人はゲツて感じて見てますが、声を出すことはありません。自分だけってさっきまでドヨンってしてましたから、そして今伝説級の槍を手に入れたのですからその嬉しさが十分理解できますからね。

でも、ハンカチでホコリを払っているのはちょっとですけど。

「さて、これでリユーイに頼らずともオバケを退治できる武器が揃ったことになる。」

4人はウンウンと頷きます。

「しかし未だに、オバケ出現の兆しが無いのはどういう訳だ！」「ミケナイは机をドンと拳で打ちました。

「え〜と。今までのオバケ出現状況から何か判りませんか？」「ポーチナがみんなのコップにお茶を入れながら提案しました。

「ウム、確かに。先ず、最初のオバケだな。あれは・・・」

「ジギタ草の採取依頼で出会ったんだ。木の上にいたんだっけ。」

「2度目は、巨大熊だった。盗賊団に襲われた後だった。」

「3度目は、お城の闘技場で部隊長に化けていた。」

「共通点は・・・リユーイ？」

「確かにリユーイのいる所に現れる・・・ということは、適当に依頼を受けていればその内オバケに合えるということか？」

「たぶん。・・・この前は少しやる気を出しすぎた。のんびり依頼をこなしていれば、その内合える可能性が高い。現に、リユーイは「若草の月」から「新緑の月」の間に3回合っているのだ。」

ルミナとミケナイの会話にリユーイはドキッとしましたが、確かにオバケはリユーイと共にあるって感じなのです。

「では、日帰り依頼をこなす形でリユーイを餌にオバケを誘き出す。ポーチナ、王女様に一応断ってきてくれ。」

「はい！」ってポーチナは部屋を出て行きました。

「さて、餌だが・・・」

「リユーイに依頼を処理させ、私達は影から監視する・・・どうだ！」

何か悪巧みの世界ですね。越後屋とお代官様の会話に近い物があります。

しばらくするとポーチナが戻ってきました。

「依頼を受ける事は問題ないそうです。でも、万が一がありますから、日帰り依頼をするようにとのことです。あとは、報酬は冒険者の溜まり場に成っている酒場で、冒険者に奢ること！それとこの作戦を「星1号作戦」と命名する。だそうです。」

「冒険者の溜まり場と言つと・・・とつとはむはむ亭」だな。よし分かった。」

「では、明日の朝から「星1号作戦」を開始する！」

次の日、「星1号作戦」が開始されました。なんとなく名前だけは格好いいですね。

リユーイがとぼとぼとギルドに歩いていきます。

その後、約50m位の所にミケナイ、ルミナ、マルチナ、ポーチナの4人が黒いマントに黒い覆面を被って隠れながら様子を見てます。

怪しさ抜群の破壊力ですから、通りを歩いている人達は遠巻きにして通っている事に4人は気がつきません。

「ギルドに入りましたよ！ どんな依頼を受けるんでしょうか？」
「ギルドの連絡員から報告です。ジギタ草10本の採取依頼です。」
「うです。」

「ジギタ草？・・・何処で採れるんだ？」
「今の季節だと・・・森の中。いいぞ、皆先行するぞ！」

怪しい4人組みは通りの影で話し合っていると、サササーつと王都の北へ向う街道に向かいます。

街道を少し行くと、小さな祠があります。

キョロキョロと周りを見ながら祠の後ろに素早く隠れました。

「誰にも見れなかったな？」

「大丈夫だ。それよりリユーイは？」

「見えてきましたよ。」

祠から頭を出して街道を見ていたポーチナをミケナイが素早く引張りこみます。

「あいつの5感は半端じゃねえ・・・隠れてる。」

何か、完全に悪役みたいな感じですが、これでもお化け退治に一生懸命なんですよ・・・って思いたい。

チャリン、チャリンってリユーイの鋼の杖についた鉄のワツカが杖をつく度に澄んだ音を立てます。

4人が隠れてる祠にだんだん近づいて・・・止まりました。

後の4人はドキドキですけど・・・そして、今度は音が少しづつ遠ざかっていきます。

ほっと4人は息をつきました。なんかとても緊張したみたいです。

「行くぞ！」

ミケナイの言葉に3人が頷きました。

そして、街道から離れた畑の中を低い姿勢で走り抜けます。時々変りばんこに頭を上げてリユイーの姿を確認します。

(さつきから、付かず離れず4人が付いてきてるけど、かまわないの?)

(俺が行く先々にオバケが出るからって、俺を餌に誘き出そうとしてるみたいなんだけど・・・)

(ふ〜ん・・・でも、この辺りにはいないと思うけどなあ。)

(俺も、そう思うんだけど・・・後で見る4人はそう思わないんだよね。)

(でも結構いい線いってるかもね。)

(それって?)

(共鳴なのかしら? それとも異質な存在を排除し合う別なものか?・・・また後でね。ちよっと分析しないと・・・)

1人になったリユイーは森に入ると、キョロキョロと辺りを探し始めました。ジギタ草を10本採らなくては帰れません。

ミケナイ達も森の木陰でお菓子を食べながらたまにリユイーを見張っています。

そこは、森の奥深く・・・

木立が鬱蒼と茂っていましたが、突然木立の一角が綺麗に消えうせると、魔方陣が浮んでクルクルと光りながら回っています。

なにやらボンヤリと魔方陣の中に大きな影が浮かび上がってきた。

そして、魔方陣の光りが消えて其処に現れた物は、首長竜のように大きな体と長い首と尾を持った怪物でした。首長竜は草食ですが、この怪物の頭には鋭い牙が並んだ大きな口があります。あまりの大きさに目や鼻が触手のように頭から飛び出てます。当然、脳みそが入るような場所はありませんから、体のどこかにはあると思います。

ギャオーン！！

大きな叫び声を辺りこだまさせると、怪物は何かに着られるように森を歩き出しました。

「ウン？・・・何か聞えたような気がするが・・・」

赤い敷物の上に座って、お茶を飲んでいたミケナイが言いましたが、誰も気に留めません。

4人がもつか気になっているのは最後に残ったクッキーを誰が取るのか、という事でしたから・・・

互いの視線を牽制しまくってますけど、現在も星1号作戦は継続中のはずです。こんなんで大丈夫なんでしょうか。ちょっと気になっつてしまいます。

リユーイはというと、とくにジギタ草10本を手に入れて森を出ようとしています。

はぁ・・・というような投げやりな、感じが遠くからでもわかる状態です。

クッキー争奪戦の勝利者となったポーチナが、ふとリユーイのいた方向を見ると、其処には誰もおりません。慌てて立ち上がると周囲を見渡します。

そして、ようやく森から出ようとしているリユーイを見つけました。

ほっと息を吐きます。見つかって良かった！って感じですよ。

「皆さん。リユーイさんが森を出ようとしてます。追いかけてみましょう！」

ミケナイ達はテキパキと道具を仕舞い、敷物を丸めます。皆で手分けして肩に背負うと、改めてリユーイを追いかけます。

でも、近づきすぎると感のいいリユーイに見つかってしまいますから、街道を大きく迂回して荒地を走り、畑の中を身を低くして疾走します。

やっとリユーイの先方に出られて一息ついたミケナイの目に映ったものは、リユーイがトボトボ歩いている姿でした。

それともう一つ、遙か森の彼方から木々をなぎ倒して進んでくる怪物の姿でした。

彼女達の勝利

ミケナイは驚きで声も出ません。
だって、そもそもこの作戦自体がミケナイ達の退屈しのぎに近いものだったからです。

賛成したルミナやマルチナ、ポーチナだって、本気で信じていた訳ではありません。王女様だって、城を壊される前に適当なガス抜き程度に考えていたようです。

それが、いきなり、大正解！！誰だって驚きますよね。

「どうするんだ！」

ルミナが棒立ちになったミケナイに気付き、その視線の先にいるオバケを見て言いました。

「とりあえず王女様には連絡しました。直ぐに来られるそうです。」

「
そう言えばポーチナって連絡係りでしたよね。」

「ところで、リユーイは何で気がつかないんだ！」

「後を見てませんもの。どちらかと言うと下を見てますよ！」
復活したミケナイの疑問にマルチナが答えています。

4人が見ている事に気付いているのかいないのか、リユーイは相変わらずトボトボと俯き加減で王都に向う道を歩いています。

その後の森からはニューって長い首を伸ばしたオバケの姿があります。さっきより大分此方に近づいています。

「とりあえず、助ける。行くぞ！！」

「「「オオー！！」」」

と言う感じで、畑の作物を蹴散らして4人は道の方に走り出しま

した。

たちまち、リユーイが暗い感じで歩いている道にたどり着くと、リユーイに向って走ります。

「オオーイ！！」

そんな声を聞いたリユーイが顔を上げると、凄い形相をした例の4人組みが此方に土煙を上げながら走ってきます。

思わず、（逃げなきゃ！）って体を後に向けた時、森の木立の上に首を伸ばしたオバケを目撃しました。

（エエー！）吃驚して、その場に棒立ちになります。

まさか、ミケナイ達の言う通りに事が運ぼうとは夢にも思わなかったからです。

「リユーイ。ポーッと立つな。これから俺達の見せ所だ。黙って見てろよ。」

ミケナイが道の真中でぼけっとオバケを見ていたリユーイに注意します。

ルミナや、マルチナも追いついてきました。ポーチナは少し遅れるようです。

「さて、殺る前に確認だ。俺とルミナが先行。それをポーチナが火炎魔法で援護する。そして、最後はマルチナの雷槍ガイボルグで止めという事でいいな！」

ミケナイの言葉に3人が頷きます。

リユーイは保険って言われてますから、最初から参戦しないつもりです。

「マルチナ。槍を貸して！」

リユーイの言葉に、ハッ！と気がついたマルチナはリユーイに槍を渡しました。両手で槍を受取ると、動力炉の出力を上げて電力

を槍に充填します。

たちまち、先端が二股になった槍の穂先間にバチバチと稲妻が走り出します。

「頑張つてね！」

そう言つて渡された槍を「ありがとう。」つて受け取ります。

5人は森への道をゆっくりと歩き出しました。オバケも森の外れまで来ているようです。首が完全にもりから離れています。

後の方から、ガラガラという馬車の音が聞えてきました。

どうやら、王女様達の御一行みたいです。

馬車を近くに止めると、ドタドタとリューイ達のところまで走ってきました。

「こりや凄いの・・正しくオバケと呼ぶに値する。」

「感心してる場合じゃないですよ。私達は私達の役目があります。

」

「そうであつた。此処はお前達に任せる。では、吉報を待つおるぞ！」

サンディに嗜められて、王女様達は街道から畑に出ます。そして、オバケの進行方向を逆に辿っていきます。

「お姉ちゃん。頑張つてね〜！」

エコーを引いたライムの声が聞えます。

王女を含めた5人の一行は、アクセルの付加があるのでしょうか。土ぼこりを上げながら畑を横切り、森の中に消えて行きました。

ちよつと意表を付かれた5人ですが、気を取り直してオバケに向かいます。

オバケの方もリューイ達に気がついたようです。

でんでん虫の目のように頭から飛び出た目がリューイ達を睨んで

ます。そして大きな口を開けるとギヤオオー！！って雄たけびを上げました。

「肉食だな！」

「短剣みたいな歯が並んでましたわ。」

ミケナイとマルチナが他人事のように話しています。

オバケとの距離が50m程に近づいた時です。

いきなり、ミケナイとルミナが抜刀して駆け出しました。ポーチナは杖を構えて、魔法攻撃の準備完了してますし、マルチナはオバケの死角をさがして横に移動し始めました。

リユーイだけがポツンと取り残されてます。

そんなリユーイをオバケは敵とみなしているのでしょうか、少しづつ距離が狭まっていきます。

しょうがないな。てな感じで鋼の杖を構えます。

ポーチナを巻き込まないようにリユーイは前にでました。もうオバケとは10mも距離がありません。

ガオオー！って大きな口が開き、リユーイをパクリつとでもするように頭が向かってきます。

バチン！って鋼の杖で頭の横を叩いて攻撃を逸らします。

「デヤアー！」

ルミナとミケナイがオバケの長い首目掛けてオニギリを叩き込みました。そこへすかさずポーチナが火炎弾で攻撃します。

ジュワ！って音がすると、傷口が焼かれて、切断面の再生が止まります。

「よし！・・・予定通り。ルミナ行くぞ！」

「オウ！」

リユーイが牽制してる間にミケナイとルミナがオバケを斬って斬って斬りまくる。そしてポーチナはその傷を片っ端から焼いていく。
・
・
見事な連携が功を奏したのでしょうか・

ボトリ！って長い首が両断されました。
ルミナとミケランはハイタッチ！してガッツポーズです。

でも・・胴体と首が合わさる部分が段々と膨らんだかと思うと、ムニユー！！って新しい首が生えてきました。

「てめえ・・インチキすんな！」
ってミケランは怒ってますけど・・オバケですからねえ。

再度やり直します。

今度は胴体を狙って、オニギリで攻撃します。頭の方はもちろんリユーイが適当にあしらってますけどね。

「エエエイ！」
マルチナが高く飛び上がるとオバケの背中にゲイボルグを突き立てます。

しっかりと、槍の柄の先端部まで貫通したゲイボルグはその雷槍としての機能を発揮しました。

ドドオーン！！
と、オバケの背中が体内より吹飛びます。すかさず火炎弾が大きく開いた傷口をジョワ！って焼き焦がします。

爆裂で空中に投出されたマルチナは、ゲイボルグを掴んでクルクルと空中を回りながらスタ！ってオバケの脇に降り立つとリユーイに向かって走ります。

背骨でも破壊されたのかも知れません。オバケはドタ！って地面にお腹を付けました。

足と尻尾をバタバタさせていますが、そんなんではルミナとミケナイの攻撃を防ぐことは出来ません。2人は更に胴体の肉を切取っていきます。まるで、鯨でも解体してるように見えます。

リユーイは走ってきたマルチナの槍を掴むと、ズン！って一気に電力を充填します。

「頑張つて！」の声に、軽く頷くとマルチナは再度攻撃に向かいます。

「あのう・・・そろそろ魔力が尽きそうなんですけど・・・」

連続で火炎弾攻撃をしていたポーチナですけど、やはり限度つてありますよね。

「まだまだ続くよ。何とかならないの？」

リユーイの声を聞いたポーチナはガツクリと首を落としました。

そしてなにやら肩から下げたポシエットを開けてゴソゴソ始めると小さなビンを取り出しました。

しばらく迷ってましたが、やがて決心が付いたのか蓋を取ってゴクリって一気飲みです。

瞬間、ピカ！って体が光ったようにも見えましたけど・・・

そして、「ウラ！ウラ！ウラ！〜」って火炎弾をたて続けに発射し始めました。

ひょっとして、怪しい薬だったのかも知れません。

ドドオーン！！

再度、マルチナのゲイボルグがオバケを体内から爆裂させました。今度の攻撃でオバケの胴体を2分したようです。頭の方は断面をジククジクさせながら盛んに再生しようとしています。ポーチナ

の火炎弾で再生面が焼かれるとその場で収まってしまいます。

尻尾のほうは再生が行なわれません。頭の方の胴体に秘密があるようです。

ルミナとミケランの解体ショーを尻目に、マルチナはまたリユーイに向かいます。

ちよつと面倒ですけど、効果は絶大ですから、今の内に魔法を充填させる必要があります。

リユーイもそれに気がついて、マルチナに走りこんで急いで槍に電力を充填しました。

そして、リユーイが頭の牽制に戻ろうとした時です。

突然、ギャー！ってオバケが叫んだかと思うと、ドシン！って長い首の先に付いた頭が地面に落ちました。

「っやつたぞ!!!」

オバケの焼け焦げた胴体の上でミケナイとルミナが改心の笑みを浮かべながらガツポーズを取っています。

初めて、リユーイ以外の者でオバケを退治できたのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8986v/>

ある晴れた日に

2011年12月11日16時45分発行